

27767-1
*
1.2

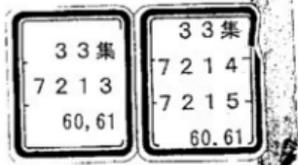
九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

蒲田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

1975

福岡市教育委員会



九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

蒲田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

1975

福岡市教育委員会



れんげ草に囲まれた蒲田遺跡

序

本書は、昭和47年4月日本道路公団福岡支社との委託契約にもとづく、東区蒲田地内の九州縦貫自動車道建設に伴う福岡東インターチェンジ内の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

調査に当りましては、日本道路公団関係者の方々をはじめ、関係諸方面の多大なるご協力を得ましたことに謝意を表するものです。

発掘調査は、昭和47年4月から昭和48年8月までの1年5か月の長期間にわたり実施してまいりました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように旧石器時代から弥生、古墳時代を経て近世に至るまでの包含層、住居遺構、墓地、条里遺構、敷石状遺構、各種遺物等豊富な学術資料を収録した成果報告書を上梓することができました。

本書に収録された資料が永く保存され、広く文化財保護思想の育成に活用されますとともに学術・研究の分野においても役立つことを願うものであります。

併せて年々失われてゆく埋蔵文化財について、なお一層のご理解とご協力を願ってやみません。

昭和50年3月

福岡市教育委員会

教育長 古村 澄 一

凡 例

1. 本書は、九州縦貫自動車道の福岡東インターチェンジの建設に関連して、1972年（昭和47年）4月から1973年（昭和48年）8月までに発掘調査した蒲田遺跡^{かまた}の報告書である。
2. 蒲田遺跡は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集の福岡市埋蔵文化財遺跡地名表（総集編）に部木遺跡^{へき}と登録されているが、部木というのは隣接する部落の小字名であり、甕棺墓等の遺跡の存在が知られているので、今回の発掘調査に際して、遺跡名は大字名をとり、蒲田遺跡とした。
3. 発掘調査は、日本道路公団の委託をうけて福岡市教育委員会が実施した。
4. 本書では、発掘調査の事実報告という点を重視して、多くの実測図を掲載するように努めた。その結果、記述のページを多少割愛せざるを得なかった。
5. 本書の執筆・編集は、飛高憲雄、藤田和裕、二宮忠司、力武卓治が担当したが、柳田純孝、塩屋勝利、折尾学、山崎純男、柳沢一男らの協力があったことをここに記す。

目 次

第 I 章	はじめに	
1	発掘調査にいたるまで	11
2	遺跡の位置	12
3	発掘調査の経過	14
第 II 章	A地区の調査	7213
1	概要	16
2	旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物	18
3	竈棺墓と土塚墓(第1地点、第2地点)	24
4	蒲田1号墳	7214
第 III 章	B地区の調査	7215
1	概要	46
2	土塚	46
3	旧石器時代の遺物	49
第 IV 章	D地区の調査	7213
1	概要	50
2	竈棺墓と土塚墓	54
3	古墳時代の住居跡	79
4	中世の遺構・遺物	94
5	D地区出土の石器	127
第 V 章	E地区の調査	7213
1	概要	128
2	旧石器時代、縄文時代の石器	130
3	土塚	135
7214	蒲田2・3号墳	136
7214	かけ塚山古墳群出土の遺物	140
第 VI 章	F地区の調査	7213
1	概要	142
2	土層と遺構	145
第 VII 章	石器について	146
第 VIII 章	おわりに	152

図 版 目 次

- P L. 1 (1)蒲田遺跡全景 (航空写真—福岡県教育委員会文化課提供) (2)蒲田遺跡透景
- P L. 2 (1)A地区第1地点全景 (2)壙棺墓出土状況
- P L. 3 (1)第1号壙棺墓 (2)第2号壙棺墓 (3)第3号壙棺墓 (4)第4号壙棺墓
(5)第6号壙棺墓 (6)第7号壙棺墓
- P L. 4 (1)第1号土塚墓 (2)第2号土塚墓 (3)第3号土塚墓
- P L. 5 (1)溝状遺構内土器出土状況① (2)溝状遺構内土器出土状況② (3)筒形土器
- P L. 6 (1)A地区第2地点全景 (航空写真—福岡県教育委員会文化課提供)
(2)土塚墓出土状況
- P L. 7 (1)第1号土塚墓 (2)第2号土塚墓内磨製石鏃出土状況 (3)磨製石鏃
- P L. 8 (1)蒲田1号墳全景① (2)蒲田1号墳全景②
- P L. 9 (1)蒲田1号墳全景③ (2)蒲田1号墳南北トレンチ東壁断面
- P L. 10 (1)B地区全景 (航空写真—福岡県教育委員会文化課提供) (2)遺構出土状況①
- P L. 11 (1)遺構出土状況② (2)土塚
- P L. 12 (1)D地区全景 (航空写真—福岡県教育委員会文化課提供) (2)壙棺墓出土状況
- P L. 13 (1)第1号壙棺墓 (2)第2号壙棺墓 (3)第9号壙棺墓 (4)第12号壙棺墓
(5)第13号壙棺墓 (6)第14・15号壙棺墓 (7)第7・8号壙棺墓 (8)第7号壙棺
- P L. 14 (1)住居跡全景① (2)住居跡全景②
- P L. 15 (1)第1号住居跡 (2)第1号住居跡出土遺物
- P L. 16 (1)第2号住居跡 (2)第2号住居跡出土遺物(I)
- P L. 17 第2号住居跡出土遺物(II)
- P L. 18 第2号住居跡出土遺物(III)
- P L. 19 (1)第3号住居跡 (2)第4号住居跡
- P L. 20 (1)第5・6号住居跡 (2)第7号住居跡
- P L. 21 第5・6号住居跡出土遺物
- P L. 22 (1)南北敷石遺構① (2)南北敷石遺構②
- P L. 23 (1)東西敷石遺構① (2)東西敷石遺構②
- P L. 24 (1)東西敷石北溝 (2)集石遺構
- P L. 25 (1)井戸状遺構 (2)井戸状遺構出土遺物
- P L. 26 D地区柱穴状遺構・出土遺物
- P L. 27 D地区敷石遺構遺物出土状況

- P L. 28 敷石遺構出土遺物(I)
- P L. 29 敷石遺構出土遺物(II)
- P L. 30 敷石遺構出土遺物(III)
- P L. 31 溝状遺構出土遺物
- P L. 32 集石遺構出土遺物
- P L. 33 表土出土遺物
- P L. 34 滑石製造物
- P L. 35 (1)E 地区全景 (航空写真一福岡県教育委員会文化課提供) (2)E 地区遠景
- P L. 36 (1)E 地区断面① (2)E 地区断面② (3)土壇
- P L. 37 (1)蒲田 2・3 号墳全景 (航空写真一福岡県教育委員会文化課提供)
(2)蒲田 2・3 号墳全景
- P L. 38 (1)蒲田 2 号墳石室 (2)蒲田 2 号墳墳丘断面
- P L. 39 (1)蒲田 2 号墳墳丘列石 (2)蒲田 2 号墳墳丘出土遺物
- P L. 40 かけ塚山古墳群出土遺物
- P L. 41 (1)F 地区遠景 (2)F 地区発掘区遠景
- P L. 42 (1)No. 1 トレンチ断面① (2)No. 1 トレンチ断面②
- P L. 43 (1)No. 5 トレンチ断面 (2)集石遺構
- P L. 44 石鏃(I)
- P L. 45 石鏃(II)
- P L. 46 (1)石鏃(III) (2)縦長剥片、横長剥片(I)
- P L. 47 縦長剥片、横長剥片(II)
- P L. 48 折断剥片、切断剥片
- P L. 49 搔器、削器
- P L. 50 (1)Scraper (2)石鏟状石器、揉錐器、彫器、尖頭器、ナイフ形石器、台形石器
- P L. 51 (1)台形石器、彫器、揉錐器 (2)ナイフ形石器
- P L. 52 (1)小石刃、細石刃(I) (2)小石刃、細石刃(II)
- P L. 53 (1)細石核再生剥片 (2)石核再生剥片
- P L. 54 細石核、細石核再生剥片、石核、石核再生剥片
- P L. 55 磨製石器、石製品
- P L. 56 (1)A 地区出土の縄文式土器 (2)福岡東インターチェンジ全景 (航空写真)

挿 図 目 次

Fig. 1	蒲田道跡位置図 (縮尺 $\frac{1}{25,000}$)	12
Fig. 2	A地区地形測量図 (縮尺 $\frac{1}{1,000}$)	17
Fig. 3	A地区土層図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	18
Fig. 4	A地区土塚状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{100}$)	23
Fig. 5	A地区出土縄文式土器拓影 (縮尺 $\frac{1}{2}$)	23
Fig. 6	A地区第1地点遺構配置図 (縮尺 $\frac{1}{100}$)	折り込み
Fig. 7	A地区第1・3・4号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	25
Fig. 8	A地区第2・5号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	26
Fig. 9	A地区第6・7号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	27
Fig. 10	A地区第1・3~5号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	28
Fig. 11	A地区第6・7号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	29
Fig. 12	A地区第2号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	30
Fig. 13	A地区第1~4号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	32
Fig. 14	A地区溝状遺構内土器出土状況図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	34
Fig. 15	A地区溝状遺構出土土器実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$)	折り込み
Fig. 16	A地区溝状遺構出土土器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$)	折り込み
Fig. 17	A地区第2地点遺構配置図	37
Fig. 18	A地区第1・2号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	38
Fig. 19	A地区第3~5号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	39
Fig. 20	蒲田1号墳填丘測量図 (縮尺 $\frac{1}{500}$)	41
Fig. 21	蒲田1号墳填丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	42
Fig. 22	蒲田1号墳填丘出土遺物実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{2}$)	43
Fig. 23	蒲田1号墳填丘出土遺物実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$)	44
Fig. 24	B地区地形測量図 (縮尺 $\frac{1}{1,000}$)	47
Fig. 25	B地区遺構配置図 (縮尺 $\frac{1}{500}$)	折り込み
Fig. 26	D地区地形測量図 (縮尺 $\frac{1}{1,000}$)	51
Fig. 27	D地区甕棺墓・土塚墓配置図 (縮尺 $\frac{1}{500}$)	折り込み
Fig. 28	D地区第1~4号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	55
Fig. 29	D地区第5~7号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	56
Fig. 30	D地区第8~10号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	57
Fig. 31	D地区第11号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	58

Fig. 32	D地区第12・13・16号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	59
Fig. 33	D地区第14・15号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	60
Fig. 34	D地区第1・2号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	61
Fig. 35	D地区第4~6・8号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	62
Fig. 36	D地区第7・9・15号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{10}$)	63
Fig. 37	D地区第10・11号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	64
Fig. 38	D地区第12・13号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	65
Fig. 39	D地区第3・14・16号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	66
Fig. 40	D地区第1・2・9・13・16号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	72
Fig. 41	D地区第6・8・10・12号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	73
Fig. 42	D地区第2・4号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	74
Fig. 43	D地区第5・7・11号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	75
Fig. 44	D地区第14・15号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	76
Fig. 45	D地区第14号土塚墓出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	76
Fig. 46	D地区第1土塚状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{10}$)	77
Fig. 47	D地区第1土塚状遺構出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	77
Fig. 48	D地区第2土塚状遺構出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	78
Fig. 49	D地区第2土塚状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	78
Fig. 50	D地区住居跡分布図 (縮尺 $\frac{1}{100}$)	折り込み
Fig. 51	D地区第1・3号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	82
Fig. 52	D地区第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	83
Fig. 53	D地区第2号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	84
Fig. 54	D地区第2号住居跡出土遺物実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{5}$)	84
Fig. 55	D地区第2号住居跡出土遺物実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{5}$)	85
Fig. 56	D地区第2号住居跡出土遺物実測図(III) (縮尺 $\frac{1}{5}$)	86
Fig. 57	D地区第4号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	87
Fig. 58	D地区第4号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	87
Fig. 59	D地区第7号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	88
Fig. 60	D地区第5・6号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	89
Fig. 61	D地区第5号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	90
Fig. 62	D地区第6号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{5}$)	91
Fig. 63	D地区第H溝状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	95
Fig. 64	D地区井戸状遺構出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	97

Fig. 65	D地区井戸状遺構実測図(縮尺 $\frac{1}{50}$)	97
Fig. 66	D地区柱穴出土遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{3}$)	100
Fig. 67	D地区柱穴実測図($\frac{1}{5}$)	100
Fig. 68	D地区敷石遺構出土磁器実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	101
Fig. 69	D地区敷石遺構出土磁器実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	102
Fig. 70	D地区敷石遺構出土磁器実測図(III)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	103
Fig. 71	D地区敷石遺構出土磁器実測図(IV)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	104
Fig. 72	D地区敷石遺構出土磁器実測図(V)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	105
Fig. 73	D地区第I溝状遺構出土磁器実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	106
Fig. 74	D地区第I溝状遺構出土磁器実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	107
Fig. 75	D地区第II・III溝状遺構出土磁器実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	108
Fig. 76	D地区集石遺構出土磁器実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	109
Fig. 77	D地区集石遺構出土磁器実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	110
Fig. 78	D地区表土出土磁器実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	111
Fig. 79	D地区表土出土磁器実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	112
Fig. 80	D地区出土陶器実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	113
Fig. 81	D地区出土土器実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	114
Fig. 82	D地区出土土器実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	115
Fig. 83	D地区出土青銅製遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	115
Fig. 84	D地区出土滑石製遺物実測図(I)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	116
Fig. 85	D地区出土滑石製遺物実測図(II)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	117
Fig. 86	D地区出土滑石製遺物実測図(III)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	118
Fig. 87	D地区出土滑石製遺物実測図(IV)(縮尺 $\frac{1}{5}$)	119
Fig. 88	D地区出土石器実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	127
Fig. 89	E地区地形測量図(縮尺 $\frac{1}{1,000}$)	129
Fig. 90	E地区石器出土状態図(縮尺 $\frac{1}{100}$)	131
Fig. 91	E地区土塚(縮尺 $\frac{1}{50}$)・土塚出土土器実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	135
Fig. 92	蒲田2号墳石室実測図(縮尺 $\frac{1}{50}$)	136
Fig. 93	蒲田2・3号墳墳丘測量図(縮尺 $\frac{1}{500}$)	137
Fig. 94	蒲田2号墳墳丘断面図(縮尺 $\frac{1}{50}$)	折り込み
Fig. 95	蒲田2号墳墳丘出土土器実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{3}$)	139
Fig. 96	かけ塚山古墳群出土遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{5}$)	140
Fig. 97	かけ塚山古墳群全景(写真—内海克久氏撮影・提供)	141

Fig. 98	石室 (写真—内海克久氏撮影・提供)	141
Fig. 99	F地区地形測量図 (縮尺 $\frac{1}{2,000}$)	143
Fig. 100	F地区トレンチ土層図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	144
Fig. 101	F地区集石遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)	145

表 目 次

Tab. 1	A地区出土打製石器一覧表	18
Tab. 2	B・D・F地区出土打製石器一覧表	22
Tab. 3	A地区第1地点甕棺墓一覧表	33
Tab. 4	A地区第1地点土塚墓一覧表	33
Tab. 5	A地区第1地点溝状遺構出土遺物一覧表(I)	35
Tab. 6	A地区第1地点溝状遺構出土遺物一覧表(II)	36
Tab. 7	A地区第2地点土塚墓一覧表	37
Tab. 8	蒲田1号墳墳丘出土遺物一覧表	45
Tab. 9	B地区土塚一覧表	48
Tab. 10	D地区甕棺墓一覧表	68
Tab. 11	D地区土塚墓一覧表	71
Tab. 12	D地区住居跡出土遺物一覧表(I)	91
Tab. 13	D地区住居跡出土遺物一覧表(II)	92
Tab. 14	D地区住居跡出土遺物一覧表(III)	93
Tab. 15	D地区柱穴計測値表(I)	96
Tab. 16	D地区柱穴計測値表(II)	96
Tab. 17	D地区井戸状遺構出土遺物一覧表	97
Tab. 18	蒲田遺跡出土白磁器分類表	98
Tab. 19	蒲田遺跡出土青磁器分類表	99
Tab. 20	D地区敷石遺構出土遺物一覧表(I)	120
Tab. 21	D地区敷石遺構出土遺物一覧表(II)	121
Tab. 22	D地区第I・II・III溝出土遺物一覧表	122
Tab. 23	D地区集石遺構出土遺物一覧表	123
Tab. 24	D地区表土出土遺物一覧表	124
Tab. 25	D地区出土陶器一覧表	125

Tab. 26	D地区出土土師器・瓦質土器一覽表	125
Tab. 27	D地区出土滑石製遺物一覽表	126
Tab. 28	E地区出土打製石器一覽表	130
Tab. 29	蒲田2号墳墳丘出土遺物一覽表	138
Tab. 30	蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覽表	151

付 図 目 次

Fig. 1	蒲田遺跡地形図 (縮尺 1/500)
Fig. 2	蒲田遺跡D地区遺構配置図 (300)
Fig. 3	蒲田遺跡D地区南北敷石遺構実測図 (縮尺 1/50)
Fig. 4	A地区I層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 5	A地区I層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 6	A地区I層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 7	A地区II・II上層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 8	A地区II下・III層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 9	B・D地区I・II・III層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 10	D地区I層・E地区I層・F地区III層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 11	E地区I層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 12	E地区II上層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 13	E地区II下層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 14	E地区III層出土石器実測図、石器一覽表
Fig. 15	蒲田遺跡各地区出土の磨製石器実測図、石器一覽表

第I章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

九州縦貫自動車道の建設によって破壊される遺跡の発掘調査は、福岡県教育委員会の担当で1969年（昭和44年）4月早々から着手されて現在継続中であるが、すでに資料整理の終了した遺跡の調査報告書は刊行されている。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財の発掘調査にいたるまでの経過は、1970年（昭和45年）3月刊行の「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告1」の「発掘調査の端緒と概括」で詳細に述べられているので、ここでは福岡市教育委員会文化課の担当で発掘調査した蒲田遺跡の発掘調査にいたるまでの経過について記述する。

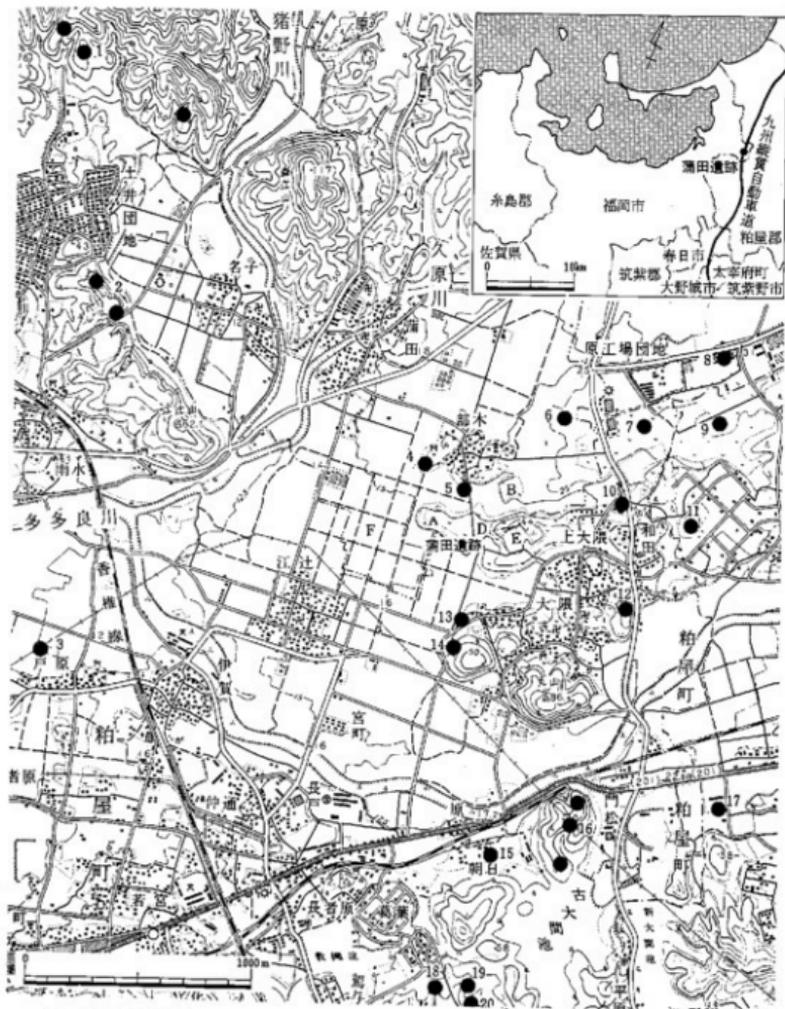
福岡市東区蒲田字北熊にある標高20～40mの台地上には、旧石器時代から近世にいたるまでの各時期の遺跡が存在することは、一部では以前から知られていたようであるが、公にされたのは1971年（昭和46年）4月刊行の「福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集」の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表」においてである。蒲田遺跡に関係するものを以下に表記する。

遺跡名称	遺跡所在地	地形	遺跡の性質	出土遺物	時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包含地	細石器、細石核、ナイフ形石器	旧石器時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包含地	石鏃、石匙、押型文土器?	縄文時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包含地	石鏃、石剣、石斧、石槌丁	弥生時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	散布地	土師器、須恵器	古墳時代
柄塚	蒲田字北熊 582	台地	円墳	内部主体一横穴式石室	古墳時代
北熊古墳	蒲田字北熊	山頂	円墳		古墳時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	散布地	青磁器	歴史時代

九州縦貫自動車道関係の福岡県内における埋蔵文化財の発掘調査は、当初から福岡県教育委員会文化課の担当で行われてきたが、蒲田遺跡のある台地が九州縦貫自動車道の福岡東インターチェンジの建設予定地になり、また遺跡が福岡市域内に位置しているということで1971年（昭和46年）の12月になって急ぎ福岡市教育委員会文化課に、その発掘調査の担当を福岡県教育委員会文化課から依頼してきた。これをうけて福岡市教育委員会文化課では、1972年（昭和47年）4月より発掘調査に着手することにした。

事業主体の日本道路公団からの委託をうけて、福岡市教育委員会文化課では調査組織を下記のように編成し、発掘調査の打ち合わせが4月になってから行なわれた。

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化課
発掘調査担当者	三島格、飛高憲雄、藤田和裕、二宮忠司、力武卓治
事務担当者	石橋博、岩下拓二



- | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|
| 1. 湯ノ浦古墳群 | 2. 名子道遺跡 | 3. 戸原遺跡 | 4. 部木八幡古墳群 |
| 5. 部木遺跡 | 6. 水+元遺跡 | 7. 部木原古墳 | 8. 原遺跡 |
| 9. 和田・部木原遺跡 | 10. 平塚古墳 | 11. 谷盤遺跡 | 12. 脇田古墳 |
| 13. 辻畑遺跡 | 14. 西尾山古墳群 | 15. 葛葉古墳 | 16. 古大間古墳群 |
| 17. 門松遺跡 | 18. 賀興丁廃寺 | 19. 賀興丁遺跡 | 20. 賀興丁瓦窯跡 |

Fig. 1 蒲田遺跡位置図 (縮尺 1/2000)

2. 遺跡の位置

蒲田遺跡は福岡市東区大字蒲田にあって、福岡平野の東北端に位置している。三郡山地とその西側の山塊から流れ出した川は、多々良川、須恵川、宇美川となって福岡平野の東部を形成している。猪野川と久原川とは、城ノ越山から南にのびる丘陵の南端にある江辻山の東麓において合わさり、江辻山の南側にいたって木流である多々良川と合流して博多湾へと注いでいる。

蒲田遺跡は、久原川と多々良川にはさまれた沖積平野の中の1つの低丘陵上に位置している。遺跡のある丘陵の南方には、標高86m余りの丸山が、北には東から長くのびてきた低い丘陵の末端部があり、そこに部木の集落が形成されている。

丘陵は、標高20~40mで東西約700m、南北は西方で約100m、東方で約300mをはかる。東方の高い山は、かけ塚山と、また西端の低い地域は、りゅうおう（龍王）と呼ばれている。地質学的には第3紀層で形成されており、表土の堆積は薄い。

周辺の丘陵上あるいは水田地帯にある幾つかの微高地には、各時期の遺跡が存在する。城ノ越山の南には湯ノ浦古墳群が、江辻山の北には名子道遺跡が、蒲田遺跡の北、部木の集落がある低丘陵の西端には部木八幡古墳群がある。また東方のブラザー工業敷地内には箱式石棺群、南の西尾山には西尾山古墳群、その北には辻畑遺跡（甕棺墓群）があり、また江辻の集落のある微高地や戸原の微高地においては、細石器なども表面採集されている。

3. 発掘調査の経過

調査は、1972年（昭和47年）4月27日に開始した。

旧石器時代、縄文時代の遺物が集中的に採集されている西方の標高20m前後の台地の西半分をA地区、土師器、須恵器、青磁器などが採集されている東半分をD地区に、さらに東方で発掘調査に先立つ現地踏査の結果、旧石器時代、縄文時代の遺物を採集した標高40m前後の通称かけ塚山をE地区、かけ塚山の北側の標高20m前後の台地をB地区とし、発掘調査に先立って、それぞれの地区の地形に合わせてグリッドを設定した。A地区、D地区は8m方眼のグリッドを全地域に通して設定し、北から南へA、B、C、……、西から東へ1、2、3、……としてグリッドの標式とした。E地区は2m方眼で組み、南から北へA、B、C、……、東から西へ1、2、3、……とした。B地区は8m方眼で組み、西から東へA、B、C、……、北から南へ1、2、3、……とした。A地区の中央部に位置し、かつて柄塚とよんでいたものを蒲田1号墳、E地区に位置し、かつて北熊古墳とよんでいたものを蒲田2号墳、その東方のやや高まりの認められた部分を蒲田3号墳とした。また、台地の西方に広がる水田地帯をF地区とした。

A、B、D、E地区は、平面昇目掘で、F地区はトレンチを入れて発掘調査を実施した。発掘調査は、工事の工程との関係もあって、3班編成で行なった。とくにE地区の発掘調査は2回にわたって別府大学の橋昌信講師、考古学研究室の学生諸君によって実施した。

それぞれの地区の所在地と調査関係者は以下のとおりである。

地区所在地

A地区	福岡市東区蒲田字北熊
B地区	福岡市東区蒲田字薬師
D地区	福岡市東区蒲田字北熊
E地区	福岡市東区蒲田字北熊
F地区	福岡市東区蒲田字祝田、字沖田

各地区の発掘調査期間

A地区	1972年（昭和47年）5月8日（伐採開始）～1973年（昭和48年）6月15日
B地区	1973年（昭和48年）6月16日～8月11日
D地区	1972年（昭和47年）5月11日～1973年（昭和48年）6月10日
E地区	1972年（昭和47年）8月15日～8月30日 1973年（昭和48年）3月1日～15日
F地区	1973年（昭和48年）1月16日～2月28日
1号墳	1972年（昭和47年）5月24日（墳丘測量開始）～6月30日
2・3号墳	1972年（昭和47年）7月18日（墳丘測量開始）～8月30日

調査関係者

安部キヨ子 安部国恵 安部サエ子 安部シズ子 安部正一 安部ツチエ 安部利郎 安部知代 安部松代 安部道子 安部ロシエ 井上駒子 井上信香 井上八重子 内海サト 大山美智枝 小山ツタエ 河辺重夫 河辺チサエ 黒木新之輔 相良文子 篠崎温子 篠崎久助 篠崎末吉 都地キク子 都地作五郎 都地恒子 都地直子 都地房江 都地富美子 都地マサ子 都地マチ子 萩尾ふじの 樋口コマ 樋口ミサオ 部木四郎 光安喜和子 光安貞子 光安紗和子 光安種良 光安利郎 光安弘枝 光安富美子 光安専 光安マツノ 光安宗太 光安ユキノ 光安礼子 山崎チヨ子 荒津孝治 河野徹也 実淵栄治 (久山中学校生徒)

(別府大学文学部考古学研究室)

上村佳典 坂本嘉弘 志津友子 永松みゆき 平ノ内幸治 和田利徳 足立孝徳 飯田直子 大城慧 大城盛栄 原田保則 橋昌信(別府大学講師)

(明治大学学生)

島巡賢二 金子真土 小森真澄 原美智子 藤野龍安 和田むつみ

(地元協力者)

後藤周三(多々良公民館長) 安部徹生(蒲田・部木地区区長) 内海知彦(部木八幡宮宮司) 樋口久雄 内海克久 光安宗太 都地文夫

(協力者)

株式会社大林組柏屋工事事務所
福原組

発掘資料の整理は、1973年(昭和48年)11月から1974年(昭和49年)12月28日までにまよよんだ。関係者は以下のとおりである。

今村淳子 内海サト 杉妙子 土斐崎つや子 野村文江 八藤丸一校 山口賀津子 山口栄 山崎チヨ子 山本光子 小水博明

II A地区の調査

1. 概 要

東西に長い舌状台地に位置し、標高20~21mの高さを持つ。水田面との比高は4~5mをはかる。西の部分、舌状の先端部をA地区とし、東の部分をD地区と名付けそれぞれ担当の調査員により発掘調査を行なった。このA地区は、福岡市埋蔵文化財地名表編集編ならびに国平健三・井上直樹氏により発表された遺跡であり、調査前のたびたびの踏査でも旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物ならびに古墳1基の確認ができた。このことによりA地区は、旧石器時代の包含層、ならびに縄文時代の包含層を推定し、また国平健三・井上直樹氏が問題点として取り上げた鈴桶技法と称せられる石刃技法とその石核の層位的、共伴関係遺物の検出を問題点として追求して行く方針をとった。A地区の発掘調査は、昭和47年5月から開始し、8月までを第一次、10月から12月までを第二次、昭和48年5月から6月までを第三次調査とした。調査方法は、1区画8m×8mを1升とするグリッド方式をとり、東西に1~16区、南北をA~H区として升目を組み、第一次にH区画、A・B区画を調査対象として行なっていた。

これによりA-C・10~13グリッドにおいて土塚数基の検出とその下層より石鏃・剝片・ナイフ形石器の出土を確認することができた。しかしながら縄文時代の包含層、旧石器時代の包含層は、B-12、C-11という北の部分にしか包含されておらずゆるやかな斜面のみに現存していたものと判断を下した。このためII層上面の褐色粘質土層より各グリッドを4つに区分し10cm単位で一箇所ずつ掘り下げていく方法をとった。その結果、遺物の広がりはずかであったが明確な包含層を把握することができた。ただ縄文時代の遺物包含層中には、土器是一片も発見されず、すべて石器のみの出土であることは、注目せねばならない事実として上げておきたい。また他のグリッドでは包含層を把握することができず表土の次に第IV層と考えた花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土に達していた。これは、墓棺の状態、蒲田1号墳の断面図との関係から50cm程度の削平された状態が推定できた。

弥生時代の遺構・遺物は、第二次・第三次の調査で検出したもので、A-C-10~13グリッドでは土塚墓6基、うち2基から石器が出土し、特に第2号土塚墓出土の有茎磨製石鏃は、注目された。また台地の最西端部を調査した第三次では、墓棺7基、土塚墓4基が出現した。したがってD地区の墓棺、土塚墓群、A地区土塚墓群と合わせて同一台地に三か所の弥生時代の墓地在り位置することが明らかとなった。これらは互いになんらかの関連があったものと思われる同一台地という位置関係に多くの問題が内在、派生するものと考えられる。さらにA地区の墓棺、土塚墓をとりかこむ溝状遺構と出土土器は、弥生時代の葬送を知るうえで多くのことを提示してくれるであろう。

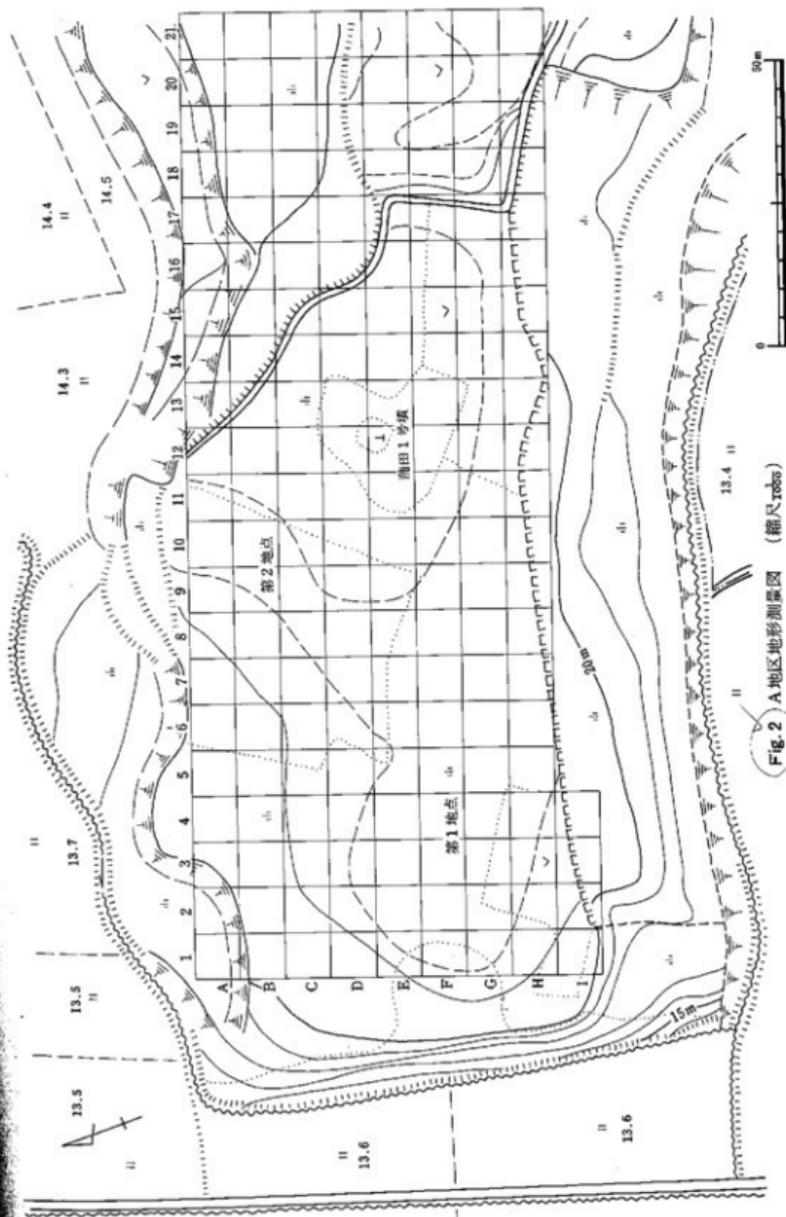


Fig. 2 A地区地形測量図 (縮尺1:2000)

全体図

遺物(石器について)

A地区I層出土の石器

A地区I層出土の石器は、多種多様な器種・形態・技術を持つ石器が出土している。時期区分では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物が出土し、その点数は、Tab.1に示すごとく数多くの石器が検出できた。しかしながら少量の資料しか図示できなかったことは、まったく遺憾に思う。ここでは、図示した石器について概略のみにとどめ後日機会があれば資料とともに発表したい。また弥生時代の遺物については、別章で述べることにして、この章では、旧石器時代・縄文時代の遺物についてのみ述べてみたい。

石鏃について (付図Fig.4-1-45)

図示したものは、44点であるが、それ以外に174点出土している。218点の石鏃は形態的に数多く分類が可能であり、この分類は、第Ⅶ章で取り扱っているためここではふれることをさげたい。I層の石鏃の時期は、形態的観察と土壌内から出土した土器片からみて縄文早期末から中期にかけてのもので、これだけ多くの石鏃が、1つの舌状台地の一部分だけに出土することは、何かを意味するものであろう。また石鏃の形態で特に注目されるのは、先端部の状態であり、石鏃の使用法の異なりを考察することが、1つの問題提起となると思われる。

先端部の状態で大別すると3つに分類できる。(1)先端部が丸みを持つ形態(付図Fig.4-19・20・25・26-28)。先端部がまったく尖ることなくならかな丸みを持つ。先端部の角度は135度内外である。(2)先端部は尖る形態を持つが、先端部の角度が90度内外(付図Fig.4-5・15・18・21・24)。(3)先端部が鋭利に尖り、先端部角度は、45度内外を示す(付図Fig.4-1-4・7-14・16・17・22・23・29-44)。この(3)は、細分することが可能でその細分基準は、先端部角度が45度内と外とに区別できる。この(1)~(3)の先端部の状態は、腸快式の場合にかぎって考察することができる。つまり対象物に直接ふれる最初の部分であり、鏃の先端部によって対象物が異なることを意味するものであったと推定できる。

尖頭器について(付図Fig.4-46-47)

46は、黒曜石を石材とした3cm×2cmの小型尖頭器で、一部に自然面を残し大まかな剝離によって整形し、その後先端部と側辺部に細部加工があるが、全体に加えていないために断面は、凹凸のあるレンズ状になっている。47は46にくらべて細部加工が表面に加えてあるが全体に加えていないためレンズ状の形態はするが、凹凸の部分がある。石材は、黒曜石を利用し、先端部・基部の部分に細部加工のある2.5cm×1.5cmの小型尖頭器である。

剥片(Fig.4-48-59・Fig.5-1・2)と折・切断剥片(Fig.4-64・Fig.5-3-11,38-59)

剥片は、縦長剥片と横長剥片に区分できる。剥片のほとんどが自然面を持ち、打面は、58をのぞいて平坦打面である。53は、表面と裏面との剝離方向が逆で、これは、上下の打面を持つ石核からの剝離によって生じた剥片である。(石器実測図は付図Fig.4-15)

折・切断剥片は、明らかにその裁断方法が異なり、折断剥片は、Fig.5-38-59の22点で、表面の稜を打点として打撃により折り取る方法を持つ。これに対して切断剥片は、Fig.4-64・Fig.5-3-11の10点で、剥片の側面にノッチ状の剝離を加えて表面の稜を打点として折り取る方法を持つ。この例としてFig.5-41のノッチ状の剝離は注目されるものである。

二次加工石器(Fig.4-62・63・Fig.5-12-16・21-27・29-31 Fig.6-1-4・6)(付図)

細部加工だけ加えてあるものと側辺部に細かなリタッチのある剥片を二次加工石器とした。

スクレーパー(Fig.5-17-20・28・32-37・Fig.6-5・7-16)(付図)

スクレーパーもエンド・スクレーパー(Fig.5-17・32・34・36 Fig.6-7・9-15)と母指形スクレーパー(Fig.6-8)、サイド・スクレーパー(Fig.5-18-20・28・33・35 Fig.6-16)の3つに分けられる。

ドリル(Fig.6-17-19)(付図)

先端部断面が、三角形及び梯形であり、縦長剥片を素材とし末端部を加工して鋭利にし、加工はすべて表面からの加工で形成されている。

小石刃(Fig.6-20-26)と細石刃(Fig.6-27-41)(付図)

小石刃は7点で剝離方向は一方方向によるもので、二次加工の加わっているものもある。細石刃は、15点であるが、32は小石刃に組み入れられるものかもしれない。

彫器(Fig.6-53-58・Fig.7-12)(付図)

彫器は、7点出土しているが、1打による彫刻刀面形成が4点と最も多い。

このほかに細石核・細石核再生剥片・ナイフ形石器・台形様石器・石核・石核再生剥片・残核等が出土しているが、これらの石器については、のちほどのべる予定であるため除外する。

A地区II層上面出土石器

石鏃(Fig.7-19-27)(付図)

9点図示したが、このほかに38点の検出がある。形態的には、I層の石鏃と同様にパラエターがある。土域内の土器(Fig.4-5)の時期と同時期の可能性を持つ石鏃である。

細石刃(付図Fig.7-32-42)と剥片(付図Fig.7-28・29・44-46)・台形石器(付図Fig.7-43)

細石刃と台形石器をのぞけばII層上面は、縄文時代の遺物と考えられる。これらの石器は、II層上面という10cm掘りの結果であることを明記しておきたい。細石刃11点、縦長剥片4点、横長剥片1点?、台形石器1点でこの台形石器は、素材の頭部を利用し製作している。

スクレーパー (付図Fig.7—47—53・58)

エンド・スクレーパー (47・52) の2点、サイド・スクレーパー (48—51・53) の5点である。48・49のサイド・スクレーパーは、石質・製作技術から縄文時代のスクレーパーと酷似している。石藪と同様の時期と考えられる。また58の親指形スクレーパーも同様であろう。

折・切断剥片 (付図Fig.7—54—57)

折断剥片は、55・56の2点、切断剥片も54・57の2点である。すべて縦長剥片を素材とする。

A地区 II層下面出土の石器について

剥片 (付図Fig.8—1—6) と折・切断剥片 (付図Fig.8—7—13)

剥片は、1が横長剥片で2—6が縦長剥片である。打面は、すべて平坦打面からの打撃剥離である。剥離方向は、ほぼ一方であるが、3の剥片は、上下の剥離を持つ。

折断剥片 (7・11—13) と切断剥片 (8—10) とは、すべて縦長剥片を素材としている。

スクレーパー (付図Fig.8—14—18) と彫器 (付図Fig.8—19)

14・15がエンド・スクレーパーで16—18がサイド・スクレーパーである。15をのぞいてすべて縦長剥片を素材としている。彫器は、5打による彫刻刀面を形成している。

ナイフ形石器 (付図Fig.8—20—22) と台形石器 (付図Fig.8—23・24)

ナイフ形石器は、2cm内外の超小型に属し、すべて先端部のみをbluntingを加えてある形態を持つ。台形石器は、大型と小型に区別されナイフ形石器も台形石器も縦長剥片を素材とする。

石核再生剥片・細石核再生剥片・細石核 (付図Fig.8—32・35・37・39・33・34・36・40・41)

石核再生剥片は、明らかに一定の法則を持っていたことを物語るものである。また細石核再生剥片も同様なことが言える。36は残核である。40は、(半)舟底形石核で一方からの細石刃離面が残る。41は、角柱状の形態を持つもので、良質の細石刃を離面した形跡は認められない。

A地区 III層出土の石器について (付図Fig.8—42—53)

剥片と切断剥片 (付図Fig.8—42 : 43・44)

42は横長剥片であり平坦打面より剥離されたもの。切断剥片は縦長剥片を切断している。

彫器とナイフ形石器 (付図Fig.8—46 : 47・48)

彫器は、2打による彫刻刀面を持つ形態。ナイフ形石器は、小型であり、47は横長剥片を素材とし、48は、縦長剥片の末端部を刃部として利用し、胴部をbluntingにより切断。

残核と石核再生剥片と石核 (付図Fig.8—45 : 49・52 : 50・53)

45は細石核の残核と考えられ、再生剥片を剥離した直後のもので、側面に細石刃剥離面が残存している。これは側面再生剥片を剥離したと観察できる残核で、その目的は、背面と側面にみられる自然面を剥ぎ取るための剥離と考えられる。そのことは、打撃が背面にむかって細

石刃剥離面からのものであることから明確に判断できる。打面は、細部に調整剥離面を持つ2条による平坦打面である。剥離以前は、半舟底形の形態を持っていたことが推定できる。

49の石核再生剥片は、正面を再生するためのものと考えられる。この剥片から推定できる石核は、打面が平坦打面を持ち、剥離方向は、上下の二方向を持つ。この形態等から考えると小石刃か細石刃を剥離する角柱状の石核の可能性がある。52の細石核再生剥片は、側面再生のために剥離された剥片である。それは、側面に細石刃剥離面を持つことが明らかである。またこの剥片は、上下二方向の剥離方向を持ち、細石核からの剥離は、下位からの剥離によるものである。ただこの剥片が、4 cm程度のものであることから細石核であれば大型の角柱状の石核と考えられるが、むしろ剥片自体を考えるならば石核再生剥片であろう。51は、小石刃で末端部を折断している。50はBlade-coreと考えてもよい石核である。実測図では明らかではないが、上下に一打による平坦面を持ち、剥離面はすべて上位からで下位からの剥離は、みとめられない。また背面にも剥離工程を行なった形跡を持ち、この面も明らかに上下に一打による平坦面を形成し、上位から剥離工程をくり返している。つまり正面観でみられる剥離工程終了後背面における剥離工程を行なって行く方法を持つ。ただここで問題となる点は、下位の平坦打面の目的である。推定できる目的は、剥離する剥片の末端部をあらかじめ規整しておくためのものと考えられる。もう1点は、正面観における上部の細かな剥離面が認められるが、これは、石核としての剥離終了後にその残核を利用してscraperとして再利用した形跡を持つ。

53の石核は、打面が自然面である。この石核の打撃方向は、上位、下位、横位の三方向を持ち、すべて打面は、自然面である。三方向という一見不規則の打撃方向を持つこの石核も、1つの剥離順序が観察される。つまり一面につき、左右から中央へのパターン形式の中で、下位から横位へ、次に上位の順で剥離をくり返す1つのパターンを持つ石核であろう。

A地区出土打製石器について

A地区出土石器の総点数は、Tab.1の表で示すごとく8816点とそれ以外にI層から切断剥片20点・折断剥片が145点・尖頭器が2点・不定形の剥片が2481点、II層上面から切断剥片が12点・折断剥片が46点・尖頭器が1点・不定形の剥片749点、II層下面から切断剥片が4点・折断剥片が22点・不定形の剥片が58点、III層から切断剥片9点・折断剥片が6点・不定形の剥片が24点出土し総数3,579点で合計12,395点である。

このほかB・D・F地区の出土石器をここで記すことにしたい。

Tab.2 B・D・F地区出土打製石器一覧表

B地区	小石刃	削片	細石刃	折断剥片	剥片	二工次石核	石核	台石形核器	ナ形イ石器	計	F地区	削片	石核	二工次石核器	台榭石器	剥片	計	D地区はI層のみ	
																		石核再生剥片1, 小石刃1, 細石刃2, 折断剥片20, 影器1, 骨製剥片1, 縦長剥片2, 二次加工石器41, 石核20	
I	4	295	2	8	11	1	6	1	1	329	I	1	1	1			2	2	石核再生剥片1, 小石刃1, 細石刃2, 折断剥片20, 影器1, 骨製剥片1, 縦長剥片2, 二次加工石器41, 石核20
II上	1	10		2	1	1	2			17	III	5			1	2	8	8	scraper 4, 台形核石器2, 不定形剥片36, ナイフ形石器2, 削片69, 石核14, 細石核2
II下				1	3					5	IV		1		1	2	2	2	ナイフ形石器2, 削片69, 石核14, 細石核2
III				1	1					2									計218
計	5	305	2	12	5	13	1	8	1	1	353		6	1	1	2	2	12	

土坑状遺構

A地区第1地点の北側
拡張区(D・E-3区)
で検出された不整な長方
形に近い土坑状遺構で、
長さ5.2m、幅1.2m、
深さ40~50cmを測る。押
型文土器3点が出土した
が、遺構の性格は不明。

A地点出土の縄文土器
縄文土器は全部で8点
出土したが、文様のわか
る6点のうち①~③以外
は単独出土である。

①、②はともに粗大な
楕円を縦列(右上から左
下の方向)へ押捺してい
るが、規則的でない。器
形がやや外反する口縁部
片で、胎土に石英粒、砂
粒を含み、焼成はもろい。
①は内面に横位の沈線を
数条施文している。

③は粗い格子目状の押
型文土器の口縁部片で、
文様は不規則で、胎土、

焼成器形とも①、②に近い。器壁は①~③とも1.0~1.2cmで、上記の遺構から出土した。

④は横位の沈線文を数条施文した胴部片で、胎土に石英粒、砂粒を含み、焼成は堅緻。暗褐色を呈し、外面の沈線文の間には煤が付着している。曾畑式土器の文様構成に類似している。

⑤、⑥は滑石を多量に混入する口縁部片と考えられ、赤褐色を呈し、阿高式土器の胎土に類似する。⑤は渦巻状の沈線による文様、⑥は2条の沈線を組合わせた文様構成である。

①~③はいずれも口縁がやや外反する早期末の押型文土器、④は文様構成から前期の曾畑系土器、⑤、⑥は胎土、文様から中期の阿高式に含まれる土器と考えられる。

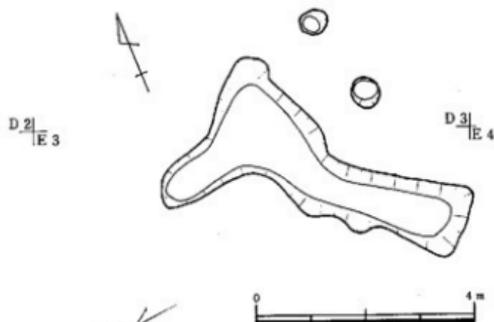


Fig. 4 A地区土坑状遺構実測図 (縮尺1/50)

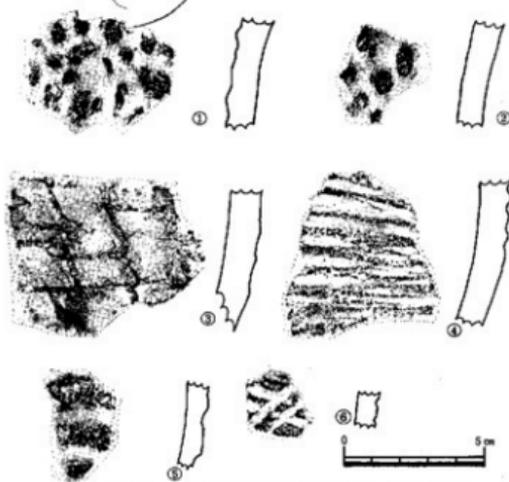


Fig. 5 A地区出土縄文式土器拓影 (縮尺1/5)

3. 甕棺墓と土塚墓

(第1地点)

A地区第1地点は、台地の最西端部にあり、A地区では第三次調査の昭和48年5月から6月まで発掘調査し、弥生時代の甕棺墓7基・土塚墓4基(うち1基は、木棺墓)と、弥生時代の遺物を出土するL字形の溝状遺構1条、さらに前述した縄文式土器片を出した土塚状遺構(Fig. 4・5)などを検出した。

検出した甕棺墓の位置関係や埋置方法については、Fig. 6・Tab-3に示すごとくである。L字形の溝状遺構は、すでに削平されているために、かなり浅く、また地形との関係から不明瞭な部分もあるが、すくなくとも甕棺墓をとりかこんで掘られていることは明らかである。この溝状遺構のほぼ中心に、大型の第2号甕棺墓が埋置されており、これとほぼ軸を同じくして、第4号甕棺墓、第6号甕棺墓と小児用と思われる第3号甕棺墓の3基がごく近接して埋置される。第1号甕棺墓と第5号甕棺墓は、北へ6-8m離れて位置し、いずれも削平されている。第7号甕棺墓は、東寄りにもっとも離れて位置する。これら計7基の甕棺墓はいずれも溝状遺構の内側にある。土塚墓は、計4基あり、第1号土塚墓は、小口の状況から木棺墓と考えられ、第4号土塚墓と2基だけが溝状遺構の内側に位置している。第2号土塚墓と第3号土塚墓は、溝状遺構の溝底あるいはその斜面にあり、溝状遺構より切られた事実を示すものではなく、むしろ溝状遺構と同時期のものと考えた方がより妥当性がある。

溝状遺構は、幅約5m、深さは最深部で40cmで現在は、かなり浅い。全長は約55mあり、西南側の端部は、現在は崖面となっており、北側は、雑木や耕作でかなり攪乱を受けており明確にできなかった。溝状遺構の出土遺物(Fig. 15・16)は、特にG・H-5グリッドより集中して出土し、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などの弥生式土器、石庖丁などの石器で多種多様である。これら出土遺物には、丹塗りの土器やY28・29・30のような小型土器やY26のような底部穿孔の土器があり、特にY31の筒形土器の出土は、この溝状遺構の性格、さらには、第1地点の墓地の性格をも決定しうるものであろう。これらの遺構・遺物が発掘調査によって明らかとなったが、表採、あるいはF地区水田の客土中からも甕棺片が出土することから、あと数基の甕棺の存在を考慮する必要がある。以上第1地点の発掘調査の結果、弥生時代中期中葉頃に第2・4・6号甕棺墓が埋置され、中期後半にかけて第1・3・5号甕棺墓、さらに第7号甕棺墓が埋置され、溝状遺構は、これらの甕棺墓の埋置と同時、あるいはすくなくとも第7号甕棺墓の埋置される間に前後して掘られたものであることが、出土遺物からも知られる。また丹塗土器、小型土器、底部穿孔土器、さらに筒形土器などの遺物は、供献葬送土器と考えられ、その対象が、特定墓か墓域全体かの問題は別にしても、甕棺墓が営まれた期間の所産、つまりある一定期間の供献・葬送の結果として把握できるのであろう。

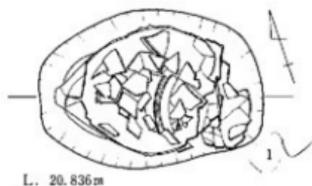
1 壺棺墓出土状況 (Fig.7 ~ 9 PL.3)

第1号壺棺墓 (Fig.7 PL.3) 現存部は、全形の約半も残っていないが、上棺のほとんどが削平されている。上棺は、復原できなかったため明確でないが、口辺部打ち欠きで覆口式の合口壺棺墓と考えていいであろう。下棺の蓋は、口辺部を欠いているが、棺内に口辺部が落ちこんでいることなどから、埋置時は完形であったものと思われる。

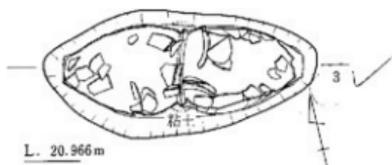
第3号壺棺墓 (Fig.7 PL.3) 不整楕円形の墓壇にはほぼ水平に埋置された接口式の合口壺棺墓であるが、口辺部が「く」の字形に外反しているために、いわゆる接口ではなく、互いちがいに組みこまれており、覆口式とすべきかもしれない。この口辺部には、白色粘土がみられた。

棺底のやや低い東棺には、胴中位に1孔が穿かれている。木製棺蓋は、その大きさから小児用と思われる。

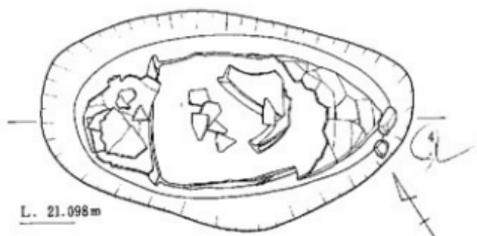
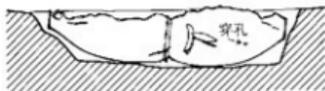
第4号壺棺墓 (Fig.7 PL.3) 第2・3・4・6号壺棺墓は、ごく近接して埋置されており、第4号壺棺墓はこれらの西寄りに位置し、主軸も大きな差はない。墓壇は、不整楕円形で、上棺部の方の壇底は斜面とし、合理的な埋置の方法をとっている。上棺は、胴部中位の突帯上より打ち欠いており、下棺の壺口縁部に合わせており、一種の接口式合口壺棺墓と言うことができよう。下棺の蓋は、断面T字形の口縁直下には、断面台形状の突帯を1条、胴中位に2条の突帯をめぐらす。上棺は、底部を欠くが、下棺と同じような器制をなすものであろう。



L. 20.836m



L. 20.966m



L. 21.098m

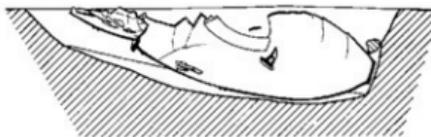
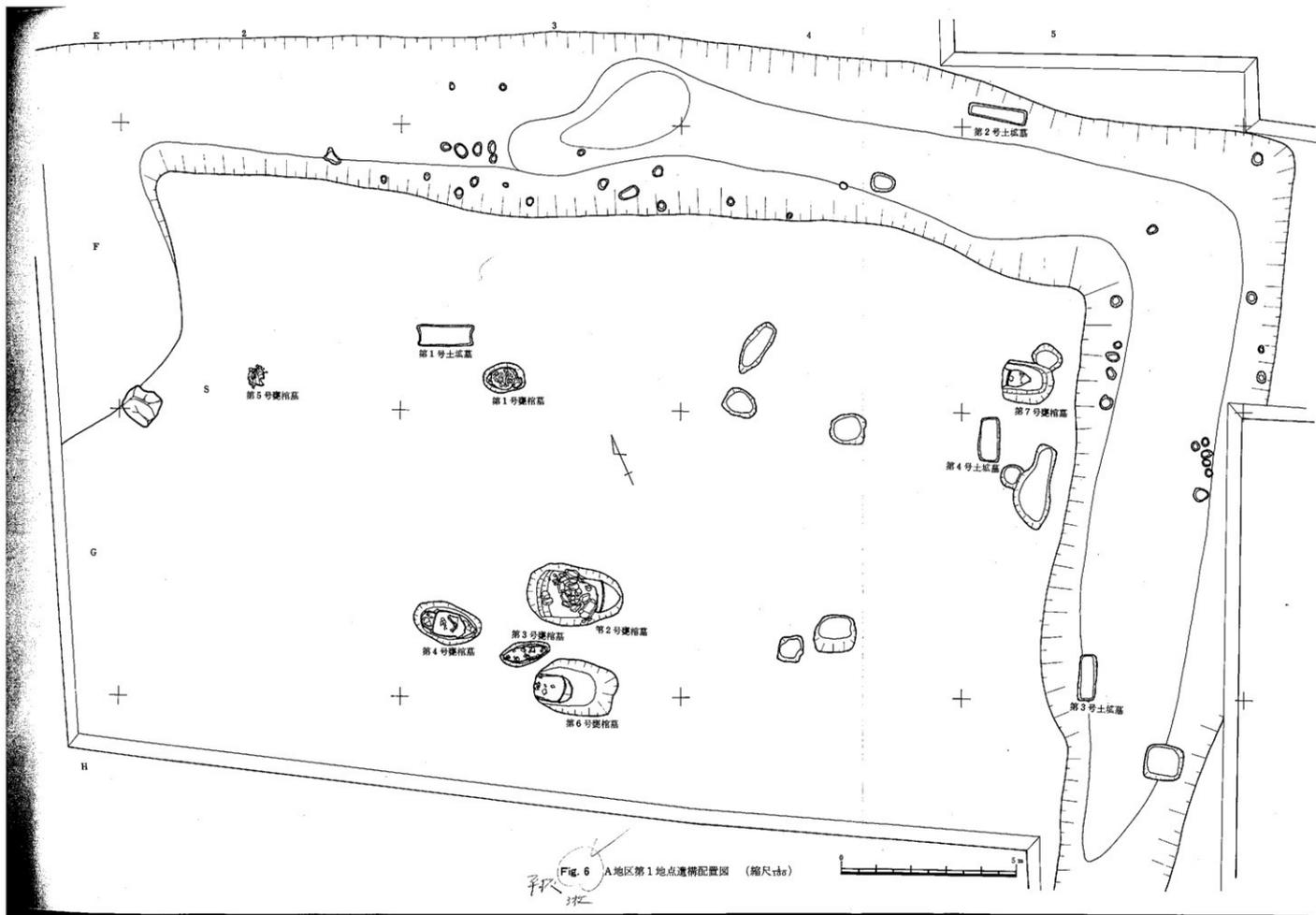


Fig.7 A地区第1・3・4号壺棺墓実測図 (縮尺点)



第5号壙棺墓 (Fig.8)

わずかに胴部の一部を残すのみで墓域や口辺部の位置、あるいは単棺か複棺か明確にすることはできないが、胴部突帯より主軸・埋置傾斜を知ることができる。本壙棺墓は、第1地点では、もっとも高い位置に埋置されており、このことから第1地点の削平状況が推測されよう。

第2号壙棺墓 (Fig.8 PL.3)

平面不整形円形の墓域は、西側口辺部は階段状に掘られ、東側棺底部は、ほぼ垂直な壁である。溝状遺構内側のはば中央に埋置されており、器高130cmを越すかなり大型の壙棺で、埋置位置や大型壙棺などは、本壙棺墓が特異な性格を有していたことを考えさせる。また口辺部の石積も例をみない。この石積は、石蓋というよりも、口辺部に粘土が用いられていることから、木蓋などの補強として置かれたものであろうか。

第6号壙棺墓 (Fig.9 PL.3)

口辺部の位置を、第2号壙棺墓とは逆にとり、平面不整形円

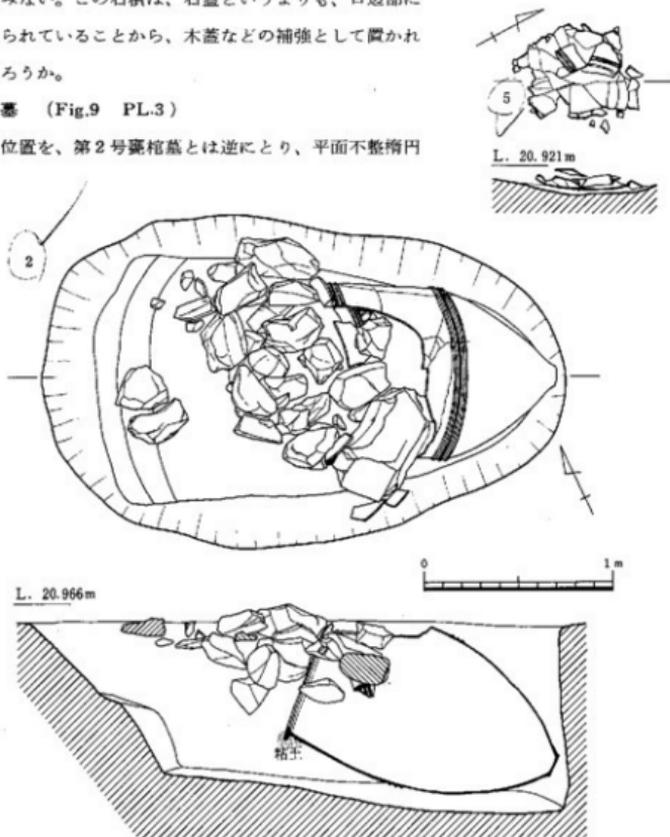


Fig. 8 A地区第2・5号壙棺墓実測図 (縮尺1/5)

形の墓壇は、一部を後世の溝によって切られているが、ほぼ旧形の状況を示すものと思われ、横穴挿入式の埋置方法をとる。上棺は、胸部にややまるみのある鉢を用いており、接口式である。

第7号甕棺墓

(Fig.9 PL.3)

平面隅丸方形の墓壇は、四壁をほぼ垂直に掘り、西側をさらに横に掘り、下棺を埋置し、上棺の鉢を接口式に合わせる。上下棺とも形態の異なる甕で、しかも「く」の字形に外反する口縁をもつが、上下甕の口径は、一致する。

本甕棺墓は、溝状遺構内側の西側コーナーにあり、他とは、やや離れて位置し、時代的にも差があり、第1地点では、もっとも新しい時期が考えられる。

第1地点の甕棺墓からは、副葬品、人骨などは検出されなかった。

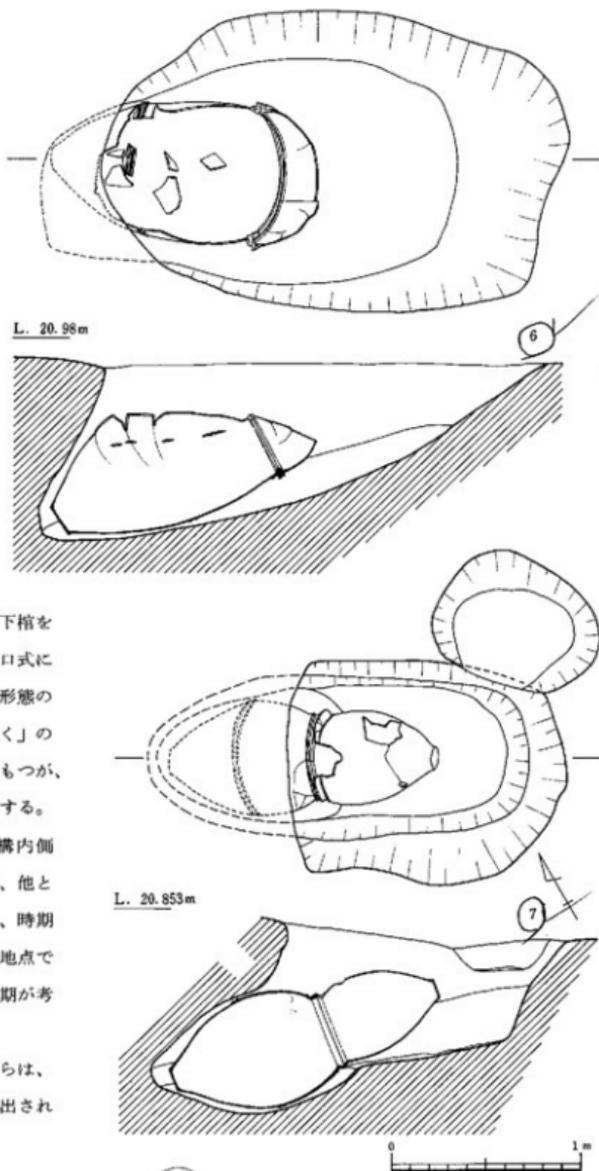


Fig.9 A地区第6・7号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{50}$ ）

2 出土甕棺 (Fig.10~12)

第1地点での検出甕棺墓は、計7基で復棺が5基、単棺が2基である。このうち、第1号甕棺墓の上棺は復原できず、下棺の甕も完全に復原できずに口辺部のみを図示した。第3号甕棺墓も、極端に器壁うすく、胴部を復原できなかった。

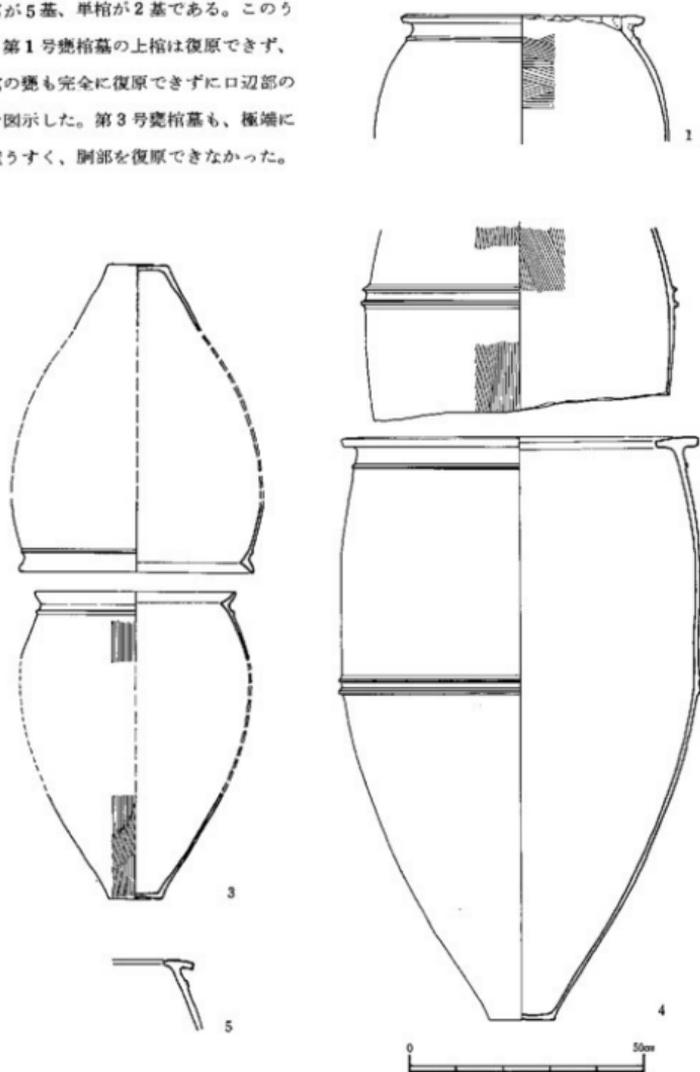


Fig.10 A地区第1・3-5号甕棺実測図 (縮尺1/2)

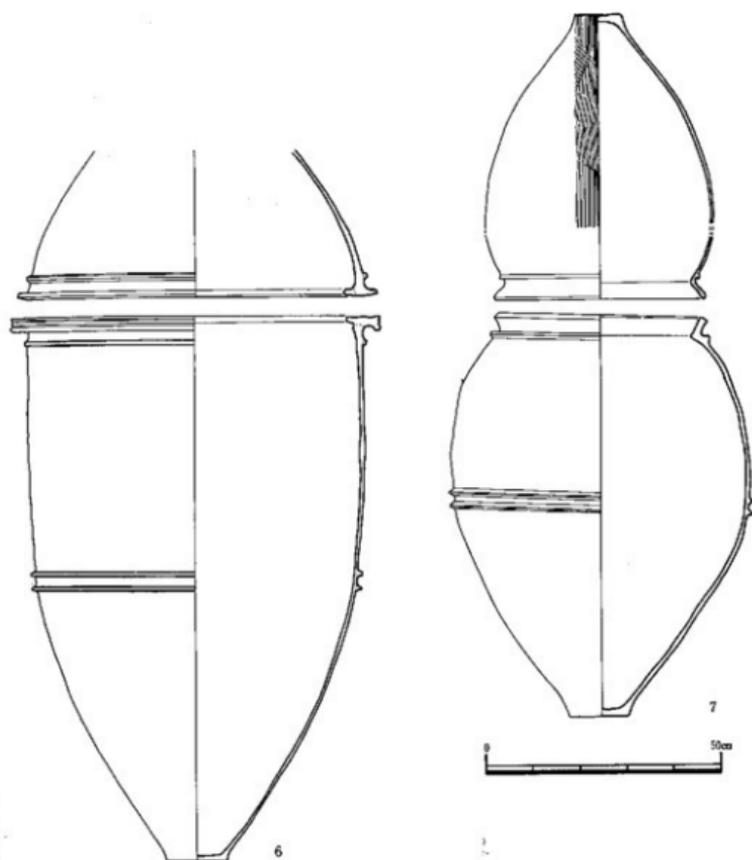
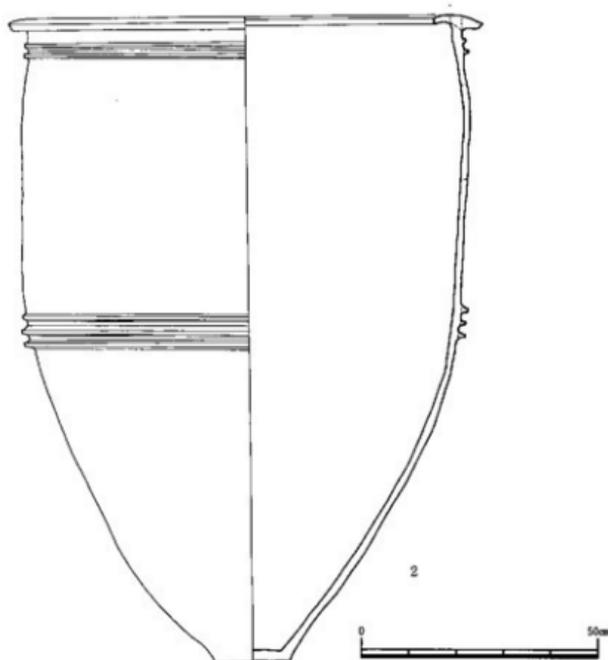


Fig.11 A地区第6・7号甕棺実測図（縮尺1/4）

Fig.12 A地区第2号壺棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

第1号壺棺 (Fig.10)

口縁内側の突出部は、打ちかかっているが、いわゆる逆L字形の口縁で、上面は平坦をなすものであろう。口縁下に断面コの字形の突帯をめぐらし、その稜線は鋭い。胴部下半部は復原できなかったが、かなり張るものと思われる。口辺部の器壁厚く、粘土の雜ぎ目がよく観察できる。内面は、横方向に粗い刷毛を用いている。赤みをおびた黄褐色を呈す。口径52cm。

第2号壺棺 (Fig.12)

口径100cm、器高137cmをはかる大型の壺棺であるが、調整は丁寧である。内外唇とも、よく発達、誇張されたT字形の口縁をもつ。口縁下に、断面コの字形の背の高い2条の突帯をめぐらし、胴上半部は、張りをみせず直線的にのびる。胴部中には、口縁下の突帯と同じような断面コの字形の突帯を3条めぐらしている。これらの突帯は、器面調整後に、丁寧な横ナデを加えて貼付けていることが、その剝離状況から観察できる。底部は、平底であるが、内面はやや盛りあがっている。外面赤褐色を呈し、胴上部に焼成時の黒斑が見られる。

第3号墓棺 (Fig.10)

上棺の甕ともに器壁うすく、胴部を復原できなかつた。下甕は、あげ底の底部から胴部中位よりやや上に最大径をとり、くの字形に外反する口縁へつづく。口縁内面は、まるみがあるが稜を持ち、内彎しながら外方へのびる。口縁直下には、やや上むきの断面三角形突帯をめぐらし、その下部から底部に、上下方向の刷毛目をほどこす。外面茶褐色を呈す。口径42cm、器高約62cmをはかる。上甕は、口径50cmとやや大きいのが、器制を同じくする。口縁の突帯は、やや小さくなり、外面磨滅のため調整痕不明。赤みをおびた茶褐色を呈す。

第4号墓棺 (Fig.10)

上棺の甕は、胴部上位より打ち欠く。胴部に2条の突帯をめぐらす。突帯断面は、三角形に近いが、まるみをもつ。内外面ともに粗い刷毛目が見られ、特に突帯部は刷毛目ののちに横ナゲしている。下棺の甕は、底部から、内彎しながらのびる胴部は、胴部中位から、直線的になり、内傾するT字形口縁へとつづく。口縁の内外唇部は、よく発達し、外唇部は、ぶ厚いつくりをなす。下甕は、口径72cm、器高125cm、淡茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良。

第5号墓棺 (Fig.10)

削平された墓塚に、わずかに胴部の一部を残していたのみであるので復原できず、ここでは、その墓塚に落ちこんでいた口辺部のみを図示する。したがって現存部の胴部と同一節体となるかは明確でない。口縁上面は、平坦面をつくり、内外突出部は、よくのびる。口縁下の突帯と外唇は、断面M字形をなす。砂粒少なく、焼成良好。外面は、赤みをおびた茶褐色を呈し、内外面ともに、ナゲ痕のこる。特に内唇下は、横ナゲで凹む。口径不明。

第6号墓棺 (Fig.11)

上棺は、内外面に発達良好なT字形口縁をもつ鉢形土器が用いられている。口径78cmの口縁は、ぶ厚いつくりをなし、口縁下の、断面コの字形突帯も、幅広くつくられている。胴部は、口辺部より、ややふくらみをもって底部へのびるが、底部欠損のため不明。外面赤褐色を呈する。下棺の甕は、口縁部に特徴を持っている。平底の底部から内彎しながら立ちあがる胴部は、胴部中位より、直立ぎみになり、口縁へとつながる。胴部中位の2条の突帯は、断面コの字形をなす。口縁は、いわゆるT字形をなすが、外唇が、垂直方向に異状に発達し、ここに2条の沈線を入れる。口縁下には、断面M字形の小さな突帯をめぐらす。外面黄褐色。

第7号墓棺 (Fig.11)

下棺の甕は、小さめの底部を持ち、胴部は、最大径を中位よりやや上にとり、くの字形に外反する短い口縁につながる。2条の突帯は、胴部中位にあり、断面三角形をなす。口縁内面は、鋭い稜をもつ。外面は、筒状のもので丁寧なナゲ調整をほどこす。上棺の甕は、くの字形に外反する口縁部をもつが、口縁端は、まるみを持っておさまり、内面の稜線部も鋭さを欠いている。胴部には、上下方向の刷毛目痕がのこる。

3 土塚墓出土状況

(Fig.13 PL.4)

第1号土塚墓 (Fig.13 PL.4)

L字状の溝状遺構の内側にあり、第1号藁棺墓と近接して位置する。平面プラン長方形の土塚は、長さ約152cm、幅59cmをはかり、やや西短側（西小口）が幅広いようである。四壁とも、ほぼ垂直に掘りこまれており、塚底は、ほぼ平坦となる。両短側壁の両端は、長側壁にそって掘りこみがみられ、木棺墓側板の痕跡と思われる。小口板の存在は、確認できなかったが、小口板を2枚の側板でおさえる構造が考えられる。

第2号土塚墓 (Fig.13 PL.4)

溝状遺構内にあり、第1号土塚墓とはほぼ方位を同じくする平面プラン長方形の土塚で、長さ168cm、幅38cmをはかる。東短側が幅広くなっており頭位か。四側壁は、いずれもほぼ垂直の壁を持っており、塚底は、平坦である。現存部は、いくらか削平されていると思われる。

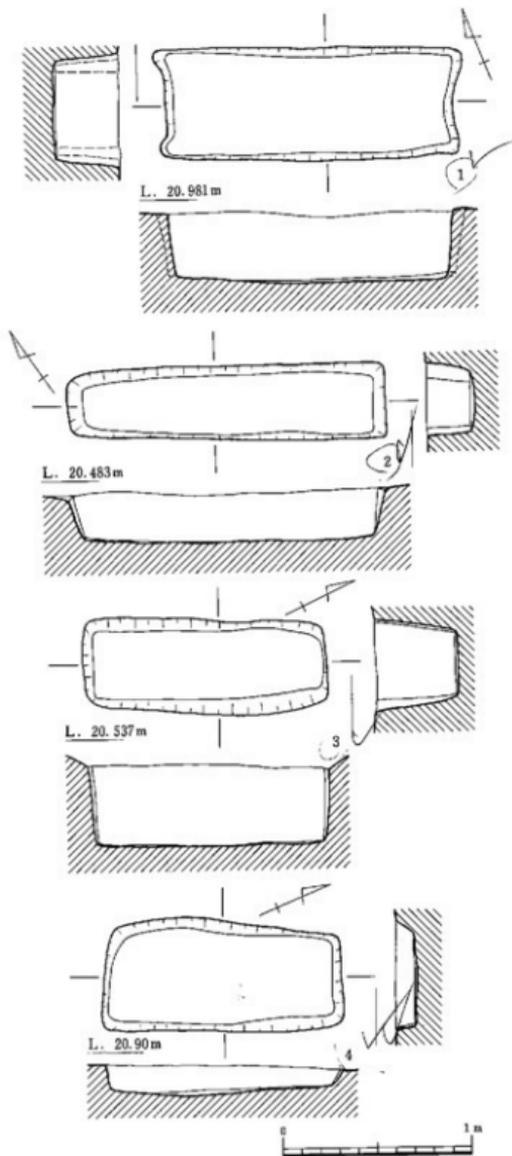


Fig.13 A地区第1～4号土塚墓実測図 (縮尺示)

第3号土塚墓 (Fig. 13 P.L. 4)

第2号土塚墓と同じように溝状遺構内より検出されたものであるが、方位は、ほぼ直角のN-26°-Eをとる。平面プラン長方形の土塚は、長さ129cm、幅49cmとやや小型である。坑内埋土の上より溝状遺構の土器片が出土することから、すくなくとも本土塚墓は、溝状遺構より新しい時期は示さないであろう。坑底は、平坦で、もっとも深く掘りこまれている。

第4号土塚墓 (Fig. 13)

溝状遺構の方向と平行に長軸をとるもので、第3号土塚墓と同一方向を示すが、溝中ではなく、第7号甕棺墓に近接して位置する。平面プランは、長さ125cm、幅58cmの長方形で、通例の土塚であるが、深さ14cmと掘りこみが浅い。これは、第1地点の第1・3・5号甕棺墓の残存部からみて、かなり上部を削平された状況を示しているものと思われる。

Tab. 3 A地区第1地点甕棺墓一覧表

(単位 cm)

No.	方位	傾斜	形式	土器	墓		時期	備考	Fig.	PL
					長さ×幅×深さ	坑底レベル				
1	N-12°-W	SE-32°	覆口?	甕+	不整楕円形 118×85×30	20.456m	中期		7.10	3
2	N-65°-W	NW-22°	単	甕	不整楕円形 276×170×82	19.846m	中期	口辺部に粘土	8.12	3
3	N-77°-W	ほぼ水平	接口	甕+甕	不整楕円形 145×65×31	20.55m	中期	上棺の甕に接痕	7.10	3
4	N-58°-W	NW-18°	接口	甕+甕	不整楕円形 196×115×72	20.378m	中期		7.10	3
5	N-29°-E	ほぼ水平	不明	甕	不明	20.761m	中期		8.10	
6	N-42°-W	SE-31°	接口	甕+鉢	不整楕円形 250×158×78	19.90m	中期		9.11	3
7	N-60°-W	SE-16°	接口	甕+甕	隅丸方形 147×112×103	19.773m	後期		9.11	3

Tab. 4 A地区第1地点土塚墓一覧表

(単位 cm)

No.	方位	平面形	長さ×幅(左・中・右)	深さ	坑底レベル	備考	Fig.	PL
1	N-69°-W	長方形	152×58・59・56	36	20.531m	木棺か?	13	4
2	N-56°-W	長方形	168×33・38・40	26	20.143m	溝状遺構内に位置する。	13	4
3	N-26°-E	長方形	129×44・49・39	43	19.967m	溝状遺構内に位置する。	13	4
4	N-24°-E	長方形	125×53・58・49	14	20.69 m		13	

4 溝状遺構 (Fig. 14 P.L. 5)

溝状遺構は、前述したように、その全貌をついに知りえなかったが、すくなくとも溝状遺構の外側には、同時期の関連すると思われる遺構の存在はない。溝状遺構内の出土遺物は、土器と石器に限られる。土器、石器は、ともに弥生時代の遺物で、新しい時期の遺物の混在はない。また、これらの土器の示す時期と、甕棺墓の示す時期とは、大きい差は認めがたい。出土土器は、溝状遺構内に分散してはいるが、G・H-5グリッドに集中しており、流れこみの

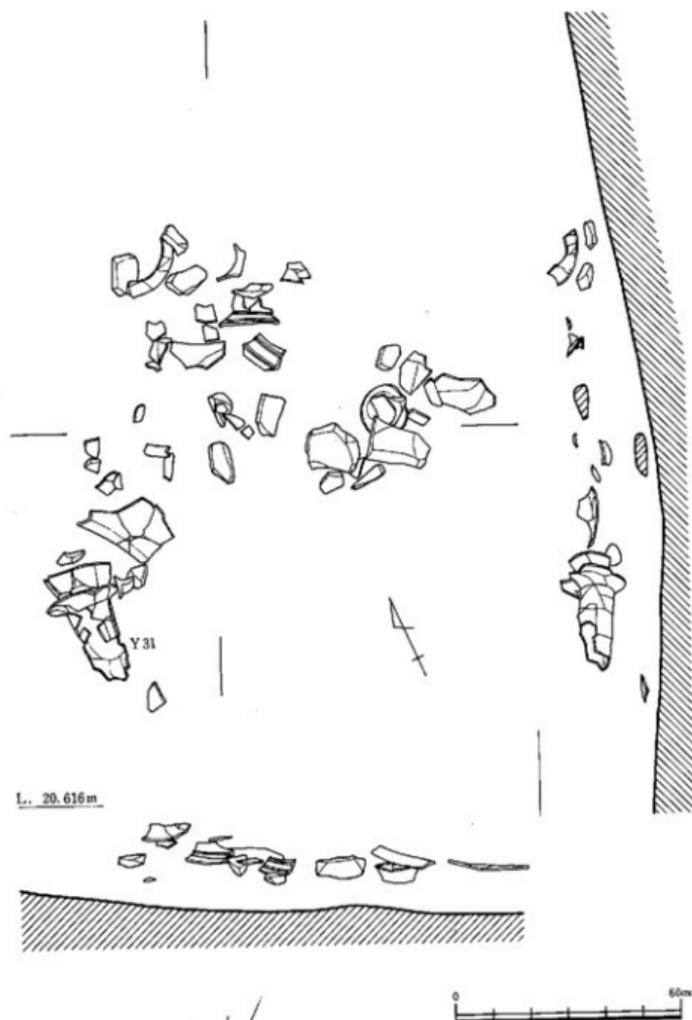


Fig.14 A地区溝状遺構内土器出土状況図 (縮尺占)

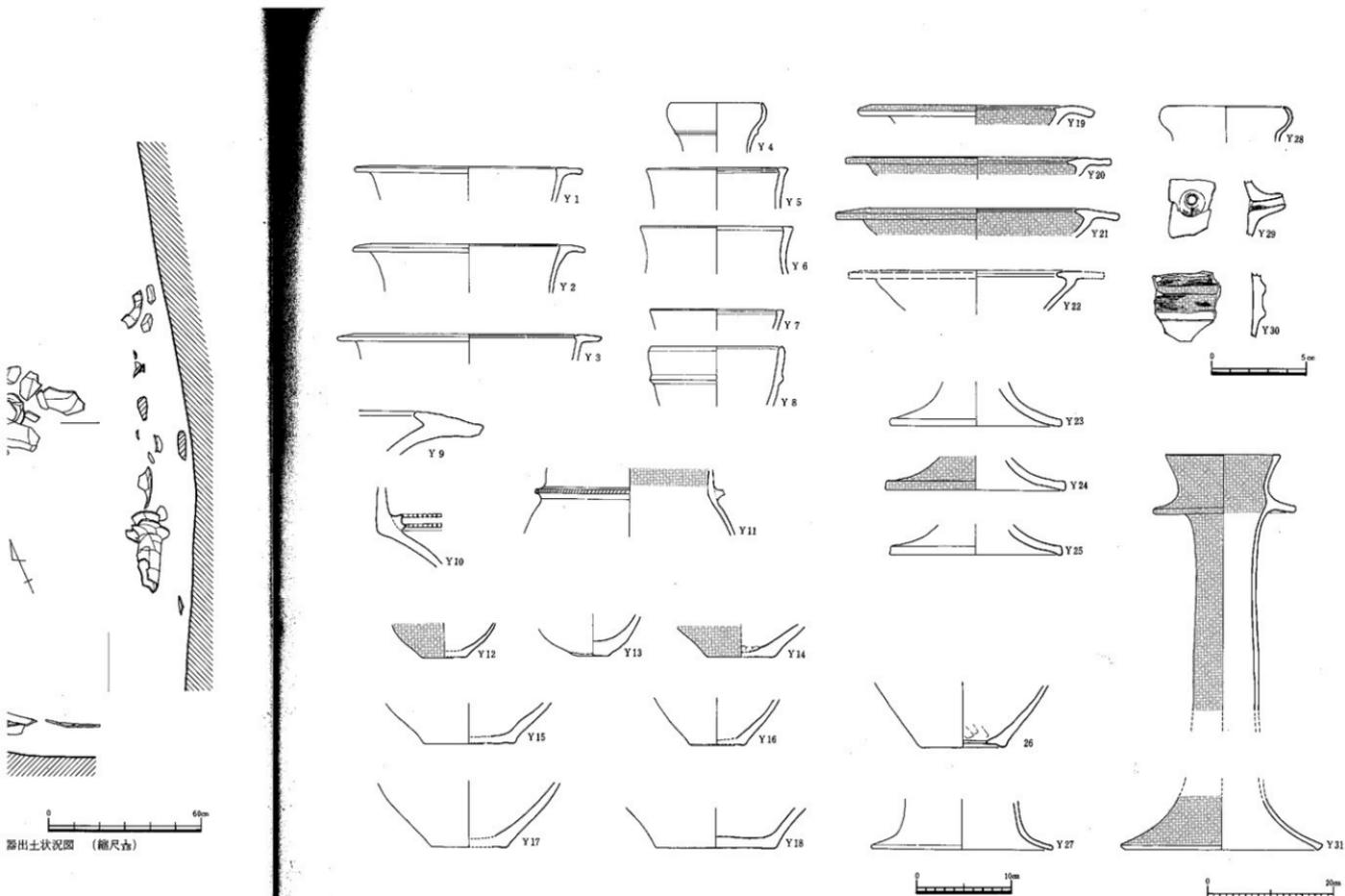


Fig. 15 A地区溝状遺構内出土土器実測図(1) (縮尺 $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{4}$)

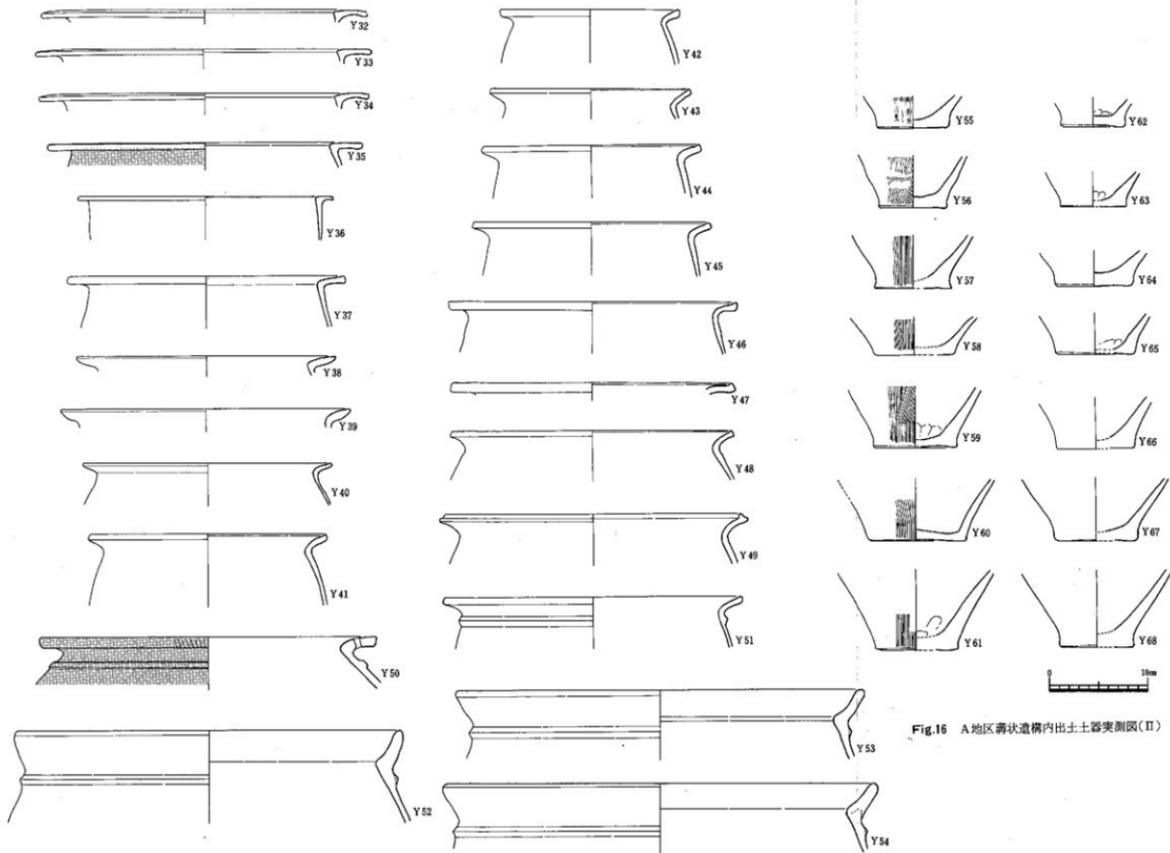


Fig.16 A地区薄状遗構内出土土器実測図(Ⅱ) (縮尺寸)

状態ではなく、むしろ意識的な投げこみ(?)を推測させる。H-5グリッドの筒形土器は、脚部を欠いており、また、底部穿孔土器、丹塗り土器の出土は、この推測を裏付けるものと考えられる。以下、溝状遺構の出土土器について、表にして記す。

Tab. 5 A地区第1地点溝状遺構出土土器一覧表 (I)

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.
Y-1	G-4	壺	口部部	口径 24	長い頸部に上面を平坦にした口縁部をつける。Y1・2の頸部は直線的であるがY3はやや彎曲し口縁部もやや方にかがむ。	内外面ともに砂粒露出	砂粒多い	黄褐色		15
Y-2	G-5	壺	口部部	口径24.5		口辺部横ナゲ、他は内外面ともにナゲ	砂粒、焼成痕	茶褐色		15
Y-3	G-4	壺	口部部	口径 28		口辺部横ナゲ	砂粒、焼成痕	黄褐色		15
Y-4	A地区	壺	口部部	口径 9.6	内側に彎曲した口縁部をもち、口縁部に断面直線的な胎土の露出がある。	かなりの磨滅をうけ砂粒露出	砂粒多 焼成痕	淡黄褐色		15
Y-5	A地区	?	口部部	口径 15	Y8以外はいずれも平坦な口縁をもつもので内側にわずかな突出部がある。Y8は、まるみのある口縁下に三角突起をつけてありY7と同様に胎土の露出とされるがY5、6はY21の口縁部に類似しているが口縁にあまりにも差がある。		砂粒多 焼成痕	黄褐色		15
Y-6	F-5	?	口部部	口径 16			砂粒、焼成痕	茶褐色		15
Y-7	F-5	?	口部部	口径 14		内外面磨滅	砂粒、焼成痕 や軟質	茶褐色		15
Y-8	A地区	?	口部部	口径 15		口辺部ヨコナゲ	砂粒わずか、 胎土	淡黄褐色		15
Y-9	G-5	壺	口部部	口径不明	頸部は大きく彎曲して外方にひろがるものと考えられる。	内外面ともに磨滅、胎土露出	砂粒少量 焼成痕	黄褐色		15
Y-10	G-5	壺	体部		Y1-3、Y9のような口縁部につきがる頸部がある。Y18は胎土目立つ胎土砂粒突起をつける。	内外面ナゲ、斜字突起に似る	砂粒少量 焼成痕	黄褐色		15
Y-11	F-5	壺	体部			内面ナゲ、外面横ナゲ、フの字突起	胎土種良、焼成痕	淡黄褐色 内面淡褐色	わずかに丹塗り痕	
Y-12	G-5	壺	底部	底径 4.6	径の小さな底部に、まるく内に彎曲する体部がつく。Y13は平や中つあがあるがいずれも胎土口縁をもつものである。	外面丹塗り?	砂粒少 焼成痕	黄褐色		15
Y-13	A地区	壺	底部	底径 3.5		内面なめらか 底部ややくぼむ	砂粒少 や軟質	赤褐色		15
Y-14	G-5	壺	底部	底径 6.8	短径、斜壁などに差はあるが、体部への立ちあがある。内径すようである。Y18は平底である。	内面ナゲ、底部内面風状の押圧痕	砂粒、良	赤褐色	外面丹塗りの可能性	15
Y-15	G-5	壺	底部	底径 9.4		内面ナゲ、底部内面の溝線は横ナゲ	砂粒もつが胎土種良	赤褐色	外面丹塗り?	15
Y-16	G-5	壺	底部	底径 5.8		内面上下方向のナゲ	砂粒、焼成痕	赤褐色		15
Y-17	G-5	壺	底部	底径 8.2		内面丁寧なナゲ外表面斜毛(?)後にナゲ	砂粒	灰褐色		15
Y-18	G-5	壺	底部	底径12.6		底部平底	砂粒少量 焼成痕	黄褐色		15
Y-19	F-4	高杯	口部部	口径 25	いずれも輪状の口縁をもつ。Y19は上面にまるみがあるが胎土はほぼ平坦である。Y19、21は、口縁部に下方にかがむ。	内外面横ナゲ	砂粒多く胎土や軟質	赤褐色丹塗り 胎土露出		15
Y-20	G-5	高杯	口部部	口径 28		内外面横ナゲ	胎土種良 や軟質	赤褐色 内外面丹塗り		15
Y-21	G-5	高杯	口部部	口径 30		内外面横ナゲ	砂粒少量 焼成痕	赤褐色 内外面丹塗り		15
Y-22	G-5	高杯	口部部	口径 27		頸部内面丁寧な横ナゲ	砂粒すくない	赤褐色 内外面淡褐色		15
Y-23	F-4	高杯	脚部	脚径 18	Y24以外は、丹塗り痕が認められない。脚縁部にやや湾曲がある。Y25は脚部内面を押し入っており凹状となる。	外面砂粒露出、内外面横ナゲ	砂粒	茶褐色	丹塗り痕認められず	15
Y-24	G-5	高杯	脚部	脚径 19		内外面ナゲ	胎土種良 焼成痕	赤褐色	外面丹塗り	15
Y-25	G-5	高杯	脚部	脚径 18		横部横ナゲ	胎土、焼成痕	黄褐色	丹塗り痕なし	15
Y-26	G-5	?	底部	底径 9	底部に焼成痕の穿孔、わずかに凹痕	底部ちかくに凹痕	砂粒、焼成痕	暗茶褐色		15
Y-27	A地区	?	底部	底径 19	縁部より上には、斜壁のつき、後部は胎土のみの凸となる。	内外面ともに磨滅	砂粒、焼成痕	黄褐色		15
Y-28	G-5	壺	口部部	口径 6.2	胎土露出にうすく丁寧なつくりをみせる。Y29、30とも小さな土器である。		胎土、焼成痕	黄褐色	Fig. 15の脚部は凡	15
Y-29	G-4	?	注口	注口径0.8	注口の長さ 1.9cm		胎土、焼成痕	内面淡褐色 内面淡黄褐色		15
Y-30	G-5	?			断面コの字形の突起をもち丹塗り痕あり。	胎土種良 焼成痕		黄褐色		15
Y-31	H-5	壺?	口部部	口径 18 底径 4.2 底径 3.5	脚部の途中を欠くが胎土露出、丹塗り痕認められるが胎土はけいしい。口縁のつくりはY5、6に似る。		砂粒、焼成痕	黄褐色	Fig. 15の脚部は凡	14-15

Tab. 6 A地区第1地点溝状遺構出土遺物一覽表(II)

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	器種	器部	法量	形 態 の 特 徴	手法の特徴	胎土・焼成	色 調	備 考	Fig.
Y-32	G-5	甕	口辺部	口径 32	近し字形の口縁をもつもので上面に平出部をつくる。内面に焼がはいるが突出部は顕著でない。Y35は「く」の字をなす。	内面縁をもつ	砂粒, 良	黄褐色		16
Y-33	G-5	甕	口辺部	口径 34		内外面横ナデ	砂粒わずか, 焼成良	やや赤みおびた黄褐色		16
Y-34	G-5	甕	口辺部	口径 33		外面横ナデ	砂粒, 堅緻	黄褐色		16
Y-35	F-4	甕	口辺部	口径 32		内外面横ナデ, 内面縁縁下はやくくむ	砂粒すくない, 焼成良	黄褐色	外側わずかに丹塗りあり	16
Y-36	H-5	甕	口辺部	口径25.8		肩縁のたの調整部不明	焼成良	黄褐色		16
Y-37	F-4	甕	口辺部	口径 28	浅ね上がり口縁と同様に「く」の字形の口縁をもつが, 浅ね上がり顕著でない。	外面砂粒露出	焼成良	黄褐色		16
Y-38	H-5	甕	口辺部	口径 26			砂粒すくない, 焼成良	黄褐色		16
Y-39	H-5	甕	口辺部	口径 29	Y39, 40はややあつく部縁はげしく彫削部はまるみがある。	部縁はげしく彫削をこどない。	砂粒すくないが3mm位の小石もつ	黄褐色		16
Y-40	H-5	甕	口辺部	口径 25		内外面とも彫削はげしく調整部不明	砂粒多し, 焼成良	黄褐色		16
Y-41	F-5	甕	口辺部	口径 24			砂粒, 焼成良, 彫削	黄茶褐色		16
Y-42	H-5	甕	口辺部	口径 18	いわゆる浅ね上がり状の口縁をもつもので「く」の字の口縁をもつY47は, やや平出部のみであり, Y49は, 浅ね上がりが特に深い。	口辺部は横ナデ, 外面は丁寧なナデ調整	砂粒すくない, 焼成良	茶褐色		16
Y-43	G-5	甕	口辺部	口径20.4		内外面ともに丁寧なナデ調整	砂粒, 堅緻	黄褐色		16
Y-44	F-5	甕	口辺部	口径 22			砂粒	灰茶褐色		16
Y-45	A地区	甕	口辺部	口径 22		内外面ともに丁寧なナデ	砂粒, 焼成良, 彫削	灰黄褐色		16
Y-46	A地区	甕	口辺部	口径 24		口辺部横ナデ	砂粒, 焼成普通	淡黄褐色		16
Y-47	A地区	甕	口辺部	口径 29		口辺部横ナデ, 外面ナデ	砂粒, 焼成普通	淡黄褐色		16
Y-48	F-4	甕	口辺部	口径28.5		丁寧なナデ調整	砂粒, 彫削に準緻	淡黄褐色		16
Y-49	A地区	甕	口辺部	口径 31			砂粒, 焼成普通	黄褐色		16
Y-50	A地区	甕	口辺部	口径 34	くの字面に外交するあつくの口縁部は二重一重の調整部をなす。	口辺に1かからの厚足, 口縁部は斜めの厚足	砂粒すくない, 胎土, 焼成良	灰茶褐色	外側丹塗り	16
Y-51	G-5	甕	口辺部	口径 32	Y52は調整部は深であるが, 浅ね上がりはさくく, 口縁下に二重調整部をもつ。	外側調整し, 調整部不明	砂粒多い, 焼成普通	淡黄褐色		16
Y-52	H-5	甕	口辺部	口径 39	大型の調整部があつめの口縁部は, 内に彫削ははいりやや内寄しながらのび, まるくおさまる。口縁下に浅うけの調整部。	調整部不明	砂粒多い, 焼成普通	黄褐色		16
Y-53	H-5	甕	口辺部	口径 41		内外面ともに調整し, 砂粒露出, 調整部不明	砂粒多い, 焼成普通	黄褐色		16
Y-54	H-5	甕	口辺部	口径 44		調整部不明	砂粒多い, 焼成良	黄褐色		16
Y-55	G-5	甕	底部	底径 7.4	いずれも外面に刷毛目調整をしたもので, Y55・Y56・Y61のように刷毛目横ナデを加えた可能性のあるものもある。	外面刷毛目ナデ?	砂粒, 良	内面赤褐色, 外面黄褐色		16
Y-56	G-5	甕	底部	底径 7.0		外面刷毛目ナデ?	砂粒, 良	内面赤褐色, 外面黄褐色		16
Y-57	F-4	甕	底部	底径 7.8	底径は平底とややあけ部との間, 内面に深または調整のものや押痕が写りわたるもの。(Y39・Y61)。底部外側縁がやや突出するもの(Y37・59)などの特徴をもつものがある。	外面刷毛目ナデ	砂粒, 良	黄褐色		16
Y-58	G-4	甕	底部	底径 8.2		外面刷毛目ナデ	砂粒, 良	赤褐色		16
Y-59	G-5	甕	底部	底径 8.6		外面刷毛目ナデ	良, 良	黄褐色		16
Y-60	H-5	甕	底部	底径 10		内面砂粒露出, 外面刷毛目	砂粒多, 良	茶褐色		16
Y-61	G-5	甕	底部	底径 8.4		調整部内面押痕, 外面刷毛目ナデ	砂粒, 良	外側黄褐色, 内側赤褐色		16
Y-62	H-5	甕	底部	底径 6.6	外面に刷毛目がない一帯で底径のつくりはY55・Y61と現をにしている。	調整部内面押痕, 外面刷毛目ナデ	砂粒, 良	赤茶褐色		16
Y-63	G-5	甕	底部	底径 6.6		底部内面押痕	砂粒, 良	黄褐色		16
Y-64	G-5	甕	底部	底径 4.0	やや底部のあつたもの。あるいは, 甕の底部と思われるものもある。	外面横ナデ	砂粒, 良	黄褐色		16
Y-65	G-5	甕	底部	底径 8.0		内外面丁寧なナデ, 底部内面押痕	砂粒, 良	茶褐色		16
Y-66	G-5	甕	底部	底径 8.0		内面砂粒露出	砂粒多, 良	明黄褐色		16
Y-67	G-5	甕	底部	底径 8.6		内外面ナデ	わずかに砂粒	茶褐色		16
Y-68	G-5	甕	底部	底径 7.6		内外面ともに丁寧なナデ調整	わずかに砂粒, 胎土	内側赤褐色, 外側黄褐色		16

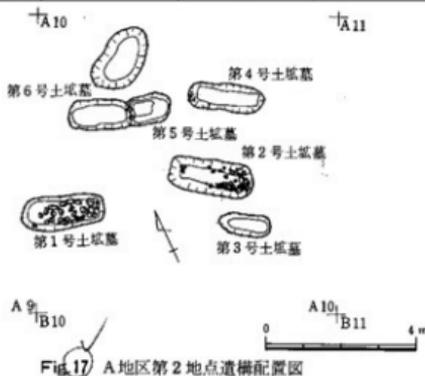
(第2地点)

A地区第2地点の土城墓は、A地区第二次調査の昭和47年10月から12月までの発掘調査で検出したものである。第2地点は、台地の中央北端部に位置しグリッド番号は、A-C-10-13グリッドである。ここで述べる土城墓6基は、A-10グリッド8×8mの1グリッド内にあるが、外にも数基の土城が認められたが、平面不整形で長軸も統一性がなく不定形であったために、ここにはとりあげなかった。6基の土城墓は、いずれも長軸をほぼ同じくし、IV層の高礫を含む黄褐色粘質土層に掘りこまれているが、A地区第1地点、およびD地区の状況からして土城上部は削平されたとすべきだろう。第1・2号土城墓は、塚底・側壁にそって小児人頭大の石を並べており、ある種の木棺墓を推測せしめる。第5・6号土城墓は、短側が互いにつながっているが、長さ、墓底の深さ、長軸ともに異なることから、2基の土城墓の切り合いとすべきであろう。ただし切り合いの先後関係は、土質・平面的にも把握できなかった。出土遺物は、第1・2号土城墓の石器のみであるが、特に第2号土城墓の有茎磨製石鈿2本は、第2地点土城墓群の時期推定ばかりでなく、北部九州におけるこの種の出土遺跡の1つとして新たな資料を加え、土城墓という明瞭な遺跡から出土したことは、さらに重要なことであろう。

Tab.7 A地区第2地点土城墓一覽表

(単位cm)

No.	方位	平面形	長さ×幅(左・中・右)	深さ、塚底レベル	備考	Fig.
1	N-77°-W	隅丸長方形	222×87・97・70	20・20.47m	塚底および側壁にそって小児人頭大の石を置く、石器出土	18
2	N-36°-W	隅丸長方形	224×85・95・90	28・20.44m	東短側に集中して石を置く。 有茎磨製石鈿	18
3	N-78°-W	隅丸長方形	140×54・58・51	14・20.54m		19
4	N-65°-W	隅丸長方形	202×68・72・57	31・20.43m		19
5	N-78°-W	隅丸長方形	108×76・77・67	23・20.47m	第6号土城墓と切り合い?	19
6	N-72°-W	隅丸長方形	163×72・82・70	21・20.49m		19

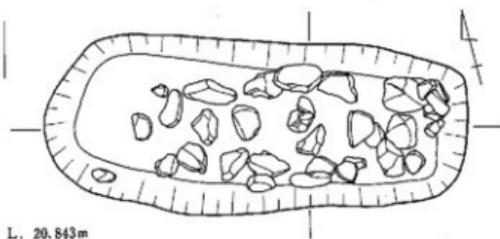
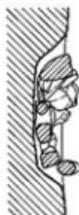


土墳墓出土状況

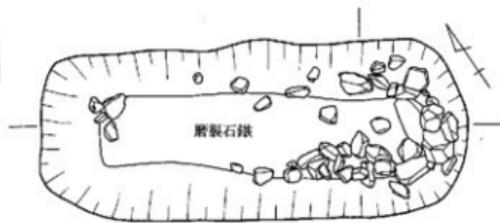
第1号土墳墓

(Fig.18 PL.7)

平面プランは、隅丸長方形である。小児人頭大の石は、墳底と西短側壁をのぞく3壁に認められる。石の大きさには統一性がないが、墳底は、ほぼ同じ高さであり、側壁は、壁に立てかけか、ほぼ垂直に立っている。石器は、この石の間より出土したもので安山岩質の石材を用いており、全長14.6cm、厚さ6mmあり、一部分研磨されて



L. 20.843m



L. 20.843m

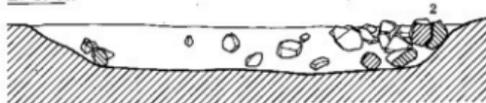


Fig.18 A地区第1・2号土墳墓実測図 (縮尺赤)

いるが、完成品であるか疑わしい。側壁の石、あるいは墳底の石の状況からして、第2号土墳墓とともに、木棺の可能性がある。

第2号土墳墓 (Fig.18 PL.7)

平面プランの幅が第1号土墳墓より広いほかは、長さ・平面プランとも類似している。域内の石は、東短側に集中しており、墳底には少なく、石の大きさにも不統一性が目立つ。2本の有茎磨製石鏃は、土墳のはば中央部より出土したもので一本は、鋒先を下にし、もう1本は、水平の状態であった。検出時に刃部を欠いた方は、全長11.7cm・茎長2.4cmあり、もう1本は、全長12.5cm・茎長2.5cmをはかる。いずれも背には茎までつながる溝をもち、断面菱形の身であるが、前者は、やや偏平さみである。

第3号土塚墓 (Fig19)

第2地点では、もっとも小さく塚底のレベルも高い。平面プランは、隅丸長方形であるが、西短側は、楕円形となる。出土遺物はなんら認められなかった。

第4号土塚墓 (Fig19)

長側壁が直線的でないが、平面プランは、隅丸長方形で、長軸を、第2・3号土塚墓とほぼ等しくする。

第5号土塚墓 (Fig19)

第6号土塚墓と切り合いと思われるが、第5号土塚墓を1基とすれば、やや小型となる。

第6号土塚墓 (Fig19)

第5号土塚墓より塚底の深さがわずかに高い。第5・6号土塚墓の境界にある4個の石は、どちらに属するかは、明確でない。

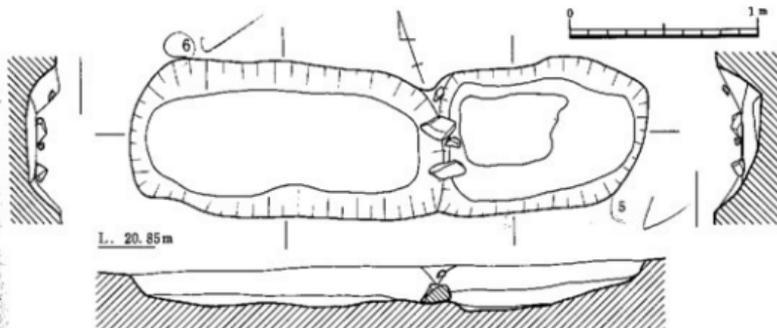
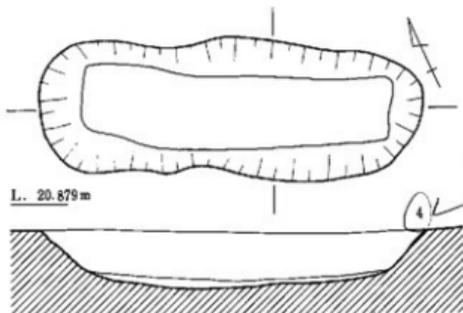
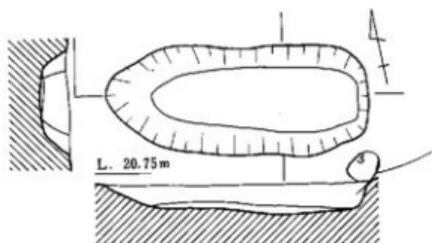


Fig.19 A地区第3～5号土塚墓実測図 (縮尺あり)

7214
4. 蒲田1号墳

本墳は、かけつか山からほぼ西に向って伸びる低平な台地上に位置する。調査前の観察により、径10数mの範囲にわたり、周囲の畑地より約2mほどの高まりを持っており、一面草木におおわれ、その一部は竹林となっていることがわかった。

平板による地形測量の結果では、本墳南側はかなり急で、北東部はゆるい斜面になっており直径10数mの円墳であろうことを予測させた。南側は竹木が茂り、北東部のゆるい斜面は江戸時代以降、現代に至る墓地として利用されている。なお、本墳のほぼ中央部に「クロガネモチ」の巨木があって、これを根こそぎ獲らんがためにブルドーザーを入れた痕跡があり、結局は木の大きさと墓地側から入れないこともあってあきらめたものの、大量の土を攪乱して去った。このため調査はこの土を除けることから手をつけたが、この攪乱された土の中にはかなりの遺物と、大小の緑泥片岩の板石を含んでいた。

調査は、本墳の埋葬施設の主体部確認と土層観察のため、中央部からはば東西・南北にトレンチを設定し発掘にかかった。しかし、いずれのトレンチにおいてもその主体部らしき遺構に接することができなかつた。ただ、南トレンチにおいては、0.9m×0.6mほどの緑泥片岩の板石を検出したが、これもすでに原位置を離れていた。このため、各トレンチの土層の観察をもとに、それぞれの区域の墳丘盛土を1枚ずつ削いでゆく作業にかかった。この作業に伴って、弥生式土器片、須恵器、土師器、青磁等の破片を検出したが、ついに主体部と覚しきものの発見には至らなかつた。

墳丘盛土の状況を観ると、3本の橋状の黒色土層が認められるが、このうちの最下部に位置する黒色土層中に主として遺物の発見を見、その下層の黄褐色粘質土層中にも遺物が含まれていることがわかった。さらに上部の盛土表土内にも須恵器・磁器の出土を見たが、これらの遺物は全てが破片になっており、まともなものがそのままつぶれたという感じを受けさせるものではなく、このような遺物の出土状況から考えて、土層図に見る最下層の黒色土層が本墳築造時の地表面であったこと、さらに本墳築造に際しては本丘陵上の縄文・弥生時代の遺物を含む土を盛土として使用したことが判明した。各トレンチでの観察によれば、墳丘裾部に対する周溝などの加工は認められなかつたが、北側に地山をわずかに削ったと思われる部分があった。しかしこの加工が本墳築造時においてなされたものかどうかは不明である。

最後に、北東部の墓地の部分を除き、南東・南西・北西の各区を地山面まで掘り下げたが、いずれの区においても埋葬主体部に接することはできなかつたし、地山面においても、その加工の痕跡を認めることはできなかつた。そのほか、埴輪・葦石・石列などの外部施設も一切認められなかつた。

以上の調査により、ブルドーザーによる破壊のため埋葬主体部を確認できなかったという、

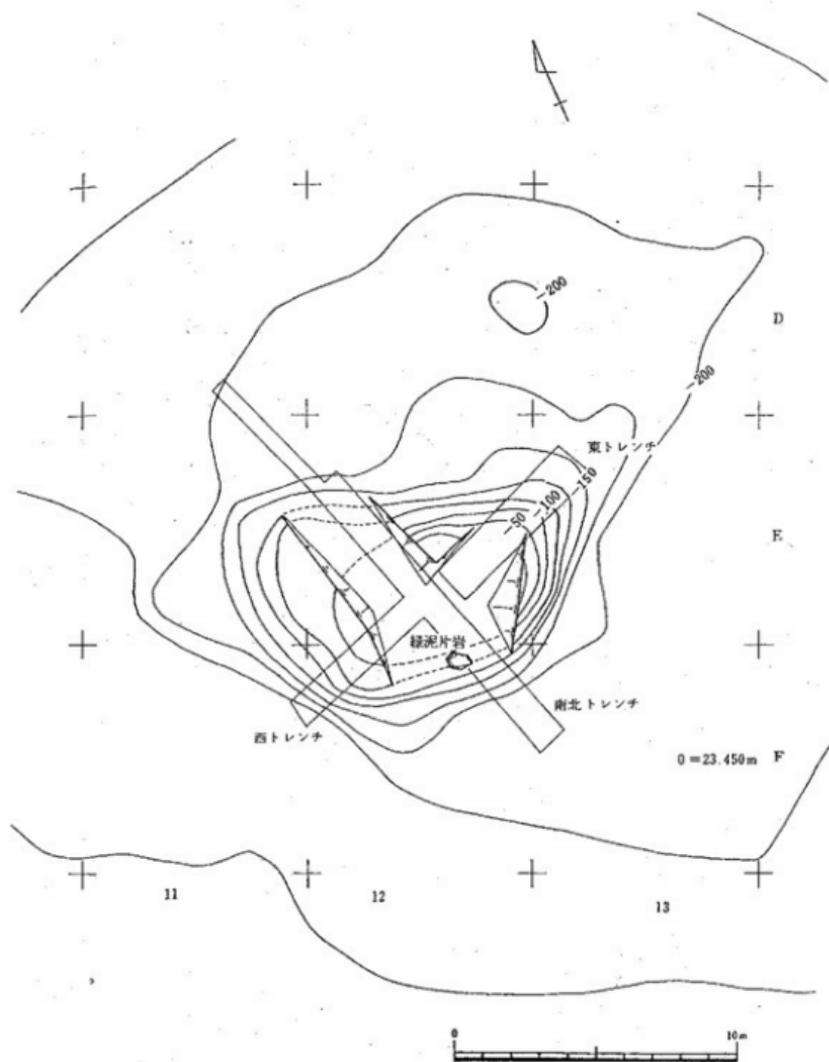
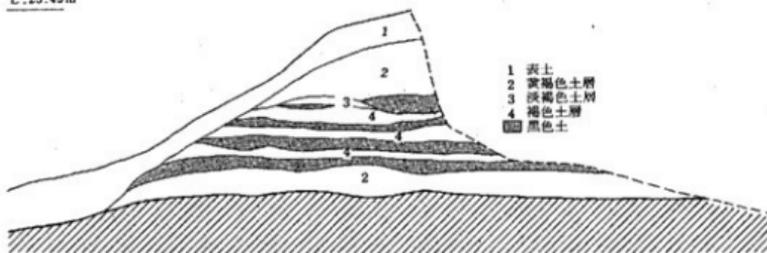


Fig.20 蒲田1号墳丘測量図 (縮尺 $\frac{1}{200}$)

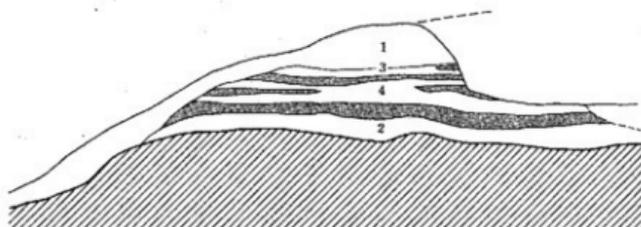
L. 23.45m



- 1 表土
- 2 黄褐色土層
- 3 赤褐色土層
- 4 褐色土層
- 黒色土

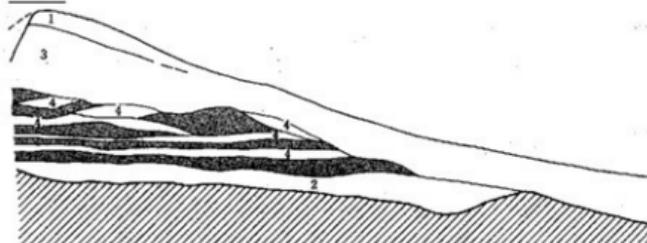
1. 南北トレンチ東壁断面図

L. 23.45m



2. 西トレンチ北壁断面図

L. 23.45m



3. 東トレンチ北壁断面図



Fig.21 蒲田1号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)

180

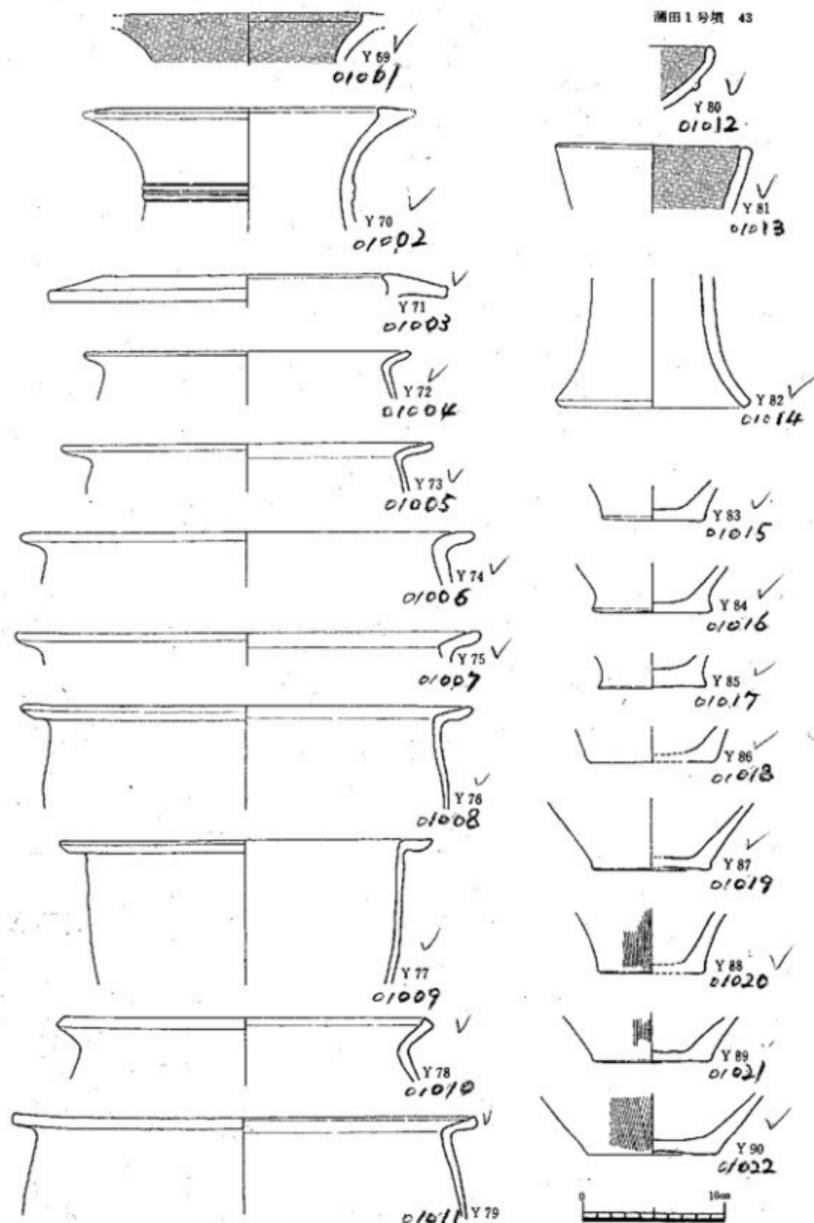
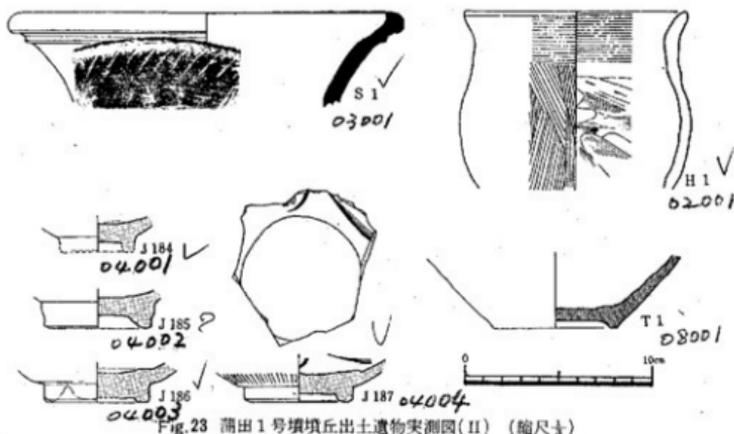


Fig.22 蒲田1号墳墳丘出土遺物実測図(I) (縮尺1/4)

72-14



古墳としての否定的要素を含むにしても、立地の条件、盛土を持つことからして古墳と考えることが妥当と思われる。さらに、かなりの量の緑泥片岩を集めていることから、少々大胆に推測することが許されるならば、その内部主体としては、緑泥片岩の板石による小口横みの小石室（堅穴式）ではなかったらうかと思われる。横穴式石室でないことは間違いなく、また、適当な大きさの板石をもたないことから、箱式石棺とも考えられない。本墳が堅穴式の小石室をもっていたものであるとすれば、先に述べた南トレンチ出土の $0.9\text{m} \times 0.6\text{m}$ の板石は、天井石として使用された可能性も考えられる。このような堅穴式の小石室については、本墳から指呼^(注)の間に望み得る土井名子道1号墳にその例を見ることができる。

本調査についてまとめてみると次のようになる。

1. 本墳は径10数mの円墳であったであろうこと。
 2. 内部主体は、緑泥片岩を使用した小石室をもつものであったらうこと。
- 以上の推測と次の事実を知り得た。
3. 本墳築造に際しては、本台地上の縄文、弥生期の遺物を含む土を盛土として使用した。
 4. 本墳築造後、この台地はその背の部分を1m近く削られ、平坦にされた。

(注) 「名子道遺跡」 一福岡市大字土井名子道所在古式墳墓の調査1972年一

Tab. 8 福田1号墳填土出土遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	出土地帯(層位)	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.
Y-69	北西部	壺	口辺部	口径16+α	真手の頸部は、大きく外巻し断面輪状の口縁部をなす。	内外面ともに丹塗りか?	緑黄	普通	淡黄褐色	22
Y-70	西トレンチ 深部土層	壺	口辺部	口径 23	Y70は新面M字形の頸部をもつ。	内面横ナナ、外面上下の裏のちねアナか?	砂粒	普通	赤茶褐色	22
Y-71	墳丘	甕	口辺部	口径 28	口縁部のみ、内巻の突出は小さく、やや下方に広がる。	口縁部や縁部	砂粒	普通	暗茶褐色	22
Y-72	南東部 深部土層	壺	口辺部	口径 23	いずれも「」の字形に外反する口縁部をもち、縁部のね上がりはなく、面取りもなく、まるくつくる。Y72・75・76は内面に縁部がはいる。	調整板不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-73	南東部 深部土層	壺	口辺部	口径 26			砂粒	普通	淡褐色	22
Y-74	北東部	壺	口辺部	口径 32	Y77は口縁部をほぼ平直で最大径は1縁部にある。	内外面とも調整し調整板不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-75	南東部 2・3深部土層	壺	口辺部	口径 33		調整板不明	砂粒	普通	赤褐色	22
Y-76	南東部 深部土層	壺	口辺部	口径 32		調整板不明	砂粒少 粘土	普通	黄褐色	22
Y-77	南東部B	壺	口辺部	口径 26		口辺部横ナナ	砂粒	普通	黄とみだり 赤褐色	22
Y-78	北東部	壺	口辺部	口径 26	「」の字形に外反する口縁部をもちやや肥厚した縁部は小さく丸むろさる。	内外面調整板不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-79	南東部 深部土層	壺	口辺部	口径32.8		口辺部横ナナ、外面不明だが縦筋毛か?	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-80	墳丘		口辺部	口径26-30	尖形は新面M字形。	内外面横ナナ後丹塗り	砂粒	堅焼	赤褐色	22
Y-81	南東部 2・3深部土層		口辺部	口径 14	口縁部は平直でなくまるみをなす。	内面ナナ、丹塗り、外面調整	砂粒 多い	普通	淡褐色	22
Y-82	南東部 深部土層	器台	底部	底径14	ほぼ一定した厚さをもつ。底部も現存部と同形か?くびれ部不明。	外面縦筋毛	砂粒	普通	淡黄褐色	22
Y-83	南東部 深部土層	底部	底径	7.2	厚部や中間	外面横ナナ	砂粒	堅焼	淡黄褐色	22
Y-84	北西部 深部土層	底部	底径	8.4	底縁はやや凹、腰部へは内反りあり		砂粒	普通	黄褐色	22
Y-85	南東トレンチ	底部	底径	7.8	底縁ふちつく外面頸部はやや突出する。	底部凹む。外面横ナナ 底部縦筋毛	砂粒	普通	外面灰褐色 内面淡黄褐色	22
Y-86	南東部 2・3深部土層	底部	底径	9	胎盤あつい。	外面砂粒露出	砂粒	普通	黒褐色	22
Y-87	西トレンチ	底部	底径	8.4	底縁はやや凹、内反りあり		砂粒少 粘土	普通	赤褐色	22
Y-88	南東トレンチ	底部	底径	7.6	内反りきみであるが底径小さく立ちあがりも大きい。	外面粗い刺毛	砂粒	普通	赤茶褐色	22
Y-89	北西部	底部	底径	8.4	底縁大きく内反りあり、Y89は胎盤あつい。	外面縦筋毛後ナナか?	砂粒	普通	赤茶褐色	22
Y-90	南東トレンチ	底部	底径	13	Y90あつい	外面粗い刺毛	砂粒	普通	黄褐色	22
H-1	墳丘	壺	底径	12	肥厚した口縁部は小さく外反しまるくおさめる。	口辺部横ナナ外面縦筋毛内面調整	砂粒少	普通	暗茶褐色	22
S-1	北東部	壺	口辺部	口径 20	口縁部は外反し、頸部は内側に丸くつまみ込んでおさめる。		砂粒	堅焼	淡灰黒色	23
J-184	北西部	碗	底径	高台径 3.8 底径 0.9	小形の碗や見込内部に砂付着		灰白	良		23
J-185	北東部	碗	底径	高台径 5.8 底径 1.3	高台の側面凹みに輪縁があり凹みがめだつ	高台には胎がわかるが見込には胎がわからず	淡黄色	良		23
J-186	墳丘	碗	底径	高台径 5.8 底径 1.9	高台の凹みに刺毛の浅い高台をつくる。底径は本寸	見込には文様なし	暗灰色	良	胎は高台まで 透れる	23
J-187	北西部	碗	底径	高台径 5.8 底径 1.9	高台は刺毛がでた後縁をえがく胎がある。	高台部に胎目。見込胎部は文様	灰色	良	胎は高台まで	23
T-1	北西部	底部	底径	6.6	あけ口の底部から縁部は、大きく外反する。胎盤不明	内面横ナナ、外面丁寧な丸回り	暗褐色	良		23

第三章 B地区の調査

1. 概要

B地区の地形は、標高40mを持つかけ塚山と称したE地区と部木部落の中間に位置し、和田・大隈からつづく標高23mを持つ最西端に位置する。B地区は、昭和48年6月16日から8月11日までの約2か月間発掘調査を行なった。発掘調査方法は、地形にそって1区画が8×8mのグリッドを組み、東西をAからF、南北を1から9とし、台地全体の表土層（耕作土層）を剥ぎ、遺構の検出を行なった。その結果、表土層の下は、A・D・E地区で第IV層とした黄褐色の中に礫を含む花崗岩風化土壌であり、その土層を掘りこんで多くのピット群が検出できた。

また遺構の検出を行なって行く際に表土層から石鏃・台形様石器・ナイフ形石器・石核再生剥片等が出土したため、包含層の確認を行ってみた。その結果E-2・3グリッドの道路側断面でA・E地区と同様のII・III層を確認することができた。このII・III層からは、少数ではあるが、石器の出土を確認した。その状態よりE-2・3グリッドを掘り下げてみたが、この包含層は薄く部分的に現存していることが判明した。

2. 土 塚

土塚及びピット群は、第IV層を掘り下げてつくられており、その分布は、北東部と南西部に大半が集中している。これらの土塚及びピットの平面プランは、円形・長方形・隅丸長方形など定形化したものもあるがほとんどが、不整形である。C-7グリッドの47号土塚は、平面プラン円形で、深さ約1mにはほぼ垂直に掘られ、平坦な塚底をなす。さらに北側の壁中位から、横に掘りこまれており、深さ70cm、径1mの円形となっている。このようないわゆる二重土塚は、B-2グリッドの1号土塚にもみられる。1号土塚は、不整形の平面プランで、深さ80cmの塚底から、さらに深さ50cmの塚が掘りこまれており、最深部までの深さは140cmをはかる。塚底に、石をもつものもいくつかあり、E-3グリッドの9号土塚、B-6グリッドの24号土塚、41号土塚などにみられる。また、塚底に小さなピットをもつものもあるが、これらは時期を異にするピットの重複と考えられるが、表面観察では、その先後関係は明確にしえなかった。平面プランが不整形な土塚の多くは、これに該当するものと思われる。E-2グリッド4号土塚、B-4グリッド12号土塚、D-6グリッド42号土塚、E-8グリッド51号土塚などは、平面プランや深さなどから土塚墓の可能性もあろう。

番号は付してないが、これら53基の土塚以外にも、数基の土塚があるが、いずれも遺物の出土がまったく認められず、したがって、時期、性格ともに明確にしがたい。

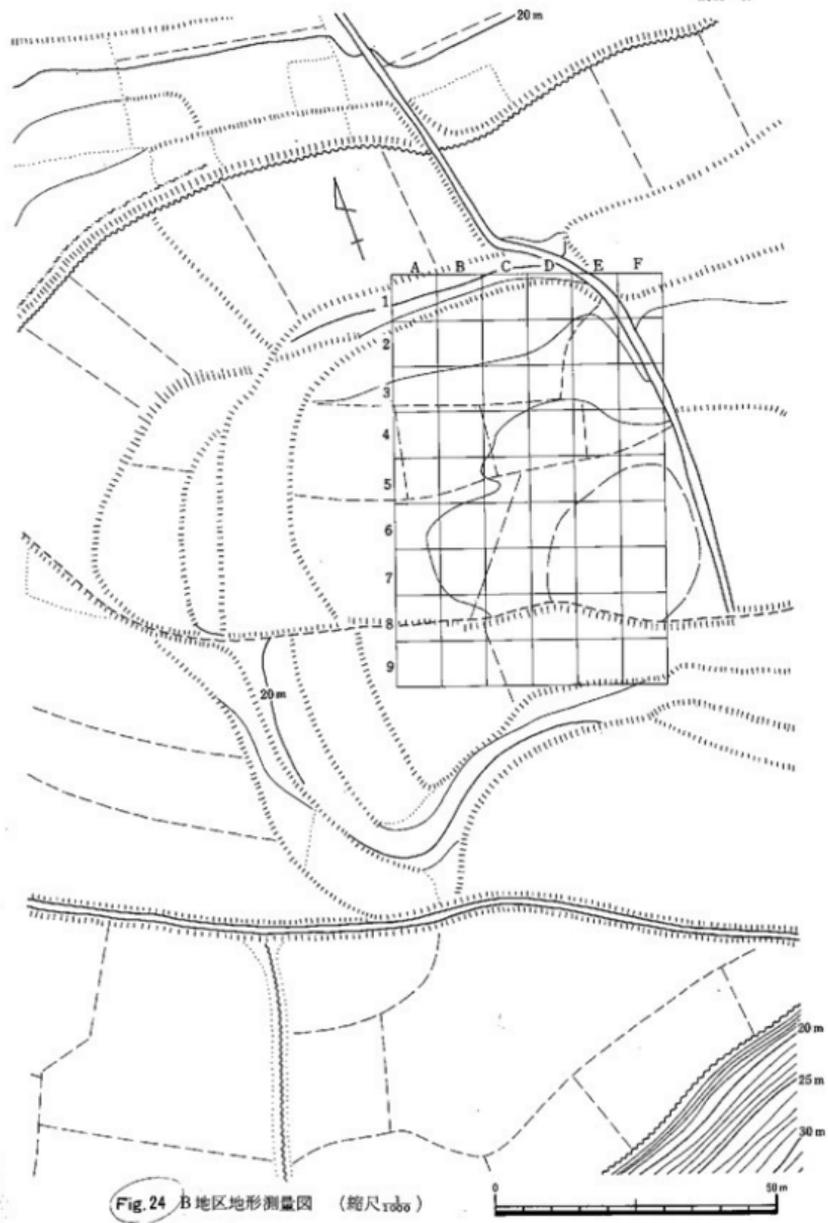


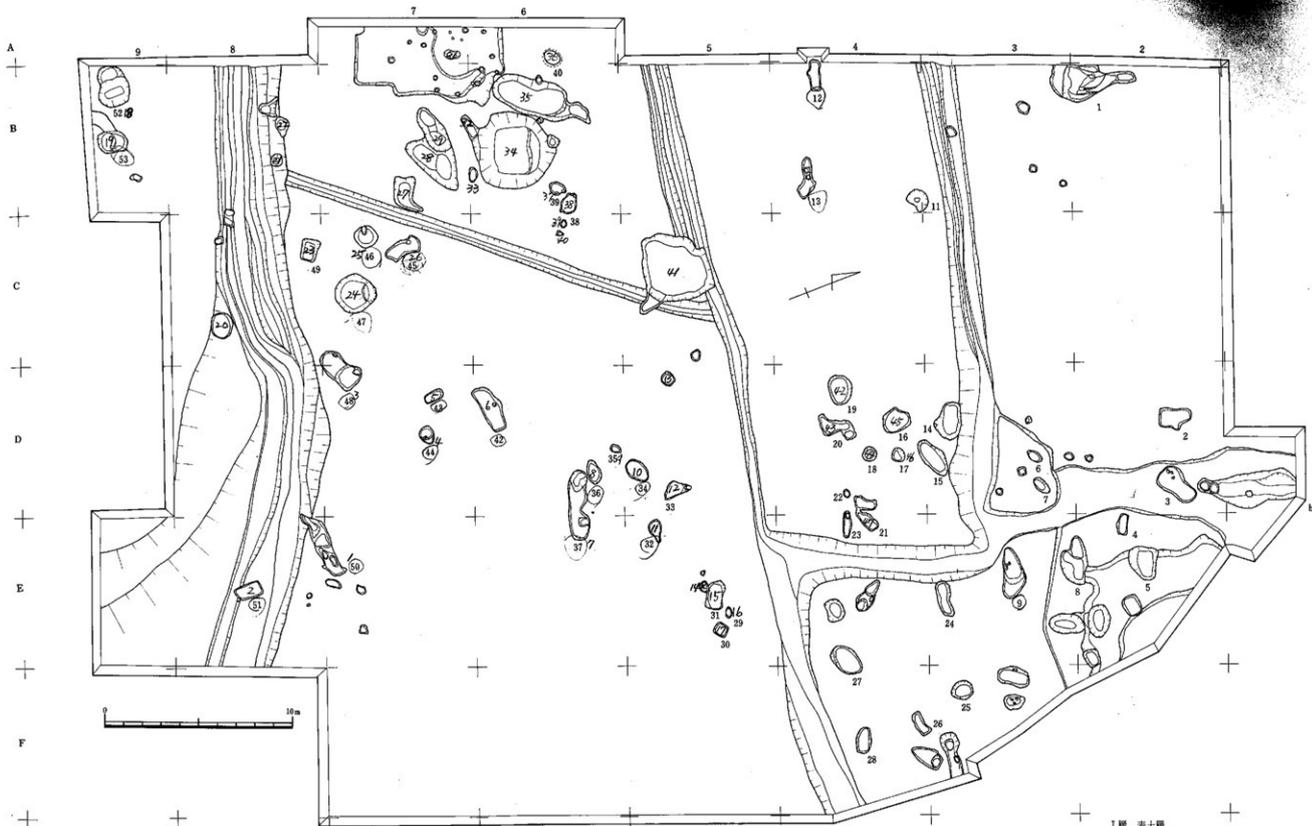
Fig. 24 B地区地形測量図 (縮尺1:1000)

全体図に示す

Tab. 9 B地区土城一覽表

(単位: cm)

No.	グリッド	平面形	長さ	幅	深さ	備 考
1	B-2	不 整 形	460	200	161	二重壁穴 内部 100×95×92
2	D-2	隅丸長方形	170	127	20	
3	B-2	不 整 形	235	133	15	内部にビット有
4	E-2	長 方 形	113	48	48	
5	E-2	隅丸長方形	170	150	45	
6	D-3	楕 円 形	110	50	15	中央に小ビット有、40×35×24
7	D-3	楕 円 形	93	40	18	
8	E-3	不 整 形	185	126	35	
9	E-3	不 整 形	270	105	17	壁が内部に有
10	B-3	円 形	63	48	13	
11	B-4	円 形	127	120	22	
12	B-4	長 方 形	160	70	25	
13	H-4	不 整 形	224	75	15	内部にビット有
14	D-3	隅丸長方形	182	150	10	
15	D-3	長 楕 円 形	250	135	33	
16	D-4	不 整 形	146	114	17	
17	D-4	円 形	130	100	52	
18	D-4	円 形	73	75	25	
19	D-4	楕 円 形	150	120	25	
20	D-4	不 整 形	145	87	18	
21	D-4	不 整 形	140-100	60-52	35-24	
22	D-4	円 形	53	50	10	
23	E-4	長 楕 円 形	140	35	20	
24	E-3	長 楕 円 形	188	73	10	壁2個内部に有
25	F-3	円 形	132	100	22	小ビット有、15×11×13
26	F-4	隅丸長方形	127	55	13	
27	F-4	楕 円 形	180	117	11	
28	F-4	長 楕 円 形	145	72	12	
29	E-5	楕 円 形	78	72	40	
30	E-5	不 整 形	58	48	12	
31	E-5	隅丸長方形	163	134	24	隅丸長方形とビット
32	E-5	不 整 形	150	80	24	
33	D-5	不 整 形	126	75	14	2つのビットの切合い
34	D-5	楕 円 形	135	88	18	
35	D-6	楕 円 形	59	40	15	
36	D-6	楕 円 形	127	71	32	
37	D-6	不 整 形	357	115	37	内部にビット有
38	B-6	不 整 形	165	115	40	
39	B-6	不 整 形	110	74	25	ビットが側壁に3つ。
40	B-6	円 形	73	73	10	
41	B-6	楕 円 形	81	47	14	内部にビットと壁 35×30×25
42	D-6	隅丸長方形	255	100	25	内部にビット
43	D-7	隅丸長方形	111	53	16	
44	D-7	不 整 形	90	75	45	
45	C-7	不 整 形	197	103	23	
46	C-7	円 形	127	110	24	内にビット有 43×26×40
47	C-7	円 形	210	183	111	二重壁穴、内部は 120×100×90
48	D-7	不 整 形	235	130	73	
49	C-8	長 方 形	125	80	70	
50	E-7	不 整 形	385	105	30	内部にビット有
51	E-8	長 方 形	142	73	25	
52	B-9	不 整 形	220	167	73	2つのビットの切合い
53	B-9	不 整 形	320	122	85	ビットと長方形ビットの切合い



- I 层 淤土层
- II 层 夹有碎陶土层
- III 层 夹有彩陶土层
- IV 层 氧化锰化合物黄褐色粘质土层

Fig. 29 B地区遺構配置圖 (縮尺1:500)

平野
7.2
12/7

7.2-15

3. 旧石器時代の遺物

層位について

B地区のほぼ全体に表土層下にすぐ第IV層と思われる花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土層があり、そのIV層を掘り下げているピット状遺構がある。しかしながらF-2・3の道路側断面にII・III層を確認することができ、断面及びE-2・3の調査を行なった。道路側断面の層序図はFig.25で示すごとく、I層が表土層（耕作土層）20cm、II層が褐色粘質土層25cm、III層が赤褐色粘質土層（花崗岩風化土層）23cm、IV層が花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土層からなり、その下層は、花崗岩風化礫の密度が多くなる状態がみられ、黄褐色粘質土層がしだいに赤褐色に変化する。遺物包含層は、II層・III層であるが、II層は、A・E地区と同様に上下に区別され、上面20cm、下面5cmであった。

石器について

表土層から出土した石器は、石鏃・二次加工石器・台形礫石器・ナイフ形石器・Scraper・石核再生剥片・切断剥片・折断剥片がある。これらの石器の中には、縄文時代の石鏃、旧石器時代の遺物である台形礫石器・ナイフ形石器・石核再生剥片がある。石鏃は、扁脚鏃の一種であるが、意識的に製作した形跡を持つ。台形礫石器は1型に分類したもので、側刃部がbluntingではなく横位からの大まかな剝離によって形成された大型の石器である。ナイフ形石器も特殊形態を持った石器で、先端部のみにbluntingを加え他の部分は、素材のままの状態である。また石核再生剥片は、打面再生剥片で横位からの剝離によって石核から剝離されたのもScraperとして使用した可能性をもつ。Scraperは、SideとEndに区別できる。Sideが2点、Endが4点である。折断剥片は、2点出土し、切断は、2点出土している。

II層上面には、石鏃3点、Scraper 2点、折断剥片1点の計6点の出土である。II層下面では、大型縦長剥片と折断剥片が出土し、III層では、縦長剥片1点、折断剥片が1点、出土点数は少なかった。II層上面の包含層は、石鏃のみで時期を決定することはできないが、A地区・E地区の状況から判断して縄文の時期と考えてもさしつかえないとしても、II層下面、III層の出土石器のみの観察では、この層位が旧石器時代の遺物の包含層であると断定することはできない。しかしながらA地区・E地区の層位とB地区の層位との対比による観察と、II、III層の折断剥片・縦長剥片等の剝離面を観察すると、剝離面は、一方向による打撃を持つか、上下の二方向による打撃、横位と上の二方向によるものである。また、縦長剥片・折断剥片の形態を観察するとBladeともよべる剥片であり、また技術的にもこれらの剥片を剝離した石核は、1つの定型化した技法を持っていた可能性を大いにひめたものである。また表土層より出土している台形礫石器、ナイフ形石器、石核再生剥片等の出土からみて、B地区のII層下面・III層は、旧石器時代の遺物の包含層である可能性を強く持つ層位であろう。

第IV章 D地区の調査

1. 概要

D地区は、A地区第1・2地点、蒲田1号墳と同じ台地にあり、グリッド番号16列を境として、台地の東側半分を占める。地形は、A地区と同様に畑地として利用されていたために、平坦であるが、グリッド18列でA地区より一段低くなって、東側は、標高を増し、かけ塚山の西斜面へとつながる。発掘調査以前の表採などの知見によると、A地区とは異なり、石器類はきわめて少なく、この反面青磁類をはじめとして、弥生式土器・土師器・須恵器などが多く、これらと関連する遺構遺物の出現が予測され、特に本台地と相対する部木部落の台地には、前方後方墳を中心とする部木八幡古墳群が位置し、⁹ 墓棺墓の所在も確認されているなど、周辺の遺跡との関連からもA地区と同じようになり複合的な遺跡であることを思わしめた。

発掘調査は、昭和47年5月より開始し、全面の草刈り後、A地区からの通しのグリッド8×8mのグリッドを設定した。D地区も旧石器時代の層位的確認の可能性も予想され、また、本遺跡の発掘調査が、いわゆる緊急調査で、記録保存の対象にしかすぎないことから、層位的にしかも全面的な最深部までの発掘調査が必要であった。時間的な問題から建設工事と並行しての発掘調査を余儀なくされ、工事用進入道路が建設されるグリッドH・I列、すなわちH-25～H-29、I-25～I-29の10グリッドから表土除去をおこない、ついでカルバート・ボックス建設のグリッド26列と発掘調査を進めた。表土層中の出土遺物は、表採結果と大きく異なることはなかった(Fig.78)。表土除去後の表面観察によって、東北方向に走るいく条かの溝と柱穴状の黒褐色土の落ちこみの存在が知られた。D地区が、ごく最近まで畑地として利用されていたために、耕作に伴うものかとも思われたのであるが、柱穴状ピットには、礎盤と考えられる石を持つもの、あるいは磁器類を出土するものがあり(Fig.66・67, PL.26)柱穴と断定できた。またH・I-29グリッドでは南北方向の溝状の落ちこみがあり、これらが先の東北方向に走る溝に切られており、東北方向の溝が現在の畑の畔方向とも一致することなどから、明らかに耕作に伴うものと判明したので、柱穴と南北方向に走る溝状の落ちこみを追求することにした。その結果H-29グリッドでは、3条の溝が確認され、発掘順に第I・II・III溝とした。もっとも東寄りの第I溝は給水用パイプが埋設されていたために、かなり攪乱を受けたようで出土遺物も各種混在し、この推測を裏づけた。第I・II・III溝とも出土遺物は、青磁類を主とするが、墓棺片の出土が目され、墓棺墓の存在を予想させた。これらの溝の南側末端部をおさえるために拡張区J-29グリッドを設定したところ、第I・II・III溝とも1つに連結し、台地を整形したかのような遺構があらわれ、この上に集石遺構が乗っていることが確認された。ここでも出土遺物は磁器類が主となっていた(Fig.76・77)。カルバート・ボックス建設のグリッド26列で

は、H・I-25グリッドで中央に幅4m、その両側に幅1mの落ちこみが南北方向に走っており、中央の落ちこみは、小石をたたきしめた状態で敷石が発見され、ここからも、磁器、石鍋などが出土し、H・I-29グリッドの第I・II・III溝、およびJ-29グリッドの積石と出土遺物は類似し、時期的には差がなく、機能的にもなんらかの関連があったものと思われた。さらにこの遺構は、北へのびていると思われたので、南北両端部を確認するために、北側の調査契約地すれすれにA-C-24-28グリッド、南側も同じようにJ-26・27グリッドを設定した。北側のA-C-24-28グリッドでは、柱穴と耕作による数条の浅い溝があらわれ、南側のJ-26・27グリッドでは、敷石の木端部が出現し、ここでもJ-29グリッドと同様に台地を整形した可能性がみられた。この結果、遺構および遺物の包含が台地全体におよぶことが確認された。また、敷石の北側端部は、E-25グリッドでT字形に直交するあらたな敷石があらわれ、敷石両側の小溝とともに、さらに東西にのびているようであった。この結果、敷石の構造と、これに伴う建造物の追求、さらに甕棺墓の把握などが発掘調査の問題点となった。

H・I-29グリッドの溝中出土の甕棺片は、D地区での甕棺墓の存在を推測させたが、磁器類を出土する敷石・集石・溝などの遺構がつくられる際、台地をある程度整形、削平した可能性もあり、弥生時代の生活面の把握は困難と思われた。しかし、I・J-29グリッドでは、第I溝に切られながらも、わずかに墓壇を残した甕棺墓2基と、H・I-29グリッドでは、第II溝に切られた土塚墓3基を検出し、H-28グリッドでは、上部を削平されているが、良好な状態で甕棺墓・土塚墓が出現した。また、I・J-29グリッドでは、浅い土塚より、丹塗りの壺・壺・高杯が発見され、供献・葬送の祭祀遺構と考えられ、D地区の甕棺・土塚墓群が同一台地にあるA地区と同じ様相を示すのか重要な問題となった。

建設工事と並行して、発掘完了グリッドから遺構実測を済ませ、昭和48年6月までに、調査予定地のほとんどを発掘終了した。敷石は、南北方向の敷石を南北敷石、東西方向の敷石を東西敷石と呼び、その機能および、付随するであろう遺構の確認に注意し発掘を進めた。南北敷石は、南北全長48m、幅6m、東西敷石は、全長94m、幅6mをはかり、南北敷石の東側溝は、E-25グリッドで直角に曲がり、途中削平されているようであるが、E-29グリッドの第II溝とつながるようである。東西敷石の北側溝は、敷石と並行に東西にのびるが、D-21グリッドで北に方向を転じ、台地下の水出面にのびており、これを北溝と呼ぶことにした。また第III溝は、東西溝東端部と、第I溝は東西溝北側溝とそれぞれE-29グリッド、D-29グリッドで連結することが明らかとなった。また、敷石を削いでいく段階で、高麗天目を出したI-25グリッドで、井戸状の遺構が発見された。甕棺・土塚墓も、発掘の進展に伴って数を増し、F-26グリッドの有軸羽状文の土器片を出す土塚墓を西端とし、最終的には、甕棺墓16基、土塚墓16基を検出し、十字形に交差する配置であった。これらの大部分は、溝によって切られるか削平されており、第III溝によって切られた第11号甕棺墓出土の磁器・石鍋類、また第7号甕棺墓

出土の金環など、中世における台地の整形・削平という当初の推測をさらに強めた。

東西敷石の側溝は、D・E-29グリッドで第I・II溝と連結することを確認していたが、東西敷石とは別の敷石がD-28グリッドに現われ、東にのびているようであった。この敷石の東側延長上には、豚舎があり、かつて豚舎建設の際、同類の敷石が存在したということから、豚舎の後方、かけ塚山西斜面にA-35-37グリッド・B-37グリッドを設定したが、耕作時の溝が出たのみで、敷石と関係するものはなら発見できなかった。また、一段低い畑地となっているH-K-32-35グリッドでは、かつて人家が建っていたということで遺構の存在が危ぶまれたが、幸いにも地上げしてあり、その盛土下から古墳時代の住居跡7基と中世と思われる柱穴群を検出した。中世の遺構と重複しているために、各住居跡内の出土遺物すべてが、住居跡に伴うものとは考えられないが、第2号住居跡では、古手の須恵器を出し、第5号住居跡と第6号住居跡は切り合い関係にあり、第6号住居跡からは、単孔式の甕が出土した。また中世と思われる柱穴群は、ここでも甕を持つものがあり、特に柱穴内出土の崇寧重宝は、磁器類などの他の遺物とともに、本遺跡の年代・性格を考えるうえで貴重な資料と思われた。

(主要参考文献)

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| 福岡市教育委員会 | 『宝台遺跡』昭和45年 |
| | 『金沢遺跡第1次調査概報』昭和45年 |
| | 『多々良遺跡調査報告書』昭和47年 |
| | 『宝満尾遺跡』昭和49年 |
| | 『板付周辺遺跡調査報告書』昭和49年 |
| 福岡県教育委員会 | 『津古内畑遺跡』第1次-第4次 昭和45年-昭和49年 |
| | 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I-V 昭和45年-昭和49年 |
| | 『大宰府遺跡跡』昭和46年 |
| 大野町教育委員会 | 『中・寺尾遺跡』昭和46年 |
| 佐賀県教育委員会 | 『郷方遺跡』昭和49年 |
| 福山市教育委員会 | 『草戸千軒町遺跡』昭和49年 |
| 和島誠一編 | 『日本の考古学』III 弥生時代 河出書房新社 |
| 日本考古学協会編 | 『日本農耕文化の生成』昭和36年 |
| 杉原莊介・大塚初重編 | 『土師式土器集成』本編 |
| 亀井明徳 | 『九州出土の宋・元代陶磁器の分析』考古学雑誌第58巻4号 |
| 高槻市史編さん委員会 | 『高槻市史』第6巻考古編 |
| 佐原真・金岡悠編 | 『古代史発掘』弥生時代 船作の始まり 講談社 |

④ 部木遺跡

昭和38年に部木より大隈に通じる農道を拡張したときに発見されたもので、現在、井上茂雄氏宅の裏畑崖面に1基の甕棺が露出している。当時作業に従事した人たちの話を総合すると、この甕棺は、同形のものが2個口を合わせた状況で出土し、うち1個は完全に破壊したこのことで、甕棺内部からは、何も出土しなかったという。残された1個は、高さ1.5mほどの崖面に、斜めに掘りこんだ墓壇に埋置されており、口辺部を欠くが、上記のごとく合口式であったことは、棺内に口辺部があることから納得できよう。甕の形態は、胴部中位に、コ字形断面の突帯2条をめぐらし、口縁上面は、平坦面をなすもので、D地区第12・13号甕棺の下棺に類似している。現在は、農道のために崖面に露出しているが、おそらくは、垂直に掘られた土壇に横穴を穿ち、挿入埋置したものと思われる。

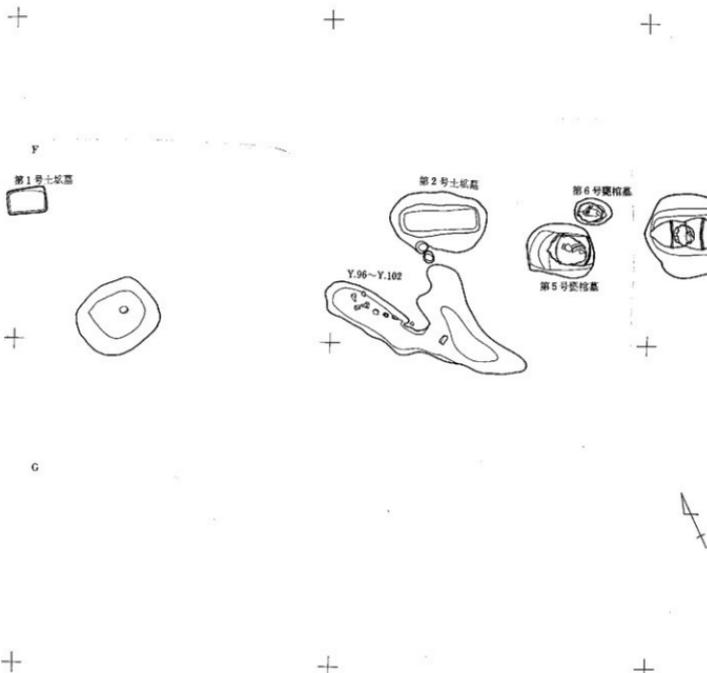
2. 甕棺墓と土塚墓

D地区における甕棺墓・土塚墓群は、台地の東側、標高20mのほぼ平坦部に形成されている。最終検出数は、甕棺墓16基、土塚墓16基である。前述したように、積石、集石遺構の石に混じって甕棺片が出し、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝と呼んだ溝に切られていることから、さらに多くの甕棺墓・土塚墓を考えるべきであろう。現存の遺構からすれば、北端は第14号甕棺墓、西端は第1号土塚墓、東端は第13号土塚墓、南端は第4号甕棺墓で、十字形に交差する形で埋置されており、甕棺墓、土塚墓ともに、特別のグループをなさないものと思われる。甕棺墓は、発見順に番号を付した。第1号甕棺墓は、広口壺が2個出土し、1個には丹塗り痕が認められ、出土状況からみて、壺棺墓というよりも、あるいは土塚墓の供献土器とすることも許されるかもしれない。第2・6・7・8・15号甕棺墓の5基は、小児用甕棺墓と思われるが、第6・8号甕棺墓は、複棺の可能性もある。溝により、切られているのは、第11号甕棺墓と第14・15号甕棺墓で、第Ⅲ溝の溝底に位置する第11号甕棺墓からは、磁器類、石鍋などを出土した。甕棺墓の方位には、統一性があるよう見え、ほぼ北西方向をとるものと、これらと直角に交わる主軸をもつものの2つのグループがある。この2つの主軸と、大きく異なる甕棺墓は少ない。埋置の方位に関する限り、D地区では古い時期と思われる甕棺墓の多くが北東方向の主軸をとる傾向にあるが、時期的な差は認めがたい。また単棺、複棺の差による埋置方法にも大きく異にすることはないと思われる。16基の土塚墓の長軸も、甕棺墓と同様に2つのグループに分かれ、しかも、甕棺墓と直角方向のものは少なく、並行に掘られている。甕棺墓、土塚墓ともに、明らかに副葬品と断定できるものはなく、第7号甕棺墓の金環、第10号甕棺墓の石斧、第11号甕棺墓の磁器類、滑石製石鍋、第12号甕棺墓の黒曜石製石鏃、第1号土塚墓の有軸羽状文土器片など、いずれも後世の流入と考えられる。切り合いは、甕棺墓にはなく、土塚墓の第14号土塚墓と第15号土塚墓にみられる。第14号土塚墓は、第15号土塚墓を切っているが、平面隅丸方形のプランは、通例の土塚墓と違いやや特異な形態をなしており、あるいは土塚墓としての認定は、困難かもしれない。ただ第14号土塚墓から外面丹塗りの甕形土器が出土しており、D地区土塚墓群の年代をある程度決定できるであろう。また、甕棺、土塚墓に付随すると思われる土塚をJ-29グリッドで検出した。この土塚からは、丹塗りの壺、高杯、甕形土器が出土し、甕棺墓、土塚墓に対する祭祀遺構と考えられる。F-27グリッドでも、不定形ながら土器片を出す土塚を検出した。これらの甕棺墓・土塚墓からやや離れていくつかの時期不明の土塚が存在する。

E

F

G



G

H

I

第7号土墩墓

第11号土墩墓

第16号土墩墓

第10号墩棺墓

第11号墩棺墓

第2号墩棺墓

第1号墩棺墓

第6号土墩墓

第16号墩棺墓

第3号土墩墓

第5号土墩墓

第4号土墩墓

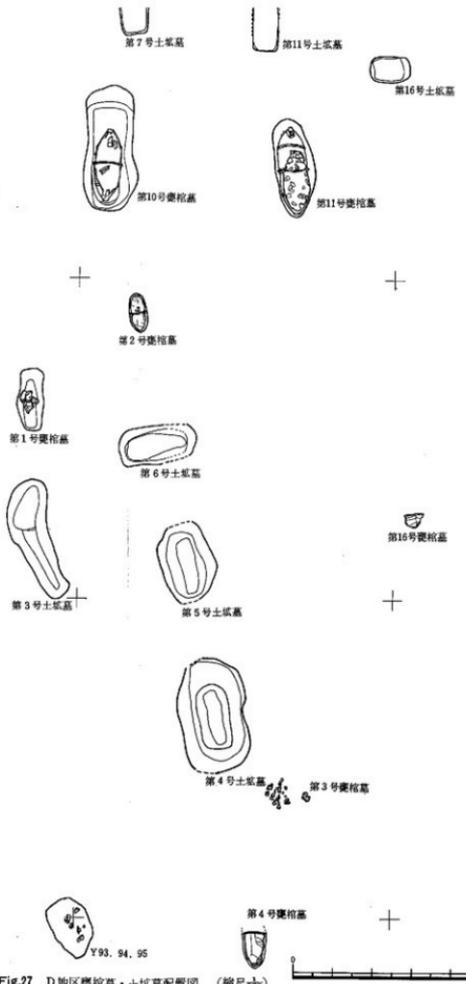
第3号墩棺墓

第4号墩棺墓

Y93, 94, 95

Fig.27 D地区墩棺墓·土墩墓配置图 (缩尺1/20)

甲板 1/2



1. 甕棺墓出土状況 (Fig. 28~33 PL. 12)

第1号甕棺墓 (Fig. 28 PL. 13)

平面プラン隅丸長方形の土壇より、2個体の大口壺が出土した。うち1個は丹塗り土器で、口縁部を下にしており、この上にもう1個の壺が重なる。これらの出土状況からみて、壺棺というよりも、土壇墓に対する供献土器とすべきかもしれない。

第2号甕棺墓 (Fig. 28 PL. 13)

わずかに全形の瓦を残して出現した。現存部によれば、2つの小型の甕を用い、口縁部を合わせて、ほぼ水平に埋置している。甕は、ほぼ同型のものを利用している。やや口辺径の小さい南側の甕は、口辺部に2条の断面三角形突帯を持つが北側の甕は、1条しかみられない。墓底の標高は、他に比較が高いが、これは、小型という甕の大きさによるもので、深い墓壇を必要としなかったためであろう。

第3号甕棺墓 (Fig. 28)

第I溝より切れ、その斜面に破片がわずかに残る。図示した甕口辺部は、溝底より浮いており、もとより原位置を示すものではなく、方位、墓壇、さらに複棺、単棺かも明確でない。

第4号甕棺墓 (Fig. 28)

本甕棺墓も溝より切られているが、現存部より方位と、傾斜角度が推測できる。現存部は、墓壇に、ほぼ密着して水平に埋置されており、第1・2号甕棺墓と並行の方位をとる。単棺か複棺かは判断できないが原位置であることは確かで、D地区甕棺墓配置の南端に位置している。

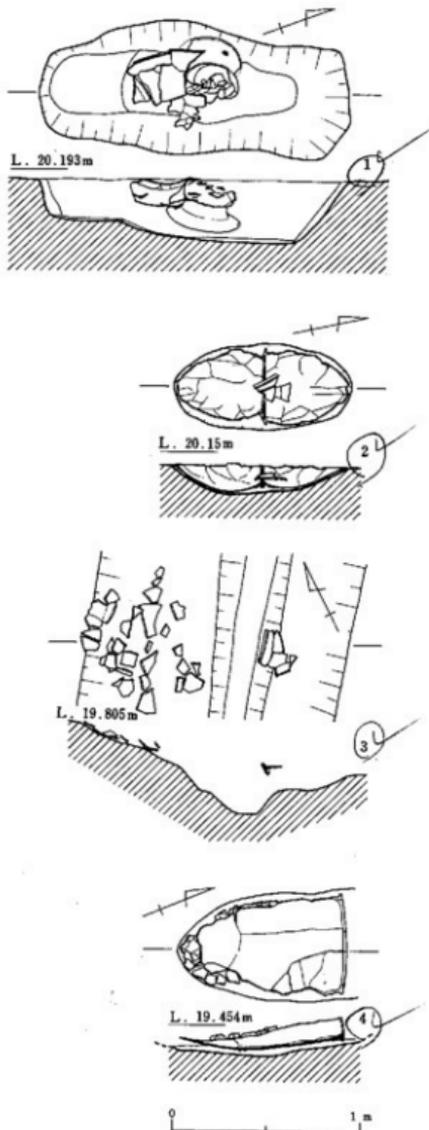
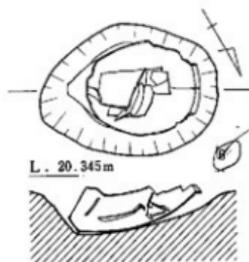


Fig. 28 D地区第1~4号甕棺墓実測図 (縮尺)

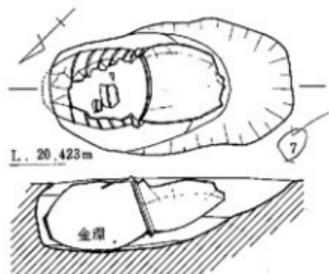
第5号壔棺墓 (Fig.29)

隅丸長方形の平面プランは、方形にもかく、北西側より階段状に掘りこむ。上・下棺の削平状況からみて、長方形の壔をほぼ垂直に掘り、さらに東下方に横穴を掘り、壔を斜めに埋置する方法をとったのであろう。上棺は、大半を欠く鉢形土器を用いており、下棺の大型壔と口辺部を合わせる。D地区の壔棺墓としては、古い時期に属し、中期中葉か？



第6号壔棺墓 (Fig.29)

第5号壔棺の北側に、ごく近接して発見されたもので、方位もほぼ等しい。本壔棺墓も、大半が削平され、墓塚の平面プランも原形を示さない。棺内落ちこみの口辺部は、下棺の壔の口辺部ではなく、別個体に復元できた。したがって複棺ということが考えられるが、口径があまりにも異なることから、挿入という埋置方法、あるいは供献土器ということも考えられよう。



第7号壔棺墓 (Fig.29, PL.13)

平面プランは、不整楕円形で、北側に斜めに掘りこまれている。N-44°-Wの方位は他の壔棺墓の方位と、やや異にしている。2個の壔を用いた接口式の壔棺墓であるが、下棺は、体部に5条の断面M字形の突帯をめぐらす特異な壔を用いており、丹塗り痕が認められる。下棺より金環が出土したが、その出土状況からみて、削平時に流入したのであろう。

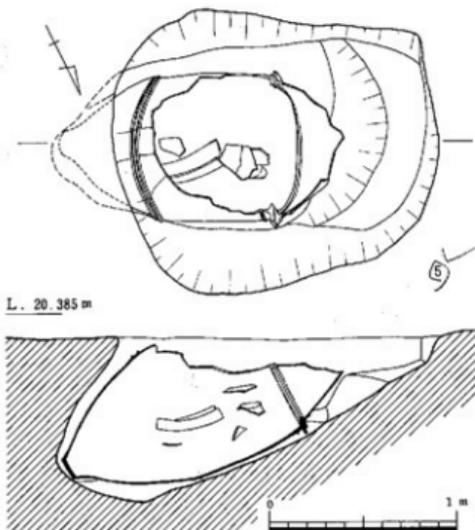
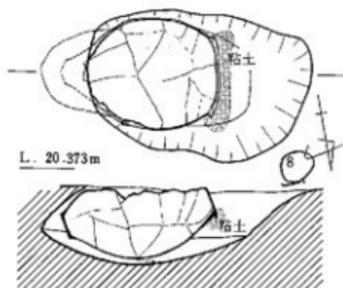


Fig.29 D地区第5～7号壔棺墓実測図 (縮尺)

第8号甕棺墓 (Fig.30 PL.13)

全形の写ほどを欠く。墓壇は、東側へ斜めに掘りこみ、墓壇の形と合わせて棺を埋置している。棺上部は削平され、現在は単棺であるが、口辺部には灰白色粘土があり、複棺という可能性もあろう。方位は異にするが、第7号甕棺墓に近接して位置し、同じように小児用の甕棺墓と思われる。



第9号甕棺墓 (Fig.30 PL.13)

大きさを異にする2つの甕を用いた甕棺墓で、西棺は、ほぼ水平に埋置されているが、小型の東棺は、これと離れて、口辺部を下にし、傾斜をもって埋置されている。西棺の甕は、口辺部を打ち欠き、小型の甕の口径に一致させていることから、出土状況は、旧形を示さず、さらに墓壇の形状から、西棺とも水平に埋置されていたもので、西棺は、削平時に動いたのであろう。

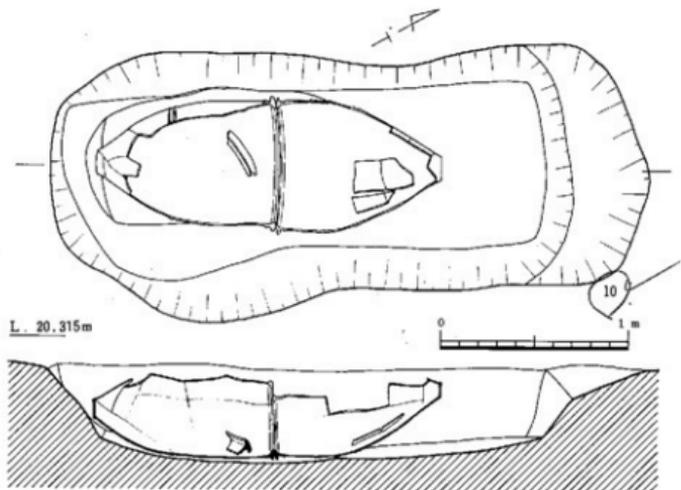
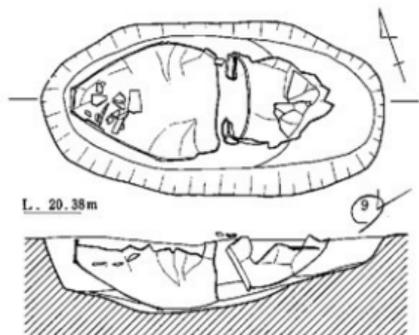


Fig.30 D地区第8~10号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)

第10号壘棺墓 (Fig.30)

第11号壘棺墓と、ほぼ同じ方位で並行する位置関係にある。墓域は、隅丸長方形の平面プランで、壘棺の埋置としては、必要すぎるほどの大きさである。大きさにやや違いがあるが、器制を同じくする2つの壘を用いた接口式の合口壘棺墓である。南側の壘口辺部より、石斧が出土したが、棺内落ちこみの破片よりみて、副葬品とは断定できないであろう。

第11号壘棺墓 (Fig.31)

第III溝により、上部を切られているが、墓域と埋置方法は推測できる。ほぼ等しい大きさの壘を用いた接口式合口壘棺墓で、墓域の北側壁を垂直近く掘りこみ、下棺を置き、斜面の坩底を利用して上棺を埋置するという方法をとる。墓域および棺内出土の磁器類 (J 114~121) や滑石製石鍋などは、削平後の遺物で、第III溝に伴うものである。

第12号壘棺墓 (Fig.32 PL.13)

平面プラン隅丸長方形の墓域の西寄りにほぼ水平に埋置された接口式の合口壘棺墓で、第5・6号壘棺墓の東側に近接して位置する。接口式の形をとるが、東側の壘は、口辺部を打ち欠いており、西側の壘は、口辺部は存在するが、口縁内の突出部を全面打ち欠いている。2つの壘は、墓域の西に片寄って置かれており、埋置順序は、西棺が先であったものと考えられる。

第13号壘棺墓 (Fig.32 PL.13)

墓域は、上下棺の形に合わせて掘ってあり、下棺は、坩底を深くしている。下棺は、胴部に2条の断面三角形の突帯をめぐらす大型壘で、平坦な口辺部を持つ。上棺は、小型の壘で、くの字形に外反する口辺部であるが、下棺とたくみに組み合わせ密着している。傾斜して埋置された壘棺の多くが同一方向に並び、しかも木壘棺墓のように上棺を西側に置く例が多いようである。

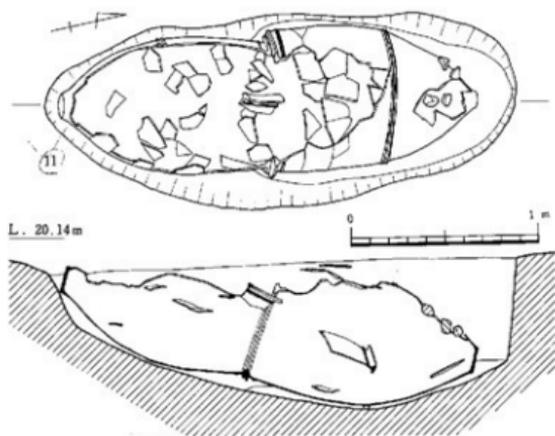


Fig. 31 第11号壘棺墓実測図 (縦尺表)

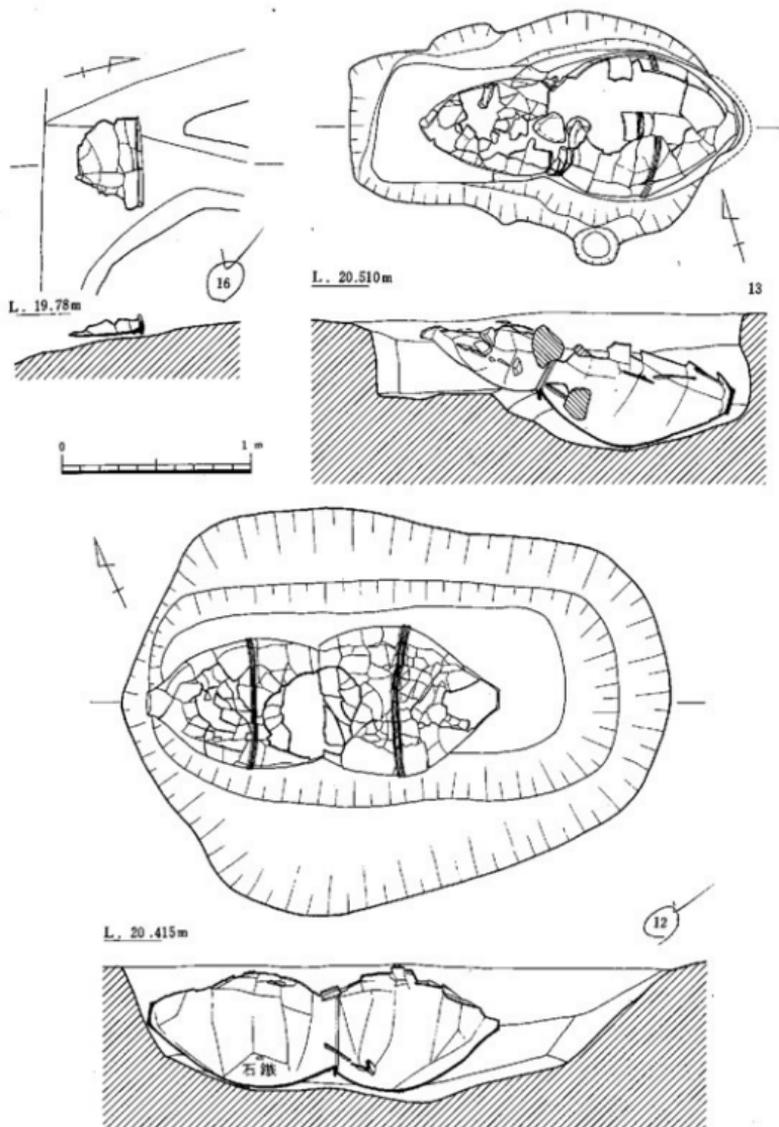


Fig. 32 D地区第12・13・16号麦积墓实例图 (缩尺 $\frac{1}{2}$)

第14号甕棺墓 (Fig.33 PL.13)

第III溝より墓域の一部が切られている。水平に埋置した平棺で、墓塚の基底は、甕の形態と同じように掘られ、口辺部側は、階段状となる。また、最大径をはかる口辺部は、特に横に掘りこみがみられる。本甕棺墓は、D地区甕棺墓の北端に位置している。

第15号甕棺墓 (Fig.33 PL.13)

第14号甕棺墓と同じように第III溝によって墓域を切られている。逆L字形の口縁をもつ小型の甕を用いた接口式の合口甕棺墓で、やや傾斜して埋置されている。両棺の全長約65cmで本遺跡では、もっとも小さい甕棺墓で、小児用甕棺墓であろう。D地区における小児用甕棺墓は、第2・6・7・8・15号甕棺墓などが考えられるが、墓域の中での占地、あるいはグループなどに特殊性は見られず、また、甕棺としての専用土器か、転用土器かは、明らかにしがたい。

第16号甕棺墓 (Fig.32)

わずかに甕の口辺部を残すのみなので、詳細は不明である。現存部は、口辺部を北に向けており、出土状況が原位置を示すとすれば、ほぼ水平に埋置されていたということになり、その方位も、他の甕棺墓と大きく違わない。

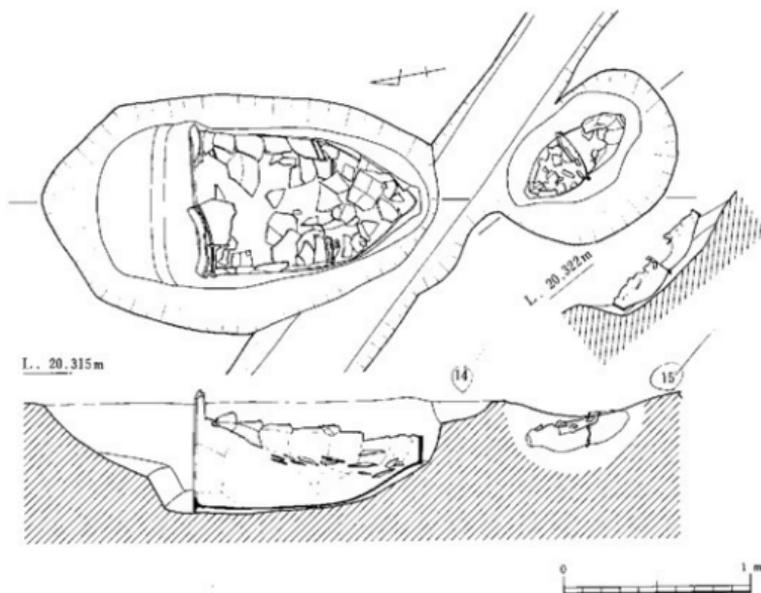


Fig.33 D地区第14・15号甕棺墓実測図 (縮尺表)

2. 出土甕棺 (Fig.34~39)

D地区甕棺墓の検出総数は、16基で、複棺11基、単棺5基である。これらの大部分が削平のために破壊されており、復原作業は困難をきわめた。出土個体数27個のすべてをここに図示したが、第1号甕棺墓の広口壺2個、第2号甕棺墓の上下甕棺、第3号甕棺墓、第15号甕棺墓の上下甕棺は、器壁うすく、完全に復原できなかった。実測図の縮尺は、第1号甕棺墓、第2号甕棺墓、第15号甕棺墓は $\frac{1}{2}$ 、他は縮尺 $\frac{1}{4}$ で統一した。

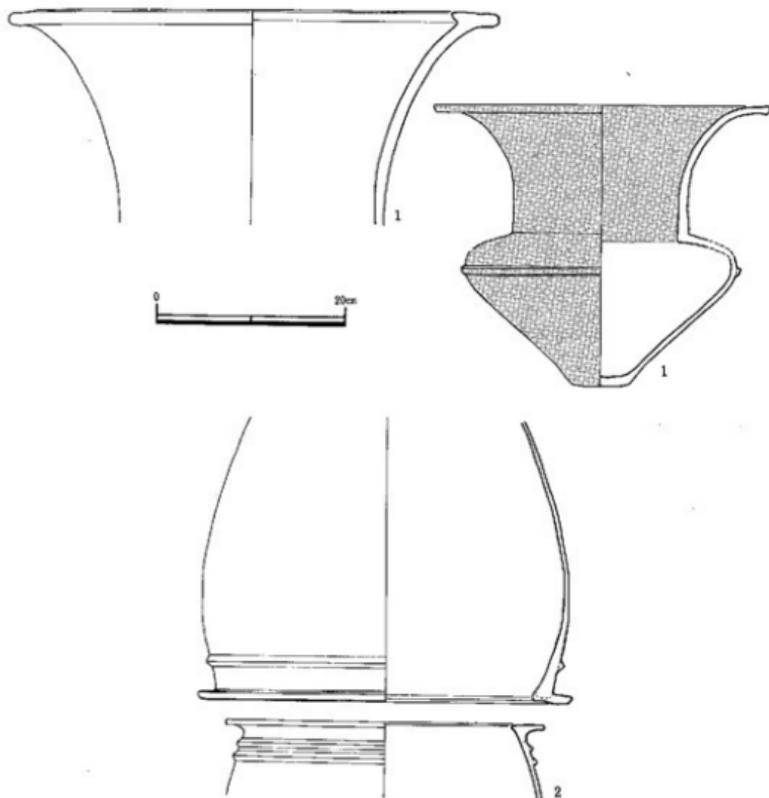


Fig. 34 D地区第1・2号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

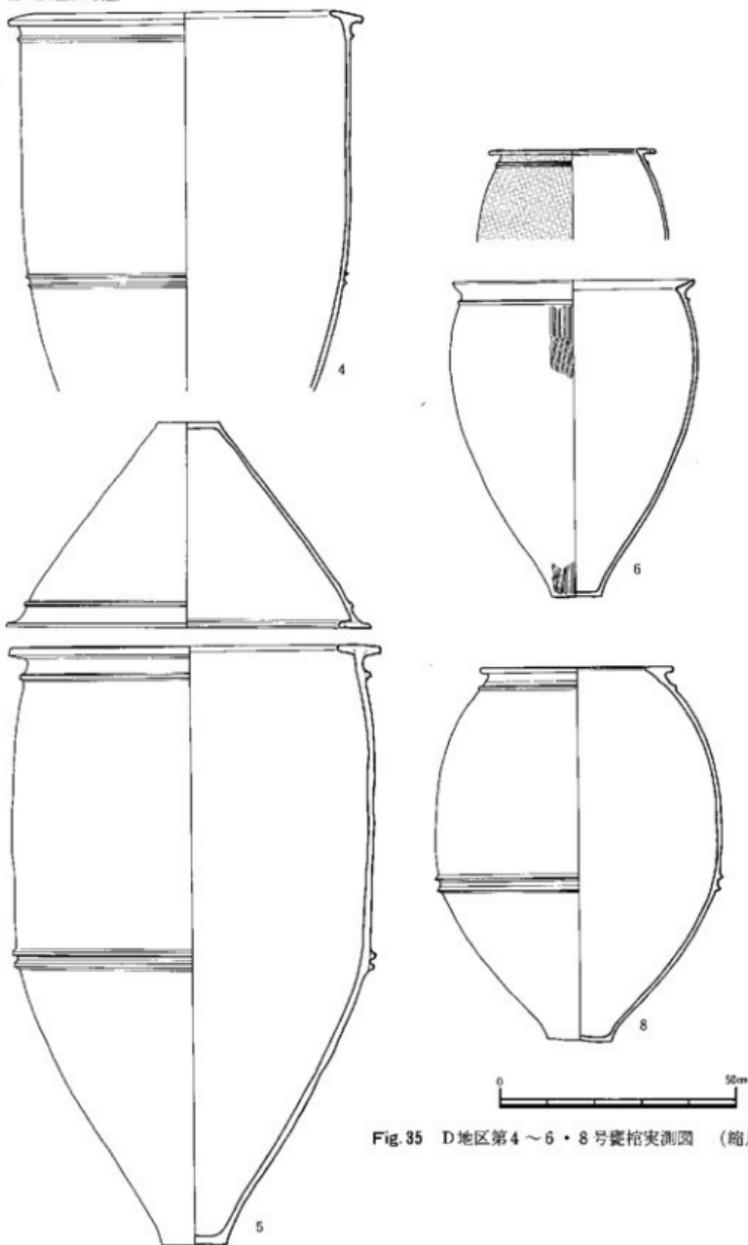


Fig.35 D地区第4～6・8号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

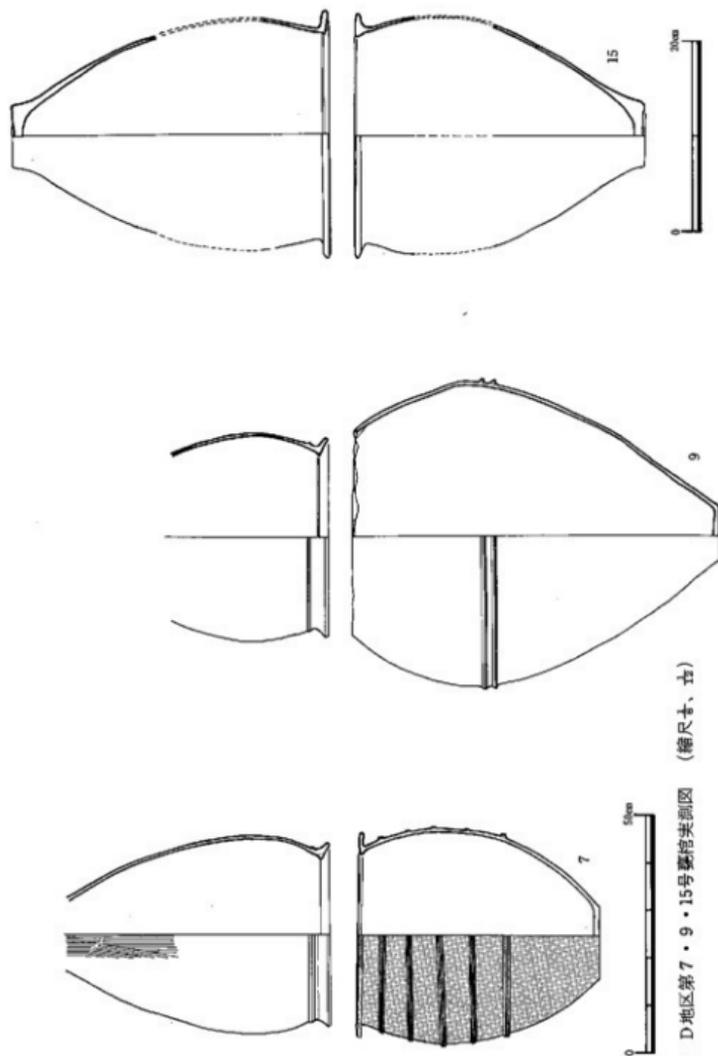


图 36 D地区第7·9·15号鬲类器图 (缩尺十、五)

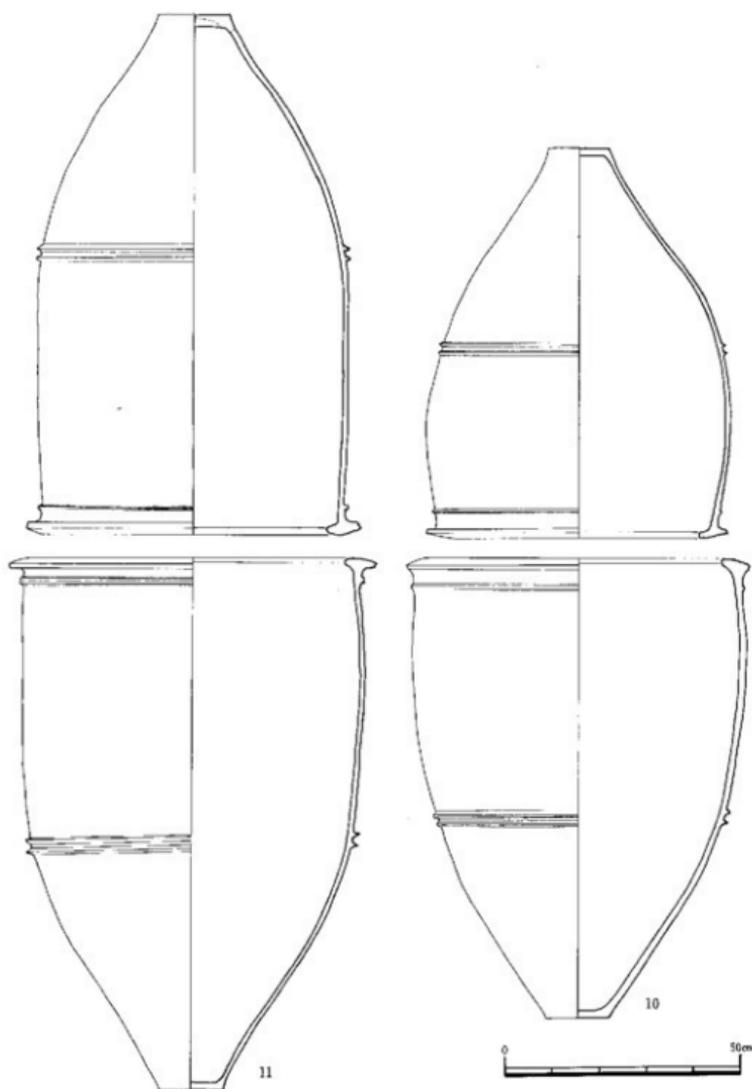


Fig. 37 D地区第10・11号墓棺実測図 (縮尺1/5)

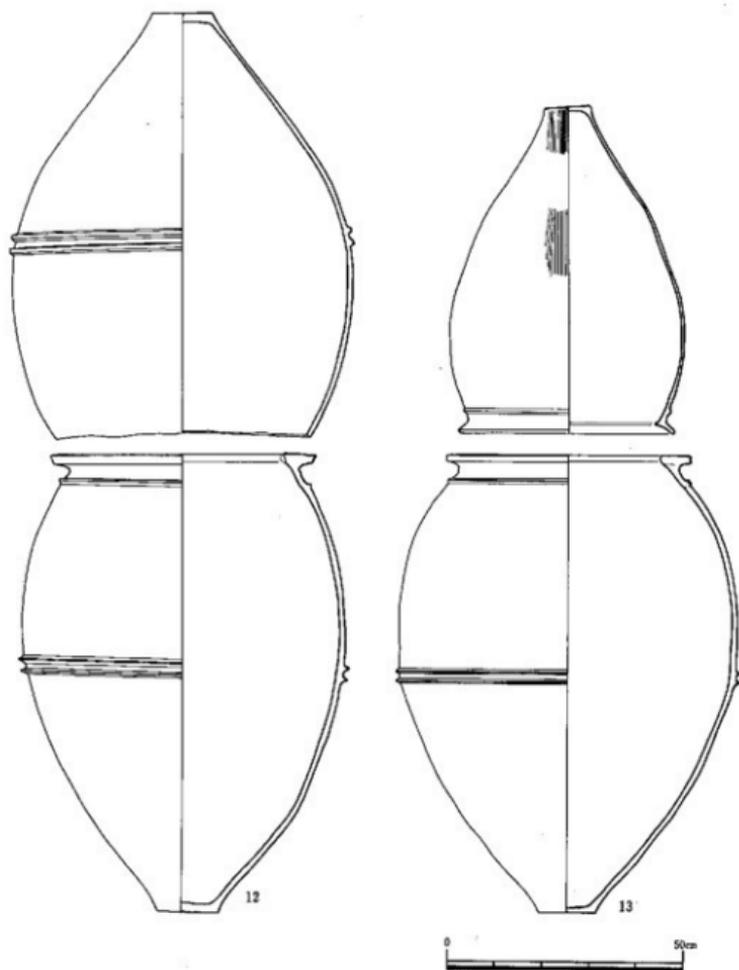


Fig. 38 D地区第12・13号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$)



第1号壺棺 (Fig.34) 2個の壺形土器よりなる。上に重なる壺は、口径52cmで、頸部から朝顔状に開く。口縁内面には突出部があり、口縁上面は平坦面をなす。胎土砂粒もつ。他の1個は、口径36cm、復原器高30cmをはかる。まるみのある小さな底部から外反ぎみにのび、コの字形の突帯を、胴部最大径の位置にめぐらし、急に内彎して頸部へつながる。頸部は、上方に直線的にのび、その中位より開く。頸部内面、底部外面に丹塗り痕のこる。

第2号壺棺 (Fig.34) 両棺とも復原できず、ここでは口辺部のみを图示する。下棺とした壺は、口径34cmで、逆L字形の口縁をもち、口縁直下に、断面三角形の突帯を2条めぐらす。口縁上面は、ほぼ平坦面をなすが、わずかながら内側に傾いている。上棺の壺は、同じように逆L字形をなすが、器壁は厚く、外唇部は、まるみをもつ。口縁直下に断面三角形の突帯を1条めぐらす。内壺とも、砂粒多く、赤みをおびた黄褐色を呈する。内外面磨滅し、調整痕不明。口径40cm、口縁上面は、平坦面をなさず、内側に傾斜し、その残はにぶい。

第3号壺棺 (Fig.39) 第1溝によって切られているために、全形を知りえない。图示した口辺部は、その残存部と同一個体をなすかは、明確にできない。口縁部は、いわゆるT字形口縁をなすもので、口縁下に、1条の断面三角形突帯をめぐらす。口縁内側への突出部は、肥厚しており、内外唇とも、まるみをもつ。口縁上面は、平坦となるが、外に傾斜する。

第4号壺棺 (Fig.35) 胴部中位に、2条の断面三角形突帯をめぐらし、口辺部へは、直線的にのび、T字形口縁をつける。口縁のつくりは、第3号壺棺と類似しており、内面への突出部は肥厚し、外傾する口縁となる。口縁下には、1条の断面三角形突帯をめぐらす。外面淡茶褐色を呈す。胎土には、石英砂粒を含む。

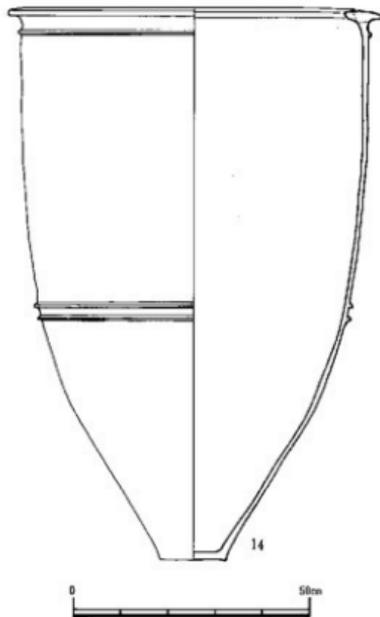


Fig. 39 D地区第3・14・16号壺棺実測図 (縮尺1/2)

第5号甕棺 (Fig.35) 下棺の甕は、口径80cm・器高126cmをはかる。2条の断面コの字形突帯は、胴部中位よりやや下方にめぐり、胴部上半部は、直線的で、上面平坦なT字形口縁へのびる。口縁部の内外面の突出部は、水平にのびる。口縁下の突帯は、断面コの字形をなす。上棺は、鉢形土器が用いられており、口径78cm・器高43cmをはかる。底径14cmの底部から直線的に外反し、下甕と同じようなT字形の口縁をもっている。内面の突出部は、肥厚する。

第6号甕棺 (Fig.35) 下棺内に落ちこんでいた甕形土器は、口縁内面と外面に丹塗り痕が認められ、平坦面をつくる口縁部には、相対して2個一組の穿孔一対があり、体部にも焼成後外側からの一孔がある。口径35cm。下棺の甕は、口径51cm・器高67cmで、くの字形に外反する口縁を持つ。口縁突帯下と底部付近には、刷毛目痕がのこる。

第7号甕棺 (Fig.36) 下棺の甕は、口径43cm・器高52cmで、逆L字形の口縁をもつ。口縁上面は、平坦であるが、やや外傾する。胴部は、まるみをもっており、大きめの底部へつながる。胴部には、断面M字形の突帯が5条めぐり、口縁に近くなるにつれ、その間隔はせまい。上棺の甕は、口径39cm、底部を欠くが、やや長めの胴をもつ、口縁部は、くの字形に外反し、口縁内面は、突出し、粘土継ぎ目が観察できる。底部近くに刷毛目痕のこる。

第8号甕棺 (Fig.35) 上面水平の逆L字形口縁をもつ。頸部は、急に屈曲して胴部へつながり、中位よりやや下に、2条の断面台形の突帯をめぐらす。口径41cm・器高78cm。

第9号甕棺 (Fig.36) 同器種大小の甕よりなる。小型の甕は、口径41cm、口縁部は、くの字形に外反する。内面には、小さく突出する部があり、鋭利な稜線をなす。大型の甕は、口辺部を打ち欠いている。現高68cm。胴部最大径は、やや上位にあり、その位置に断面三角形の突帯をめぐらす。突帯は、鋭利な三角形ではなく、またやや下方に垂れさがる。

第10号甕棺 (Fig.37) 下棺の甕は、口径73cm、器高96cmで、胴部中位よりややさがって2条の断面三角突帯をめぐらす通例のものであるが、口縁部に特徴をもつ。つくりとしては、T字形であるが、厚みがあり、内外への突出が少ない。口縁直下に突帯をめぐらす。上棺は、口径64cm・器高78cmの甕で、外傾するT字形の口縁をもつ。断面三角形の突帯を、口縁下に1条、胴中位に2条めぐらす。

第11号甕棺 (Fig.37) 下棺口径78cm・器高112cm、上棺口径70cm・器高110cmと両棺ほぼ同じ大きさの甕を用いている。外傾するT字形口縁は、上棺が、やや肥厚しているようである。上棺の甕底部には、粘土継ぎ目が観察できる。口縁下の突帯は断面M字形をなす。

第12号甕棺 (Fig.38) 下棺の甕は、底部から、内彎しながらのびる胴部中位に2条の断面三角形の突帯をめぐらす。口縁は、上面平坦部をもち、ぶ厚く堅牢なつくりをなす。胴部中位に、やや上向きの断面三角形の突帯をめぐらす。上棺は、口辺部を打ち欠いた甕で、下棺よりも、胴部にまるみがあり、胴中位の2条の突帯も、断面コの字形をなし、細かい点で異なる。いずれも胎土に石英砂粒を含み、外面茶褐色を呈す。

第13号壺棺 (Fig. 38) 口径52cm・器高96cmをはかる下棺は、第12号壺棺墓と同一の器制を持つ壺で、逆L字形の口縁は、上面を平坦とし、外唇部がやや凹む堅なつくりをなす。口縁下の突帯は、断面M字形である。胴部中位には、頂点のせまいコの字形突帯をめぐらせる。上棺の壺は、口径48cm・器高68cmで、くの字形に外反する口縁をもつ。胴下半分には、刷毛目痕がのこる。口縁部の内側は、やや凹み、内面突出部の稜はするどい。

第14号壺棺 (Fig. 39) 口径80cm・器高117cmをはかる壺を用いた単棺である。口縁部はいわゆるT字形の口縁をなし、内側への突出部は肥厚している。断面コの字形の突帯は、口縁直下に1条、胴部はやや下位に2条がめぐる。

第15号壺棺 (Fig. 36) 下棺の壺は、口径26cm・器高復原31cmをはかる。口縁はL字形をなし上棺に比較すると厚く、やや外傾する。底部はあげ底がみ。上棺の壺は、口径26cm、器高復原34cmで、やや胴長である。口辺部は、逆L字形で、外唇部はまるくおさめている。口縁上面は、わずかに内傾し、内面突出部が認められる。

第16号壺棺 (Fig. 39) 口径不明。T字形口縁をもっている。内面は、よく発達しているが、粘土の継ぎ目から、外面の突出は、小さくつけられている。

Tab. 10 D地区壺棺墓一覧表

(単位 cm)

No.	方位	傾斜	形式	土器	墓		時期	備考	Fig. PL.
					長さ×幅×高さ	口径			
1	N-20°E			壺・壺	楕丸長方形	164×70×34	19.803m	中期	28 13
2	N-12°E	NE ほぼ水平	接口	壺+壺	楕円形	94×46×16	19.98m	中期	28 13
3	N-64°W	不明	単?	壺	不明		19.65m	中期	28
4	N-22°E	NE ほぼ水平	単?	壺	不明		19.294m	中期	28
5	N-74°W	NW 28°	接口	壺	楕丸長方形	173×76×87	19.395m	中期	29
6	N-66°W	NW 29°	差しこみ?	壺+鉢	不整形円形	94×69×25	20.045m	中期	29
7	N-44°W	SW 13°	接口	壺+壺	不整形円形	128×66×47	19.913m	中期	全環 29 13
8	N-80°W	NW 18°	単	壺	不整形円形	119×76×41	19.87m	中期	口辺部に粘土
9	N-70°W	SW ?	差しこみ?	壺+壺	楕円形	183×90×40	19.86m	中期	30 13
10	N-28°E	NE ほぼ水平	接口	壺+壺	楕丸長方形	318×103×48	19.655m	中期	石斧
11	N-12°E	SW 15°	接口	壺+壺	楕円形	249×102×78	19.24m	中期	口辺接合部に粘土、青磁
12	N-66°W	SE ほぼ水平	接口	壺+壺	楕丸長方形	289×216×73	19.555m	中期	石鏃
13	N-74°W	NW 15°	接口	壺+壺	楕丸長方形	206×112×73	19.64m	中期	32 13
14	N-16°E	NE ほぼ水平	単	壺	楕円形	211×112×58	19.565m	中期	33 13
15	N-28°W	NW 12°	接口	壺+壺	楕円形	105×75×20	19.665m	中期	33 13
16	N-13°E	NE ほぼ水平	単	壺	不明		19.64m	中期	32

3. 土塚墓出土状況 (Fig.40~44)

第1号土塚墓 (Fig.40)

平面プランは長方形で、四壁はほぼ垂直に掘られており、全長101cmをはかる、幅は、向短側ともに差はなくD地区では、小型の土塚墓である。図示できなかったが、土塚内より有軸羽状文をもつ弥生式土器の小破片を出土した。N-72°-Wの方位で、土塚墓群の西端に位置する。

第2号土塚墓 (Fig.40)

長軸方位N-70°-Wは、第1号土塚墓と差はなく、近接して位置する第5・6号甕棺墓や第12号甕棺墓とも方向を同じくしている。平面プランは、隋円形に近い隅丸長方形をなすが、二段目の掘りこみは、四壁ともほぼ垂直をなし、長さ204cm・幅76cmの長方形をなす。塚底は、平坦であった。

第3号土塚墓 (Fig.42)

第3号土塚墓は、第1号甕棺墓の南側約1mの位置にあり、不整形の土塚墓である。長さ3mもあり、やや大きすぎることを、塚底が二段となっていることなどから、2つの土塚墓の切り合いも考えられよう。ただ表面観察、土層断面には変化は認められなかった。

第4号土塚墓 (Fig.42)

第II溝より上部を切られているため、不整長方形の平面プランは、旧形を示さないであろうが、第II溝の溝底より低い部分は、旧形のままであろう。平面プランの長さは、290cm、幅162cm、二段目の掘りこみは、長さ170cm・幅82cmをはかり、北短側がやや幅が広い。長軸方位N-12°-Eで、土塚墓群の南端に位置する。

第5号土塚墓 (Fig.43)

第4号土塚墓の北側に約1.5mと近接して位置しており、同じように第II溝によって切られる。第4号土塚墓と平面プランはよく類似しているが、土塚の規模は小型である。長さ200cm・幅142cmで、長軸方位N-10°-Eで、第4号土塚墓と並ぶ。四壁は、わずかに稜をもっているが、塚底まで斜めに掘られている。出土遺物はなかった。

第6号土塚墓 (Fig.41)

同じように第II溝によって切られる。長さ210cm・幅100cm・深さ29cmあり、隅丸長方形の平面プランをとる。第1・2号甕棺墓、第3・4・5号土塚墓に囲まれているが、これらの方位と違い、直角方向のN-78°-Wの方位をとる。

第7号土塚墓 (Fig.43)

平面長方形プランで、長さ208cm、幅83cmをはかり、第10号甕棺墓と第8号土塚墓の間にあり、ほぼ同一方向に並ぶ。深さは、24cmと浅く、上部を削平されたものと思われる。塚底は、中央部が、最も低い。平面プラン、および塚底プランも西短側よりも東短側が幅広く、東短側が頭位であろうか。

第8号土墳墓 (Fig.41)

長さ172cm・幅79cmの長方形の平面プランを持つ土墳墓で、第7号土墳墓の北側に位置する。方位は、N-52°Eで、北東-西南方向をとる第3・4・5・7号土墳墓の北東端にあり、これより、北側には、同一方向の上墳墓はみられない。墳底プランも、長方形を示し、小口の東短側の墳底には、一段低い掘りこみがあり、木棺小口板を想定させる。ただ、ほかの三側には、同種の掘りこみは検出できず、墳底は、平坦となっていた。

第9号土墳墓 (Fig.40)

深さは、12cmと浅く、墳底レベルもD地区でもっとも高い。平面プランは、不整形形で、長さ133cm・幅76cmをはかり、N-28°Wの方位をとる。四壁の掘りこみはあまり、平面プランも不整形がめだつことから、土墳墓とするには、疑わしい一面も持つが、甕棺墓の出土状況からして、土墳墓も削平されたことが考えられ、本土墳墓を小児用土墳墓とすれば、掘りこみの浅い現存部でも、矛盾はないと思われる。また、位置や方位にも同じことが言え、ここでは、土墳墓と認定してとりあげた。

第10号土墳墓 (Fig.41)

長さ163cm・幅66cm・深さ50cmをはかる。平面プランは、長方形で、第III溝より切られている。第11号甕棺墓の北東部約1.7mの位置にあり、第7号土墳墓と並行する。四側壁の掘りこみは、ほぼ垂直となり、長側は、両側とも内側に掘りこまれ、平面プランよりも墳底プランが幅広くなっている。墳底は、平坦であるが、両短側の深さに5cm程の差があり、北短側にむかって、傾斜している。墳底近くから、弥生式土器片を出土したが、磨滅した小破片のため、時期は、明確にしがたい。

第11号土墳墓 (Fig.43)

第10号土墳墓と同様に、第III溝によって東側半分を切られるが、現存部より旧形を知りうる。現存部の平面プランは、長方形で、明らかに二段の掘りこみを持っている。一段目の掘りこみは、復原長215cm、幅95cmで、二段目掘りこみは、長さ128cm、幅37cmをはかる。一段目掘りこみは、削平されているが、二段目掘りこみは、旧形をとどめていると思われる。二段目掘りこみは、四側壁とも垂直に掘られ、深さも50cmを越え、墳底のレベルは、D地区土墳墓では、もっとも低い。墳底は、平坦面をつくらず、弓状にややまくなっている。

第12号土墳墓 (Fig.41)

N-72°Wの方位は、第11号土墳墓と、ほぼ同じ方向で並行する位置にある。土墳上面を、第1・III溝によって切られているために、平面プランは、変形となる。側壁は、垂直に近く、東短側は、内側に掘りこまれている。墳底は、平坦面をなす。本土墳墓は、削平されているが、墳の深さからみて、第11号土墳墓のような二段掘りこみの可能性はないようである。

第13号土塚墓 (Fig. 40)

第13号甕棺墓の東側に近接して位置し、第8号甕棺墓・第9号土塚墓・第12号土塚墓・第13号甕棺墓と方向を同じくして、ほぼ一列に並ぶ。長さ 138cm、幅72cmで、長方形の平面プランを持つ。西短側で、やや凹凸があるが、側壁は、ほぼ垂直に掘られ、坑底は平坦をなす。

第14号土塚墓 (Fig. 44)

長さ 222cm 幅 200cmの、方形にちかい平面プランを持つ。坑底は、平坦となるが、西側壁には、突出した掘りこみがみられる。土塚北隅で、第15号土塚墓を切る。坑底に密着していないが、土塚内より弥生式土器片が出土し、図示した。Y91は、逆L字形口縁をもつ甕形土器で口縁下に断面三角形の突帯1条をめぐらし、丹塗り痕が認められる。口径は36cm。Y92は、底部で、底径9cm、明赤茶褐色を呈す。これらの土器から、D地区土塚墓の年代推定が、ある程度可能となろう。

第15号土塚墓 (Fig. 44)

第14号土塚墓より切られている。長さ 174cm・幅 100cmの平面プランは、不整楕円形で、坑底プランは、隅丸長方形である。坑底は、ほぼ平坦面をつくるが、側壁は、傾斜をもって掘りこまれている。

第16号土塚墓 (Fig. 40)

長さ 104cm・幅65cmの長方形平面プランは、D地区では、第1号土塚墓について小型である。N-68°-Wの方位は、第11号土塚墓と同一で、第12・13号土塚墓などは、並行の位置にある。長側壁はほぼ垂直の掘りこみをなすが短側は、斜めの掘りこみをなす。

Tab. 11 D地区土塚墓一覧表

(単位 cm)

No.	方位	平面形	長×幅(左・中・右)	深さ・坑底レベル	備 考	Fig.
1	N-72°-W	長方形	101×58・63・60	31 19.93m	有軸羽状土器片	40
2	N-70°-W	隅丸長方形	242×115・148・110	55 19.63m		40
3	N-8°-W	不整長方形	300×62・96・82	46 19.62m	あるいは2つの土塚の切りあいか? 石塚	42
4	N-12°-E	不整長方形	290×168・162・173	48 19.44m	第Ⅱ溝より切られる	42
5	N-10°-E	不整楕円形	200×92・142・122	40 19.66m	第Ⅱ溝によって切られる	43
6	N-78°-W	隅丸長方形	210×90・100・85	29 19.78m	第Ⅱ溝によって切られる	41
7	N-77°-E	長方形	208×63・83・82	24 19.97m		43
8	N-52°-F	長方形	172×70・79・73	23 19.99m	東短側に浅い掘りこみがあり、あるいは本塚か	41
9	N-62°-W	不整楕円形	133×61・76・56	12 20.12m		40
10	N-28°-E	長方形	163×61・66・50	50 19.59m	第Ⅱ溝より切られる、弥生式土器片	41
11	N-68°-W	長方形	170+α×90・90・-	70 19.38m	二段の掘りこみ第Ⅱ溝によって切られる	43
12	N-72°-W	隅丸長方形	148×40・54・50	40 19.58m	第Ⅱ溝によって切られる	41
13	N-65°-W	長方形	138×65・72・62	55 19.56m		40
14	N-70°-W	隅丸長方形	222×205・200・184	54 19.61m	弥生式土器出土 (Y91・Y92)	44
15	N-98°-W	不整楕円形	174×90・100・90	28 19.86m	14号土塚より切られる	44
16	N-68°-W	長方形	104×53・65・58	30 19.74m		40

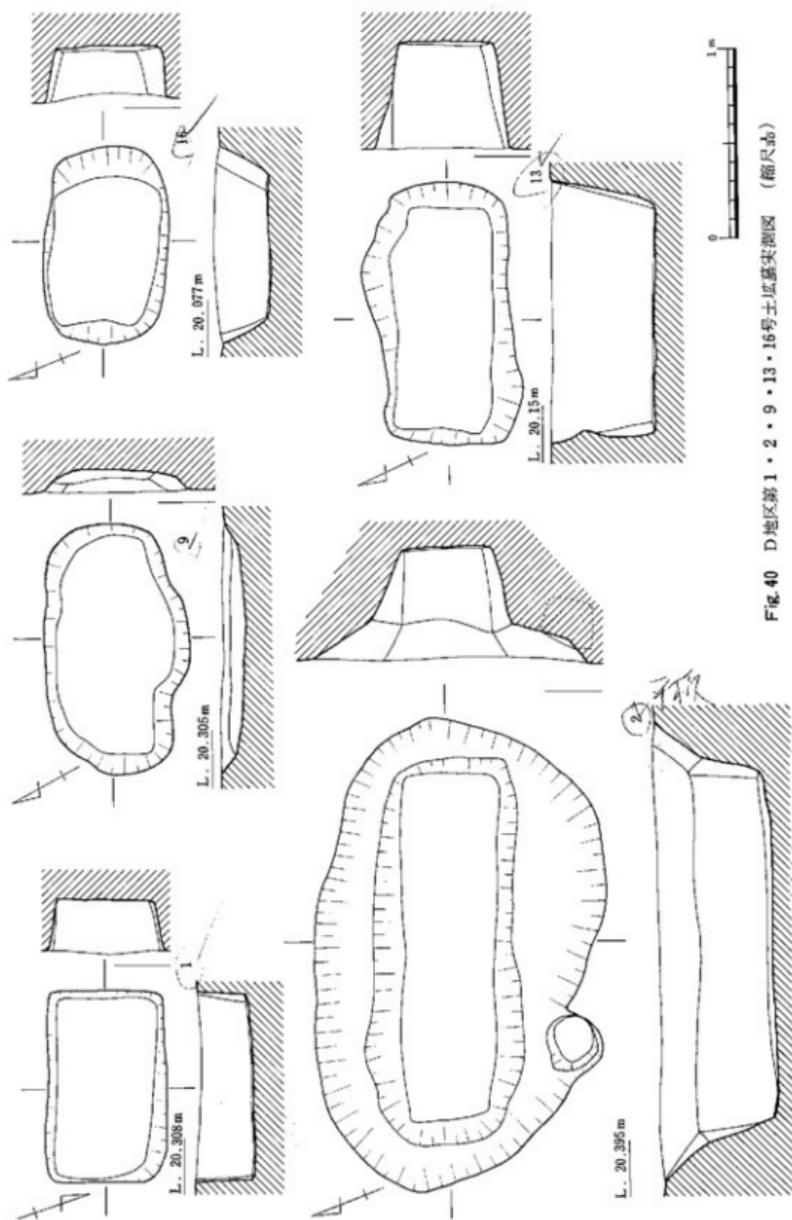


Fig. 40 D地区跡1・2・9・13・16号土坑盛土断面 (縮尺品)

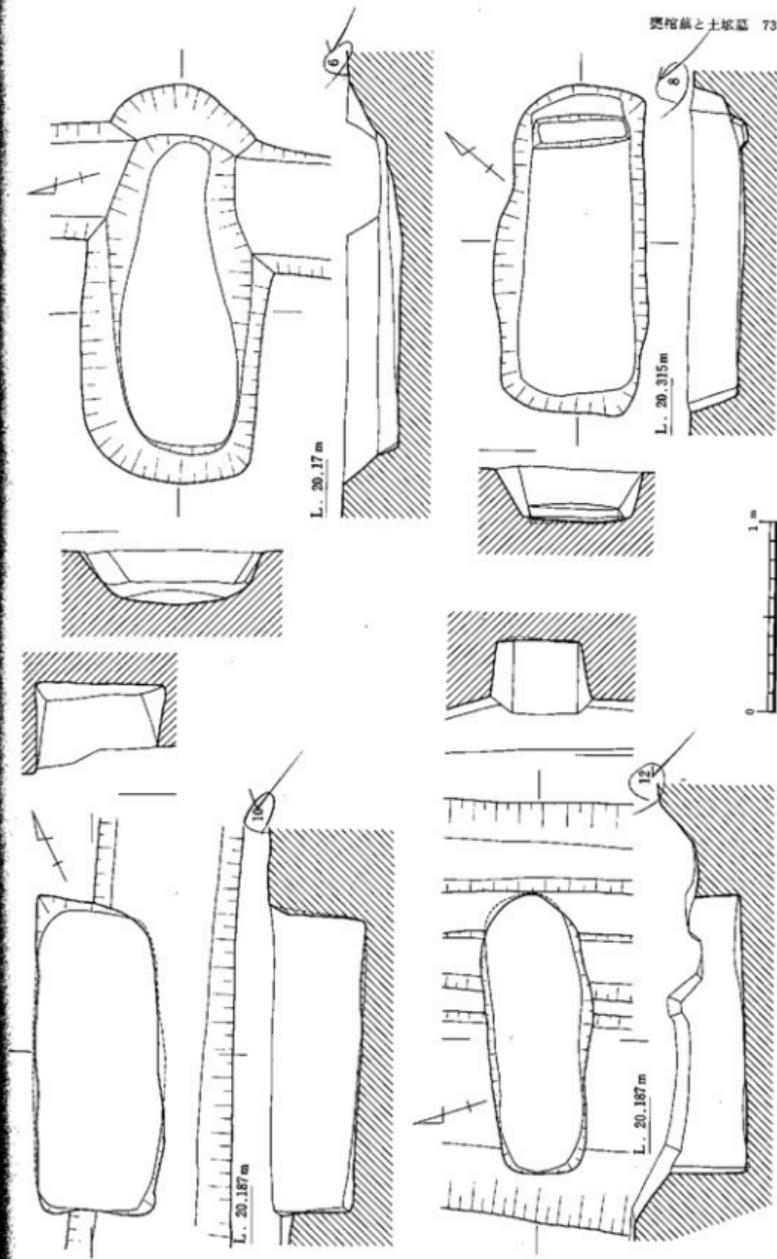


Fig. 41 D地区第6・8・10・12号土塚墓実測図 (縮尺示)

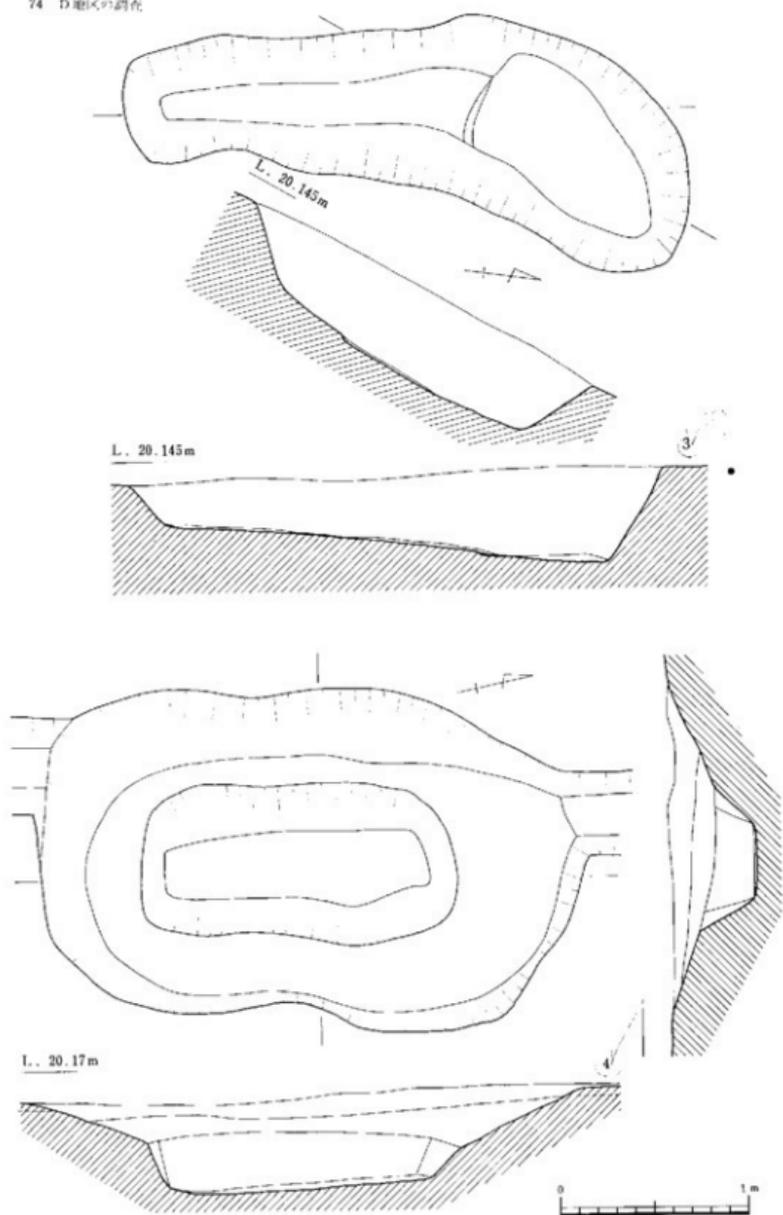


Fig.42 D地区第3・4号土坑墓実測図 (縮尺表)

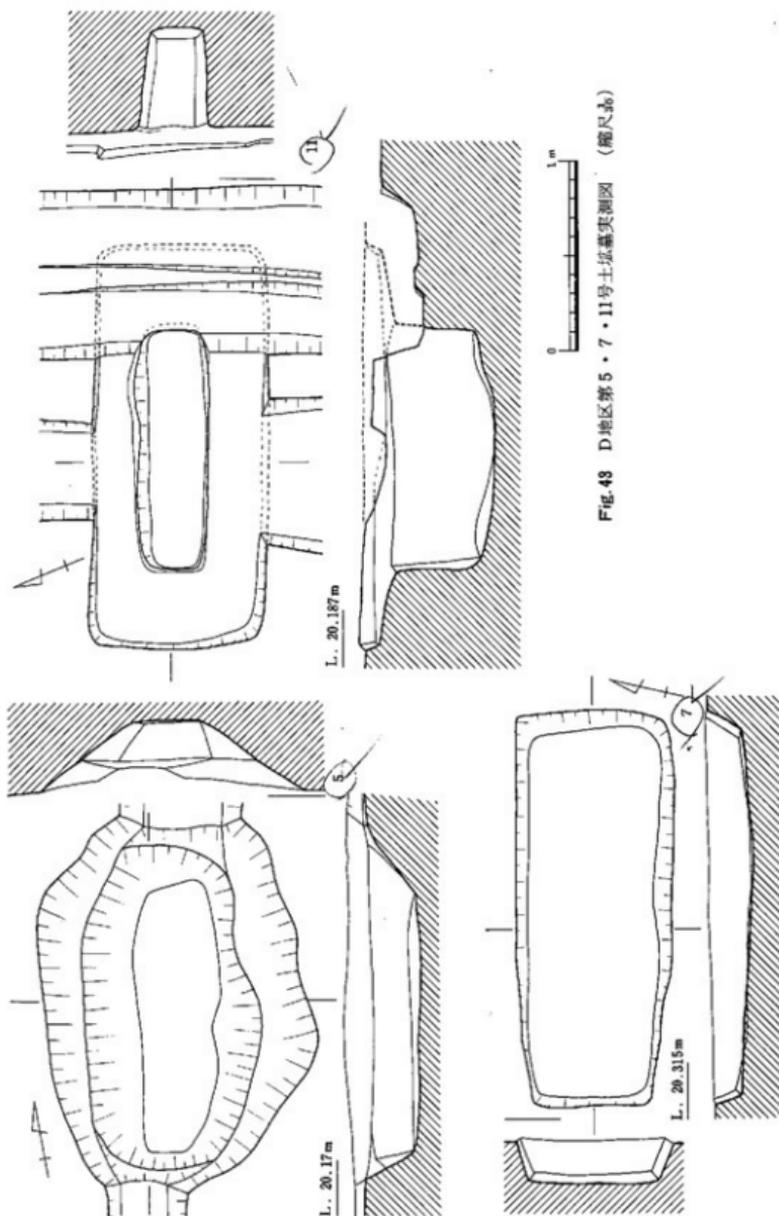


Fig. 48 D地区第5・7・11号土坑墓実測図 (縮尺品)

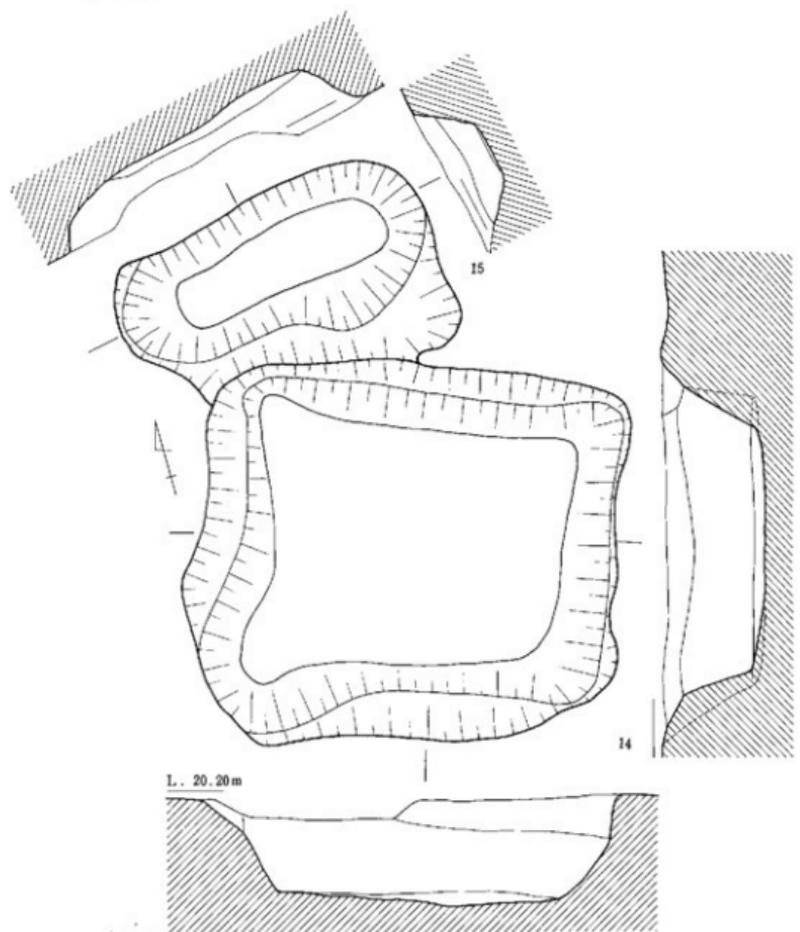


Fig. 44 D地区第14・15号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$)

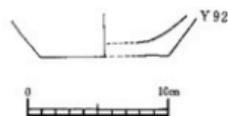


Fig. 45 D地区第14号土塚墓出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)

4. 土壇状遺構 (Fig.46-49)

D地区では、甕棺墓・土塚墓に付随すると思われる遺構が2か所に存在する。これらは、いずれも土器を伴っており、その時期は、甕棺墓・土塚墓の示す時期と大きな違いはない。いまI・J-28・29グリッド検出の遺構を第1土壇とし、F-27グリッド検出の遺構を第2土壇として、出土遺物・遺構について記す。

第1土壇 (Fig.46・47)

平面プランは、不整形円形で、長さ90cm・幅60cmをはかる。深さは、10cm前後と浅く、谷底まで傾斜をもって掘られており、明瞭な壁をもたない。出土遺物で図示したのは、次の3点である。Y93は、口径27cmで逆L字形の口縁を持っており、上面平坦な口縁は、下方に傾く。口縁直下には、断面M字形の突帯をめぐらす。Y94は、高杯形土器の杯部で、内面の突出部はよく発達し、外傾する上面平坦な口縁をもつ。Y95は、高杯形土器の脚部で、断面三角形の突帯をもち内面にしぼり痕が見られる。Y94と同一個体か、また、壺形土器と思われる土器片も出土した。これらは、いずれも外面丹塗りである。第1土壇は、第4号甕棺墓と並んで、甕棺墓、土塚墓群の南端に位置している。出土遺物の丹塗り土器、さらには、甕棺墓・土塚墓との位置関係などから、祭祀遺構としての性格が考えられよう。

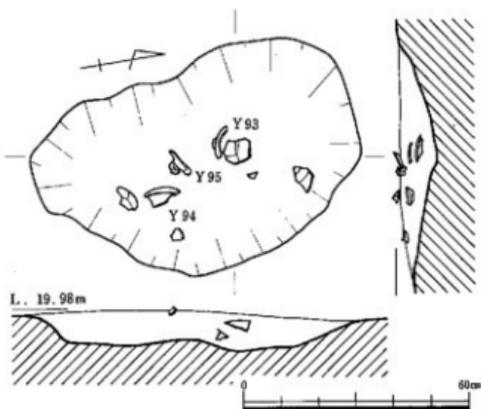


Fig.46 D地区第1土壇状遺構実測図 (縮尺1/5)

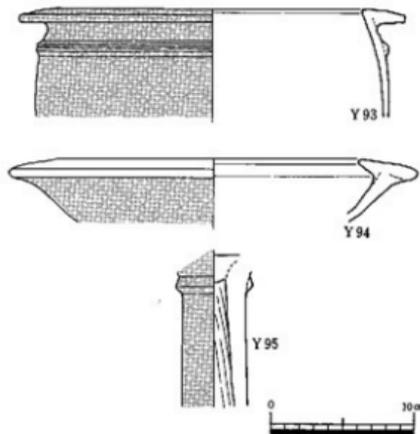


Fig.47 D地区第1土壇状遺構出土土器実測図 (縮尺1/3)

1
LL
12

第2土塚 (Fig.48・49)

第2土塚は、第2号土塚墓の南側で検出したもので、平面プランは不整長楕円形をなす落ちこみで、意識的な掘さくによるものであるかは疑問である。図示した出土遺物は7点である。

Y96は、明赤茶褐色を呈する口辺部で、逆L字形の口縁は、外傾する。Y97は、明黄褐色で逆L字形の口縁は同じように外傾する。口縁直下に突帯をめぐらす。Y98は、淡茶褐色で、口縁は小さく、ほぼ水平に外反する。内外面ともに砂粒露出する。Y99は、くの字形に外反する口縁を持つ。口縁直下に断面三角形の突帯を持つ。

胎土は、砂粒を含み外面に横ナデ痕がわずかながら認められる。Y 100は、灰白色を呈する底部であるが、破片のため底径は知りえない。Y 101は、茶褐色で、同じように底径、調整痕は不明。Y 102は、内面黒色、外面赤褐色を呈する平底の底部である。底径は、9cmをはかる。出土遺物のすべてが、内外面ともに磨滅をうける。第2土塚は、藁棺墓・土塚墓に近接してはいるが、出土遺物等には时期的な統一性がなく、丹塗り土器などを持たないことなどから、第1土塚と同一の性格は考えられないであろう。

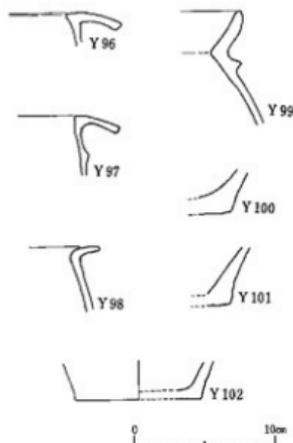


Fig.48 D地区第2土塚状遺構出土土器実測図 (縮尺4)

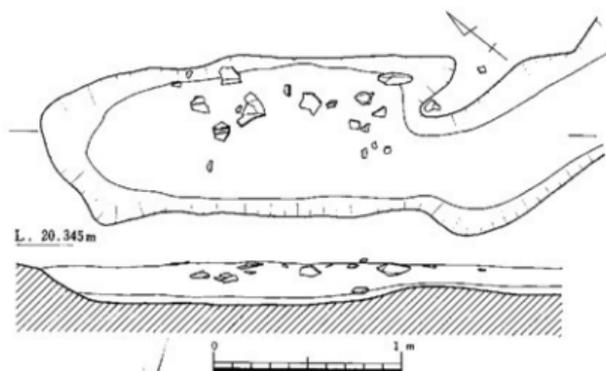


Fig.49 D地区第2土塚状遺構実測図 (縮尺1/5)

3. 古墳時代の住居跡

住居跡7基は、D地区調査予定地の最南端にあたるH-K-32~35グリッドで検出したものである。中世の柱穴群と重複しているために、住居跡内のピット、および出土遺物について、両者を区別する必要がある、このことに注意しながら発掘を進めた。

第1号住居跡 (Fig.51・PL.15)

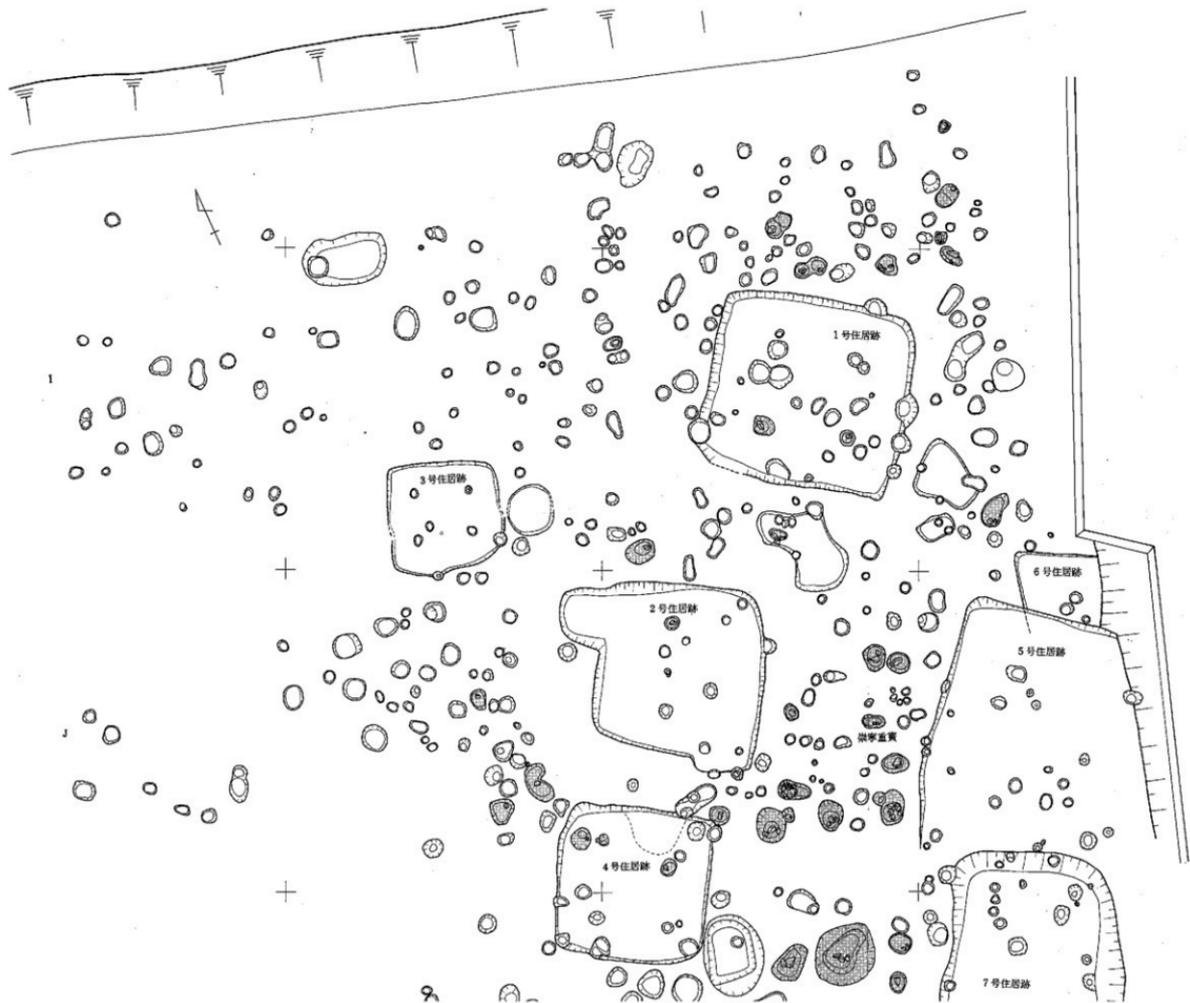
住居跡が検出されたI-K-32~35グリッドは、I列からK列にむかって傾斜する。つまり現況は、北側が高くて南側が低くなっている。第1号住居跡は、もっとも北側のI-34グリッドにある。北壁4.7m・南壁4.8m・東壁4.5m・西壁4.3m、深さ40cmをはかり、ほぼ方形の平面プランをもつ。床面は、地山と考えた黄褐色土を掘りこんでいる。住居跡内には、明らかに上部より掘りこまれたピットをのぞいて、14個のピットが存在するが、H11の嚢口辺部を出したピット3は、明らかに本住居跡の支柱穴の1つをなすものと思われる。これに対応するのが床面よりの深さ40cm前後のピット1・2・4であろう。特にピット2・4は、底に石がみられた。床面に炉と認められる部分はなく、また、外部施設など付随する遺構は持っていない。

出土遺物 (Fig.52・Tab13・PL.15)

出土遺物は、碗・杯・甕・変形土器、手捏ね土器などの土師式土器、須恵器、滑石製防錘車などで、これらの遺物は、住居跡の東側に片寄って出土した。実測できた杯形土器(H2~5)は、4個体分あり、口径13cm前後で、内外面とも丁寧な調整を施しており、口縁部を強く押しつけて横ナゲするものと小さく外反させるものがある。碗形土器(H6)は、はりのある胴部に内傾する口縁部をつけ、上面は小さな平坦面をつくる。変形土器には、口辺部のつくりにも三種類あり、H8のようにくの字形に外反し、内側に稜をもつもの、H9・10のように彎曲しながら外反するものと、もう1つは、H7のようにあつめの短い口辺部をもつものなどがある。変形土器(H11)は、精良な胎土を用いており、球形の胴部をもつ。手捏ね土器(H12~14)は、ほぼ同じ大きさをなす。H15は、土器と同じ焼きであるが、全形を知りえない。

第2号住居跡 (Fig.53・PL.16)

第2号住居跡は、第1号住居跡と第4号住居跡の中間に位置する。表土除去後の観察では、北壁・西壁がやや判然としていたのみで、東壁・南壁は、不明瞭であった。さらに、南壁付近に、畑地利用の際の段があり、傾斜が急になっていたために、発見を困難にした。西壁の北隅に1.5m×1.2mの張り出しがみられる。北壁5.1m・南壁4.0m・東壁3.8m・西壁4.5mで、コーナーは、いずれもまるみがある。柱穴内には、10個のピットが存在し、壁との関係から、ピット1・2が支柱穴と考えられるが、これに対応する柱穴は、住居内には、認めがたい。とすれば住居跡外に、対応する柱穴を求めると、あるいは、上部構造に帰因するとすべきか。床面には、焼土など炉と認める部分は、検出されなかった。



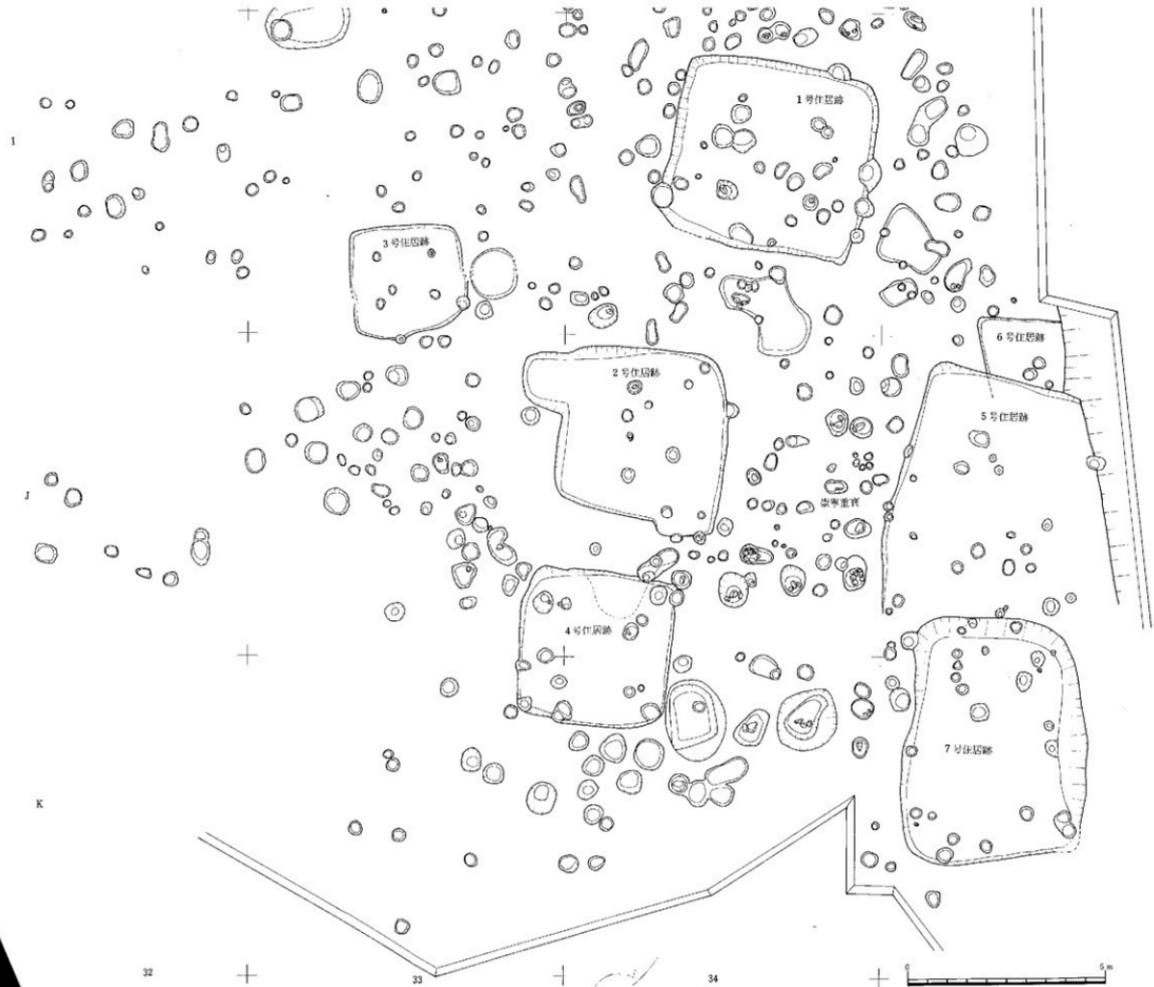


Fig. 50 / D地区住居跡分布図 (縮尺1/50)

出土遺物 (Fig.54・55・56・Tab.13・14 PL.16・17・18)

遺物は、住居跡内の北東部より集中的に出土し、床面にはほぼ接した状態をがす。これらの遺物には、手握ね土器・須恵器など完形に近いものもあるが、ほとんどが破片となっている。実測可能な須恵器は、図示した杯と蓋のみである。蓋(S2~6)は、S6をのぞき、直立した長い体部をもち、天井部とは、明瞭に区分され、口縁部は、つまみ出される。杯(S7~9)は、やや内傾ぎみのうすく直立する立上りをもって、蓋受部には、蓋をかぶせて焼いたあとが認められる。いずれも焼成良好である。土師式土器の杯・碗・壺・甕形土器は、第1号住居跡と同じように、それぞれいくつかに分類できる。杯形土器は、球形に近い胴部に、すどく外反する口縁をもつもの(H18)、丸底であるが、球形をなさず底面の大きいもの(H16, 17)、胴がはり、口径、器高ともに大きいもの(H19~23)。碗形土器は、底面の大きい丸底の底部に内傾する胴部がつき、直立ぎみの口縁でおさめ、口縁内外面を強く押して横ナデするもの(H24)と軽くナデるもの(H25)がある。甕形土器は、胴のりが小さく、くの字形に外反する口縁部をもつもので、外反が小さく、ぶあつい口縁をもつもの(H29・34)、彎曲しながら外反するもの(H30~33)、うすく直立する口縁をもつもの(H36)があり、内外面の調整に差はない。壺形土器(H37~39)は、3個あり、いずれも球形の胴部をなし、外反する口縁をもつ。内外面の調整は類似するが、口縁のつくりが、直立ぎみのもの(H37)、くの字形のもの(H38)、まるみをもって外反するもの(H39)に分けられる。焼成は良好であるが、胎土に砂粒を含む。手握ね土器は、4個出土したが、うち1個は、図示できなかった。

第3号住居跡 (Fig.52・PL.19)

他の住居跡は、いずれも側壁の方向を互いに並行にとるが、第2号住居跡のみ、やや異にしている。平面プラン長方形で、北壁2.7m・南壁2.6m・東壁2.2m・西壁2.6mをはかる。住居跡の中央部を、耕作用の溝によって切られており、また、床面までの深さは、20cmもなく、上部はかなり削平されたものと思われる。このために南壁東隅は、不明瞭な壁となっている。住居跡内には、7個のピットがあり、ピット1・2・3・4が、主柱穴となるのであろう。遺物は、土器片がピット3付近より出土したが、実測不可能な破片のため図示できなかった。

第4号住居跡 (Fig.57・PL.19)

第2号住居跡の南側に位置する平面プラン長方形の住居跡で、北・南壁3.8m・東、西壁3.5mをはかる。南壁部は、かなり削平されているが、住居跡の落ちこみは、明瞭である。住居跡内には、12個のピットが認められ、主柱穴は、ピット1・2・3・4であろうか。ピット4は、やや深く床面より40cmである。北壁には、部分的に焼土が推積している。

出土遺物 (Fig.58・Tab.12・14)

須恵器は、蓋の2個が実測できた。ともに蓋で体部・天井部の境は明瞭でない。S11は、南壁に接して発見された。H43は、甕形土器の口辺部で、H44は、甕の張付把手である。

第5号住居跡 (Fig.60・PL.20)

第6号住居跡の下部より検出した住居跡で、東壁を農道で、南壁を耕作でそれぞれ切られているが、北壁の西コーナー残存状態は、わりに良好である。平坦な床面には、焼土・炭化物が厚く存在し、それが部分的でないことから、火災ということも推測されるが、出土遺物には、その顕著な痕跡は見られない。住居跡内には、24個のピットがあり、ピット1・2・3・4が主柱穴であろうか。

出土遺物 (Fig.61・Tab.12・14・PL.21)

須恵器の杯S12は、直立するやや短めの立上りを持ち、S15～17は、内傾する短い立上りを持っている。蓋(S13・14)は、いずれも天井部と体部との境を失っており、天井部は、約半分を篋削りする。杯形土器(H49～51)は、3個体あり、小さく外反する口縁部の上面端は、まるみをもつ。H49は、球形の胴部をなすものと思われ、H51は、平底ぎみのあつい底部をなす。碗形土器(H45～48・52)は、第2号住居跡出土の碗形土器に類似するもの(H45)、口縁部は、内彎するが、胴のはりが少ないもの(H46～48)、内彎する口縁に、はりの大きい胴部がつくもの(H52)に分けられる。杯、碗形土器ともに、胎土もよく丁寧なつくりをなす。甕形土器は、くの字形に外反する口縁をもち、胴部外面刷毛目、内面篋削り、口縁内外面は、横ナデで、外面は、刷毛目を消している。H55・56は、甕把手で、別個体である。H57は、手捏ね土器で、あつい底部をもつ。H58～60は、土製の鐘で3個発見された。3個とも、管状をなし、H59は、ややまるみがある。この他に、硬質砂岩を用いた砥石が出土している。砥石の長さは、約10cm・幅2.5cm・厚さ1.5cmの長方形で、使用面は、研磨されくぼんでいる。

第6号住居跡 (Fig.60・PL.20)

第5号住居跡の上部につくられた住居跡で、時期的に第5号住居跡よりも新しくなる。表面観察では、切り合い関係は、明確にできなかったが、第5号住居跡の掘り込みより出土した甕のレベルが、第6号住居跡の床面レベルと合うことなどから、甕を第6号住居跡に伴うものとし、第5号住居跡を古い時期のものと考えた。

出土遺物 (Fig.62・Tab.14・PL.21)

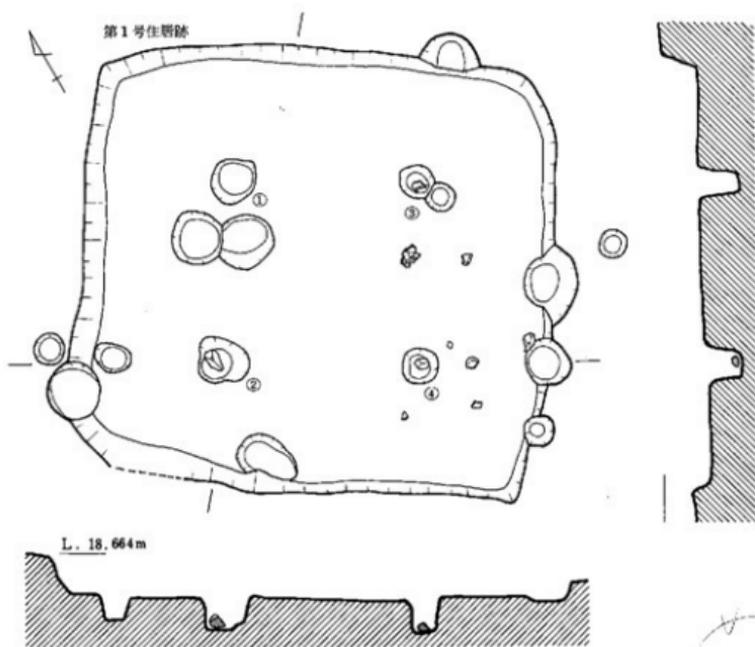
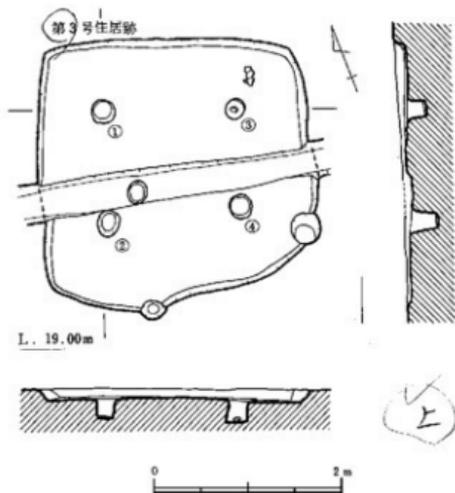
H61・62は、甕で、H61は完形である。底部は、単孔式となっており、長胴の中心に、把手を張りつけている。須恵器蓋は、全体の約半分を篋削りしており、天井部と体部の境はない。

第7号住居跡 (Fig.59・PL.20)

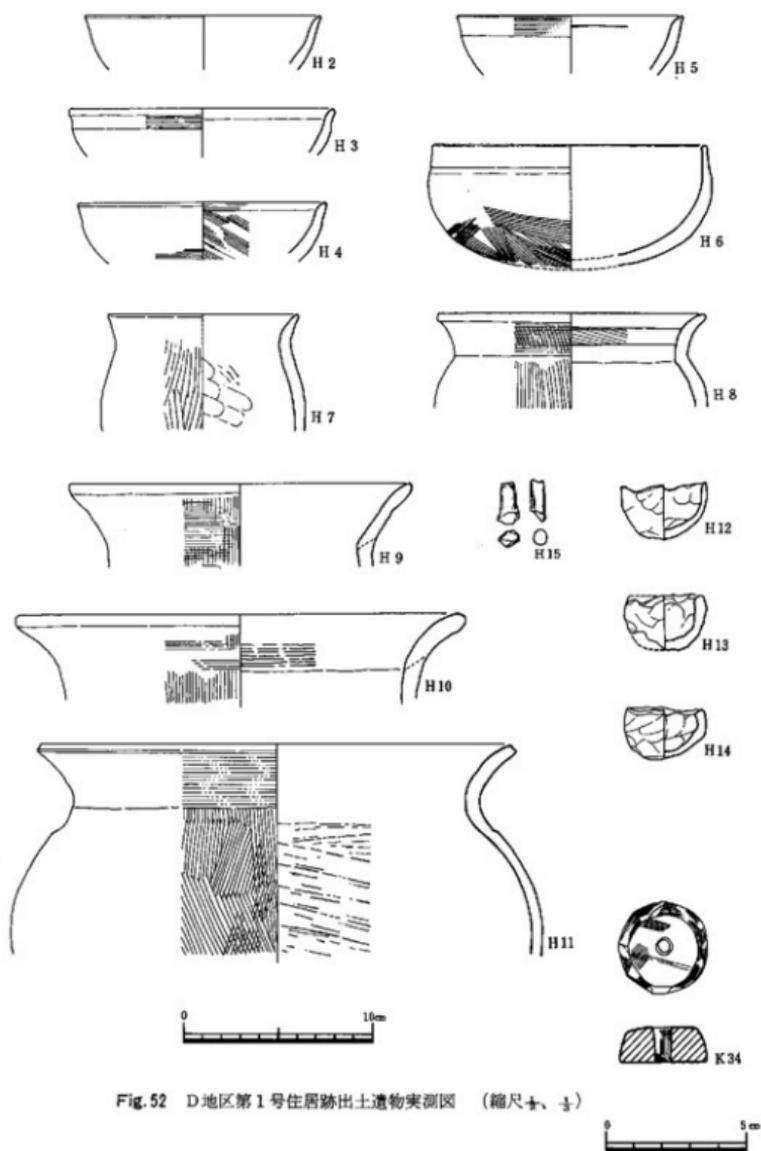
検出した住居跡の中で、もっとも南端にあり、標高も低い位置にある。平面プランは、長方形で、4隅は、かなりまるみが目立つ。北壁の残存状態は、概ね良好であるが、農道によって削平された南壁は、明瞭さを欠いている。住居跡内のピットには、第1・3号住居跡のように明らかに対応するような配置は、みられない。住居跡の出土遺物は、すくなく、実測不可能な小破片のために図示できず、またこれらの多くが、後世の流入と思われた。

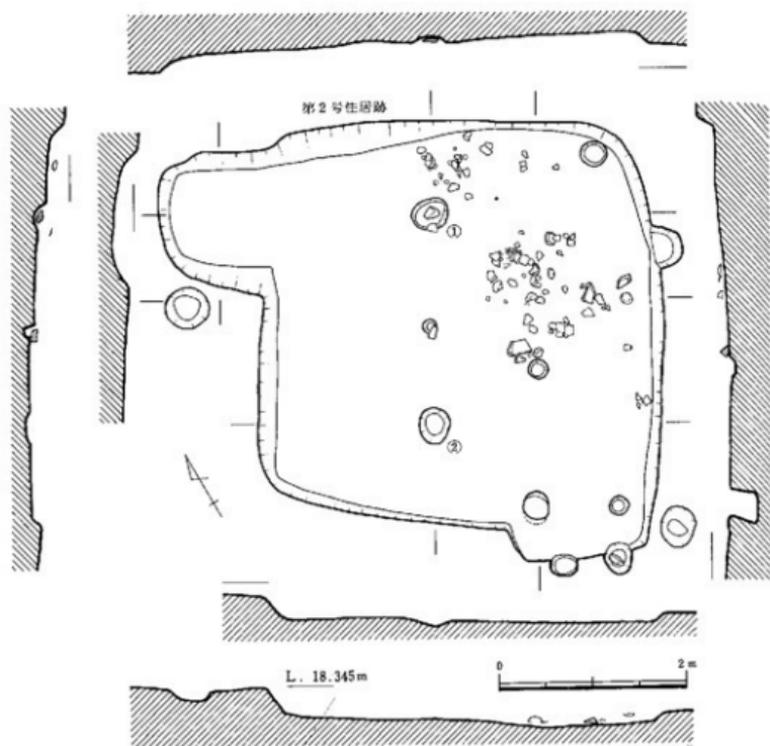
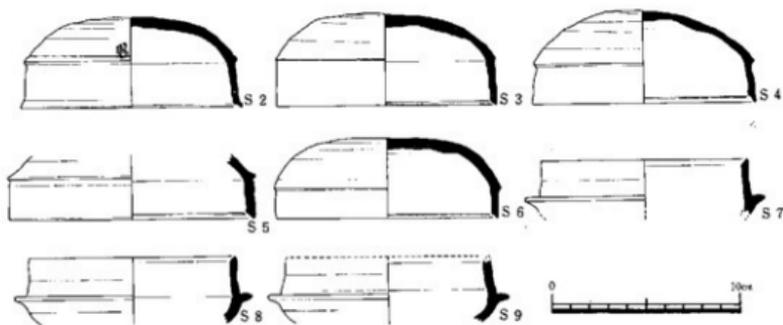
D地区住居跡

各住居跡の実測図は、縮尺 α で統一した。明らかに住居跡に伴わずに上面から掘りこまれた柱穴は、Fig.50のD地区住居跡分布図に記入した。なお、この図で柱穴にアミがかかっているのは、盤石を持っていることを示している。



(Fig.51) D地区第1・3号住居跡実測図 (縮尺 α)

Fig. 52 D地区第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{3}$)

Fig. 53 D地区第2号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)Fig. 54 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

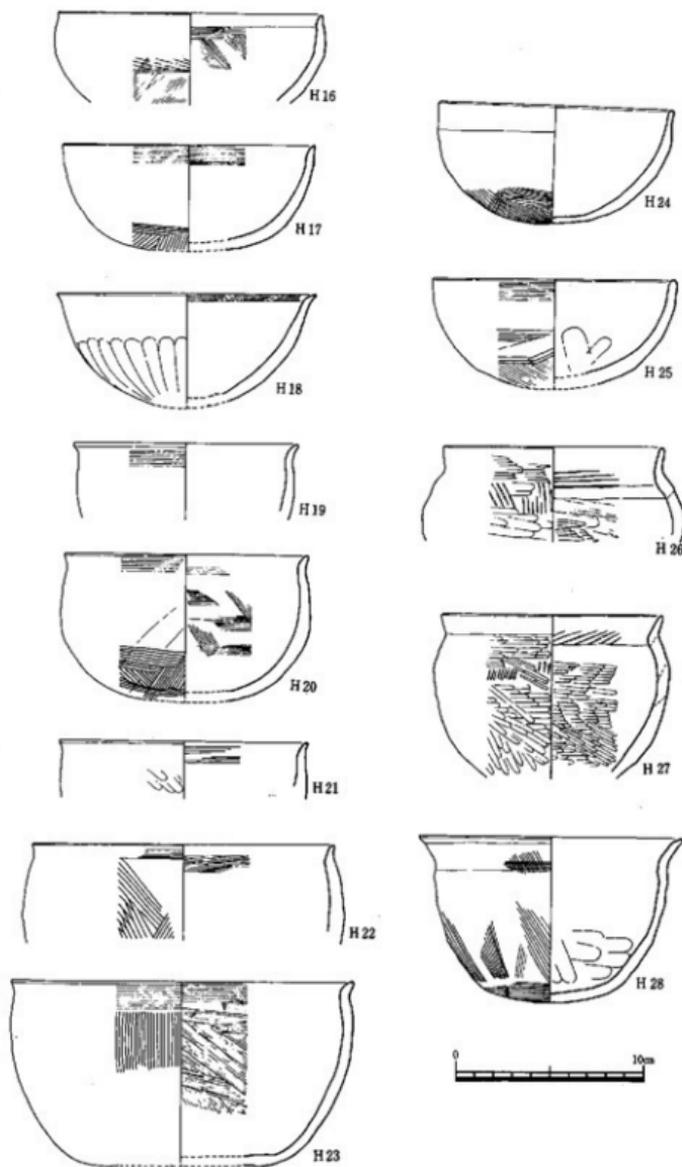


Fig. 55 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(II) (縮尺十)

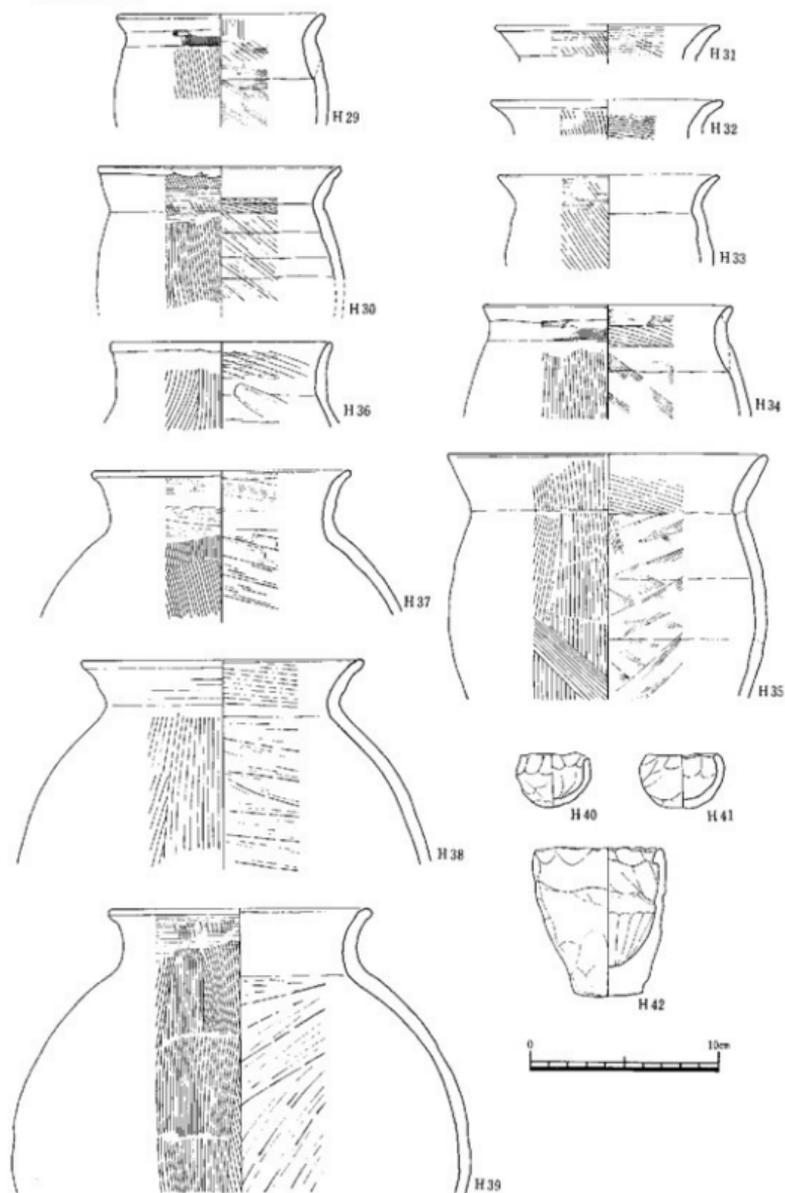
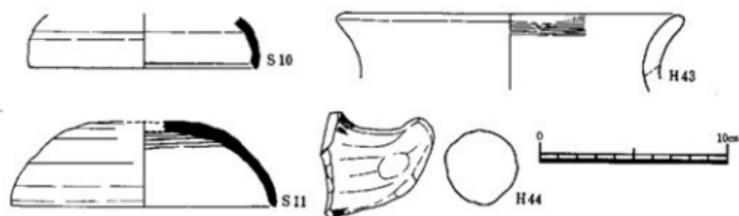
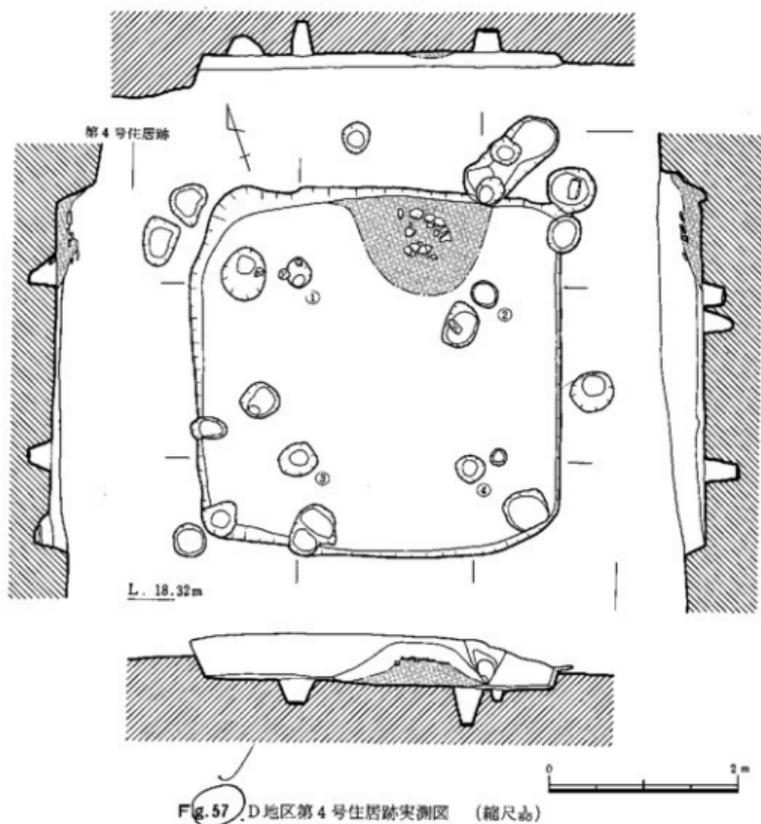


Fig. 56 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(Ⅲ) (縮尺寸)



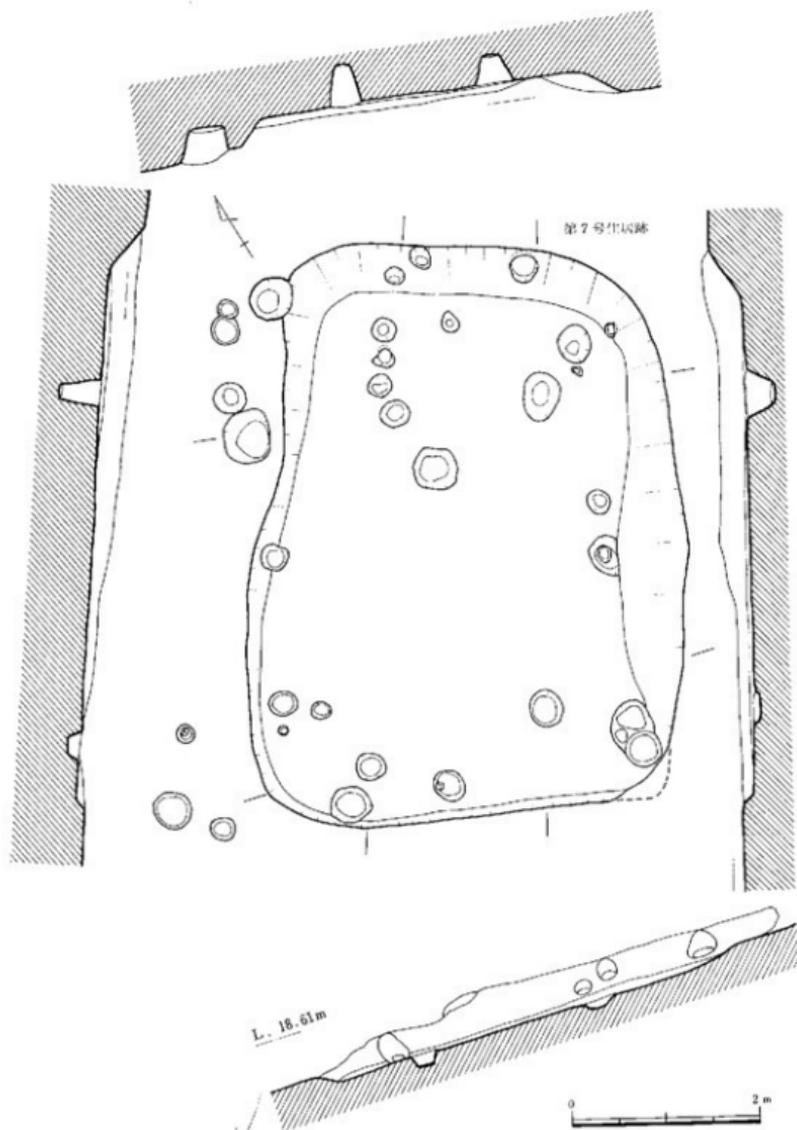


Fig. 59 D地区第7号住居跡実測図 (縮尺高)

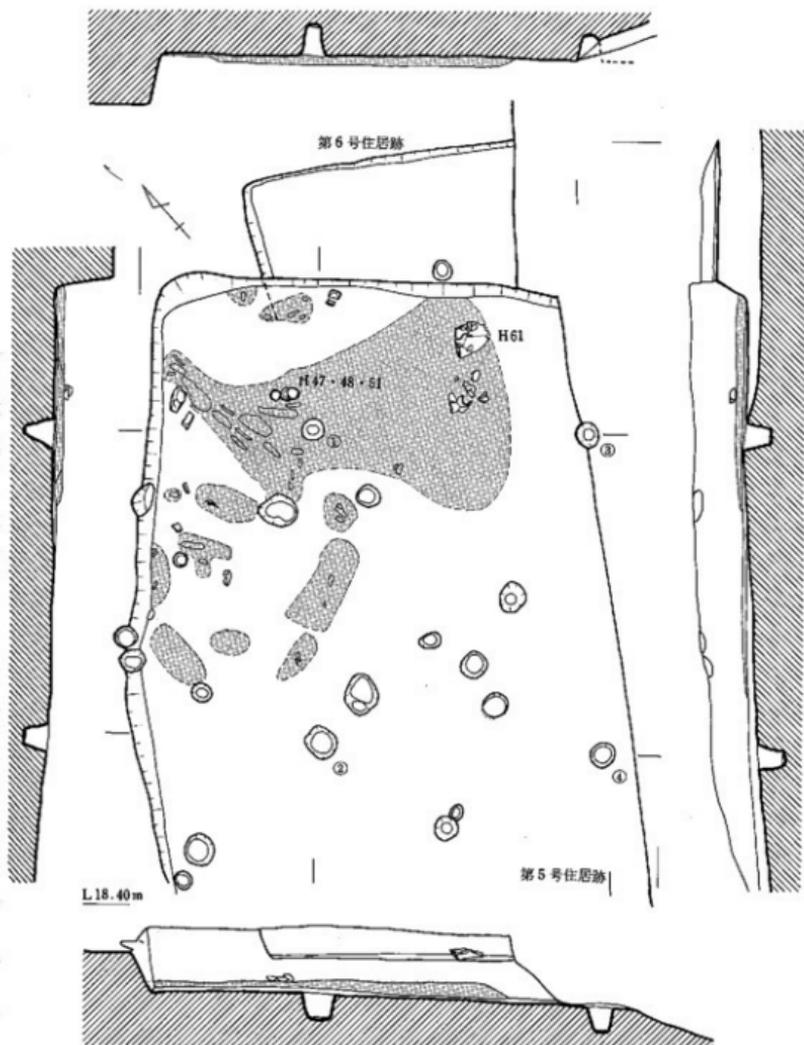


Fig. 60 D地区第5・6号住居跡実測図 (縮尺)

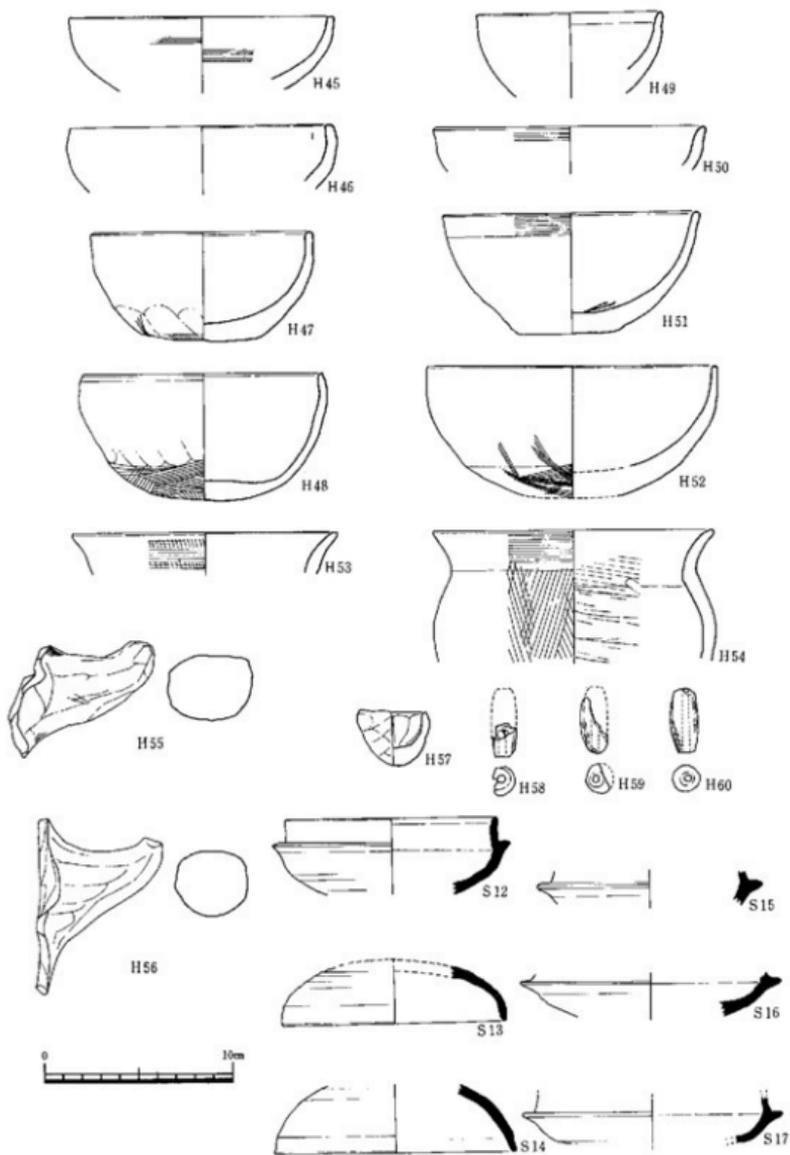


Fig. 61 D地区第5号住居跡出土遺物実測図 (縮尺寸)

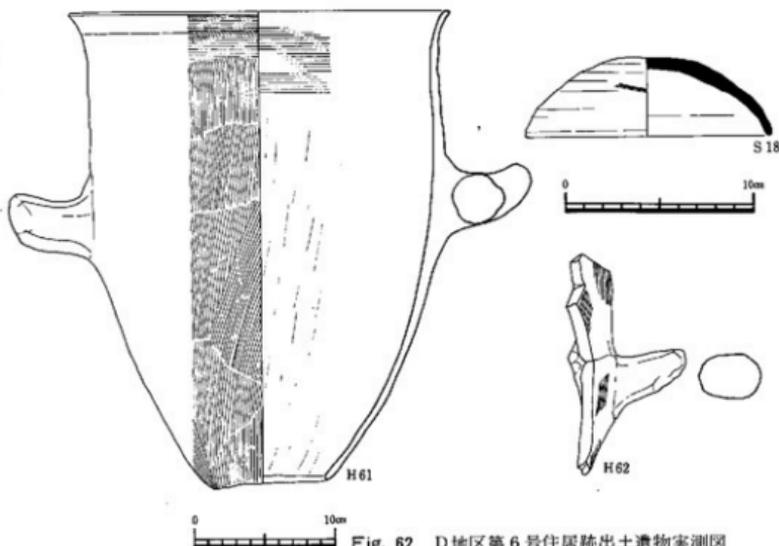


Fig. 62 D地区第6号住居跡出土遺物実測図

Tab. 12 D地区住居跡出土遺物一覧表 (I)

(縮尺 $\frac{1}{4}$)

(単位 cm)

遺物番号	住居跡	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.	Pl.
S-2	2号住居跡	蓋	ほぼ 完形	口径11.8 器高4.8	丸地を持つ天井部に、器 底のほぼ半分の長さの直 立した体部を持つ。天井 部と体部とも明瞭に区別 している。口縁部は、 つまみ差して作り、器内 面に明瞭な縦線をもつ。	S-5は不明であるが、 他は全て天井中央部から 天井部の四分の三近くま へつ削りする。ていどい な作りである。	良好・堅緻	黒灰	内部に ナメあり	54	16
S-3	2号住居跡	蓋	ほぼ 完形	口径11.8 器高4.9			+	灰		54	16
S-4	2号住居跡	蓋	ほぼ 完形	口径12.0 器高4.9			+	灰		54	16
S-5	2号住居跡	蓋	部分 破損	口径13 (推定)			+	灰		54	
S-6	2号住居跡	蓋	ほぼ 完形	口径12.0 器高4.3	上記4例に比し、体部が 若干短い。		+	淡灰	ための赤灰 彩をまわ す。	54	16
S-7	2号住居跡	杯	部分 破損	口径11.0 (推定)	S-7、S-8ともに2 cmほどの立上りを持ち、 S-9も口縁部を欠失 しているが、ほぼ同様に なると思われる。	蓋をかぶせてやいたあと が発露部に認められる。	良好・堅緻	灰		54	
S-8	2号住居跡	杯	部分 破損	口径11.0 (推定)		S-7、S-8は同一個 体の可能性もある。	+	灰		54	
S-9	2号住居跡	杯	部分 破損	口径10.6 (推定)	わずかに内縁するが直立 するうす立上りである。		+	灰		54	
S-10	4号住居跡	蓋	部分 破損	口径12.1 (推定)	天井部、体部の境は明瞭 ではない。体部は丸く内 面に沿って伸びる。	口縁部を引き出して作 り、この部分の内縁に明 瞭な縦線をもつ。	胎土はよい がわずかに 焼きが甘い	内黒、天井 部にナメ あり	58		
S-11	4号住居跡	蓋	形状に 復原	口径13.8 器高4.5	全立り形状で、全体的に 丸くもつ。天井部、体 部の境は明瞭ではない。	天井部の約半分ほどをへ つ削り、口縁部は丸くお きめられている。			58		
S-12	5号住居跡	杯		口径9.0 (推定)	やや小ぶりや、直立する が短めの立上りを持つ。	一部に焼きあくれが認め られる。		濃灰	砂眼を青 や緑色に 染めよう とした	61	21
S-13	5号住居跡	蓋		口径11.7 (推定)	天井部と体部の境がなく S-12では口縁部をわず かに内縁に付けているの に似る。S-14は外にひ らく。	天井部の約半分ほどをへ つ削りしている	良好・堅緻	+		61	
S-14	5号住居跡	蓋		口径12.6 (推定)			胎土は良好 成実	濃灰茶	いわゆる 藍ヤク	61	
S-15	5号住居跡	杯	不明		3例とも、体部を欠失し ているが、内縁する短い 立上りを持つ。		胎土・焼成 ともに良好 堅緻	灰		61	
S-16	5号住居跡	杯	+					黒灰		61	
S-17	5号住居跡	杯	+					灰		61	
S-18	6号住居跡	蓋	ほぼ 完形	口径12.9 器高4.2	全体的に丸地をまわび、口 縁部は丸くおきめられ、 天井部、体部の境はよい。	全体的約半分をへつ削り	良好	灰	内面ナメ	62	

4. 中世の遺構・遺物

A地区、D地区が位置する台地には、旧石器、縄文時代から弥生時代をへて、古墳時代までの遺物、遺構の存在が確認されたが、これと重複して、中国産磁器類などを多量に出土する遺構がある。本遺跡では、旧石器、縄文時代の遺物について、その量は多く、また遺構も、台地半分以上を占めていることから、発掘調査に多くの日数を要することになった。遺構は、敷石、溝、集石、井戸状遺構、さらに柱穴に大別できる。これらの遺構は、同じような遺物を出土することから、互いになんらかの関連があるものと思われ、その構造や性格追求とともに、発掘調査の重要な問題点であった。

1. 敷石遺構 (付図2 PL.22~24)

ここで敷石遺構としてとりあげるのは、前述した南北敷石・東西敷石および北溝の3遺構である。これらの遺構は、時期的な差は認めがたく、また機能的にも分離して考えることは困難と思われるが、記述の関係から、3つの遺構に分け、順に記していく。

南北敷石(付図3 PL.22)は、I-25グリッドを南の端部として、D-25グリッドを北の端部とする全長48mの敷石である。敷石は、幅6mの溝状の落ちこみ内に、たたきしめた状態で検出されたが、敷石の横断面は、平坦面をなさず、漏斗状に中央部が盛りあがっている。敷石の石は、小見人頭大を最大とするほどで、極端に大きい石は用いられず、大きさや、石質など、石自身には、統一性、特殊性は、ないようである。南側端部のI-25グリッドでは、段をもって、台地を削っており、その斜面にも石がのっているが、流れこみの状態を示している。1段低くなった部分も、敷石と同じような遺物を出すが、かなり攪乱を受けている。敷石の南北方向の断面は、中央部がもっとも高く、南北の両側に向かって次第に低くなる。敷石の石の量に、部分的な差がみられるが、これは、断面高低の差とは関係ないようである。

東西敷石(付図2 PL.23)は、D-25グリッドで、南北敷石と直交するが、切り合い関係は示さず、南北敷石の東西両側溝も、敷石と同じように方向を変えており同一の遺構である。西の端部は、E-17グリッドにあり、敷石の北側溝は、掘られているが、敷石の石は、極端にその量が減り、地表面から浅いということもあってか、不明瞭に終わる。東の端部は、前述したように豚舎下まで延びているようであるが、確認できなかった。したがって、東西敷石の全貌は、出現していないことになるが、豚舎下より発見されたものは、D-28グリッドで、北側溝より新たに始まる別の敷石と思われる。E-17グリッドよりD-27グリッドまでの敷石全長は約94mをはかる。東西断面は、ほぼ中央部にあたるD-21グリッド付近がもっとも低く、東西の両方向に向かって、次第に高くなる。横断面は、南北敷石とは異なり、平坦状となり、石も大きめであり、量も多いようである。敷石の北側には、小溝をもち、同じように東西両端部が高く、中央部が低くなり、D-21グリッドで、方向を北に転じて、さらに現水田の台地下に伸びている。この遺構を北溝とした。(PL.24)

2. 溝状遺構 (付図2・Fig.63)

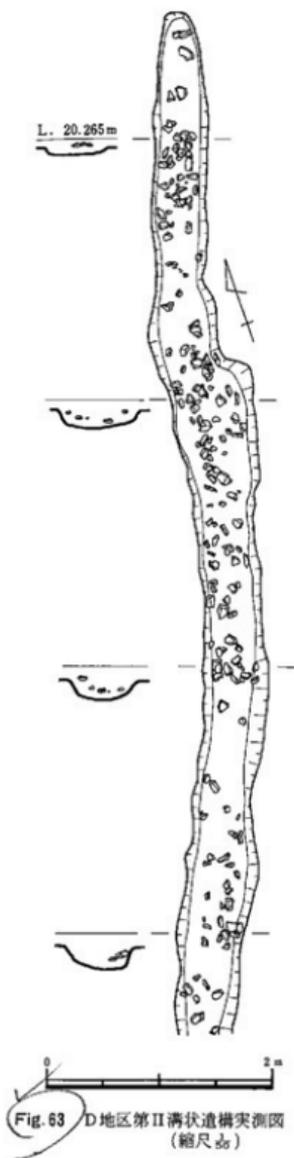
ここで溝状遺構としてとりあげる、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝は、いずれもE-29グリッド・D-29グリッドで、東西敷石と連結し、同一時期の所産と考えられるものであるが、出土遺物も多く、台地東側を画する溝と思われる、また敷石を持たないことなどから、ここでは、一応分けて記す。なお、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの番号は、発見順に付したもので、第Ⅰ溝は東、第Ⅲ溝は西、その間に第Ⅱ溝という位置関係にある。

第Ⅰ溝は、第11・12号土塚墓を切っている。検出した長さは、約45m・深さ約30cmをはかる。南の端部は、集石につながり、第Ⅱ溝とも連結する。北端は、豚舎と農道にさえぎられ、発掘できなかつたが、東西敷石の北側溝と、D-28グリッドの別の敷石に結びつくものと思われる。また、第Ⅲ溝とは、切り合っており、第Ⅰ溝も、いく条かの溝によってなるが、給水用パイプ埋設の際に攪乱されており、これらの前後関係は、把握できなかつた。

第Ⅱ溝は、南端部を集石につなげ、第4・5・6号土塚墓を切り、第Ⅰ溝と並行して北へのびる。F-29グリッドで一旦途切れるがその先端部より、約3.5mの間隔をおいて、L字形の溝があり、さらに、その延長上に東西敷石の南側溝が位置する。これらの間隔は、後世の削平によるものか、あるいは、意図的なものかは、明確でない。

第Ⅲ溝は、北端部で、東西敷石よりのびる溝と一部分つながるもので、第10・11・12号土塚墓、第11号壙棺墓を切っている。南端は、第11号壙棺墓の墓塚と重なり、途切れる。この南側に、浅いL字状の溝があり、この遺構の出土遺物も、第Ⅲ溝としてとりあげた。

以上3つの溝には、敷石遺構と同じような石、遺物が出土するが、石を敷いた様子はなく、落ちこみの状況を示している。



K4-26.

3 集石遺構 (PL.24)

遺構は、工事用進入道路の建設予定地であるJ-29・30グリッドで検出したもので、第三溝に見られた給水用パイプがここまでのびており、攪乱されていると思われたのであるが、遺構は、地山を整形しており、出土遺物のがす時期には乱れはなく、また、この遺構から、小さな落ちこみが西へのびており、これが南北敷石の東側構につながる可能性があることから、1つの遺構とした。集石は、地山を、最大幅1.8m、長さ6mに舌状につくり出した先端部にみられるもので、敷石と同じような大きさの石を用いて、すくなくとも四重に積みあげられている。また、集石の東側には、長さ約3.5mの列石が東へのびており、同一の遺構をなすものと思われる。この列石の出土遺物は少ないが、集石からは、敷石や溝と同じように、中国産磁器類を出土する。なお、この舌状のつくり出しは、J-26グリッドの南北敷石の南端部とつながるものと考えられる。

4 井戸状遺構 (Fig. 64・65 Tab.17 PL.25)

J-25グリッドには、敷石直下に井戸状の遺構が存在する。平面は、直径約1.8mの円形をなし、深さ約2m、底部も円形で、直径70cmをはかる。上部は、逆円錐状に傾斜をもって掘られ、中位よりやや上から円柱状に垂直に掘られる。遺物は、土師皿と背磁であるが、底部からは出土していない。特に、円柱状に掘りこまれる位置には、10数個の石とともに完形の土師皿が出土した。遺構内の埋土は、上部が暗茶褐色土で、下部は、黄茶褐色土であった。

5 柱穴 (Fig.66・67 PL.26)

柱穴状ピットは、発掘したグリッドのほぼ全面にわたってみられるが、密集度の違いは存在する。特に、南北・東西敷石と第II溝によって囲まれたE-1-25~28グリッドでは、H列を境として、南側に密集しており、北側では、敷石を敷えるすぎない。これらの柱穴状ピットには、盤石を持つものがあり、これらは、明らかに柱穴と考えられるが、互いに関連した建物としては、とらえられない。建物として認定できたのは、E-27グリッド(D-1とする)とG-26グリッド(D-2)とするの2棟である。D-1は、1(柱間は約3m)×1(約2.5m)で、長軸は、東西方向である。D-2は、1(柱間約3m)×2(柱間約1.8m)で長軸は、北東-南西方向をとる。柱間は、やや差があり統一性がなく、北側は、4個のピットよりなる。これらの建物の時期は、明確でない。各ピットの計測値は下表のとおりである。

Tab. 15 柱穴計測値表 (I)

D-I E-27 グリッド	概要(柱間 北・南・東・西)	(単位cm)			
		P1径・深さ	P2径・深さ	P3径・深さ	P4径・深さ
	1×1 (36×38×20×28)	40・26	40・14	38・17	30・24

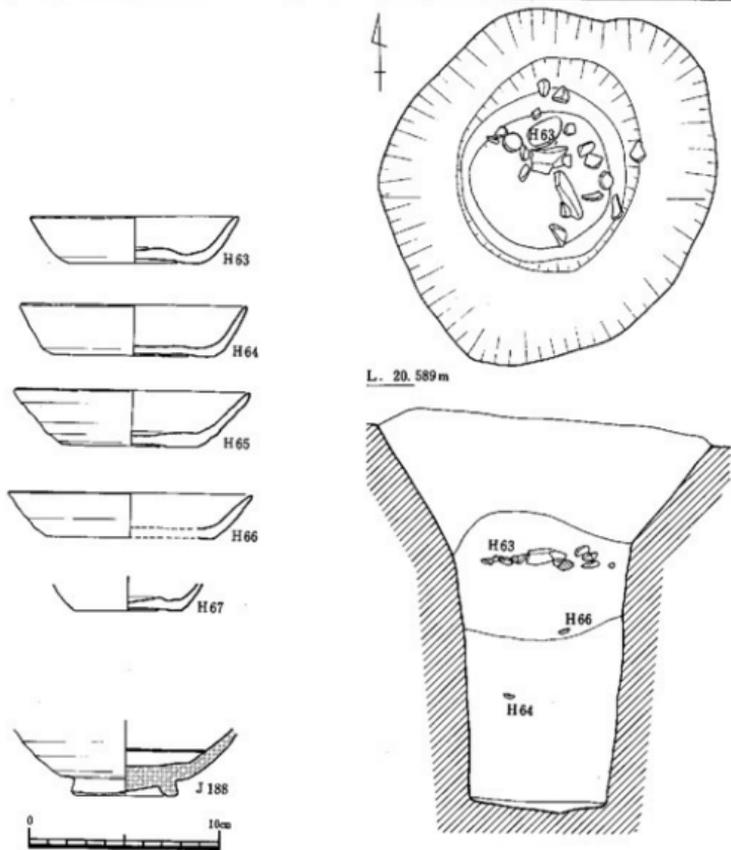
Tab. 16 柱穴計測値表 (II)

D-II G-26 グリッド	概要(柱間 北・南・東・西)	(単位cm)							
		P1径・深さ	P2径・深さ	P3径・深さ	P4径・深さ	P5径・深さ	P6径・深さ	P7径・深さ	P8径・深さ
	1×2 (35×35×20×28)	38・14	35・40	34・21	40・15	35・29	30・53	40・15	40・29

Tab. 17 井戸状遺構内出土遺物一覧表

(単位cm)

遺物番号	遺物器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼色	備考	Fig.	PL.
H-63	土師皿	ほぼ完形	口径 11.0 器高 2.5 底径 7.2	いずれも糸切りの底部をもっており、H63・H67のように、ややあげ部となり、底部の立ちあがりが多いもの、H64・66のように体部の立ちあがり小さく、したがって口径が大きいもの2つに分類できる。	底部に焼成後の穿孔	良良	赤褐色		64	25
H-64	土師皿	ほぼ完形	口径 12.0 器高 2.8 底径 8.4		内外面横ナデ	良良	赤褐色	L.18.944m	64	25
H-65	土師皿	ほぼ完形	口径 12.4 器高 3.0 底径 7.0		糸切り底部・内外面横ナデ	良良	赤褐色		64	
H-66	土師皿	底部欠	口径 13.0 器高 2.4 底径 9.0		内外面横ナデ、底部不明	良良	赤黄褐色	L.19.284m	64	
H-67	土師皿	底部	器高 5.6		糸切り底部・横ナデ	良良	赤褐色		64	
J-188	青磁碗	底部	実口径 5.6 実内径 0.9	底部あつく器身の厚り出し強い。足込内帯には文様は無いが足込帯部に浅彫めぐる。		胎土 藍色 胎色 藍色	緑は高台まで		64	

Fig. 64 D地区井戸状遺構出土遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{3}$)Fig. 65 D地区井戸状遺構実測図(縮尺 $\frac{1}{6}$)

手取有

出土遺物 (Fig.68~87 Tab.18~27 PL.28~34)

敷石・溝・集石・井戸状遺構より出土する遺物は、弥生式土器、土師式土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石鏃など多様である。これらの遺物は、敷石、集石の中より混在して出土するが特定の遺構のみに、また部分的に集中して出土することはなく、分散して出土する傾向にある。出土遺物の主となる磁器類は、中国産と朝鮮産がみられ、中国産磁器類が、圧倒的な量を占める。最近、発掘調査遺跡の増大に伴い、中国産磁器類についての報告が増え、考古学的な研究・分析もなされている。これらの研究・報告を参考、指標としてさらに若干の考察を加えて、本遺跡出土の磁器類を分類する。中国産磁器類は、大きく白磁と青磁に分けられ、白磁は、その形態、手法、釉調などから5類に、青磁は、特にその文様から8類に分けられる。朝鮮産磁器は、I-25グリットの井戸状遺構の上部と敷石遺構より出土した天目類(J78~81)で、高麗天日いわゆる黒高麗と呼ばれているものである。以下、白磁、青磁の分類表を示す。

Tab.18 蒲田遺跡出土白磁器分類表

類	形態・手法・文様の特徴		(法 量)		論士・釉調	該当遺物番号	備考(類別)
	口 辺 部	体 部	底 部	部			
I	口径14~17cmで、小さく外反させるものと、ほぼ水平に平開面をつくって小さく外反するものがある。口縁内面に凹線と内外装横ナメ	器高を知りうるものなし。内装しながら1線へつがる。外装のない体部は、水平の口縁をもつようである。見込体部に横線あり、外装横ナメ。	高台径5.3~7.2cm・高台高は、1.4cm前後のもの。1.9cm前後のものがある。高台は露を高く削り出すが、見込内面に支線をもつものは、削して高台は高い。高台と体部の境に段をもつものがあり、これらの多くは、高台編製だ。	灰白色、白・淡黄白色胎土、灰青・淡黄白色釉。高台・露部に白磁の文様があるものあり。	J7-10・83-86 89-91・94・108 114・115-117 118・121-126 129-131・154 158-163	福岡市和自遺跡 043	
				J27			
II	口径14~17cmで玉鉢状の口縁をもつ。この口縁には、折り返しの線装なもの、なめらかなもの、さらに大小の溝いがある。外装横ナメ	J124は、全形を知りうる。器高6.3cm、口径15.8cm、内装しながら口縁へつがるが、1線ほどではなく、やや高麗的で底面からの立ちあがり小さい。外装横ナメ。	高台径6.2~7.2cm、高台高の7~1.0cm、高台の削り出し深く、平みぐらしている。見込内面に横線、高台内面に縦線があるものも深く水平になっているものがある。	白色、灰白色胎土、灰・灰白色釉。高台・露部に白磁の文様があるものがある。	J2-6・11-13	福岡市和自遺跡 048・113 大宰府史長46 018・50	
					J5		
III	水遺跡では、口縁を知りうる概はない。	器高18cmのものがJ92・165は、高台部に帯口があり、蓋部からの立ちあがりは、やや傾斜する。	見込内面に輪状の無地がある。高台径5.8~7.6cm、高台高1.1~1.4cm。高台の削り出しは、深く高い。見込内面はやや平たいが、底面が水平なものもある。(J164)	灰白・白・淡黄白色、粘土、灰白・灰黄色胎土。やや内装横ナメ。高台編製だ。	J92・95 108・107 164・165	福岡市多々良遺跡 区21 大宰府史長46 018	
					J16		
IV	いわゆる1光の口縁をもつものであるが水遺跡では、目的の類の類上はなかった。器口縁を知りうるのはJ14のみで10.2cm。	J14の器高は1.9cm、底面からの立ちあがり大きいものと小さいものがあり、大きい方は、器口縁が深い。外装横ナメ。	底径4.8~7.0cmだが体部の立ちあがりの小さいものは器口縁も浅い。底面の厚さは、器高の大きい方がうすめ。どちらもやや内装。見込内面に横線。	灰白・白磁胎土、灰白・白色釉。全面に横、底面は、削り出す、帯口ナメ(?)のものもある。	J14-18 J87	多々良遺跡 015	
					J16		
V	白磁であるが、I-15層には見られないもの、出土数が少ないためにセット関係がつかぬもの、あるいは器型を器型と異なるものもここに一括する。				J72-74 146-147	J15	

Tab. 19 蒲田遺跡出土青磁器分類表

類	形態・手法・文様の特徴		(法 量)	胎土・釉薬	該当遺物番号	備考(類別)
	口 辺 部	体 部	底 部			
I	筒型でもつものに 縁と皿がある。開口 径16-18cm、口径11 -13cm。口縁はやや なるもの。片反す るものがある。	体部外部に唐草文をもつもの、 唐草文は縁部を除くものも、 唐草文の粗雑なもの、沈線によ るものなど。さらに器身の横 筋のものも多様である。	高台径5.0-5.8cm、高台高 0.7-0.9cm、浅い底部に 削り出しの境、小さな重 立する高台をつける。	灰、灰白胎土、釉は、 高台まで使れ る。	J 43-47 135-137・172	蒲田2号墳 J189
II	口径16.0-17.0cm、縁 は、まるく、やや 外反する。内面に1 -2本の沈線。	見込外部に唐草文があるもの、 いわゆる「唐文割込内面」と呼 ばれているもの。沈線を用いる。	底部が厚くなるのは、J100 のみ、高台径 6.4cm、高台高 0.8cm、高台のつくりは、 I類に類似。	灰白、灰、油灰系 胎土	J 52・100 111・174 175?	計5
III	口径15-17cm I類と同じように、 縁から口縁をもつ もの、まるくおき のものがある。内 面口縁下に沈線も つものもある。	見込に唐草文をもつもの、あるいは 同一形制をとるもの。底外部に もよすが、文様は内面に唐草文を する例が多く、見込外部にも施さ れるときは、葉・蕾が使用される 例が多い。	高台径 5.2-6.8cm 高台高 0.8-1.2cmで、高台 のつくりはI類に類似。修 繕に厚いものがあり、内面 はよりあがるものがある。	白、灰白、灰、灰 黄、灰黄、灰黄白 胎土、唐草文をもつ ものがある。露光 が白黄色、赤褐色 を呈するものがある。	J 49-51、53-59 60-71・101-103 112・130・145・ 173・176-180	計40
IV	底部のみの破片全 くで口縁部は不明。器 白は、内面口縁下 に沈線をもつ。口径 16.7cm。	見込内面に唐草文の唐草文を もつ。高台径は、2個のみある が、見込外部には唐草文が施 されることがある。	高台径5.4-6.2cm 高台径 0.7-0.8cm、おきつ底面 はI類と同じであるが、さ らに小さな高台をもつ。	灰白色胎土 高台取りやめ種 かる。	J 48・181	計2
V	口径16-17.2cm、内 面が丸の形は、外 反するところなく、まる みのある縁をつくる。	内外面口縁下に沈線のみあり、外面 は、底部から唐草文に唐草文を もつ。内面は、露光状の陶文を つくる。	高台径4.7-6.8cm、高台の 削り出しは粗雑。内面が平 底のもの、中心がぼし いものがある。高台内は、 断面山形の粘土をのこす ものがある。	灰、灰白、灰黄白 胎土 高白胎土	J 19-27 97-99・101-103 109・119-121 132	計20
	皿 口径10-12cm 口縁部は外反し、まる い縁をつける。	高径2cm、文様は内面にあり、唐 草の露光状文と、唐草の草花 文よりなる。内面と外部との境に 沈線。	高径 2-6cm、おきつ底 部から、修繕は縁をもって 外反する。見込内面に文様 のないものもある。	灰白、灰白色胎土、 唐草文のものが 多い。	J 28-40 98・133・134 166-169	計20
VI	本遺跡では、たゞ1 点のみ出土。堀川窯で あろう。	内面縁ナデ、外面は1cm幅の荒削り。	底部、口縁部を欠く。	釉薬不明 灰白色胎土	J 1	計1
VII	本遺跡では、3点出 土。明代か?	口縁部、体部を欠いている。見込 内面に刻印。	高台径 5.4-6.4cm 高台高 1.1-1.4cm 厚さは、まるみがあり、突 が深い。	灰白胎土胎土、高 台内は赤褐色を呈 する。	J 76・105・148	計3
VIII	白磁と類似する に、口縁部がつか ぬ。あるいは修繕 の跡をなすもの。	J 77は白磁、底部高台で見込文様は唐 草。J 149は唐文、口縁部は唐草文が つく。J 150は唐文の底部か? J 183は大型の皿であらう。I類に属するか?			J 77・104 149・150 183	計5

青銅製遺物 (Fig. 83 P.L. 27・30)

H-25グリッドの南北敷石東側溝より出土したもので、J 4・13と共伴。欠損部少なく、ほぼ完形に近く、1辺 7.5cmの方形である。本例を鏡とするには、種々の点で疑問があるが、A面の中央部に小さな突出部があり、鏡と思われる。これを鈕とすれば、円鈕というよりも、むしろ帯鈕に近く、かなり細いつくりのものと言えよう。A面の縁は、5mmほどの幅をもってやや厚くなっている。B面には、禾木科植物か、あるいは木質部らしきものの付着が認められる。ただし、箱に納められていたような出土状況ではなかった。映像面は、原形は平面をなしていたものと思われるが、現在は、やや凸面を示す。

軒平瓦 (Fig. 83)

図示した軒平瓦はH-29グリッドの第I溝より出土したものである。周縁を欠いているが上外区は珠文・下外区は、隅刻鋸歯文よりなり、内区は、扁形唐草文と思われる。瓦片は、集石遺構でも出土しているが、出土数は、きわめて少ない。

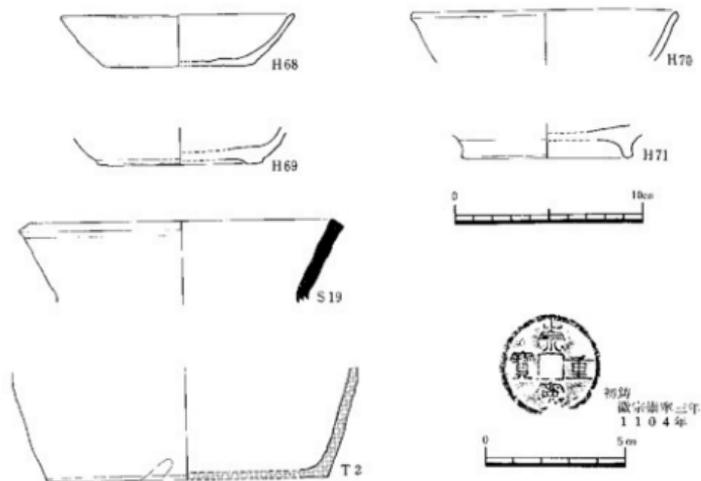


Fig. 66 D地区柱穴出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$)

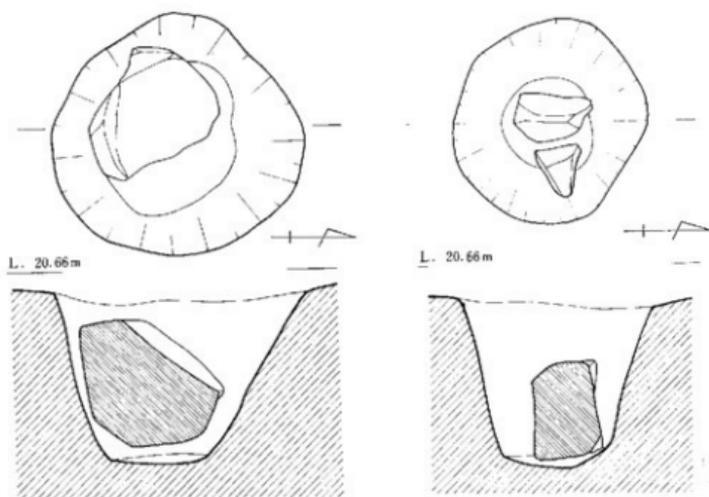


Fig. 67 D地区柱穴実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$)

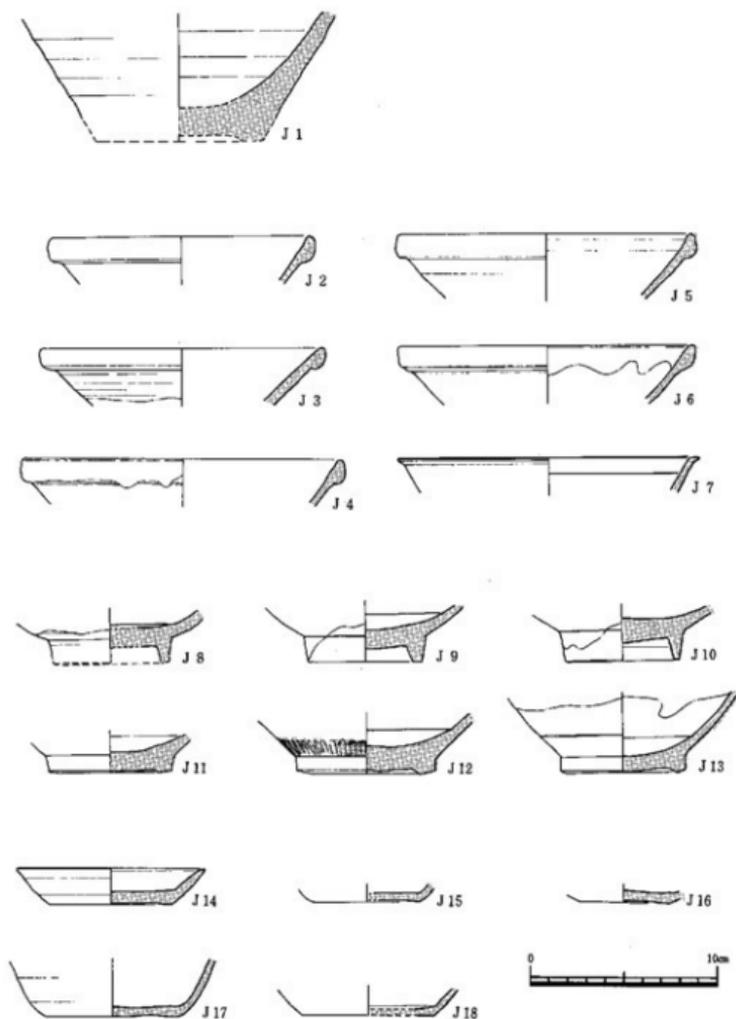


Fig. 68 D地区敷石遺構出土磁器実測図(Ⅰ) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

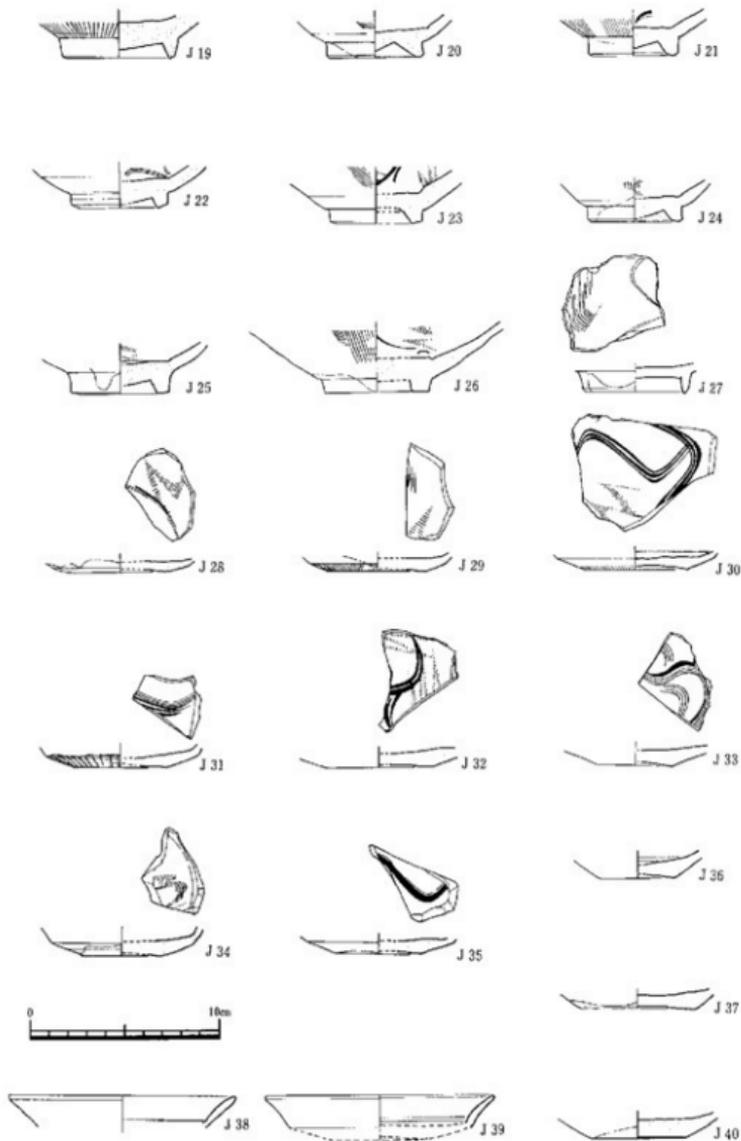


Fig. 69 D地区敷石遺構出土磁器実測図(II) (縮尺)

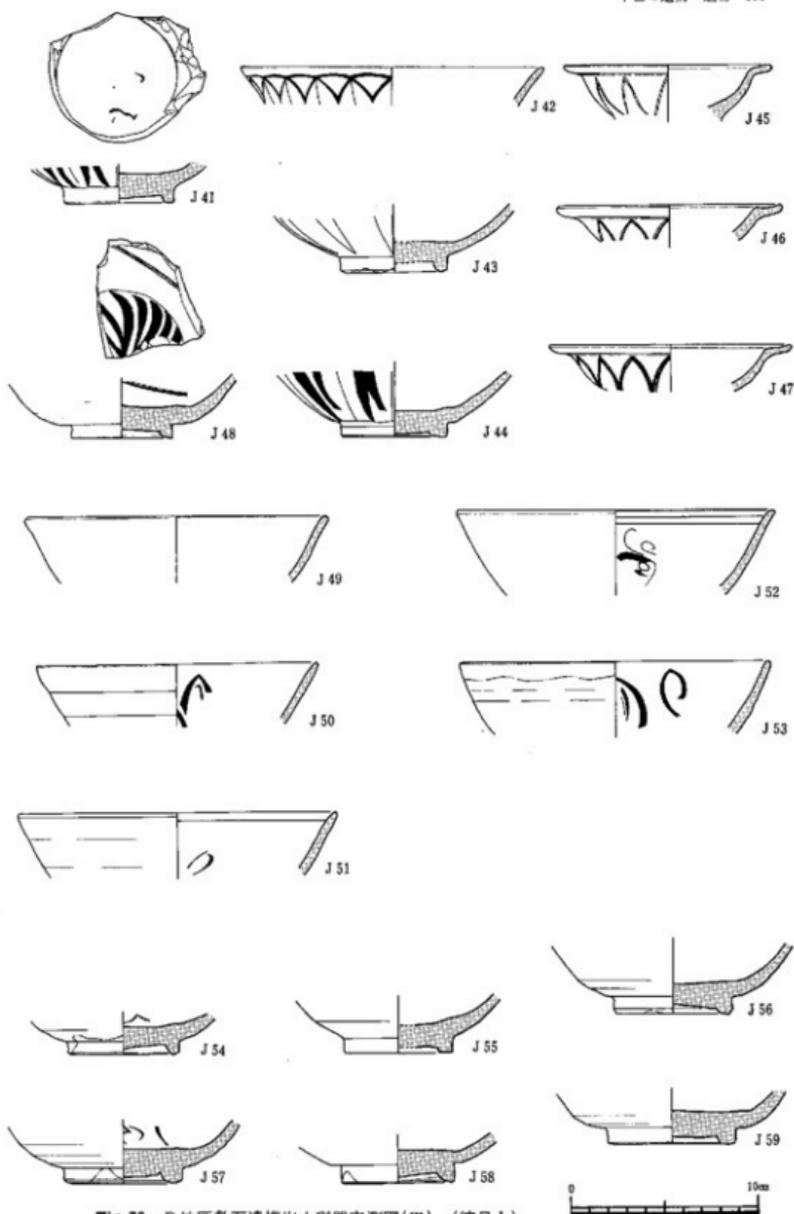


Fig. 70 D地区敷石遺構出土磁器実測図(Ⅲ) (縮尺寸)

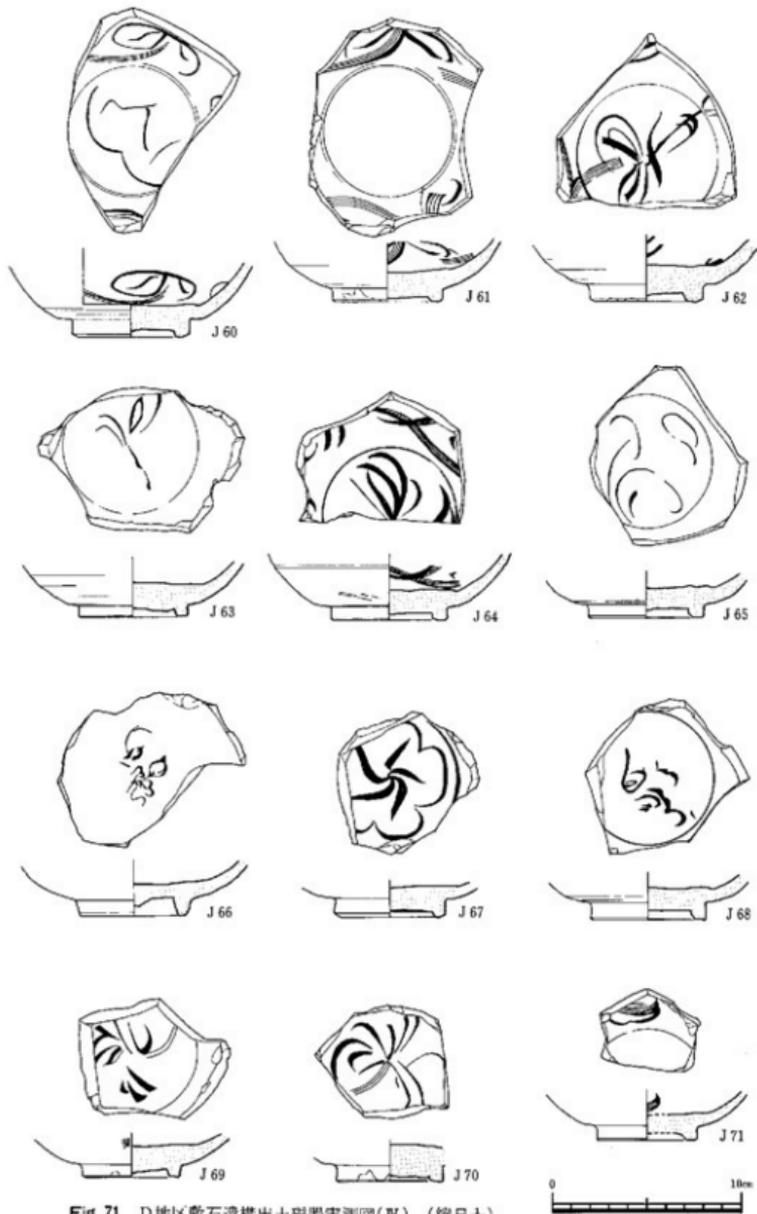


Fig. 71 D地区敷石遺構出土磁器実測図(Ⅳ) (縮尺寸)

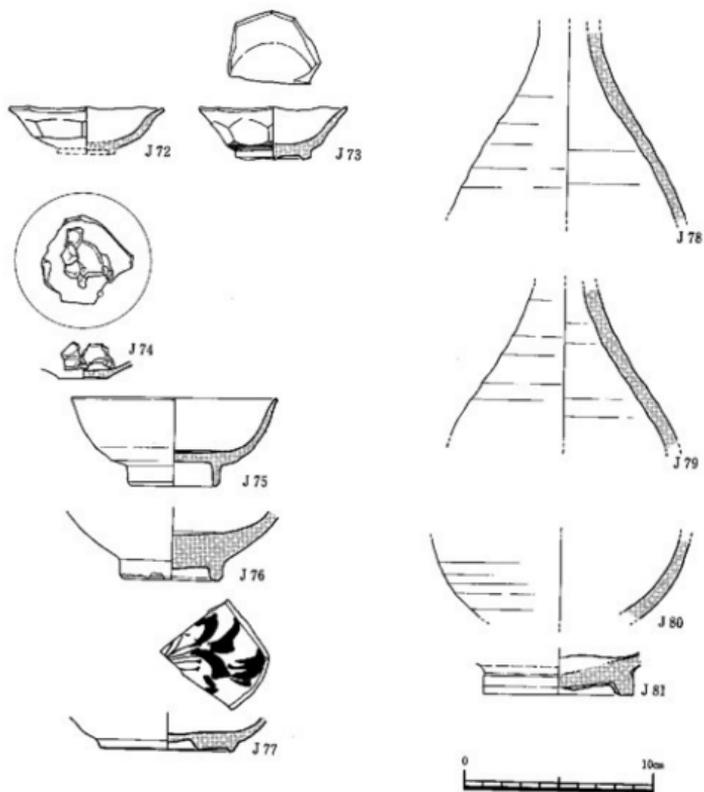


Fig. 72 D地区敷石遺構出土磁器実測図(V) (縮尺寸)

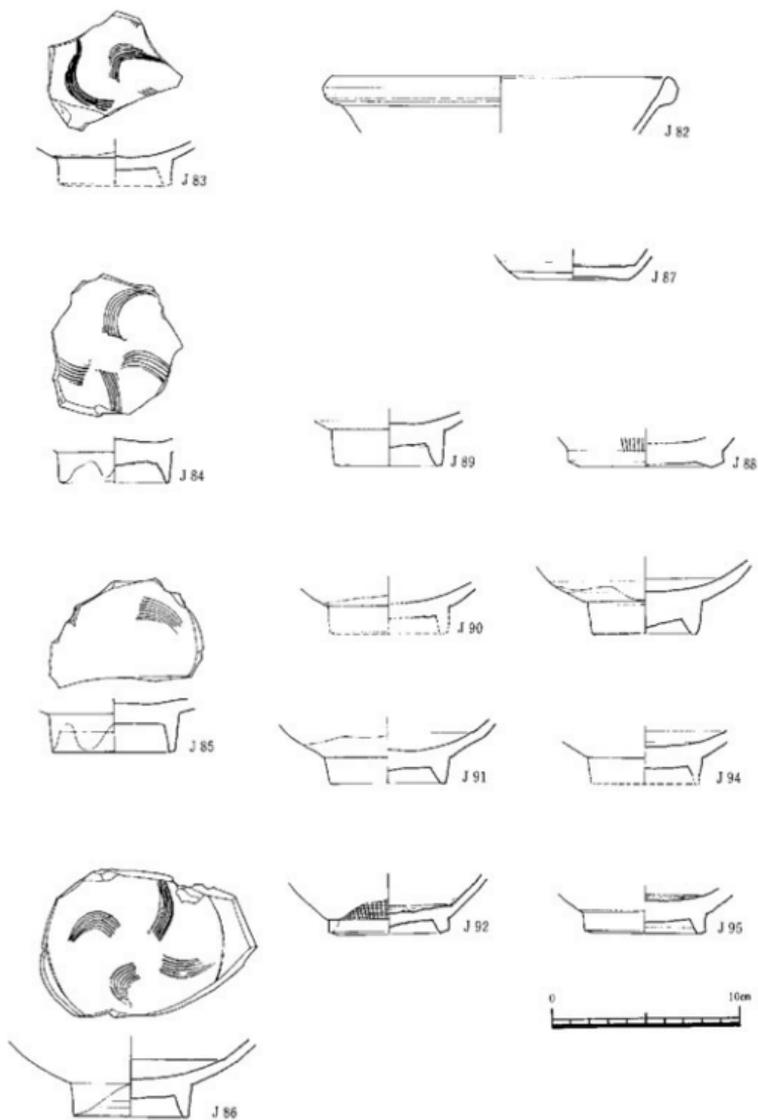


Fig. 73 D地区第1溝状遺構出土磁器実測図(1) (縮尺寸)

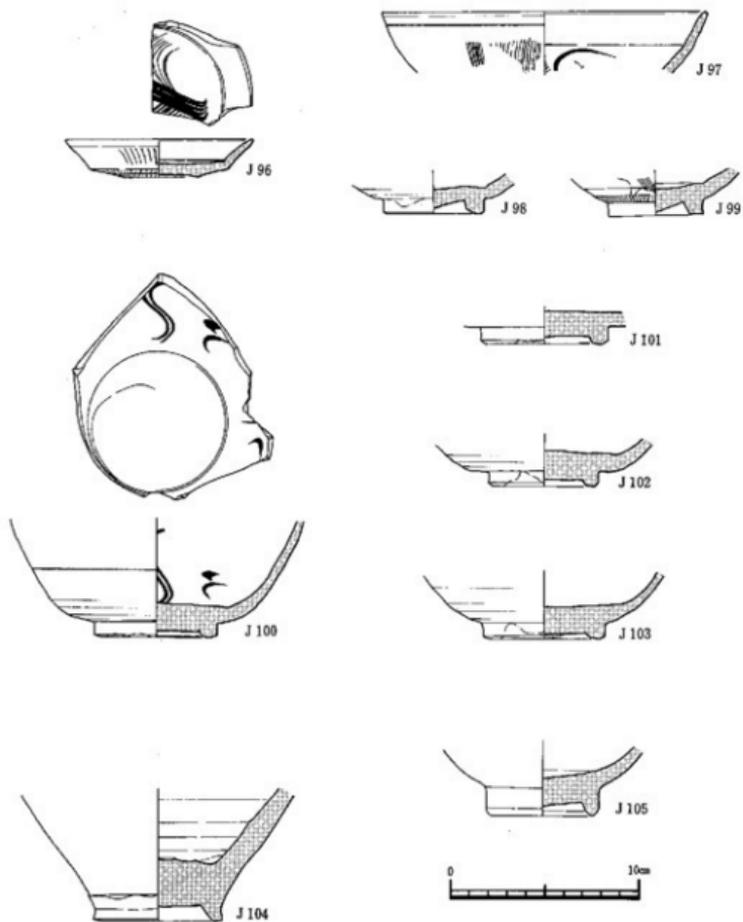


Fig.74 D地区第I溝状遺構出土磁器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

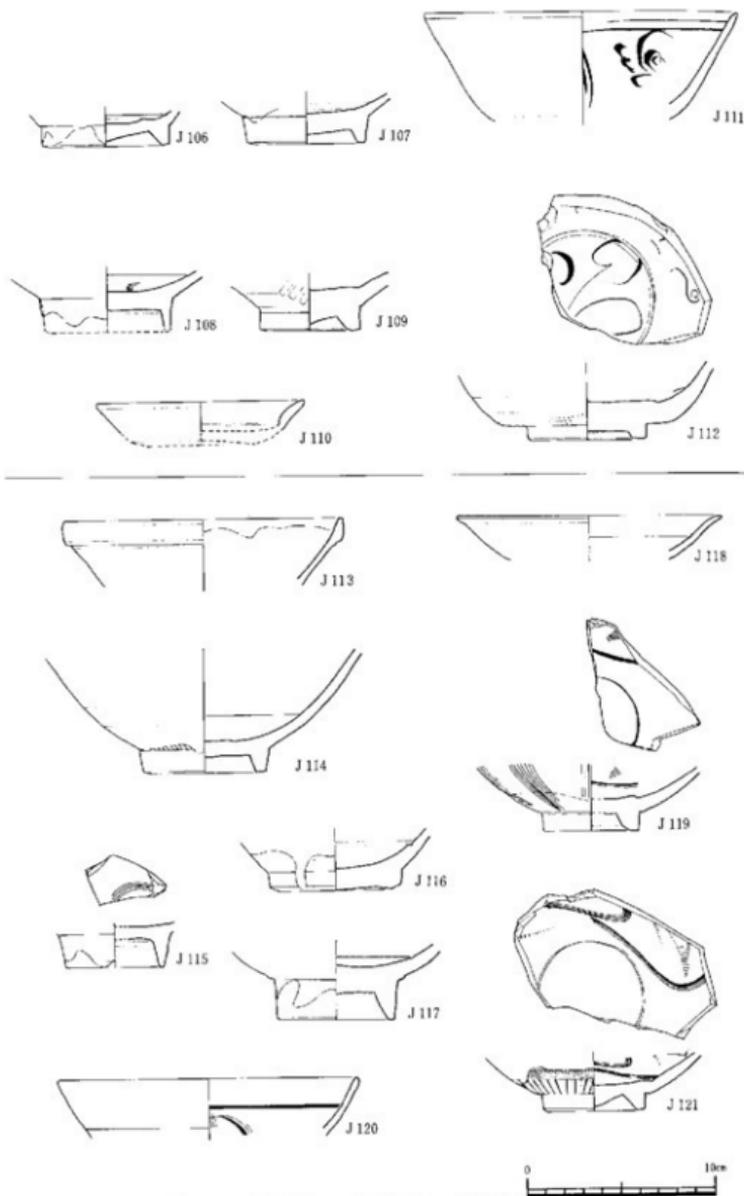


Fig. 75 D地区第II・III溝状遺構出土磁器実測図 (縮尺半)

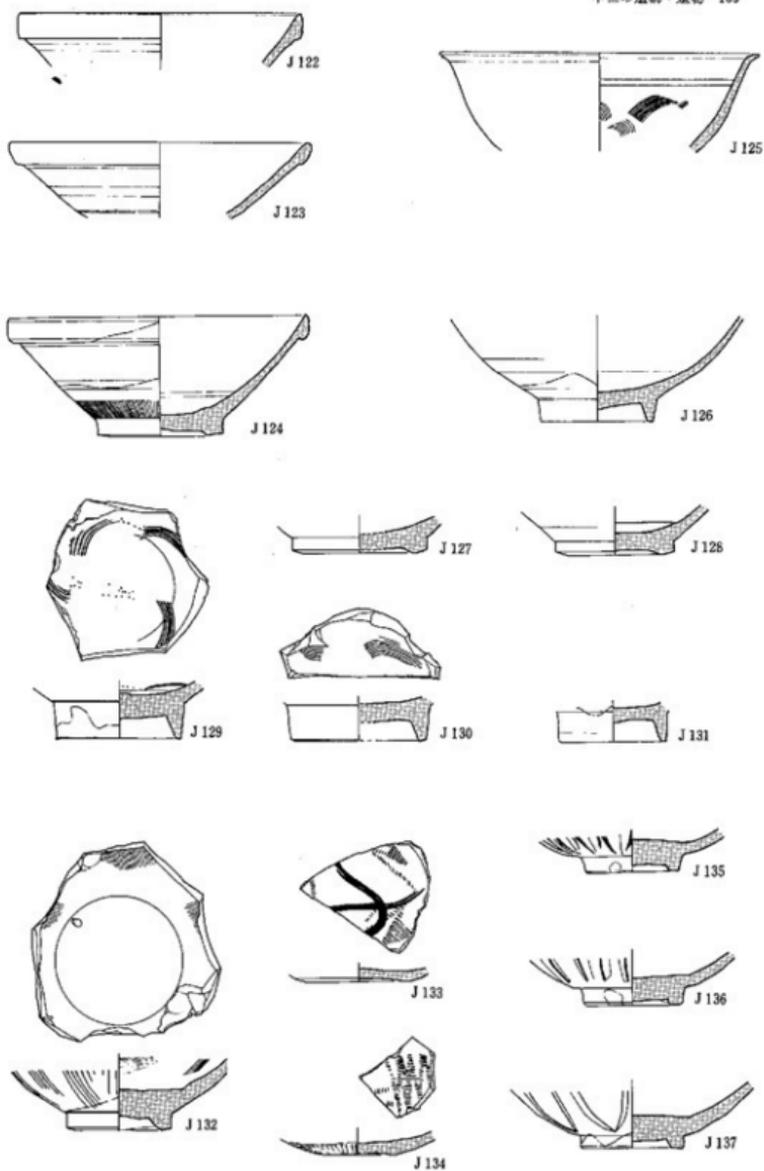


Fig. 76 D地区集石遺構出土磁器実測図(I) (縮尺十)

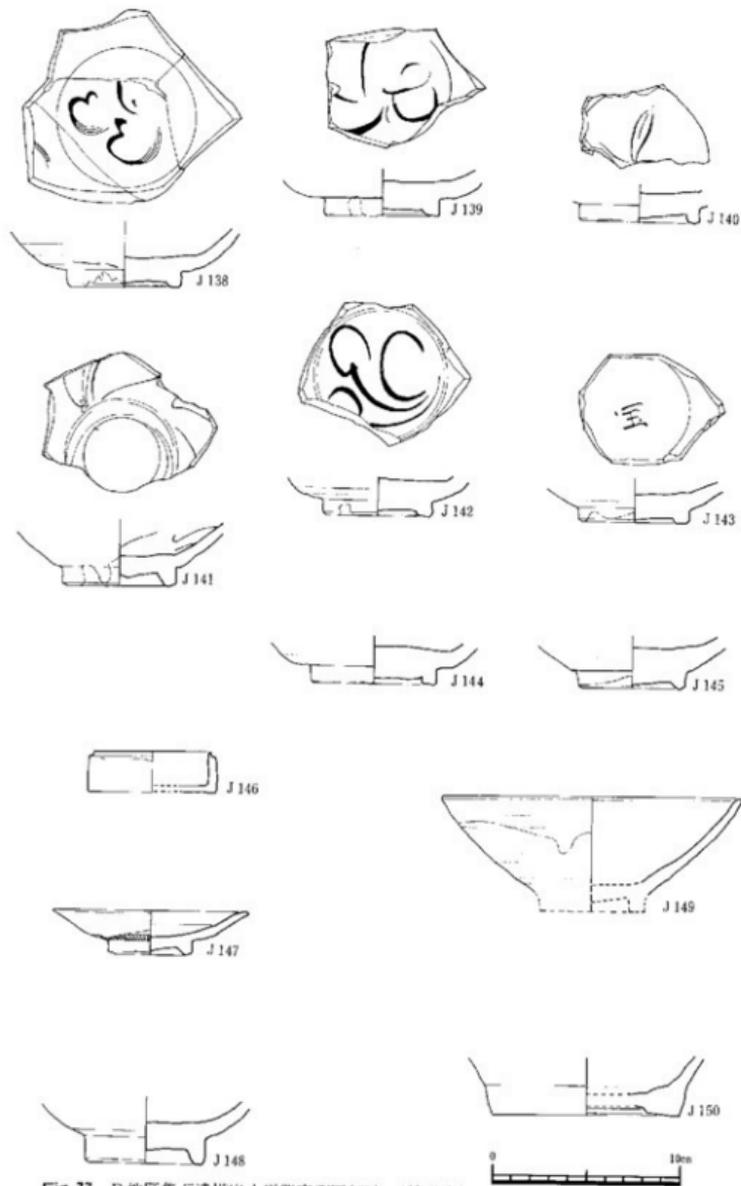


Fig. 77 D地区集石遺構出土磁器実測図(II) (縮尺寸)

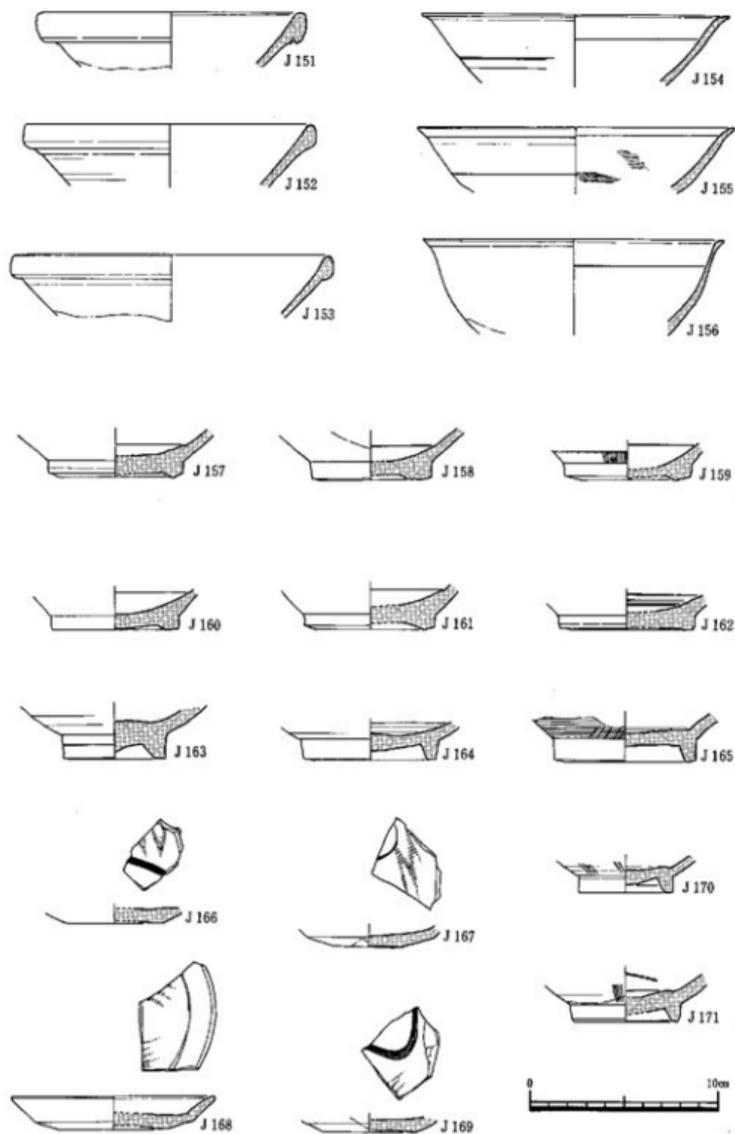


Fig. 78 D地区表土出土磁器実測図(Ⅰ) (縮尺寸)

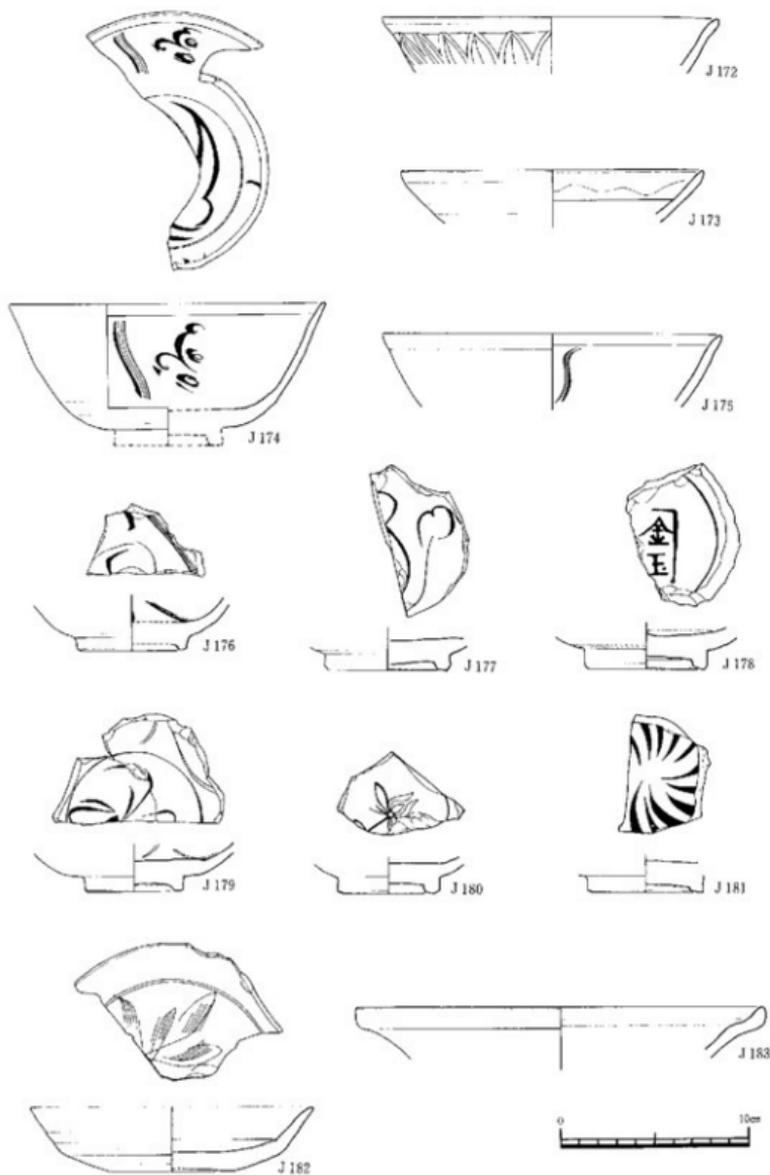


Fig.79 D地区表土出土磁器実測図(Ⅱ) (縮尺寸)

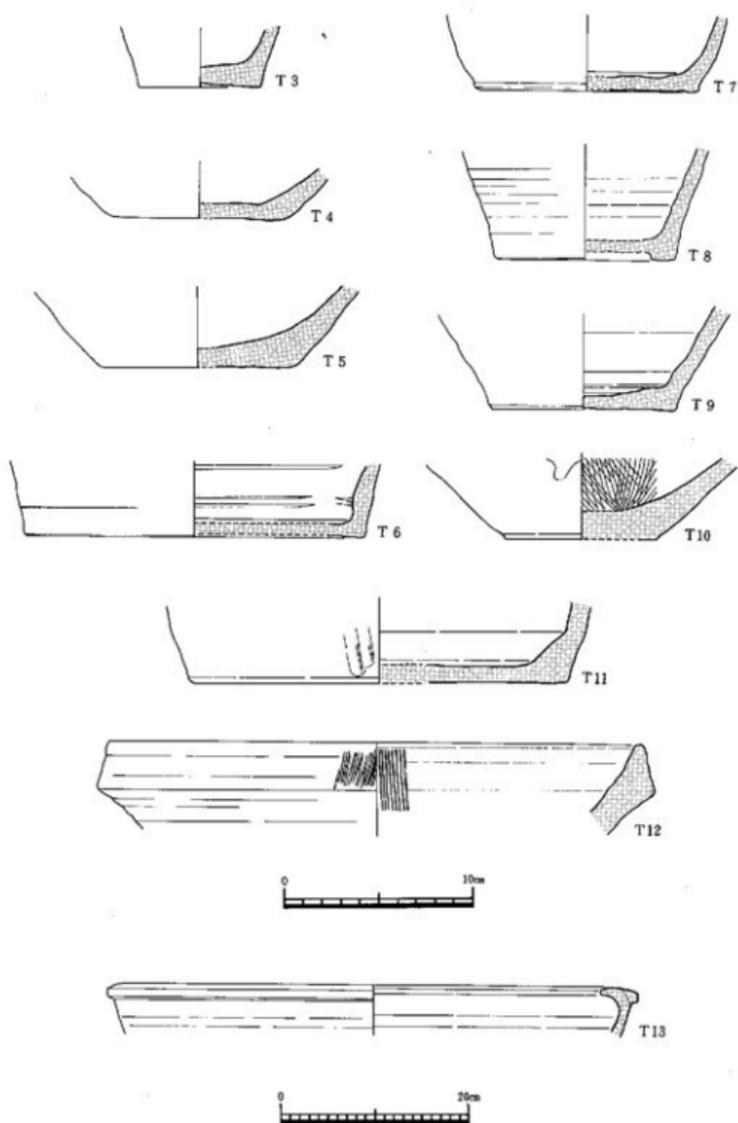


Fig. 80 D地区出土陶器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$)

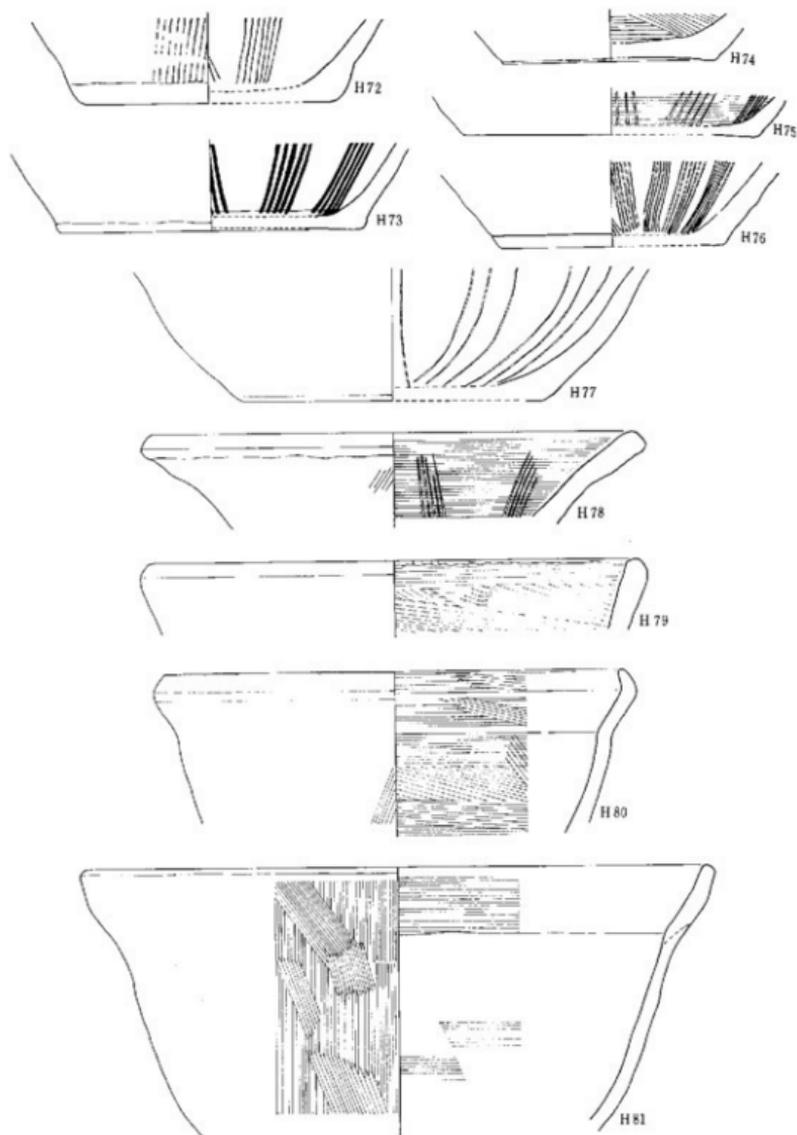


Fig. 81 D地区出土土器実測図(Ⅰ) (縮尺寸)



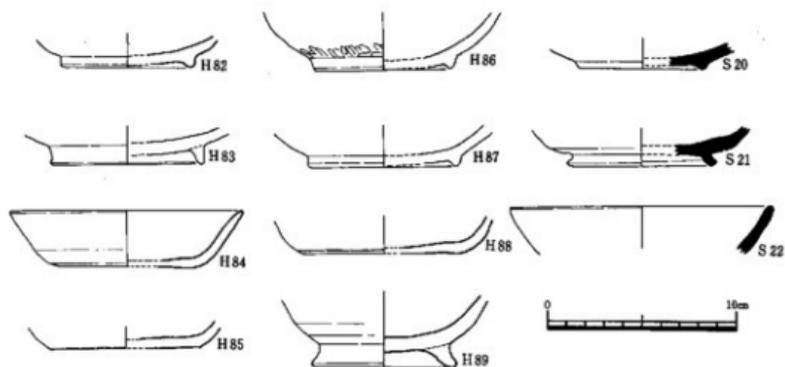


Fig. 82 D地区出土土器実測図(II) (縮尺1/10)

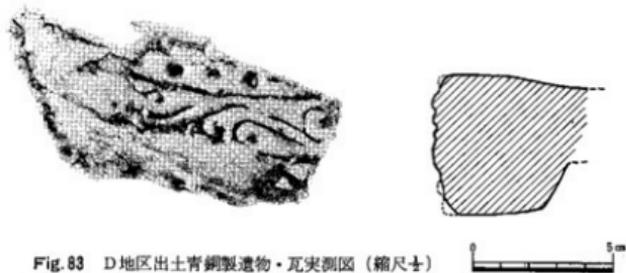
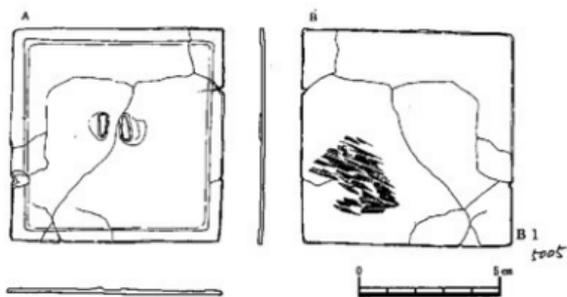
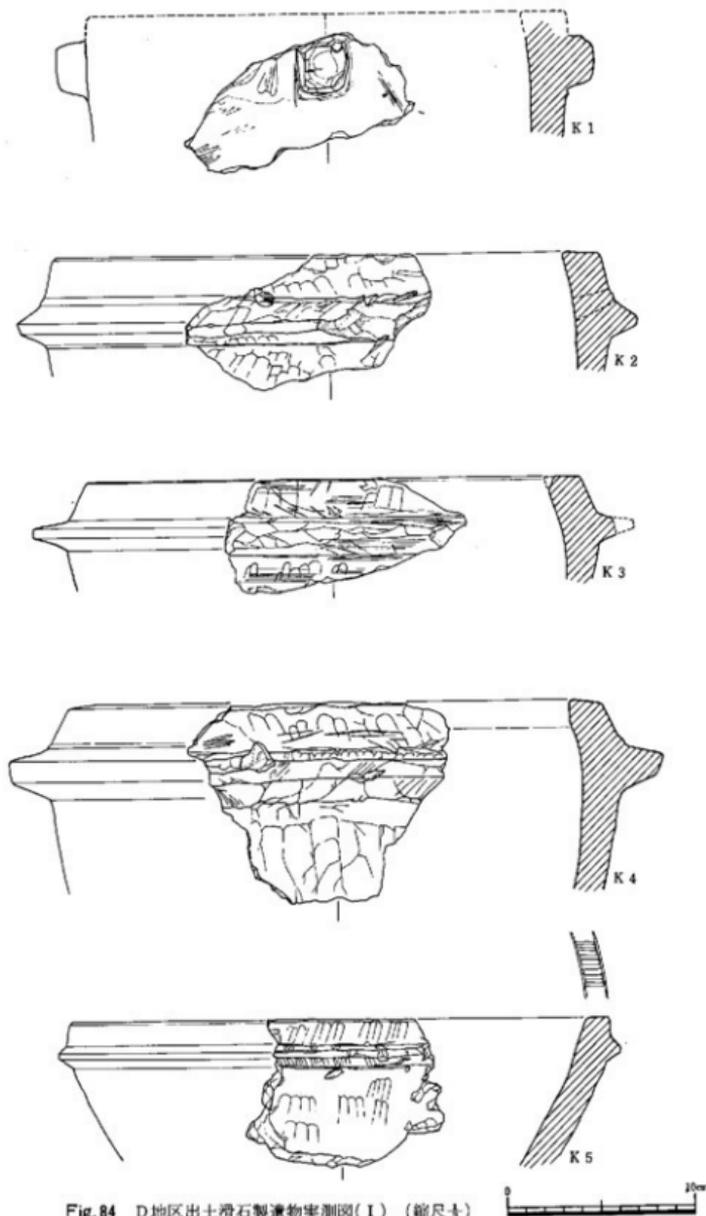


Fig. 83 D地区出土青銅製遺物・瓦実測図 (縮尺1/10)

Fig. 84 D地区出土滑石製遺物実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

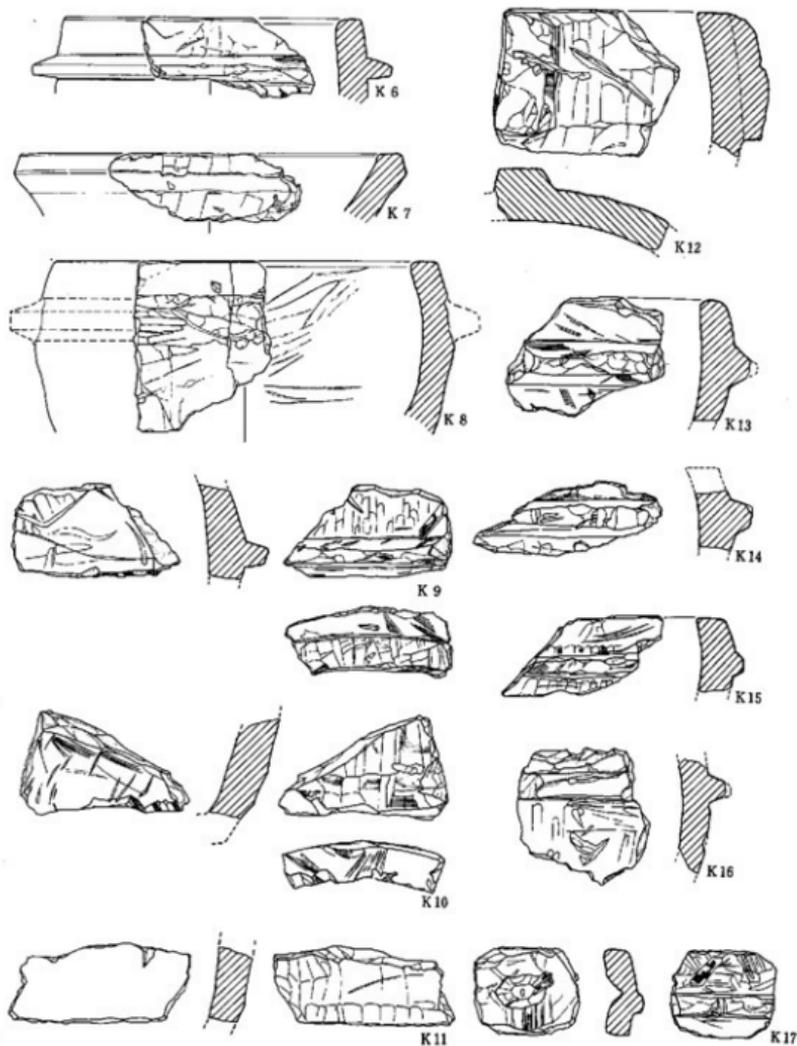


Fig. 85 D地区出土滑石製遺物実測図(Ⅱ) (縮尺 $\frac{1}{2}$)



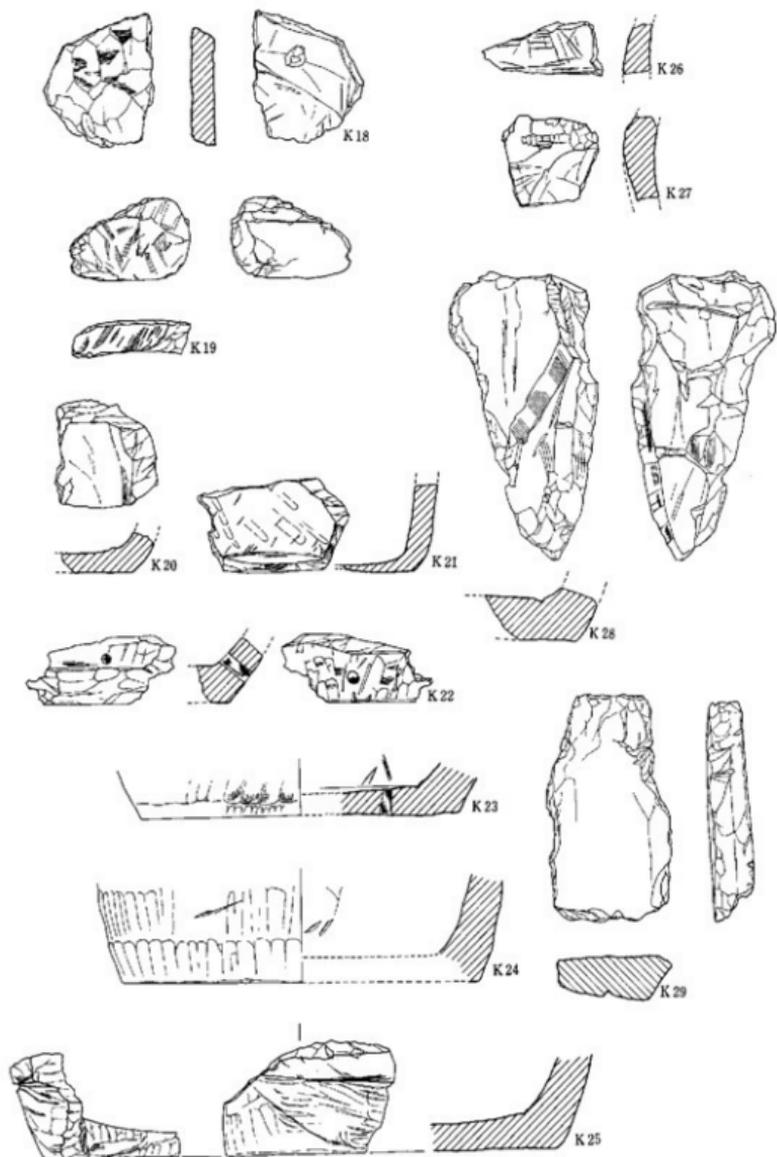


Fig. 66 D地区出土滑石製遺物実測図(Ⅲ) (縮尺寸)

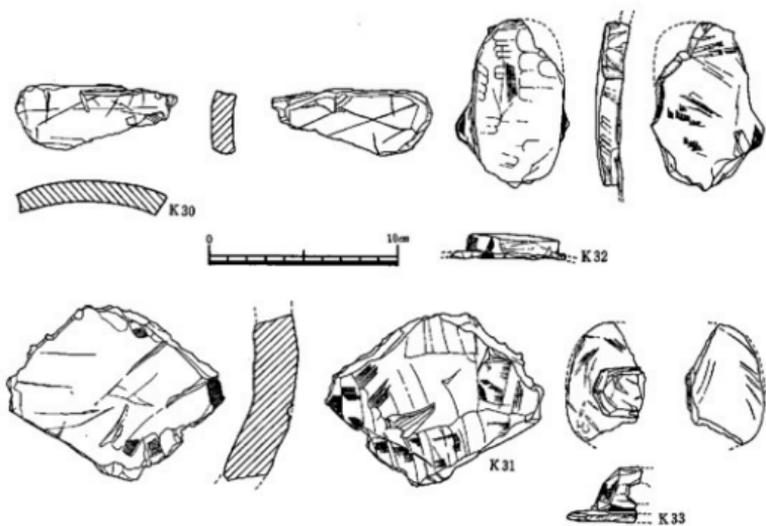


Fig. 87 D地区出土滑石製遺物実測図(Ⅳ) (縮尺寸)

Tab. 21 D地区敷石遺構出土遺物一覽表(Ⅱ)

(単位 cm)

遺物 番号	グリ ド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	底色	器身・胎色	備考	Fig.
J-41	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.8 底台径 0.9	距離文もつ一帯であるが胎土のつけ方は一律であるが胎土のつき方により洗削のみのものがあり、洗削と胎土から区別がつかないものなど多種である	胎土は白くつくられ、外壁に多少の黒文をめぐらす	灰白	良	高台内にたまに赤い点	J41-44 青磁Ⅱ	70
J-42	D-19	青磁	碗・口辺	口径 16			灰白	良	全無紋	J41-44 青磁Ⅱ	70
J-43	E-26	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.8		外壁に黒文あり、胎土は灰白に変化	灰白	良	高台内面のみ洗削される	割 溝	70
J-44	D-28	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.7		胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	高台まで洗削される(?)の跡、赤褐色		70
J-45	D-27	青磁	皿・底部欠	口径 11	外壁に多少の黒文をめぐらすもので、いずれも洗削による。この皿の胎土はほぼ全平口縁部にあり、上面が洗削のものと同じである	胎土文は洗削か磨りか	淡灰白	良	特写かか	敷石下	70
J-46	E-27	青磁	皿・底部欠	口径 12		胎土文は二線によるがその線は一様でない	灰白	良	特写かか	J45-47 青磁Ⅲ	70
J-47	D-19	青磁	皿・底部欠	口径 13		二線の胎土で胎土文をめぐらす	灰白	良	口縁縁部は洗削される		70
J-48	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.4 底台径 0.7	高台のつくり小さく、洗削外壁に多少の黒文をめぐらす	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰白	良	高台の内面のみ洗削される	青磁Ⅳ	70
J-49	D-19	青磁	碗・口辺	口径 16	口縁部のみであるが、J54-12のよう全胎土がつかぬものもある。口縁部のつくりはJ49のようになるかおきめるものとJ50のようになり外壁に多少の黒文をめぐらすものがある	胎土文は洗削か磨りか	灰	良	高台をめぐらす洗削	J49-50 青磁Ⅳ	70
J-50	D-19	青磁	碗・口辺	口径 15		胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	内面のみ洗削される		70
J-51	D-19	青磁	碗・口辺	口径 17		内面洗削ナメ外壁洗削り、内面口辺下に洗削	白	良	外壁のみ洗削される	文様	70
J-52	D-19	青磁	碗・口辺	口径 17		内面、口辺は洗削ナメ、外壁は洗削り	灰	良	口辺部の洗削は洗削による	「青土」区 洗削り?	70
J-53	B-21	青磁	碗・口辺	口径 16.7		胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰白	良	口辺外壁は洗削される	北溝、内?の 胎土色異なる	70
J-54	H-26	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.7	おあつた底部に磨り出しの跡の小きき高台がつか、高台の中に内面する胎土がつかぬものがある	見込内面に磨き文	灰白	良	高台は胎土をめぐらす洗削		70
J-55	A-C	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.8	見込内面に磨き文をめぐらすものがある	内外壁ともに交錯なし、高台内は磨き文	淡灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	高台内面が 洗削	70
J-56	D-19	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 0.9	見込内面に磨き文をめぐらすものがある	高台の磨り出し洗削、外壁洗削り	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	見込内面は 洗削	70
J-57	A-21	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.8		見込内面に磨き文	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	北溝	70
J-58	D地区	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0		高台の磨り出し洗削	灰白	良	高台の胎土は胎土として左右に区別がなさない		70
J-59	D-29	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 0.9		見込内面に磨き文をめぐらすものがある	灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	北溝	70
J-60	G-26	青磁	碗・底部	高台径 6.3 高台高 1.0	高台はほぼ直立し、見込は内面に磨き文をめぐらす	見込の文様は、磨きと磨き文の交錯	淡黄	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	J60-J71 青磁Ⅴ	71
J-61	D地区	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.7	ひくく小さい高台	見込内面に洗削	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない		71
J-62	H-26	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.9	高台は胎土をめぐらす	文様は磨き文に洗削を用いる	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	内面洗削り	71
J-63	D地区	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.6	高台の磨り出し洗削で胎土は胎土として左右に区別がなさない	見込内面の磨き文、内面洗削	灰白	良	高台内面は洗削される	外壁洗削り	71
J-64	D-19	青磁	碗・底部	高台径 6.2 胎土高 1.2	見込内面に磨き文をめぐらすものがある	外壁約 5mmの胎土で洗削される	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない		71
J-65	D-27	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.8	高台をめぐらす洗削	見込内面に磨き文をめぐらすものがある	灰	良	高台内に胎土をめぐらす	高台内に砂	71
J-66	E-22	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.8	高台内は洗削り胎土がよごす山形胎土をめぐらす	見込の内面に磨き文をめぐらす	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	高台の胎土は胎土として左右に区別がなさない	71
J-67	D-29	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	高台は胎土をめぐらす	胎土の文様は六糸の花文	灰	良	高台内面のみ洗削される		71
J-68	D-27	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.9	高台の胎土をめぐらす	外壁洗削り、見込内面に洗削	灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	71
J-69	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 0.6	高台内は胎土をめぐらす	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	71
J-70	E-24	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.9	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	71
J-71	D地区	青磁	碗・底部	胎土径 5.4 高台高 0.8	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	71
J-72	E-26	白磁	皿・底部欠	口径 8.2	口縁を磨きにするが、つくりや胎土は、まったく形制を同一にする。口縁部は胎土をめぐらすものと思われ、ひくく小さい高台がつか、他に胎土をめぐらすものがある	胎土は胎土として左右に区別がなさない	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-73	E-26	白磁	皿・半欠	口径 7.9 胎土径 7.9		胎土は胎土として左右に区別がなさない	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-74	E-24	白磁	蓋	径 7	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-75	E-21	銅	碗・完形	径 10.8 高台径 4.4	見込内面は、磨きと磨き文の交錯による胎土の胎土をめぐらすものがある。高台は、直立しており、胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-76	E-26	青磁	碗・口辺欠	高台径 5.4 高台高 1.1	高台内は胎土をめぐらす	内面洗削ナメ、外壁は洗削り	淡灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-77	D-21	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.5	胎土は胎土として左右に区別がなさない	見込の文様は洗削、かなり洗削	白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-78	I-25	天目	瓶・頸部	現存部高 10	いわゆる磨き文と呼ばれる胎土の胎土をめぐらすものがある。内外面は胎土をめぐらすものと思われ、胎土は胎土として左右に区別がなさない。口縁部は胎土をめぐらすものである	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-79	I-26	天目	瓶・頸部	現存部高 8		胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰白	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-80	I-26	天目	瓶・体部	径 13.6	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72
J-81	I-26	天目	瓶・底部	高台径 5.6 高台高 1.3	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	灰	良	胎土は胎土として左右に区別がなさない	胎土は胎土として左右に区別がなさない	72

Tab. 23 D地区集石遺構出土遺物一覽表

(単位 cm)

遺物番号	グッド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	釉薬	備考	Fig.
J-122	J-29	白磁	碗・口辺	口径 15	玉縁状口縁をもつ	口辺下部で釉が完全に かかっていない部分がある	灰白	良		J 125-J 124 白磁Ⅱ	76
J-123	J-29	白磁	碗・口辺	口径 16	玉縁状口縁をもつ	外縁の裏側、内面の積 り残すところ	淡灰白	良	高台縁は粉 かからず		76
J-124	J-29	白磁	碗・	口径 17	玉縁状口縁をなし、裏 で平く広く切りこむ	高台縁に輪郭のこり、外 面の裏側よりよく残る	淡灰白	良	高台縁は無 釉	見込に浅彫	76
J-125	J-29	白磁	碗・底部欠	口径 17	ほぼ水平に外反する口縁 を有する。口辺下部内縁縁 を有する。口辺下部内縁縁	内面横ナデ、外面裏側 にほぼ水平に反り出す	白	良	全面釉	見込に細い 積り残す	76
J-126	J-29	白磁	碗・口辺欠	高台径 6.0 高台高 1.2	高台はほぼ断面にのび 広がりを有する	見込内縁には段のめど り文様をなし	白	良	乳白色、高 台縁は土	J 125-J 126 白磁Ⅱ	76
J-127	J-29	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.8	見込の沈みとめられ ず	内面のみ縁	灰白	良	滑らかな 白磁土	J 127-J 128 白磁Ⅱ	76
J-128	J-29	白磁	碗・底部	高台径 4.4 高台高 0.7	高台内の裏切りは、や やゆるやかに欠ける	見込に沈み始め	白	良	高台縁は土		76
J-129	J-29	白磁	碗・底部	高台径 4.6 高台高 1.9	厚い高台をもつ、 高台の縁は粗い	見込に5本の文様を 文を入れる	白	良	露土は、高 台中心	J 129-J 131 白磁Ⅱ	76
J-130	J-29	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 1.9	高台が背の高い筒状 に成形される	見込に時計まわりに種 々な文様を なす	白	良			76
J-131	J-29	白磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 1.6	ほぼ断面の背の高い高 台をもつ	高台内の裏切りは粗 い	白	良	高台縁は 土		76
J-132	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	外面横ナデ、高台の 裏側は粗い	高台内の裏切りは、山 の頂上をあらに切りと る	淡茶	良	高台縁は土	見込に小孔	76
J-133	J-29	青磁	皿・底部	底径 5.4	あけ底の底部は裏切り 残、裏側	外面縁は裏側で残りを なし、その縁は粗い	灰	良	底部のみ 無釉	J 132-J 134 青磁Ⅱ	76
J-134	J-29	青磁	皿・底部	底径 4	あけ底、裏側は粗 いに裏側	粗い電光状文	淡灰白	良			76
J-135	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.9	おもしろい高台に のびた高台をもつ	縁文は、高台近いため 全体を知らず	灰白	良	縁文は粗 い	J 129-J 137 青磁Ⅱ	76
J-136	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	底縁はほぼ平直、高台 は小さい	外縁の縁文は片断で 残り、つけは不明	灰	良	高台は一部 土をみせる	高台内に砂 付	76
J-137	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.7	肉厚な底部にゆる ゆるとした高台を 残す	縁文の縁は不明	灰	良	土まで 残る		76
J-138	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 0.9	高台の残り出しは粗 い外縁に、亀裂あり	見込内縁、底部に 無釉	灰白	良	高台内 まで	高台縁は 土	77
J-139	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0	高台の残り出しする どい	見込の文様、沈み も不明。文様は 草花か	灰白	良	縁は高台 内まで	J 139-J 145 青磁Ⅱ	77
J-140	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.9	厚い高台には、する どい残り出しの高台 をつける	見込内縁の文様は粗 いが残る	灰	良	高台内 まで	高台縁は 土	77
J-141	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0	見込内縁、高台内 でつくりが粗い	見込の文様は、する どい残りのものでつ けられる	灰白	良	高台縁は 土		77
J-142	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	底縁は厚く、す り出しの高台をつける	見込内縁に花文を 葉片形	灰白	良	縁は高台 まで	葉片には 粗い土	77
J-143	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 0.9	高台の残り出し は粗く、太いつ くりをなす	見込内縁の文様は、 白磁 土で粗い	灰	良	高台縁は 土	高台縁は 土	77
J-144	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 0.9	おもしろい高台 をもつ	見込の沈みには、と くに粗い	灰白	良	縁は高台 まで		77
J-145	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.9	かなりおもしろい 高台をもつ	内面縁とも 粗い	灰黄	良			77
J-146	J-29	白磁	合子	口径 6.2 高台径 2.2 高台高 0.8	裏側は粗い	裏側は無 釉	白	良	縁には黄 土	白磁Ⅴ	77
J-147	J-29	白磁	皿	口径 10.4 高台径 2.4 高台高 0.4	厚い高台の残り出し は粗く、高台の 縁は粗い	高台内山形断面の 裏側をなす	淡灰白	良	高台縁は 土	白磁Ⅵ?	77
J-148	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 1.4	まるみのある高台	高台内には裏切り が残り、表面は 粗い	灰	良	白磁土に 変色	青磁Ⅶ	77
J-149	J-29	青磁	碗・底部欠	口径 16	やや直線的に縁部 外反し、粗い	内面、口辺は横ナ デ、外面は裏側	灰白	良	高台縁は 土	縁は粗 い	77
J-150	J-29	青磁	蓋? 底部	高台径 10	蓋の底部か?	内面横ナデ、外面 裏側	灰青	良	縁は高台 外まで	J 149-J 150 青磁Ⅶ	77

Tab. 24 D地区表土出土遺物一覽表

(単位 cm)

遺物 番号	グリ ド	種類 器種・器部	法 量	形 値 の 特 徴	手 法 ・ 文 様 の 特 徴	胎土	胎 色	施 装	備 考	Fig.
J-151	F-30	白磁 碗・口辺	口径 14	半球状口縁をもつ	玉粒の埋りかまし細密	白	良	高台輪は 深胎	輪には小孔 がみつ	78
J-152	C-27	白磁 碗・口辺	口径15.2	内外より丁寧につくられ、玉粒状に厚く輪は輪が厚くつきたり、差別り地の彩とに彩彩している。		白	良		J151-J153 の類似品	78
J-153	G-29	白磁 碗・口辺	口径16.8	半球状口縁をもつ		白	良	高台輪は 深胎		78
J-154	表探	白磁 碗・口辺	口径16.4	典型的な体部に細く早 なる口縁をつける	口内内面に玉粒をめぐ らす。外面細密	灰白	良	高台輪全面 に胎	J154-J156 の類似品	78
J-155	F-29	白磁 碗・口辺	口径 17	体部は、やや外側に外厚 し、細い口縁をつくる	1) 内外面に細密、見込 に施装	灰白	良			78
J-156	G-28	白磁 碗・口辺	口径 16	まるみのある体部の中や外 面に玉粒をつける	口辺内面に施装	灰白	良	高台輪は 平ふみせ		78
J-157	F-30	白磁 碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.9	高台の取合いは縁に比 べり一筋多い	見込に施装の多	白	良	高台輪から 深胎	J157-J159 白磁類	78
J-158	F-30	白磁 碗・底部	高台径 6.4 高台高 1.0	高台の取合いは特色があり 作りがたい目をつける	外面細密、見込に施装 の多	灰白	良	高台輪から 深胎		78
J-159	D-19	白磁 碗・底部	高台径 5.5 高台高 0.9	高台輪に横溝	見込に施装	灰白	良	高台輪から 深胎		78
J-160	E-29	白磁 碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.7	発射はほぼ水平	見込に施装	灰白	良	見込内面に 斜行		78
J-161	G-29	白磁 碗・底部	高台径 7 高台高 0.8	高台の取り出しはまる みをもつ	見込に施装	灰白	良	高台輪から 深胎		78
J-162	D-22	白磁 碗・底部	高台径 7.2 高台高 1.3	高台小さく、取り出し は1筋	見込に、いくらかの細密 輪をつける	灰白	良	高台輪より 深胎		78
J-163	H-28	白磁 碗・底部	高台径 5.4 高台高 1.3	高台の取合いは縁の取 り、内は細密	見込内面にほぼ三角に斜 行	灰白	良	高台輪は 深胎	白磁類 I	78
J-164	G-25	白磁 碗・底部	高台径 7.2 高台高 1.1	発射はほぼ水平	見込内面に玉粒状の無輪 の多	淡黄白	良	高台輪は 深胎	J164-J165 白磁類	78
J-165	F-30	白磁 碗・底部	高台径 7.6 高台高 1.2	高台輪は縁目無 輪	見込内面に輪の無輪部は 玉粒でない	淡黄白	良	高台輪は 深胎		78
J-166	J-24	青磁 皿・底部	底径 5	法部無輪	見込に施装	灰白	良	高台輪から 深胎	J166-J169 青磁類 V	78
J-167	H-26	青磁 皿・底部	底径 3.6	径の小さな青磁の底 部は発射り施装	電気施装	灰白	良	底部無輪		78
J-168	表探	青磁 皿・底部	底径 3.6 高台径 1.8 高台高 0.5	高台の取合いは縁の取 り、内は細密	見込に施装	灰白	良	底部無輪	発射りか かり 施装の多	78
J-169	F-24	青磁 皿・底部	底径 5.0	やや外側	電気施装	灰白	良	底部無輪		78
J-170	G-26	青磁 碗・底部	高台径 3.0 高台高 0.9	発射水平	高台輪には施装	灰白	良	高台輪は 深胎	J170-J173 青磁類 V	78
J-171	D-26	青磁 碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	見込内面はややこぼ もつ	見込内面に細密と外周 施装	灰白	良	高台より 深胎	胎はほぼ 水平	78
J-172	B-12	青磁 碗・口辺	口径 18	口縁部は、やや外側に まるとおき	外周に施装	灰	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-173	E-29	青磁 碗・口辺	口径 16	内外に外厚するし もつ	口辺下内面に施装の多 く	淡黄白	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-174	F-10	青磁 碗・底部	高台径 16.5 高台高 7.5	小さな取合いとよす ついで	見込、口辺は施装、口 辺外周は施装	淡黄茶	良	輪は外周 に施装	胎土内面に 施装	79
J-175	52号 表探	青磁 碗・口辺	口径 18	まるみのある口縁は、 やや外厚する	1) 胎土内面に施装 胎土内面に施装	灰	良	内外面に 施装	内外面に 施装	79
J-176	表探	青磁 碗・底部	高台径 5.5 高台高 0.7	高台は、小さく取り 出す	見込に施装	灰白	良	胎土内面に 施装	J176-J180 青磁類	79
J-177	表探	青磁 碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.9	発射はほぼ水平	見込内面に施装	灰	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-178	表探	青磁 碗・底部	高台径 4.2 高台高 1.1	高台の取合いは縁の取 り、内は細密	高台内面に施装	灰白	良	高台内面 に施装		79
J-179	表探	青磁 碗・底部	高台径 5.2 高台高 0.8	高台の内面は縁の取 り、内は細密	見込内面に施装	淡黄白	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-180	E-25	青磁 碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	見込には内面あり	施装は施装(?)の 胎土、取りは施装	灰	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-181	F-30	青磁 碗・底部	高台径 6.2 高台高 0.8	胎土は厚いつり り	見込の胎土内面に施装 が深く施装が少ない	灰白	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79
J-182	G-10	青磁 皿・底部	底径 15 高台径 3.4 高台高 0.5	おけ底から施装 口辺部はつる	見込に、お平かに施装 をもつ、内面に施装	白灰	良	底部無輪	青磁類 II	79
J-183	A-12	青磁 皿?口辺	口径21.8	口縁部は、ほぼ水平に おき	口縁部は、ほぼ水平に おき	灰	良	胎土内面に 施装	胎土内面に 施装	79

Tab. 27 D地区出土滑石製造物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	遺物名	グリッド	器種	器部	法重	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 加 工 の 特 徴	備 考	F1層
K-1	北 浜	C 21	鍋	口辺部	口径27.2	口底下に凸状把手	のみ底のころす		84
K-2	集 石	J-29	鍋	口辺部	口径 29	口底下に筒をめぐらす	口縁部磨光、外周の磨光あり	筒下に黒付着	84
K-3	集 石	J-29	鍋	口辺部	口径28.6	口底下に筒をめぐらす	底磨りを磨治で出す	石材磨光	84
K-4	柱 穴	F-23	鍋	口辺部	口径28.6	口底下に筒をめぐらす		柱穴の磨光	84
K-5	東浜敷石	D-21	鍋	口辺部	口径 29	筒は小さい	外面に上下方向のみ磨	筒下に黒付着	84
K-6	南北敷石	F-26	鍋	口辺部	口径 16	筒両基部はすどい磨	筒は四方向の磨	内面をめぐらす	85
K-7	南北敷石	F-26	鍋	口辺部	口径 21	口底下に筒をもたない	わずかにのみ底のころ	底の付着多し	85
K-8	第1講	F-29	鍋	口辺部	口径20.4	筒は細くとりれる	内面よく磨	筒下は黒色	85
K-9	南北敷石 上石上	D-27	鍋	口辺部	口径不明	口底下に筒をめぐらす	外面のみ磨、表面磨	筒下は黒色	85
K-10	表 土	G-29	鍋?	口辺部?	厚さ約2	一辺のみ磨	外面のみ磨	外面黒色	85
K-11	第1講	G-29	鍋?	口辺部?	厚さ約1.6	再加工なし	外面のみ磨	筒周にすべて黒	85
K-12	表 土	H-28	鍋	口辺部?	厚さ約1.6	裏面磨の磨下(?)	外面わずかにのみ磨	底の付着なし	85
K-13	表 土	F-26	鍋	口辺部	口径不明	口底下に筒をめぐらす	再加工なし	筒下は黒色	85
K-14	第1講	G 29	鍋	口辺部	口径不明	筒は細くのつくり	筒に再加工磨	筒下は黒色	85
K-15	第1講	F-29	鍋	口辺部	口径不明	筒は小さいつくり	のみ底を細く	再加工なし	85
K-16	表 土	D地区	鍋	口辺部	口径不明	口底下に筒をめぐらす	外面再加工、磨光はけい	石材磨光	85
K-17	東浜敷石	D地区	鍋	口辺部	厚さ約1.2	小さい筒	内面より磨、貫通せず	筒周すべて黒	85
K-18	表 土	F-28	鍋部?	厚さ約1.2	右側の基部が		外面に準平状のみ磨	内面の孔は未磨	86
K-19	東浜敷石	D-21	鍋部?	厚さ約1.5	右側の基部が		外面わずかにのみ磨	磨光を再加工面なし	86
K-20	柱 穴	D-32	鍋	口辺部	口径不明	字状	顯著な再加工なし		86
K-21	表 土	D地区	鍋	口辺部	口径不明	字状	筒面に再加工	外面、底部に黒	86
K-22	柱 穴	D地区	鍋	口辺部	口径不明	字状	筒周外面にのみ磨	口縁部に磨	86
K-23	集 石	J-29	鍋	口辺部	口径 17	やや平たいのみ磨	外面にのみ底磨部は小孔	底の付着なし	86
K-24	南北敷石	F-26	鍋	口辺部	口径 19	字状?	外面にのみ磨、底面外面磨削のま		86
K-25	第1講	G-29	鍋	口辺部	口径 27	字状	底面外縁磨削のみ磨	再加工磨	86
K-26	表 土	D地区	鍋?	口辺部?	厚さ約1.2		内外正ともに磨	筒下の部?	86
K-27	表 土	D地区	鍋?	口辺部?	厚さ約1.6		磨削する磨治のころす		86
K-28	集 石	J-29	鍋?	口辺部?	口径不明	字状?	筒部へのちりあがりのみ磨	再加工	86
K-29	表 土	D-19			厚さ約2				86
K-30	第1講	F-29	鍋?	口辺部?	厚さ約1.3		のみ磨	外面磨削	87
K-31	第1講	G-29	鍋?	口辺部?	厚さ約2		外面を磨	外面黒色	87
K-32	表 土	D地区			厚さ約1.1		のみ磨		87
K-33	表 土	D地区			厚さ約0.5	磨削は磨石磨の磨削か?	内外面ともによく磨		87
K-34	第1号 上石上	I-34	鉢蓋		厚さ 1.2		重さ 19.6g		52

5. D地区出土の石器

D地区の層位の状態は、概要でものべたごとく上面が削平された状態が考えられるため層位的に把握することができなかったが、表土層中及び遺構内から石器が多数出土している。期的には、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物である。旧石器時代の遺物として台形礫石器

ナイフ形石器・彫器・細石刃・細石核再生剥片・残核細石核等の出土、縄文時代の遺物として石鏃・縦長剥片・Scraper等の出土がある。このほか旧石器・縄文の時期のどちらとも考えられるものにScraper・折断・切断剥片・縦長剥片等がある。

弥生時代の遺物として石斧5点、石庖丁片1点、の出土がある。Fig.88の1は、扁平片刃石斧で、敲打の部分のをこしながらも刃部の破損状態等から製品として使用した可能性を持つ。石質は凝灰岩である。

2は、今山の玄武岩を石材として使用した大型蛤刃石斧の先端部のみのもので刃部・胴部は破損している。

製作工程は、1の場合第4工程で使用し、2の場合第5工程の全工程を終了。

第1工程は、荒削り、第2工程は、整形削離、第3工程は敲打、第4工程は局部磨製、第5工程は全磨製で完成品

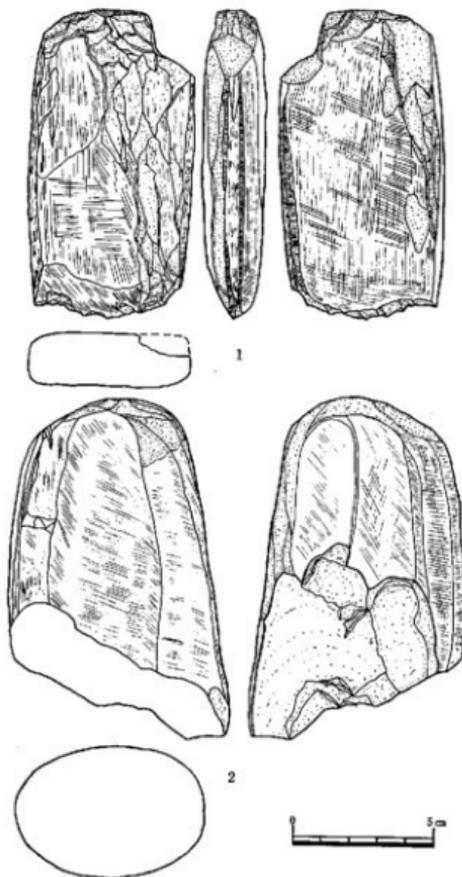


Fig.88 D地区出土石器実測図 (縮尺寸)

第V章 E地区の調査

1 概 要

蒲田遺跡発掘調査直前に踏査した際に発見した遺跡で、土の部分の赤褐色粘質土層(Ⅲ層)中で銅石刃、銅片が採集され、本調査の発掘が大いに期待された。昭和47年8月15日～9月15日の第一次調査、昭和48年3月5日から30日までの第二次調査を別府大学考古学研究室橋昌信助教授、学生8名とE地区担当者により縄文、旧石器時代遺物包含層の発掘調査を遂行した。

発掘調査を実施した地点は、標高40m前後の独立丘陵上に位置する。この独立丘陵の尾根を境に行政区画がなされ、南側は、粕屋郡に属し、一方の北側は、福岡市に編入されている。尾根の南側半分は、数年前の土砂採集のために現在は14m近くの断崖となっているが、以前は、緩やかな斜面が開け、その斜面には、三基の古墳が存在していたという。現在では、古墳のおもかげは無論のこと、旧地形の様子を窺うのも困難なほどの変貌ぶりである。北側は急角度で標高約20mの水田に続き、この部分に湧水がある。この北と南の地形の違いは、そのE地区を考察するうえで大きな意味をもつものと思われる。

発掘調査は、東西に延びた尾根の頂上部よりやや北側によった尾根上に占地する古墳(2・3号墳)の墳丘下、およびそれに隣接した地点において実施した。古墳の調査進行状況を考慮し3号墳の東側から2号墳の手前までに4×20mのa、bトレンチを設定し、さらにそれを2×2mの小グリッドに区画して発掘を行ない、第二次調査は、2号墳の完全な調査終了後にその直下を東西に15から23、南北にAからEまでの2×2mを一辨とするグリッドを設定し、Ⅱ層上面より5cm掘りを行なっていた。その結果Ⅱ層が上下に区別され、遺物の広がりも把握することができた。2号墳の版築された盛土中に旧石器時代、縄文時代の遺物が包含されており古墳築造の際Ⅱ・Ⅲ層の土を盛土に使用している。これらの状態から最も良好な状態は、むしろ南側で破壊された部分に生活が営まれていたと考えられる。東側のb-1でⅡ層からの掘りこみによって、ほぼ楕円形をした土塚が1基検出され、その中より弥生式土器が出土した。

この土塚は、斜面に位置することから台地の残存部の拡張を行なったが、その形跡は、まったく認められず、むしろこれも南側(破壊された台地)の可能性が高い。また東南部の断面に住居跡と思われる掘り込みを調査終了後発見し、弥生時代の住居跡・土塚・甕棺墓が破壊された部分に存在していたことが判明した。この点行政区画のちがいはいえ種々な遺跡の複合遺跡であったことを思うと南側がおしまれてならない。

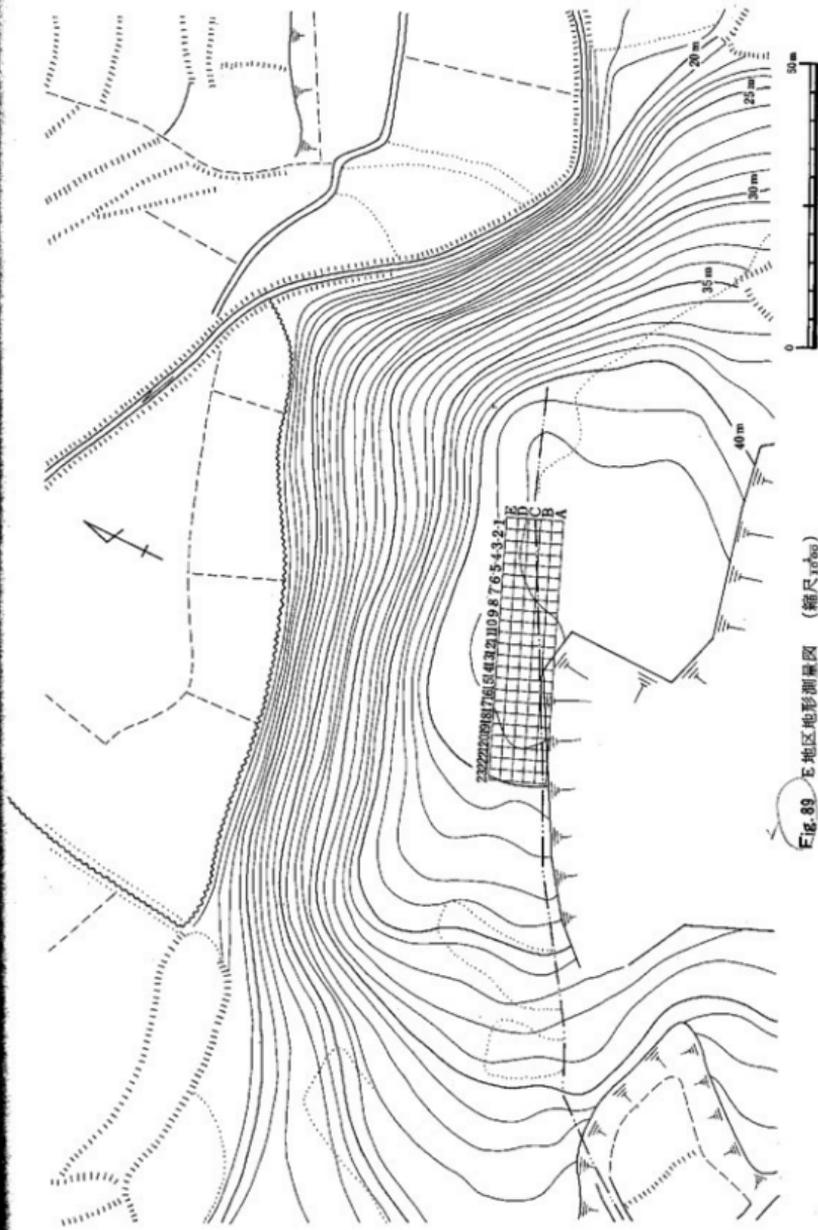


Fig. 89 E地区地形測量図 (縮尺1:500)

金律(四)二六

2. 旧石器時代、縄文時代の石器

層位について

Fig.90の断面でみられるごとくI層は、耕作土層(20cm)、II層が上下に区別でき褐色粘質土層(上面25cm、下面15cm)、III層が赤褐色粘質土層(20cm)、IV層が風化燻を含む黄褐色粘質土層である。これらの土層は、花崗岩風化土層で形成されている。II層の上面が、縄文時代の遺物包含層でII層下面・III層の10cm程度までが旧石器時代の遺物包含層である。

層位別の石器の広がりについて (Fig.90)

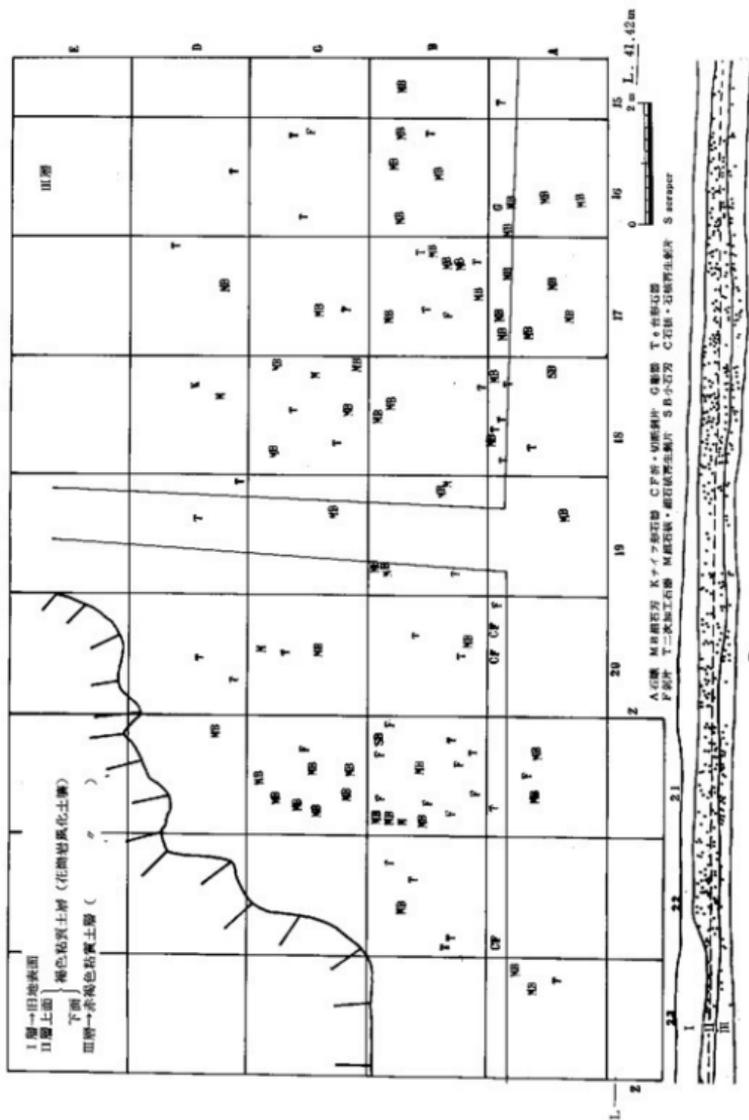
II層上面の遺物の広がり、4つのブロックに区別できる。A-22のMicro-Bladeを中心としたグループ、A・B・C・D-18を中心としMicro-Blade・二次加工石器・石鏃・石核再生剥片石核のグループ、B・C・D-17を中心とし、Micro-Blade・石鏃・二次加工石器のグループ、B-16を中心とし、Micro-Blade・石鏃・二次加工石器のグループの4つに分布していた。

II層下面の遺物の広がり、3つのブロックに区別できる。A-21・22を中心し折・切断剥片・Micro-Blade・二次加工石器のグループ、B-20を中心にScraper・二次加工石器・Micro-Blade・ナイフ形石器のグループ、B-18を中心にMicro-Blade・Micro-core・折・切断剥片のグループの3つに分布することになるが、II層下面は、遺物数がII層上面、III層より少量である。

III層の遺物の分布は、4つのブロックに区別できる。C-20・21を中心としたMicro-Blade・剥片・二次加工石器・細石核再生剥片のグループ、A-17、B-17を中心とし、Micro-Blade・二次加工のグループ、B-21、C-21を中心としたグループで、剥片・二次加工石器・Micro-Bladeのグループ、C-18を中心としたグループで、細石核再生剥片・Micro-Blade・二次加工石器・ナイフ形石器のグループである。これらII層上面・下面・III層の分布状態は、以上のようにIIのグループに区別できた。ただII層上面の分布状態で石鏃と細石刃、台形石器、ナイフ形石器の出土状況が異なる。つまり石鏃がほとんど10cm程度に包含されるのに対して、細石刃、台形石器、ナイフ形石器はII層下面に近い状態で出土する事実が明らかとなった。またB-18のII層下面で、台石と思われる礫が出土している。形態は、逆台形を示し石材は硬質砂岩。(PL.54下段石)

Tab. 28 E地区出土打製石器一覧表

層位	器種名	細石刃	細石核	細石剥片	石核剥片	石核剥片	ナイフ形石器	台形石器	石	ド	石	二次加工石器	scraper	塊	割削片	塊	小石	砕	計	
I 層		72	2		16	2	4	6	1		68	209	7	1	14	2	17	1000	1421	
II層上面		224	3	3	5	2	4	3	2		99	204	12	4	51	3	22	1851	2492	
II層下面		42	5	8	5	6	3	4	3			19	9	2	46	15	4		127	296
III 層		381	4	4	3	3	4		2			39	4	2	14	13	26	194	693	
計		719	14	15	29	13	15	13	8		167	471	32	9	125	33	69	3172	4904	



石器について

E地区 I層出土石器について

概要でもふれたごとくE地区では、2号墳・3号墳の下に縄文・旧石器時代の遺物が含まれているため2・3号墳を調査したのちに発掘調査を行なったが、古墳の盛土中より多くの遺物の出土をみた。また2号墳の最下層は黒色の腐植土であり、これを旧地表面としてとらえ、この旧地表面と盛土をI層の遺物として図示した。(付図Fig.10・11)

石鏃 (付図Fig.10-12-41)

86点中30点を図示した。A地区の石鏃と同様に種々の形態を持つが、鋸歯状と称せられている石鏃が多い。特殊な形態を持つ石鏃41は、脚部が全体の5分の1程度しかなく脚部と胴部の接点には挾込部がある。またこのE地区の石鏃は、大型の石鏃が多くそれも先端部の鋭利な形態を持つ。また未製品とも考えられる鏃32・33の2点があるが未製品と断定はできない。

剥片、石核、折・切断剥片 (付図Fig.10-42-51 Fig.11-1-15)

剥片は、縦長剥片(42・43・44・45・47・49・50)7点と横長剥片(46・48)2点とに区別でき、縦長剥片は、剝離面の打撃方向が一方のみで、打面は、平坦打面と調整打面とに区別できる。横長剥片は、離面観察によると2方向の打撃方向を持ち、打面は平坦打面と調整打面を持つ2つに区別が可能である。51の石核の石材は珪化木である。一定剝離面状態から一定の法則を持った石核であり、打面は、平坦打面に部分的に調整を加えてゆく方法を持つ。

切断剥片(1-9)は、3・7をのぞいた7点が末端部を切断する形態を持つ。しかし、3は、頭部を切断、7は、側面を切断するという特殊な場所を行なっている。折断剥片(10-15)はすべて縦長剥片を折断している。12は接合資料であるが、これは、剥片の形態から折断したと思われる。またこれらの中で裏面からの打撃・半割工程を行なった状態を示している折断剥片もみられる。

二次加工石器とスクレーパー (付図Fig.11-16-30)

二次加工石器(16-24)でサイドに二次加工のあるものは、16・19・21・22・23・24でエンドに加工のあるもの18、頭部にあるもの17、周辺部にあるもの20と区別ができる。スクレーパーでは、エンド・スクレーパーが、25・27・29・30でサイドスクレーパーは、26・28である。

ドリルと彫器 (付図Fig.11-31-36)

31がドリルで先端部断面が台形を示す。彫器は、32が4打、33が2打、34・35が1打、36が4打による彫刻刀面を持ち、形態・技術はおのおの相違がみられる。

細石刃 (付図Fig.11-37-55)

19点の細石刃しか図示していないが、E-I層中には多数の細石刃が出土した。

台形様石器とナイフ形石器 (付図Fig.11-56-62)

台形様石器としたが、中には、台形状石器として区別した石器(56・58・59)がある。つまり台形様石器として上げられるのは57の1点のみである。ナイフ形石器は、60・61・62の3点であるが、60は背のみに、61は、刃部をわずかにのこし、62は背と基部の一部にそれぞれ刃渡り加工を加える形態を持つ。

細石核再生剥片・石核再生剥片・石核 (付図Fig.11-63-78)

細石核再生剥片(63・66・67・69-76)は、3つに区別できる。正面再生剥片と呼ぶ剥片(63)と側面再生剥片(70・71・73)と打面再生剥片(66・67・69・72・74・75・76)であるがこれについてはⅦ章でのべたい。石核再生剥片も同様の区分ができる。正面再生剥片(64・65)と68の側面再生剥片である。石核(77・78)は、一定法則を持つ石核である。

E地区 II層上面の石器について

石鏃について (付図Fig.12-1-19)

図示した石鏃は、19点であるが、II層上面では、99点出土している。形態的には、A地区・E地区のI層と同様に種々のタイプに区別できるが、特徴のある石鏃は、1・5・6にみられる2cm未満の石鏃、12・16の先端部・脚部に特徴をもつ石鏃、また14の石鏃形態は、I層の石鏃(Fig.11-41)にみられた形態と同様で脚部が全体の5分1程度しかない特徴を持つ。

石鏃状石器と剥片 (付図Fig.12-20-27)

石鏃状石器(21)は、石鏃とは区別しなければならない。それは、刃部の扶込部が小さく鋸状は示すが、他の遺跡で見られる刃部状態とは異なるからである。しかし石鏃の要素は多い。

剥片は、縦長剥片と折断剥片・切断剥片とに区別できる。22・23は、縦長剥片であり、剝離方向は、一方向。切断剥片は、20・27の2点、折断剥片は、24-26の3点である。

二次加工石器・彫器・スクレーパー・ナイフ形石器 (付図Fig.12-28-48)

二次加工石器(28-31・34・39)は6点出土している。スクレーパーと同様の用途であろう。むしろサイド・スクレーパーの中に組み入れられるべきものであろう。彫器(32・33・36・42)は、すべて2打による彫刻刃面を持つ。しかし32は、彫器とも残核とも思われたが、擦痕があることと、2本の彫刻刃面があるため彫器とした。スクレーパーは、サイド・スクレーパー(35・37)の2点、エンド・スクレーパーは、40の一点である。41のナイフ形石器は背面のみに刃渡り加工を行なっている2×1.2×0.4cmの小型のナイフ形石器である。

小石刃と細石刃 (付図Fig.12-43-83)

小石刃(43-51・81)は、10点出土している。側面に細かな剝離があるものや折断されているものもある。細石刃(52-80・82・83)は、31点図示している。その形態は、さまざまで、頭部がカットされているもの、中間部だけのもの、末端がないものがある。

細石核と細石核再生剥片・石核と石核再生剥片 (付図Fig.12-84-99)

細石核再生剥片(84-87・89-91・96)は、8点、細石核残核(93・95・98)は、3点、石核再生剥片(88・94・97)は、3点、石核は、94・99の2点出土している。これらの細石核・細石核再生剥片・石核・石核再生剥片については、別章で詳細にふれてみたい。

E地区 II層下面出土の石器について

剥片と折・切断剥片・スクレーパー・ドリル・彫器 (付図Fig.13-1-21)

剥片(1・2)は、縦長剥片である。1の胴部に抉込の剝離がある。切断剥片(5-7)は、3点、折断剥片(9・10・13)は、3点で折・切断剥片とも縦長剥片を素材としている。彫器(11・12)は、1打と2打による彫刻刀面を形成している。スクレーパーは、エンド・スクレーパー(14・16・17・19・20)の5点、サイド・スクレーパー(3・4・8・15・18)の5点。

台形様石器・ナイフ形石器・尖頭状石器・小石刃・細石刃 (付図Fig.13-22-34・37-70)

台形様石器は、台形状石器(23)と台形様石器(22・24-28)に区別できる。ナイフ形石器は、29-34の6点である。これについては、別章で。尖頭状石器は、39の1点であるが、剥片尖頭部の先端部であろう。しかし石核の可能性もある。小石刃は、37・38の2点。細石刃は、40-70の31点である。中間部が多く、次に木端をカット、頭部の順。

細石核と細石核再生剥片・石核と残核 (付図Fig.13-35・36・71-28)

細石核再生剥片(71-77)は7点、細石核は、80-82の3点、石核が36、残核が3点出土。

E地区 III層出土の石器について

剥片と折・切断剥片・二次加工石器とスクレーパー・彫器と打器 (付図Fig.14)

剥片は、縦長剥片1・3-6・8-12・18-20の13点で剝離方向は、一定している。横長剥片2・7・16・17の4点で、横割ぎではなく横長剥片であろう。折断剥片は、21-23の3点で、切断剥片は、24-29・31・32の8点であるが、31は縦割りである。二次加工石器は、31であるが、折・切断剥片の中にも二次加工の加えてあるものもある。スクレーパーは、エンド・スクレーパーが、25・37の2点、サイド・スクレーパーが13・33・34・36の4点出土している。彫器は、5打による彫刻刀面を持つ(38)。40の打器は、両端に打撃痕がある。

小石刃と細石刃・細石核再生剥片とナイフ形石器 (付図Fig.14-14・15、39・41、42-66)

小石刃は、39・41の2点である。打撃方向は一定している。このほかにも図示していないが24点出土している。細石刃は、42-58の17点図示している。頭部6点、中間部9点、頭部カットが2点である。細石核再生剥片は、59・60の2点が側面再生剥片、15が打面再生剥片である。

61は、細石刃に側面に直角に近い剝離面がある。14・62は、細石核の残核である。63-66はナイフ形石器であるが、これらの石器等については、別章でのべてみたい。

3. 土 塚

土塚出土状況 (Fig.91 PL.36)

E地区のもっとも東側にあたるb-1グリッドで検出されたもので、平面プランは楕円形で長径110cm、短径80cm、深さ30cmをはかる。壁は、ほぼ垂直をなし、北に片寄って、長径45cm短径38cmの楕円形に掘りこまれており、深さは、約20cmである。土塚のほぼ中央部より、横になった甕が出土した。この甕は、

押しつぶされたような状況を示し、しかも塚底に密着していることから土塚と同一の時期のものと考えられる。

出土土器 (Fig.91)

土塚内より出土した甕は、小破片となっており、胴部の一部を復原できなかつた。焼成は良好であるが、砂粒をかなり多く含み、内外面ともに砂粒が露出している。口径は、28.5cmをはかり、口縁には、わずかに刻み目が認められる。胴下半部から底部へは、風化していないということもあって、丁寧な調整痕がのこる。底部は、あげ底で、ほぼ中央部に、焼成前の穿孔がみられる。器高は茶褐色を呈する。遺構実測図より、甕の器高は、35cm前後と推定される。したがって、Fig.91の土器実測図はさらに上下方向にのびさねばならない。これらのことから弥生時代前期の土塚墓と考えられる。

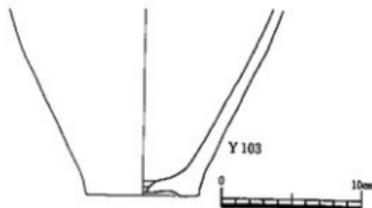
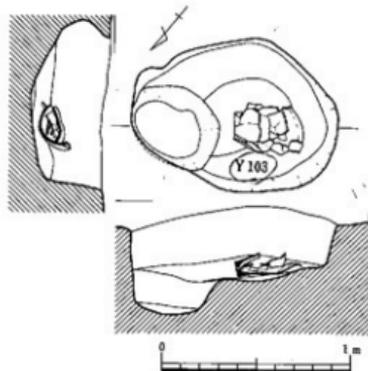


Fig.91 E地区土塚(縮尺 $\frac{1}{50}$)、土塚出土土器実測図(縮尺 $\frac{1}{10}$)

4. 蒲田2・3号墳 72/14

蒲田2・3号墳は、標高約40mを計るかけづか山のはぼ頂上に位置する。このかけづか山頂上部を福岡市と粕屋郡との境界線が走り、南半が粕屋郡、北半が福岡市に属する。本墳調査開始前、すでに粕屋郡側は10数mにわたって土取りのため切り落とされていた。ために、境界線上に位置する2・3号墳はその半分以上を切り取られ、原形を失っていた。しかし、すでに切り取られた粕屋郡側にも少くとも3基以上の横穴式石室を持つ古墳があったことが、昭和32年に撮影された写真によって確認された⁽⁹⁾。蒲田2・3号墳は、この古墳群の北端部を占める古墳である。

調査は、平板測量の結果ではその中心部はすでに破壊された可能性を示したが、埋葬主体部の確認を急ぐことから開始した。しかし、当初の予想通り、主体部は全くその形をとどめず、ただ、その中央にあたる部分に若干の、石室構築に使用されたと考えられる石組みが存在していた。この石組みは、1.5m×0.5mほどの大きさの石を中心に、人頭大の石を集めた状態であった。大形の石材は1個のみで、これに続く石材は見当らなかったが、出土の位置からして石室の腰石として使用されたものと考えてよからう。

墳丘は、石室構築とともに土を盛り上げ、その状態は墳丘断面に如実に現われていた。土層図の最下層の黒色土層は、草木葉をその表面にのせており、この層どこの上層との境は明瞭で、簡単にはがれた。このことから、本墳の築造に際してはこの部分には何らの手を加えず、盛土をのせたことがうかがえた。墳丘裾部などに特別の加工痕・周溝などの施設も認められなかった。しかし、盛土を

盛る過程においては、墳丘内部に二重の石列をめぐらしていることが知られた。

まず第一は、墳丘のはぼなかばに、人頭大の石を幅2m～3mにわたって、直径約14mくらいの円形にめぐらしている。西側の、本墳の最も低い場所では3～5段の石垣状に積んだ部分もあるが、他

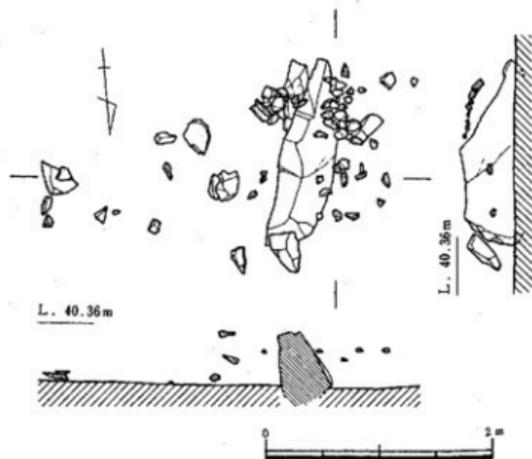


Fig. 92 蒲田2号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{100}$)

の部分は積み上げたというより、寄せ集めたという感が強いが、当初、積み上げたものが崩れ落ちた可能性も考えられる。なお、この石列は水平にめぐるものではなく、地山の傾斜と同じくらいの傾きを持ち、石列の東西の高低差は約1mを計る。

第二は、墳頂近くにめぐるもので、これも人頭大の石を用い、雑然とした感じである。この石列の直径は8m前後と思われる。

本墳丘からは、石器、弥生式土器、須恵器などの出土をみたが、須恵器以外は本墳との直接の関係は認められない。これらの遺物は第V章の「旧石器時代・縄文時代の石器」の項に詳述する。

以上の如く、本墳の調査の結果、蒲田2号墳は、

1. かけづか山南斜面に位置するかけづか山古墳群の最北端部に占地し。
2. 直径約22m、高さ2.5m以上の墳丘を持ち。
3. 墳丘内に二重の石列を持つ。
4. 横穴式石室を埋葬主体部とするであろう、円墳であることを確認した。

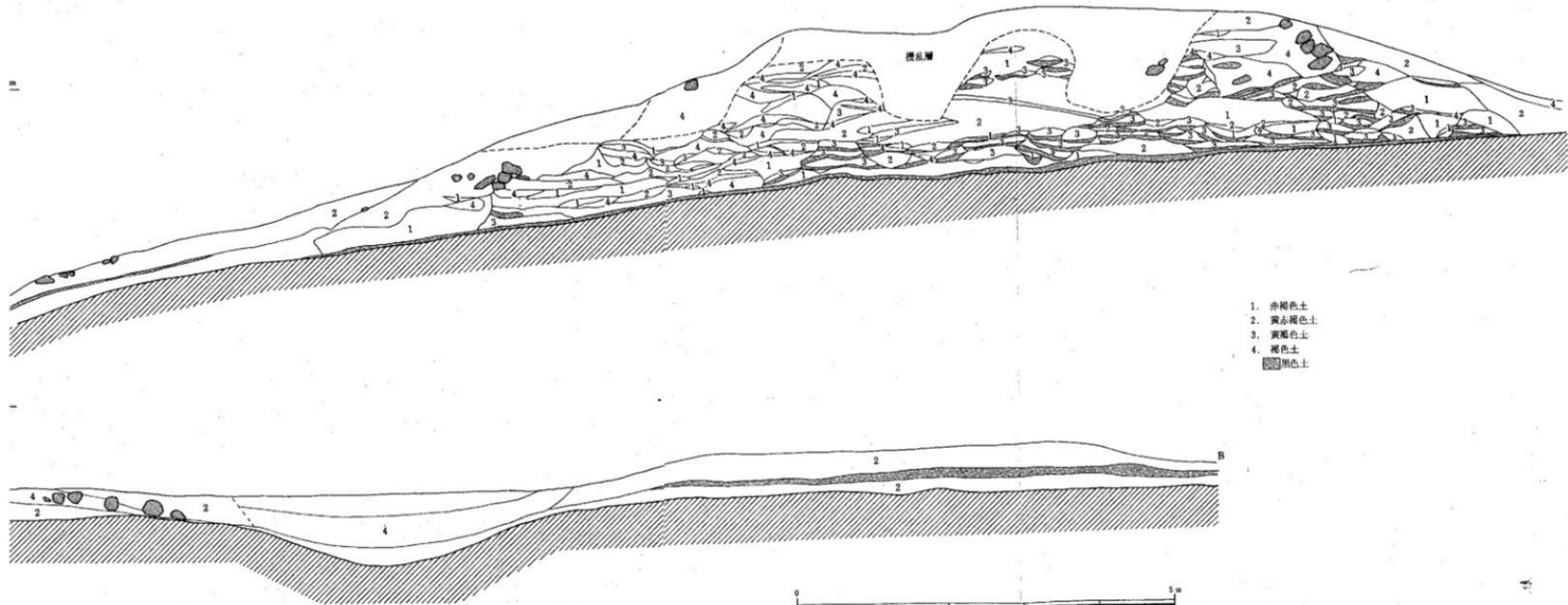
なお、蒲田3号墳は調査の結果、古墳とは無関係であることが判明した。

(注)、昭和32年11月、内海克久氏の撮影による。

Tab.29 蒲田2号墳墳丘出土遺物一覧表

(単位cm)

遺物番号	出土地点 (層位)	器種	器形	寸法	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
Y 104	墳丘東北側	礎石	口辺部	口径21.2	逆し字形の口縁や欠部などは Y110 や Y111 に同じであるがやや下方に傾斜する。		砂	灰	淡黄褐色	口縁上部、外側丹塗り。	
Y 105	東西断面	高砂	口辺部	口径19	縦断面は、口辺部のみであるが遺跡の傾斜をもつ高砂である。口辺部は、やや傾斜するが平直な面をつくる。丹塗りの痕のこぼり。		砂	灰	黄	淡黄褐色	
Y 106	トレンチ 土上	礎石	口辺部	口径32	いっぺんは倒形の特徴をきたれた口辺部をもつ。内外面均等にすまぬ調整不明な面が多いが、口辺部外面は横ナデか?		砂	灰	黄	暗褐色	
Y 107	墳丘北側	礎石	口辺部	口径37		内外面砂粒露出。積層の粘土接合部は調整不完全	砂	灰	黄	黄褐色	
Y 108	東西断面	底石	直径	5.4	おげ底の底石をもち、ぶあついつくりをなす。	調整不明	細砂	灰	黄褐色		
Y 109	東西断面	底石	直径	7.2	ややおげ底	内外面ともに磨滅	砂	灰	黄	黄褐色	
Y 110	C17 グリッド 目	礎石	口辺部	口径29	逆し字形の口辺部をもつ。口辺部直下に断面X字形の調整をみだす。口辺部に斜めの刻み。丹塗りの痕は外面のみ。		砂	灰	黄	赤褐色	C20 グリッド 出土土層外と同一
Y 111		礎石	口辺部	口径30	口辺部を欠くがつくりは Y 110 と同一。丹塗りの痕も同じように外面のみに認められる。内面、口辺部上部は不明。		細	黄	黄	赤褐色	
H 90	墳丘下 黄色土層	礎石	口辺部	口径30	いっぺんは二重の礎石の口辺部で短かい傾斜からやや外反する立ちあがりは平直な口縁である。内外面とも口辺部は丁寧な横ナデ調整下面にはへた削り痕跡を認むられる。底面部分によると、まるみのある底面で、内外面ともに上下方向に磨滅をいれる。		細	黄	黄	赤褐色	P.L-30
S 23	墳丘 北側	鉢	口径	11.6 器高 4.4	内縁する立上り縁部は欠くおさめる。底面半分ほどをへた削り。内面底面にクマヤ痕。		砂	灰	黄	淡褐色	
S 24	墳丘北東部 段土中	口辺部	口径	11.6	外反する口縁部を削り直して外方にふくらませ、おざかに内側にふくらむ。へた削りの一部が残っている。		黄	灰	黄	外面淡褐色 内面灰黄色	
S 25	墳丘北東部 段土中	高砂	脚底	直径 7.4	無蓋高砂の脚で、内面にしぼり目認められる。		黄	灰	黄	灰黄色	
J 189	段土 中	土器	口径	15.6 器高 6.5 高台部 4	縁部は、不鮮明な輪郭で物はずく。縁部文の縁部。口縁部にはけて灰色。底面内底は物厚く赤褐色を呈する。細かな黄丸。		灰	黄	黄	赤褐色	



- 1. 赤褐色土
- 2. 黄赤褐色土
- 3. 黄褐色土
- 4. 褐色土
- 5. 黄色土

Fig. 94 蒲田 2 号墳丘断面图 (縮尺)

179



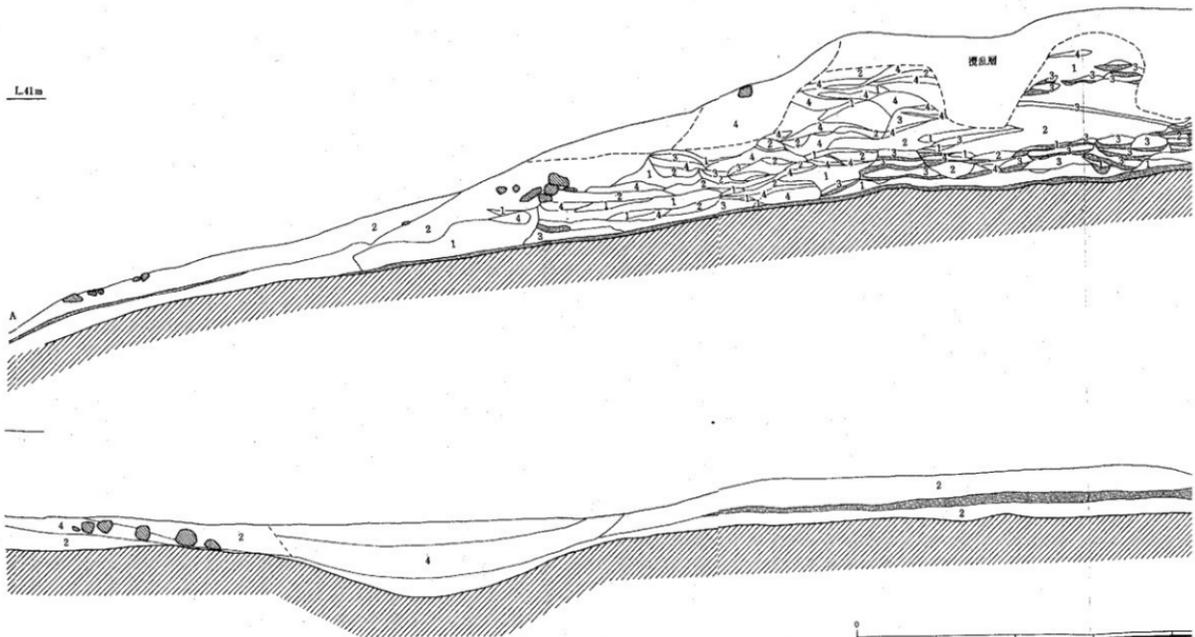


Fig. 94 浦田2号墳填丘断面图 (縮尺)

179

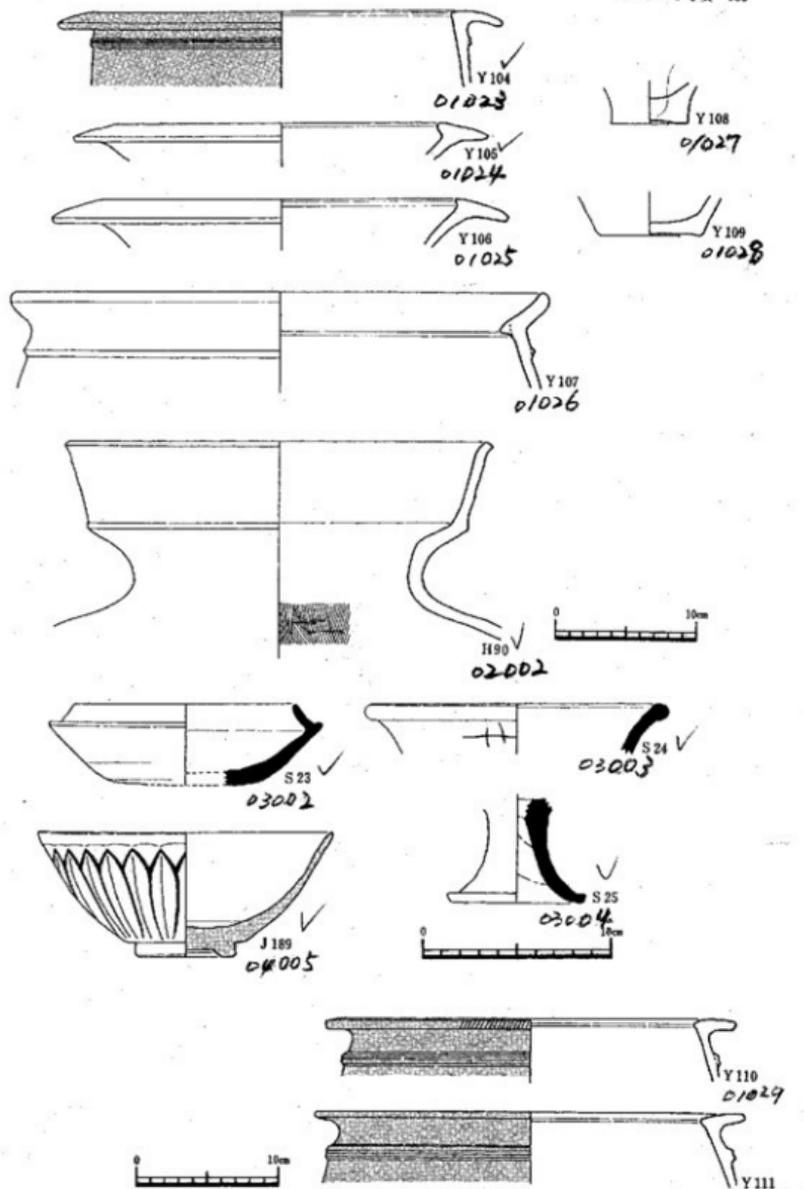


Fig. 95 蒲田2号墳填丘出土土器、E地区出土土器実測図 (縮尺寸、寸)
72/14

5. かけ塚山古墳群出土の遺物

ここに紹介する遺物は、本調査以前にすでに宅地造成によって破壊されたかけ塚山古墳群中の1基から採集された資料で、調査中に平ノ内幸治氏より寄贈を受けたものである。採集した氏によれば、本資料は、昭和45年の夏頃、かけ塚山の最高所にあった破壊された古墳石室の羨道部床面付近からまともに出て出土したとのことで、他の古墳の遺物混入は考えられない。また石室の形態は、玄室部はすでに石材は抜き取られていたとのことから明らかではない。遺物の多くは細片となっており、図示するものが少ないが、遺物の組み合わせはきわめて興味深いものがあり、かけ塚山古墳群の一端を知るうえで貴重であろう。

(1・2) 鉄地金鋼張りの磯金具で、周縁の一部を欠失するが全形をよくとどめる。手法・法量の類似から対になるものとみてよく、3が後輪護金具と考えられることから、3と同一鞍橋に装着されたものと思われる。上面にややふくらみをもつ5mmほどの金鋼張り鉄地に、磯金具を置き紙を付す。

(3) 鉄地金鋼張りの後輪の磯金具で1・2と同形のもの。軽は鉸具を欠失し座金のみ残存する。

(4) 二条線づくりの引手。

(5) 直径10cm前後の円形品の破片である。上面は面取りが施されているが、下面は剥離した状態で蒲鉾形断面をしめす。

(6・7) 鉄小札で、6は長さ5cm、円頭形をしめしやや反りをもつ。

(8) 破片の円周・傾斜・紙の間隔などから横切板鉄留胃と推定される。

(9・10) 横切板鉄留短甲と推定される。両者とも側縁は右斜めをしめすが、円周カーブは弱く、胴上部にあたるものであろう。

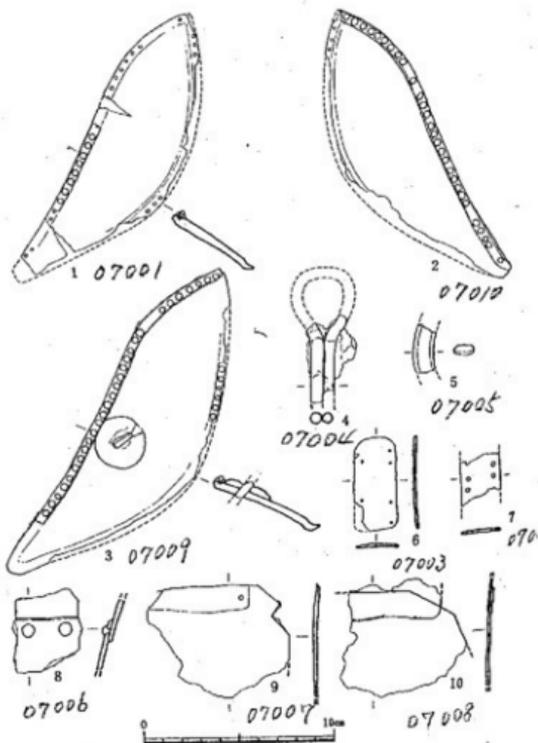


Fig. 96 かけ塚山古墳群出土遺物実測図 (縮尺寸)



Fig. 97. かけ塚山古墳群全景 (昭和32年11月撮影) 1886



Fig. 98. 石室 (かけ塚山古墳群) 1884

第IV章 F地区の調査

1. 概 要

F地区は福岡市東区蒲田字祝田、字沖田に位置する標高11~14mの水田地帯である。

当地区は、九州縦貫自動車道福岡東インターチェンジと国道201号線福岡東バイパスの建設地にあたり破壊されるため発掘調査を行なった。福岡平野の東部で比較的古代の条里制がのこっているのではないかという予想のもとに実施した。当水田地帯は大正年間に耕地整理が行なわれ、現在の農道の大部分は、その折に取り付けられている。また、北方にある台地（蒲田遺跡A地区）の西端部を削り、水田に客土したとのことで、発掘調査の途上で上層から黒曜石片、弥生式土器片、磨製石斧、須恵器片、青磁器片などが出土した。

発掘調査は農道に平行に、長さ200m余、幅3~4mのA・Bトレンチと、これに直交する長さ360m余、幅3mのCトレンチを設定し、1973年（昭和48年）1月16日に開始した。発掘調査に際しては湧水に対処するため、各トレンチに幅5mの壁を残しながら作業をすすめた。そのためA、B、Cトレンチを掘り進め、No.1小トレンチ名を付して発掘作業の助けとした。

発掘調査は、Aトレンチを掘り進め、No.1小トレンチの北側に溝状の落ち込みと集石遺構が確認されたため、No.3、No.5各小トレンチの発掘と並行してBトレンチを掘り進めた。その結果、A-No.1トレンチの西のB-N2トレンチの北側に溝状の落ち込みを確認した。さらにA-No.1トレンチとB-N2トレンチの溝状遺構の延長線上で、Bトレンチの西側にトレンチを入れてみたが、溝状遺構は確認できなかった。発掘期間の関係もあって、すぐにCトレンチの発掘調査にとりかかった。A・Bトレンチと同様に5mの壁を残しながら掘り進めたが、特別注意をひくような遺構は確認できなかった。2月28日調査を終了した。

石器について（付図Fig.10-10・11、Fig.15-2）

10の石器は、IV層出土の石核で、一打による平坦打面と自然面を持つ。打撃方向は、4方向を持ち、一面をのぞいてその打面はすべて自然面である。一定方向による剥離工程のため背面は、自然面を持つ。この石核は一定方向による連続的に回転してゆく剥離方法を持つ。つまりこの石核の場合、時計回りの回転により行なわれ、終了剥離は、下位からの剥離である。ネズミ色の色彩を持つ黒曜石である。風化は、かなり進んでいる。11は、III層出土の台形様石器である。縦長割片素材とし、主要剥離面側と表面からの打撃によって両端を折断し、片面に二次加工を加えている。刃部は、片方からの細かな剥離によって刃部を形成している。形態的には大型の台形様石器である。2は、滑石製の楕円形石斧で断面は、楕円形を示す。製作工程は、第4工程である。刃部には滑石製という軟質の石質であるため剥離痕が認められる。表面は、荒削状態、裏面は細かな敲打がみられる。

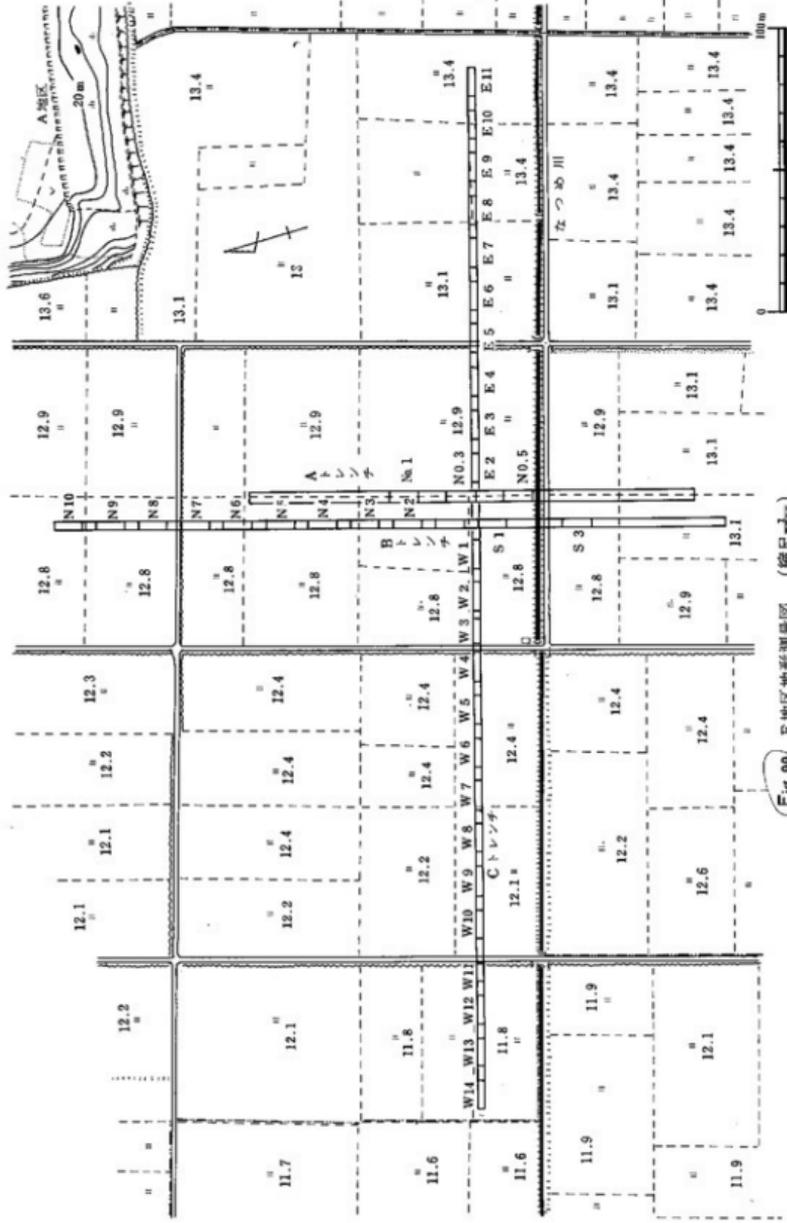


Fig. 99 F地区地形測量図 (縮尺 1:500)

全(保)内(一)ニシテ

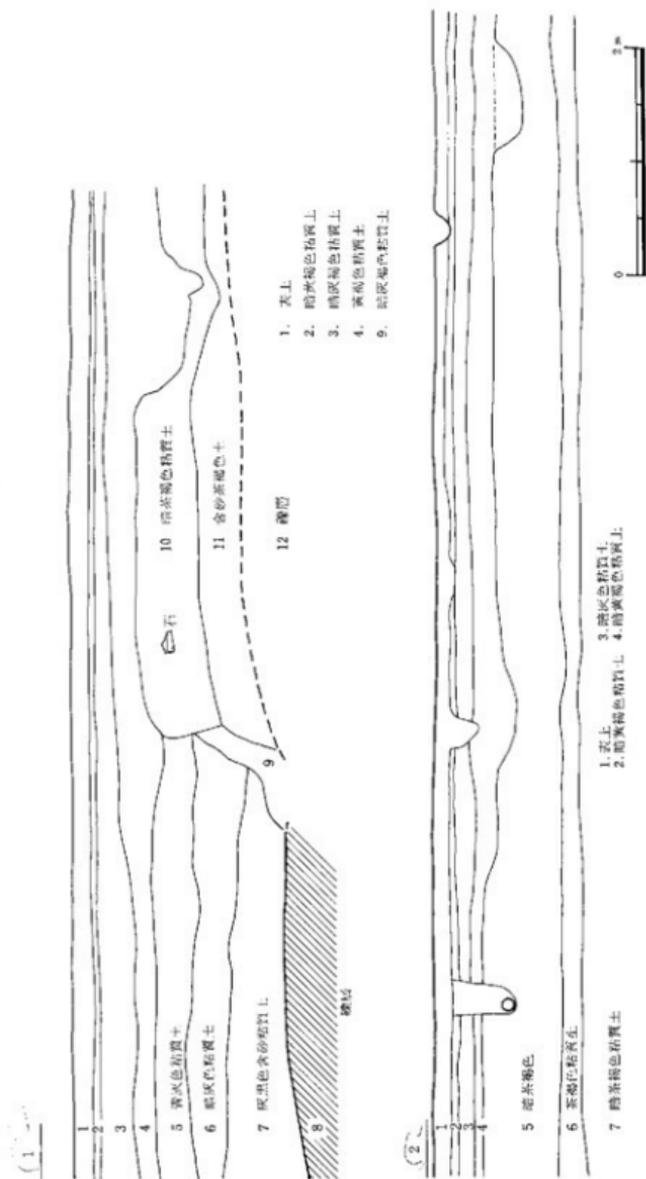


Fig.100 F地区トレンチ土層図 (1. A-Na1トレンチ 2. B-N2トレンチ) (縮尺画)

2. 土層と遺構

土層の状態は調査地点によって多少の相違はあるが、1～4層までの層序関係はほとんど同じで、下記のとおりである。

- 1層 表土（耕作土）
- 2層 暗黄褐色粘質土（鋤床層）
- 3層 暗灰褐色粘質土（暗灰色あるいは、暗灰黒色粘質土）
- 4層 黄褐色粘質土（地点によっては灰色あるいは灰白色粘質土）

5層以下は、地点によって土層にかなりの違いがみとめられるが、全体を通じて現在の地表面下約2mからは砂層になっている。

A-Na1 トレンチにおいては、5層・6層が青灰色を呈した粘質土層で、以下は砂層へと続いている。溝状の遺構は現水田面下約60cmの10層の暗茶褐色粘質土層から掘り込まれ、上面の幅約1m、深さ約50cmである。A-N0.1 B-N2で検出された溝状遺構は、完全に発掘調査することができなかったが、方向は現在の区画と一致し、遺跡の中央を流れる「なつめ川」とほぼ平行に走っていると考えられる。これらのことから、この暗茶褐色粘質土層が、ある時期の水田面と何らかのかかわりあいがあったと考えるが、時期を決定できるような伴出遺物はなかった。

集石遺構

A-Na1 トレンチで検出された遺構である。第10層の暗茶褐色粘質土中において、大小さまざまな河原石を約1m四方の範囲にわたり、平らに、堅固に敷きつめてある。石の下からは、灰と木炭が検出されたが、直接、時期を決定できるような伴出遺物はなかったが、層位関係からみて溝状遺構との関係が考えられる。

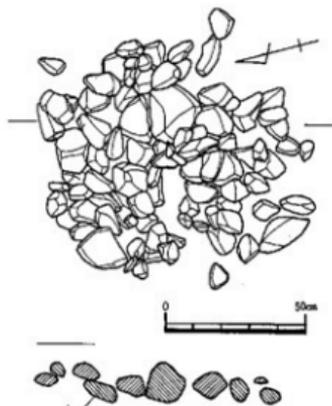


Fig.10) F地区集石遺構実測図（縮尺品）

第Ⅶ章 石器について

1. 石鏃形態分類について

蒲田遺跡出土の石鏃総点数は、427点である。前にものべたごとくこれらの石鏃は、多種多様な形態を持つわけであるが、その特徴的な形態を必ず点の一つの基準として、素材・形態・技術・先端部・脚部・脚部挾込部を総合し、特に形態と技術と脚部挾込の形態・先端部の状態に重点をおき分類基準とした。なおこの分類は、現在まで発表されている石鏃の形態分類とは、多少異なるものである。

石鏃Ⅰ型→三角形の形態を持つ。このⅠ型は、脚部・先端部の形態で3つに区分できる。

(付図Fig.4・7・9・10・12)表参照。

①脚部にわずかな挾込部がみられ、先端部は尖るものが主体的。15点。②脚部が直線的な形態を持ち、先端部が尖る。12点。③脚部が丸みを持つ形態で先端部も丸みを持つ。12点。

石鏃Ⅱ型→割片鏃と称せられる石鏃で挾込部の形態で5つに区分できる。(付図Fig.4・7・9・10・12)表参照。

①周辺のみが剝離がみられ、脚部挾込部は楕円形に近い形態。2点。②片面はすべて二次加工がなされるが、裏面は、わずかな剝離しかみられない。1点。③脚部がふぞろいの形態を必ず脚部と称せられるもので、挾込部がわずかなものと深く挾込部のあるものがあり、先端部は、尖る例が多い。11点。④片方が破損しているがむしろ脚部がふぞろいの石鏃である。ただこの石鏃が未製品なのか、また別な器種かな、不明である。7点。⑤割片の部分で大部分で形態的にはふぞろい。5点。

石鏃Ⅲ型→鋸歯鏃(有刺形鏃)を第Ⅲ型とした。この中で4つに区分できる。(付図Fig.4・7・10・12)表参照。

①先端部と脚部がほぼ半々を示し脚部挾込は深く梯形を示す。脚部は内彎し脚部末端が丸みを持つ。9点。②①とほぼ似かよっているが脚部形態が①より挾込部が深く末端部が尖る。5点。③①②と同様の形態を持つが脚部が平坦面を持つ。3点。④先端部のみの資料であるが、脚部から先端部にかけてはそく、断面は丸みを持ち、先端部は鋭利である。12点。

石鏃Ⅳ型の特徴は、脚部が全体の長さの約2分1ほどあり、先端部の鋭利な点を上げることができ、これは、長脚鏃と称せられているものである。細分すると3つに分けられる。(付図Fig.10・12)表参照。

①脚部が内彎する形態を持つが、脚部と脚部との境でわずかに外彎するため先端部の角度は鋭角になる。脚部は丸みを持ち挾込部は、長楕円形を示す。5点。②脚部の挾込部が3分の2ほどで、脚部は直線的な側辺を形成し、長楕円形の挾込部を持つ。1点。③脚部挾込形態が、

梯形を示す点と、側辺部が直線上を示す形態で、扶込が2分の1ほどをしめる。2点。

石鏝V型→従来線形と称せられてきた石鏝である。細分すると3つに区分できる。(付図Fig. 4・9・10・12)表参照。

①脚部の側辺が内彎する形態を持ち、脚部の末端部は、平坦である。5点。②脚部の側辺は直線的であるが、脚部の末端部が平坦と扶込部が円形を示すため末端が広い状態を持つ。6点。

③側辺部は、直線的であり、脚部は、尖る形態を持つ。2点。

石鏝VI型→この特徴は、脚部にみられ全体の5分の1程度しかなく、脚部と胴部との境には、扶込部があり、脚部扶込は、楕円形である。先端部は、尖る形態か丸みを持つ形態であるが、脚部と胴部の境にわずかな扶込があるため胴部は、ふくらみをもつ形態となる。5点。

(付図Fig. 4・10・12)表参照。

石鏝VII型→この特徴は、先端部・脚部・全体の形態にある。先端部は丸みを持ち、脚部扶込部は、楕円形か梯形を示す。全体的な形態として横幅の広い寸脚であり、断面形態は、薄いレンズ状を示す。(付図Fig. 4・10)表参照。8点。

石鏝VIII型→VIII型の特徴は、扶込部の中央に小さな舌を持つことが特徴である。形態的には、わずかな扶込部を持ち先端部は丸みを持つ。(付図Fig. 4・7)表参照。4点。

石鏝IX型→細石鏝をIX型とした。(付図Fig. 4)表参照。2点。

石鏝X型→この特徴は、脚部がふぞろいで、従来扁脚鏝と称せられる石鏝。(付図Fig. 4・7・9・12)表参照。12点。

石鏝XI型→形態的には、二等辺三角形に扶込がある状態を示す。脚部扶込部は、梯形を示す。先端部は、尖る形態。細分すると2区分。(付図Fig. 4)表参照。

①脚部側辺が内彎する形態を持ち、脚部末端部が丸みを持つか尖る。10点。②脚部側辺が直線的であるため横に広い形態を持ち、末端部は、尖る形態を持つ。8点。

石鏝XII型→この石鏝は、脚部扶込部に特徴があり、形態的には、二等辺三角形を示す。脚部扶込部は、三角形を示し、わずかな扶込しないため横幅の広い形態(付図Fig. 4・10・12)7点。

石鏝XIII型→大型石鏝で、脚部が全体の3分の1未満で、脚部扶込部が梯形を示す。横幅が広く、先端部は尖っている。(付図Fig. 7・10・12)表参照。9点。

石鏝の破損部分について

石鏝のどの部分が破損しているかという問題が生じた時の資料にその部分と点数を記しておきたい。①完形品76点、②先端部のみ破損22点、③脚部のみ破損52点、④先端部、脚部破損22点、⑤半割状態17点、⑥胴部中途より、下部破損43点、⑦先端部と片方の脚部破損34点、⑧片方の脚部のみ破損81点、⑨脚部(片方)のみ現存80点、総計427点。また先端部と脚部との破損の数は、先端部の破損78点、脚部の破損176点である。

折・切断剥片と台形状石器・台形様石器について

従来、旧石器時代の遺物の中で特に台形石器製作過程においてタルドノア技法か、上場技法と称せられる折断技法が問題にされたことがある。しかし上場技法の場合、接合する資料を示し、その折断した剥片が、プロト台形石器としてとらえられると考えている。これに対しタルドノア技法は、日本においてその資料は発見されていず、その存在は、不明確である。しかしながら製作技法上の切断・折断技法の有無に対してあまり重要視されていないのが現状であろう。この問題を一つのテーマとして発掘調査を行なってみた。その結果、折断剥片と切断剥片の二種類に区別することができた。折断剥片の場合、その折断方法は、剥片の縁から打撃による折断が主体であるが、裏面・横位からの打撃による折断もみられる。つまり折り取るといっても打撃によるもので（これは実験の結果によるもので、目的的に折り取ることは可能であった）決して打撃なしでは、目的的に折断することは不可能であった。また、裏面・横位と正面からの打撃による面を観察してみれば、正面であれば直角に近い状態である。が、裏面、横位からのものは、step-flaking的な状態が残ることが観察できる。一方切断剥片を観察してみるとノッチ状の剝離がみられ切断剥片の断面を見るならば両端に剝離が認められる。つまりノッチのはいった部分に目的的に打撃を行なって折り取る方法が観察できる。以上のことから簡田遺跡の場合明らかに折・切断技法が存在したことが明らかになった。しかし切断技法が、タルドノア技法と同一のものか否かは、より多くの資料により判断する必要がある。

台形状石器→折・切断剥片の中で、両端を切・折断した剥片で台形の形態をがすものがある。

これをプロト台形石器として規定されるか否かという問題が提起できる。これを一つの技法として台形石器の箱中に組み入れる場合、その刃部となる部分を観察しなければならぬ。刃部の部分に使用痕の対こぼれがあるか否かが問題になる。そこでここでは、台形石器の箱中に組み入れ、台形状石器と称しておきたい。

台形様石器の形態分類（付図Fig.-4・5・6・7・8・9・10・11・13）表参照

- 1類→枝去木型に類似する形態を持ち、横長剥片を素材とする。側面形成は、bluntingではなく薄く削ぐ方法である。刃部の部分は、素材の面をそのまま残す。
- 2類→大型に属し、側面形成は、大まかな剝離によるものと折断した面を持つ。
- 3類→両側面にbluntingを加えた小型の台形石器。縦長剝を素材としている。
- 4類→片面は、blunting、他の片面は、切・折断面のままで、小型と中型の台形様石器。
- 5類→両側面とも切・折断した状態で、形態的に台形石器に類似する。台形状石器と称した石器である。ただ基部の部分と考えられる部分には、まったく使用痕の対こぼれはなくすべて刃部と思われる部分にある。また基部と思われる部分は、何の加工も認められない。

石核と細石核・再生剥片の区分とナイフ形石器

石核について

石核は大別して3つに区分ができる。(付図Fig.7・8・10・12)

a類→8-50で示すごとく上下に一打による平坦面を持つが、下位からの剥離工程は、まったく認められず、すべて上位からのものである。この意味は、剥片の状態をあらかじめ規定するための下位の打面か、もしくは、終了形態が上位からの剥離のみであったかの2つである。またこの石核は、背面にも剥離工程を行なった形跡を持ち、この背面上下の平坦打面を持つが、その部分は、正面観からみた場合両左右に打面が形成されている。つまりこの石核は、正面の剥離工程終了後に背面の剥離工程を行なっている。

b類→打面がすべて平坦打面(自然面か一打による平坦面)であり、剥片の離面状態は、打面から行なわれている。しかしこれらの石核から剥離された剥片は、決して良質のものではないが1つの法則性を持った剥離がなされている。つまり左右の剥離から中央部への剥離という1つのパターンがあり、側面形成もすべて打面からによる剥離がなされたことを物語っている。

(付図Fig.7-11・59、10-51、12-99)

c類→打面は、一打か自然面による平坦打面であり、一方向からの剥離工程をくり返すため背面は自然面を持つ。剥離方向は、3方向が示されているが、その中でも上下の剥離方向が主体をしめる。つまり下位から横位、そして上位からの剥離工程をくり返すため側面形成はまったくみられない。これも1つの法則性を持った石核といえる。(付図Fig.7-10,8-50,53,10-10)

以上3類のほかには石核再生剥片があるが、この石核再生剥片をみると1つの法則性を持った石核が存在していたことを物語り、それもBladeを剥離した可能性を持つ石核が存在していたことが明らかである。

細石核について

細石核を形態的に区別すると、舟底形細石核(半舟底も含む)と角錐形(角柱形も含む)の2つに区分できるが、細石核再生剥片からみて舟底・半舟底の形態を持つ細石核が主体的。また残核からも同様の結果がえられた。

再生剥片について

再生剥片には、細石核再生剥片と石核再生剥片があるが、どの部分を再生された剥片であるかについては、両者は、同一の再生がなされている。この再生剥片を区別すると4つになる。

1. 打面再生剥片→打面の再生を目的として目的的に剥離された剥片である。34点出土しているが、この剥片が剥離された打撃方向は、石刃剥離離面に対して横位・正面・背面の3か所からの剥離方向を持ち、剥離角度は、打面を一直線上におくならば斜めの角度を持つ。1つの疑問点は、打面再生は、何を意味するものかであろう。打面が自然面を持つ例、一打による平坦

打面を持つ例、調整剥離はあるが、step-flakingによって打面からの剥離が困難である例の場合で、確実な剥離工程が不可能な状態になった時に行なうことによって新しい打面を形成しながらおこなっていると考察できる。

2. 側面再生剥片→側面の形成・再生を目的に剥離された剥片。

剥片が剥離された打撃方向は、下位・打面・横位と3方向から剥離されている。この側面再生剥片の剥離された目的は、側面の自然面を剥離し、新しい側面を形成する場合と石刃剥離工程で新しく側面を形成しその部分にも石刃剥離を行なっていくための形成であろう。

3. 正面再生剥片→step-flaking等により次の剥離が困難をきたした場合。

この剥片の目的は、step-flakingによって生じた剥離面を新しく再生するためのものである。剥離の打撃方向は、打面、下面、横位方向から剥離されている。

4. 残核→上記の1～3までの再生剥片が剥離された石核で再生の困難なものである。また末端部の残核もある。これも一種の再生剥片と考えられるものであろう。

ナイフ形石器について

38点のナイフ形石器が出土している。形態的には、多種多様であるがその特徴についてのべることはさけ、層的に考察するならば、A地区I層より17点出土しているが、1点だけ中型に属するだけで、後は小型である。A地区II層下面に小型が2点出土し、II層上面には出土していない。III層でも2点の小型が出土している。E地区のI層から小型が3点、II層上面から1点、下面6点でいずれも小型に属する。III層のナイフ形石器は4点出土しているが、これらは、1点をのぞいて中型に属する。このことからE地区のIII層とII層下面との素材・技術・形態の相違が明らかである。A地区は、II層下面、III層とも小型でありE地区はどの相違はみられない。

磨製石器と磨製石製品について

磨製石器は、石斧・石匙・磨製石鏃が各地区から出土している。石斧は、大形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・楕形石斧・蛤刃石斧・扁平両刃石斧の5つに形態的に区分できる。石匙の形態は、すべて刃部外形を示す。ただ1点未製品があるが、この製作工程は、一部研磨が開始されていることから、研磨にはいる直前の石器であろう。磨製石鏃は、2点とも全磨製で、朝鮮式磨製石鏃と称せられる石器である。磨製石製品は、紡錘車・砥石がある。このほかすり石と考えられる石器と、扁平礫の両端に挾込部を持つ石錘がある。

E地区出土石器総数

E地区出土石器で、表に記入していない石器は、I層の不定形剥片1538点・折断剥片94点・切断剥片20点、II層上面では、不定形剥片106点・折断剥片64点・切断剥片25点・石鏃状石器1点、II層下面では、不定形剥片14点・尖頭器1点・折断剥片15点・切断21点、III層では、不定形剥片87点・折断剥片137点・切断剥片11点の合計2134点で総数は、7038点である。

Tab. 30 蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覧表

遺跡名 地区	細石刀	細石核	細石核 再生剥片	石核	石核再 生剥片	ナイフ 形石器	台形 石器	形器	ドリル	石鏃	二次加 工石器	Serra- per	残核	細石 剥片	備長 剥片	小石刀	碎片	計
A地区	143	13	32	25	31	25	24	10	1	246	1066	45	193	21	55	6886	5816	
B地区	2			1		1	1				13	8	5			5	305	341
D地区	2	2		20	1	2	2	1		14	41	4	2	1	1	69	218	
E地区	719	14	15	29	13	15	13	8		167	471	32	9	125	33	69	3172	4904
F地区				1			2				1			2			6	12
計	866	29	47	76	45	43	42	19	1	427	1592	89	9	327	55	130	10438	14291

II層下面とIII層との時期区分

II層下面とIII層との区別は、ナイフ形石器が小型から中型の形態変化と製作技術の多少の相違である。また細石核では、II層下面が舟底形・角錐形を示すのに対してIII層は、半舟底の形態である。台形様石器の出土をみていると台形様石器が出土している層序は、II層下面まででIII層には、まったく認められないことや、石核・石器の組み合わせからみても、層位的にも、時期的に区別される可能性が多分にある。また細石核再生剥片・石核再生剥片よりその剥離技術を考えてみると、これら再生剥片は、P.149で述べたごとく4つに区分が可能であるが、これを剥離技術の点から考察すると、一定方向から剥離した離面を持つタイプと上下二方向から剥離した離面を持つタイプが判明した。また打面形成は、平坦打面のもの・平坦打面であるが剥片を離面する直前に調整を加えたもの・自然面を打面としたもの・調整打面を持つものなどに区別できる。II層下面は、平坦面に調整を加えたもの・平坦打面・調整打面を持ち、III層は、一打による平坦打面・自然面を打面としたものに区別できる。また石核再生剥片・細石核再生剥片の形態から石核復原を考えると、角錐形・半舟底形・舟底形・半円錐形・円錐形が可能である。

A・E地区にみられる石器の出土量に対する考察

旧石器・縄文時代の石器を総合すると石器の総数は、14291点となりあまりにも多量の出土である。それを細分したのがTab. 1・Tab. 28・Tab. 30で示した点数でこの量的な石器数でも1つの考察ができる。また石材として最も多量に使用されたのは、黒曜石(Obsidian)であるが、この黒曜石でも、佐賀県の腰岳、長崎県の東浜・針尾島、大分県の姫島と各地の原産地の黒曜石が使用されている。特に佐賀県の腰岳産は、全石器の90%をしめている。この点と他の多くの資料で考えてみるならば、少なくとも8つの生活の跡が考えられ、縄文時代の石鏃の量、剥片・削片の量からみて石器製造を行なった場所と考察できる。また旧石器時代の遺物量からも生活跡が考察でき、E地区のブロックからも石器製造場所としても考察できる。しかしながらそれらしい遺構の確認は、残念ながらできなかった。この点、粕屋郡の台地(南側)の破壊がおしまれてならない。

打面を持つ例、調整剥離はあるが、step-flakingによって打面からの剥離が困難である例の場合で、確実な剥離工程が不可能な状態になった時に行なうことによって新しい打面を形成しなおしていると考えられる。

2. 側面再生剥片→側面の形成・再生を目的に剥離された剥片。

剥片が剥離された打撃方向は、下位・打面・横位と3方向から剥離されている。この側面再生剥片の剥離された目的は、側面の自然面を剥離し、新しい側面を形成する場合と石刃剥離工程で新しく側面を形成しその部分にも石刃剥離を行なっていくための形成であろう。

3. 正面再生剥片→step-flaking等により次の剥離が困難をきたした場合。

この剥片の目的は、step-flakingによって生じた剥離面を新しく再生するためのものである。剥離の打撃方向は、打面、下面、横位の方向から剥離されている。

4. 残核→上記の1～3までの再生剥片が剥離された石核で再生の困難なものである。また木端部の残核もある。これも一種の再生剥片と考えられるものであろう。

ナイフ形石器について

38点のナイフ形石器が出土している。形態的には、多種多様であるがその特徴についてのべるとはさき、階位的に考察するならば、A地区1層より17点出土しているが、1点だけ中型に属するだけで、後は小型である。A地区II層下面に小型が2点出土し、II層上面には出土していない。III層でも2点の小型が出土している。E地区のI層から小型が3点、II層上面から1点、下面6点でいずれも小型に属する。III層のナイフ形石器は4点出土しているが、これらは、1点をのぞいて中型に属する。このことからE地区のIII層とII層下面との素材・技術・形態の相違が明らかである。A地区は、II層下面、III層とも小型でありE地区などの相違はみられない。

磨製石器と磨製石製品について

磨製石器は、石斧・石槍・磨製石鏃が各地区から出土している。石斧は、大形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・撥形石斧・蛤刃石斧・扁平両刃石斧の5つに形態的に区分できる。石槍の形態は、すべて刃部外形形を示す。ただ1点未製品があるが、この製作工程は、一部研磨が開始されていることから、研削にはいる直前の石器であろう。磨製石鏃は、2点とも全磨製で、朝鮮式磨製石鏃と称せられる石器である。磨製石製品は、紡錘車・砥石がある。このほかすり石と考えられる石器と、扁平礫の両端に抉込部を持つ石鏢がある。

E地区出土石器総数

E地区出土石器で、表に記入していない石器は、I層の不定形剥片1538点・折断剥片94点・切断剥片20点、II層上面では、不定形剥片106点・折断剥片64点・切断剥片25点・石鏢状石器1点、II層下面では、不定形剥片14点・尖頭器1点・折断剥片15点・切断21点、III層では、不定形剥片87点・折断剥片137点・切断剥片11点の合計2134点で総数は、7038点である。

Tab. 30 蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覧表

分類名 地区	細石刀	細石核	細石核 再剥片	石核	石核再 生剥片	ナイフ 形石器	台形 石器	形器	ドリル	石鏃	二次加 工石器	Scrap- er	残核	残片 剥片	横長 剥片	小石刀	砕片	計
A地区	143	13	32	25	31	25	24	10	1	346	1066	45		193	21	55	6886	8816
B地区	2			1		1	1				13	8		5		5	305	341
D地区	2	2		20	1	2	2	1		14	41	4		2	1	1	69	218
E地区	719	14	15	29	13	15	13	8		167	471	32	9	125	33	69	3172	4904
F地区				1			2				1			2			6	12
計	866	29	47	76	45	43	42	19	1	427	1592	89	9	327	55	130	10438	14291

II層下面とIII層との時期区分

II層下面とIII層との区別は、ナイフ形石器が小型から中型の形態変化と製作技術の多少の相違である。また細石核では、II層下面が舟底形・角錐形を示すのに対してIII層は、半舟底の形態である。台形様石器の出土をみても台形様石器が出土している層序は、II層下面まででIII層には、まったく認められないことや、石核・石器の組み合わせからみても、層位的にも、時間的に区別される可能性が多分にある。また細石核再生剥片・石核再生剥片よりその剥離技術を考えてみると、これら再生剥片は、P.149で述べたごとく4つに区分が可能であるが、これを剥離技術の点から考察すると、一定方向から剥離した離面を持つタイプと上下二方向から剥離した離面を持つタイプが判明した。また打面形成は、平坦打面のもの・平坦打面であるが剥片を離面する直前に調整を加えたもの・自然面を打面としたもの・調整打面を持つものなどに区別できる。II層下面は、平坦面に調整を加えたもの・平坦打面・調整打面を持ち、III層は、一打による平坦打面・自然面を打面としたものに区別できる。また石核再生剥片・細石核再生剥片の形態から石核復原を考えると、角錐形・半舟底形・舟底形・半円錐形・円錐形が可能である。

A・E地区にみられる石器の出土量に対する考察

旧石器・縄文時代の石器を総合すると石器の総数は、14291点となりあまりにも多量の出土である。それを総分したのがTab. 1・Tab. 28・Tab. 30で示した点数でこの量的な石器数でも1つの考察ができる。また石材として最も多量に使用されたのは、黒曜石(Obsidian)であるが、この黒曜石でも、佐賀県の腰岳、長崎県の東浜・針尾島、大分県の姫島と各地の原産地の黒曜石が使用されている。特に佐賀県の腰岳産は、全石器の90%をしめている。この点と他の多くの資料で考えてみるならば、少なくとも8つの生活の跡が考えられ、縄文時代の石鏃の量、剥片・削片の量からみて石器製造を行なった場所と考察できる。また旧石器時代の遺物量からも生活跡が考察でき、E地区のブロックからも石器製造場所としても考察できる。しかしながらそれらしい遺構の確認は、残念ながらできなかった。この点、粕屋郡の台地(南側)の破壊がおしまれてならない。

第VIII章 おわりに

蒲田遺跡出土の石器について明確にできた点とこれからの問題点にふれてみたい。

1. この遺跡は、花園岩風化土よりなる土層である。ゆえに精製土層と称しているが、それは、肉眼的、体験的結果によるもので学術的な研究の結果ではない。
2. 旧石器時代と縄文時代の遺物包含層を把握できた。
3. 時間的には、2つ考えられるが、石器を一時期多量に製作した可能性を持つ遺跡で、石器出土総点数は、14 291点出土している。
4. 後期旧石器時代終末期の遺物包含層をA・B・E地区の3か所で把握でき、縄文時代の包含層も同時に把握できた。
5. 後期旧石器時代の終末期の場合に、A、E地区とも2つの時期を持つ可能性がある。
6. 折・切刃剥片のその実態を明らかにできたと同時に規定の問題が生じてきた。
7. 石核再生剥片・砥石核再生剥片の細分化（打面・側面・正面再生剥片）と規定の問題。
8. 台形様石器と台形状石器の存在と規定の問題。
9. 石鏃形態分類の規定問題。

以上が蒲田遺跡の石器について明確になった点であるが、このほかにも、石器の組成について、石器分布のブロックについて、石器の詳細な説明、出土遺物の実測図、周辺関連遺跡との対比による編年の位置づけ等多くの問題と取り組むたかったが、この報告書では、より多くの資料をのせることを主目的としたため、これらの多くの問題は、後日機会があれば述べてみたい問題ばかりである。

弥生時代の遺構・遺物は、A・D・E地区で検出されたが、いずれも都送に関連するものである。台地西端部に位置するA地区第1地点では、L字状の溝状遺構に囲まれた部分から、甕棺墓・土塚墓が発見され、台地のほぼ中央部には、有茎磨製石鏃を出土した土塚墓をはじめとして数基の土塚墓、台地東部のD地区でも、甕棺墓と土塚墓が検出された。したがって同一台地上に3か所の墓地が存在していることが知られた。台地中央部の土塚墓群の時期については、有茎磨製石鏃の類型より、弥生前期末という一応の推測が可能であろう。第1地点の甕棺は、中期中葉・中期後葉・後期前半の3時期にわたっている。これに対し、D地区の甕棺は、中期中葉・中期後葉の2時期で、後期前半まで下がるものはないようである。したがって、すくなくとも弥生中期中葉から後葉にいたる時期に、台地の東西両部に、墓地が形成されていたことになる。第1地点、D地区ともに、祭祀と思われる遺構が付随しており、特に、第1地点では、溝中より多量の遺物が出したが、これらは、甕棺の示す時期と差はなく、ある一定期間の行動結果としてとらえられよう。また、これがどのような意識の反映であるか、またその意識の反映が、甕棺墓の内、どのような現象として表出されるか問題となろう。したがってA地区第1地点甕棺、土塚墓とD地区甕棺、土塚墓とは、結果としての差としてとらえるばかりでなく、意識の差として把握されねばならないであろう。

古墳時代の遺構は、蒲田1・2・3号墳に代表されるが、これらは、すでに詳述したので、ここでは、古墳時代の住居跡とその出土遺物について記す。住居跡は7基検出され、第5・6号住居跡で切り合い関係がみられる以外は、遺構の重複はない。遺物は、第1・2・4・5・6号住居跡より多量に出土しており、碗、杯、甕、壺形土器の器種が知られ、同一器種における分類は、各住居跡出土遺物にも矛盾なく該当させることができた。特に良好な須恵器を出土した第2号住居跡では、土師式土器の器種も豊富で、共伴した須恵器から、ある程度の年代推定が可能である。須恵器では、遅くとも5世紀終末から6世紀初頭が考えられよう。後世の柱穴が重複していたために、住居跡に伴う柱穴と後世の柱穴とが混在し、住居跡の主柱穴の認定には困難をきわめた。また住居跡内においても、主柱穴の存在が疑問とされるものがあり、上部構造、さらには住居跡外の柱穴も注意する必要がある。

中国産磁器類を出土する遺構を、敷石・溝・集石遺構などに分けて記したが、前述したように、構造・機能的に関連していることが、発掘調査の進展に伴い明瞭となった。南北敷石・東西敷石は、ともに両側に小溝を持つ（東西敷石の東半分は、南側の小溝はない）が、南北敷石東側溝は、北より右まわりに、東西敷石南側溝→第II溝→集石→南北敷石東側溝とつながり、南北敷石→東西敷石→第II溝→集石、東西溝北側溝→第I溝→集石遺構と、各々つながる。これらの遺構は、結果としての関連性が認められるにすぎず、その性格、機能（意識・原因）についてはならぬ触れることはなかった。南北敷石は、東西敷石が平坦部をなすのに対して、蒲鉾状に、中央部が高くなっている。発掘時は、敷石両側部にも中央部敷石と同一レベルで、多量の石が存在していた。さて、敷石遺構の機能であるが、単なる区画とするか、あるいは区画の意も合わせ持つ道路、さらには、溝などが考えられる。これら種々の推測は、各々単独にありえず、またその推測の肯定・否定両面の性格を持っており、単一的には解明しがたいであろう。たとえば、台地上における区画とすれば、その対象とする・なるものの存在を明確にする必要がある。敷石を溝とすれば、当然のごとく排水という機能が最優先せねばならない。しかし、敷石の両側には小溝を持っており、敷石遺構自身には、排水の機能はなく、また、敷石の必要性もない。ただ、敷石遺構の両側溝は、充分に排水機能を持っている。特に東西敷石の北側溝は、東西両端部が高く、D-24グリッドにむかって低くなり、北溝へのびており、明らかに排水を目的としている。また道路とするには、石に高低があり、また東西敷石は、台地と並行しており、敷石部も平坦であることから、道路の可能性はあるが、南北敷石には、その積極的な資料を欠く。いずれの説も、推測の域を出るものではない。敷石の性格、機能については、決定的な説はなく、類似遺跡の増加に期待せねばならないが、遺構の規模・石の量などから、遺構掘削時には、集中的な労働力を必要としていることは明らかである。どの説にしても、敷石遺構のみを説明しうるにすぎず、本遺跡の全体におよぶところの性格、機能規定とは言いがたいのではあるまいか。中国産磁器類など多量な遺物は、敷石・集石などの遺構に関連する

別な遺構の存在を推測させるが、わずかに建物2棟を検出したにすぎない。しかし柱穴群の密集や、盤石などの状況からさらにその数は多かったものと思われる。

中国・朝鮮産磁器類は、白磁を5類、青磁を8類に分類した。敷石・集石・溝状遺構は、これら分類された磁器類のほとんどを持っており、蒲田遺跡の特徴と言え、また越州窯産の青磁を1点しか持たないことも特徴としてあげねばならない。特に高麗天日の類は優品で、遺構の時期推定に貴重である。宋銭の出土例は、多くの遺跡で知られ、時期推定の有効な遺物であり本遺跡出土の崇寧重寶も、柱穴群、さらには敷石遺構などの上財を指す一資料であろう。したがって、本遺跡の時期は、12世紀初頭鑄造の崇寧重寶、14世紀中ごろから製作されたという黒高麗、明代の青磁類、さらに井戸状遺構出土の上筋皿・青磁などから、すくなくとも12世紀から15世紀の時期が考えられる。

このように、出土遺物から、ある程度の年代が推測されえるが、あまりにもその幅が大きく各遺構・遺物ともにさらに細かな分析・考察等を必要とし、文献的な裏づけ、周辺遺跡との関連など、その背景も問題とせねばならない。しかし、本遺跡のある多々良平野周辺については意欲的な注目すべき調査・考察も行なわれているが、西の早良平野、福岡平野に比較して、極端に少なく、いまようやくその端緒についたばかりといえる。したがって本遺跡の性格は、地域・地方史と遊離した関係で語られるにすぎず、いましばらく類例遺跡の増加を待ちたい。

昭和47年4月から開始した発掘調査は、昭和48年8月に終了した。1年5か月という長期間の発掘作業であったが、建設工事と並行しての作業であったために、A・D・蒲田1号墳と各地区同時に着手するという不規則な作業をしいられ、各地区で原則とした全面発掘・最深部までの追求発掘も、やむなく断念せざるをえないことばかりか、十分な検討を加えての発掘作業をも許さない状況もあった。また、資料整理・報告書作成時にも、各々が新たな遺跡の発掘調査を担当することになり、本報告書作成にあたっての共同討議に徹底さを欠き、用語・内容の不統一・重複という結果となった。これは担当者の怠慢でもあり、本市の文化財行政の実態でもある。さらに印刷費の高騰も影響して、ページ数に著しい制限が加わり、遺構・遺物の説明、考察に多くの枚数をかけることができなかつた。しかし、報告書という目的から、事実の報告につとめ、このため遺物台帳の裏とできるだけ多くの実測図とを組みあわせることにした。この方法は、窮余の一策という感がないでもないが、一試行として認めていただければと思う。このような苦言を書くことは、いままでご協力、ご尽力いただいた多くの人たち、そして遺跡・遺物に対して、裏切ることになり心からお詫びをし、反省したいと思う。かくして九州縦貫道は、3月13日に開通し、蓮華草につつまれていたあの静寂な蒲田遺跡は、いまはもうどこにもない。しかし、文化財行政、とくにその活用問題は、いまこそその出発にあり、決意を新たにしていく。

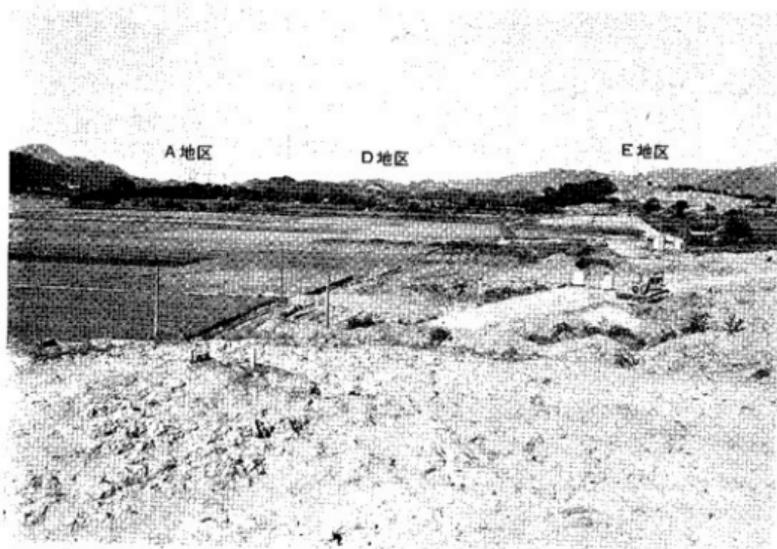


圖 版



1. 蒲田遺跡全景 (航空写真) 昭和47年8月撮影

2903



2. 蒲田遺跡遠景 (西尾山古墳群より)

2904



1. A地区第1地点全景



2. A地区要棺墓出土状况(第2~4·6号要棺墓)



1. 第1号甕棺墓 1140



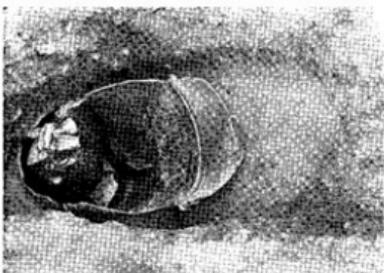
2. 第2号甕棺墓 1142



3. 第3号甕棺墓 1157



4. 第4号甕棺墓 1153

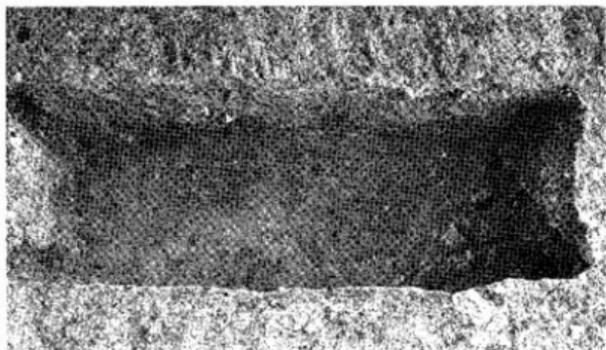


5. 第5号甕棺墓 1155



6. 第7号甕棺墓 1503

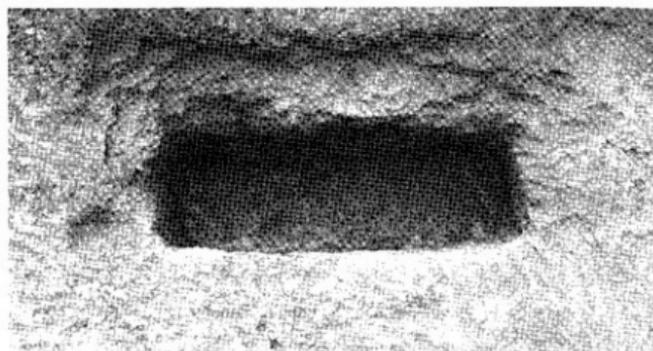
A地区第1地点第1~4・6・7号甕棺墓



1. 第1号土坟墓 (木棺墓)



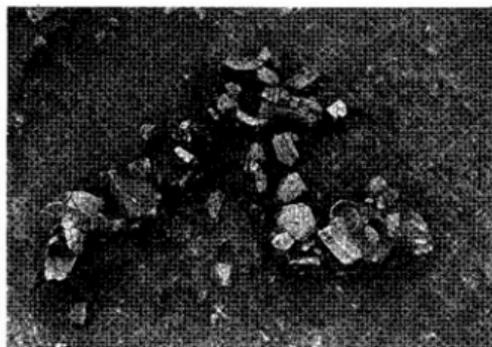
2. 第2号土坟墓



3. 第3号土坟墓



1. 溝状遺構内土器出土状況 (G-5グリッド) 1522



2. 溝状遺構内土器出土状況 (H-5グリッド)

1792

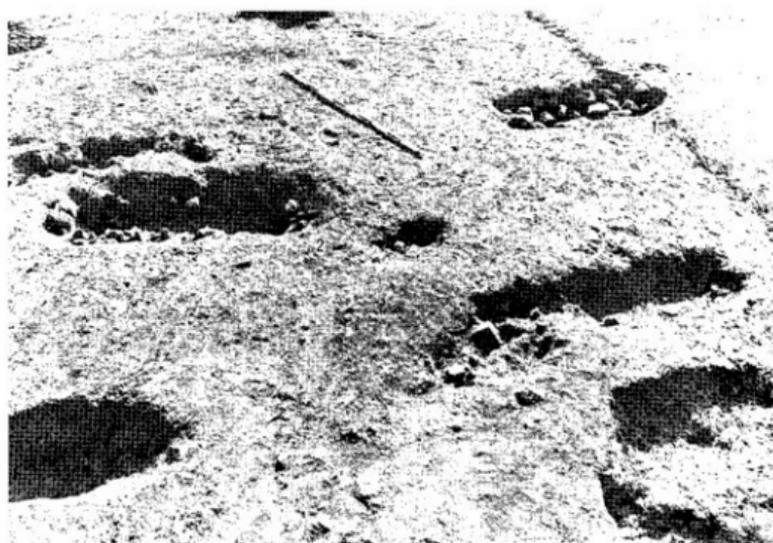


3. 筒形土器 (Y31) 01031

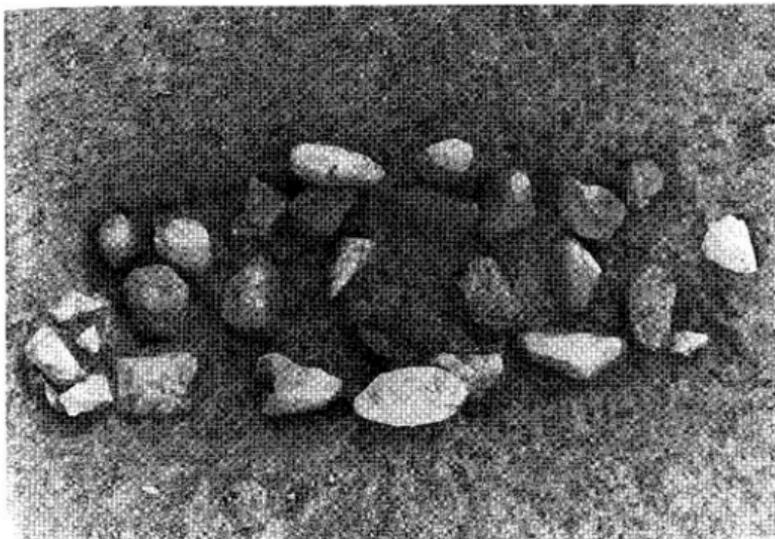
2170



1. A地区第2地点全景(航空写真)



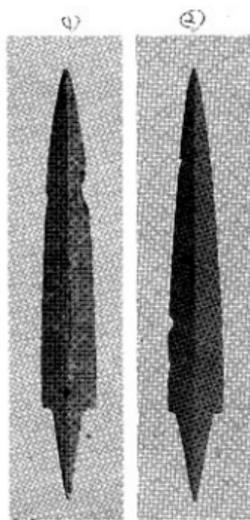
2. A地区第2地点土壇墓出土状況(第1・2号土壇墓)



1. 第1号土坛墓 890



2. 第2号土坛墓内磨製石器出土状况 153



3. 磨製石器

7213/0767

7213/0765



1. 蒲田1号墳全景（発掘調査前）



2. 蒲田1号墳全景（正面は部木八幡古墳群）



1. 蒲田1号墳全景 146



2. 蒲田1号墳南北トレンチ東壁断面 147



1. B地区全景(航空写真)

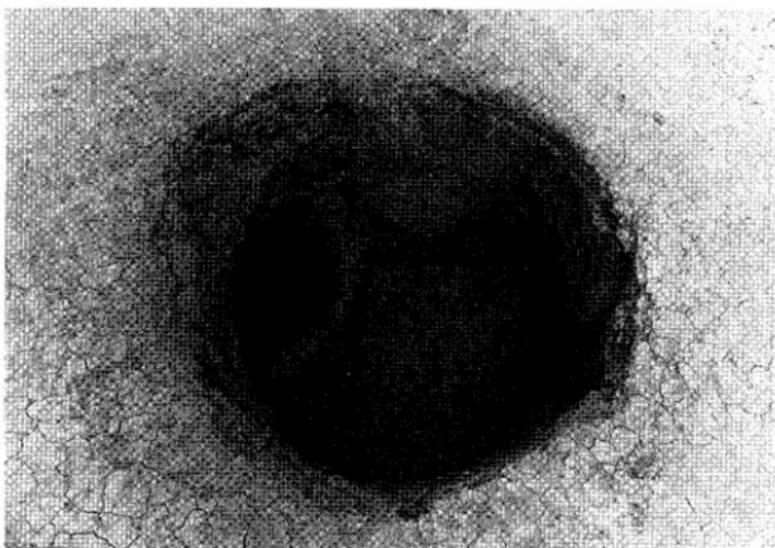


2. B地区遺構出土状況①



1. B地区遺構出土状況②

2898



2. 土埴(47号土埴)

1833



1. D地区全景 (航空写真)



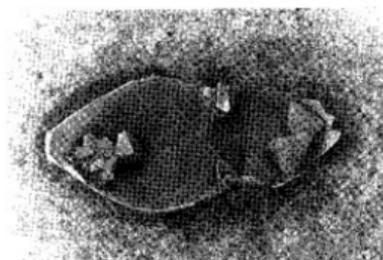
2. D地区瘞棺墓出土状況 (第5～9・12号瘞棺墓)



1. 第1号墓棺墓 1-7



2. 第2号墓棺墓 168



3. 第9号墓棺墓 736



4. 第12号墓棺墓 2172



5. 第13号墓棺墓 113



6. 第14-15号墓棺墓 12-23



7. 第7-8号墓棺墓 556



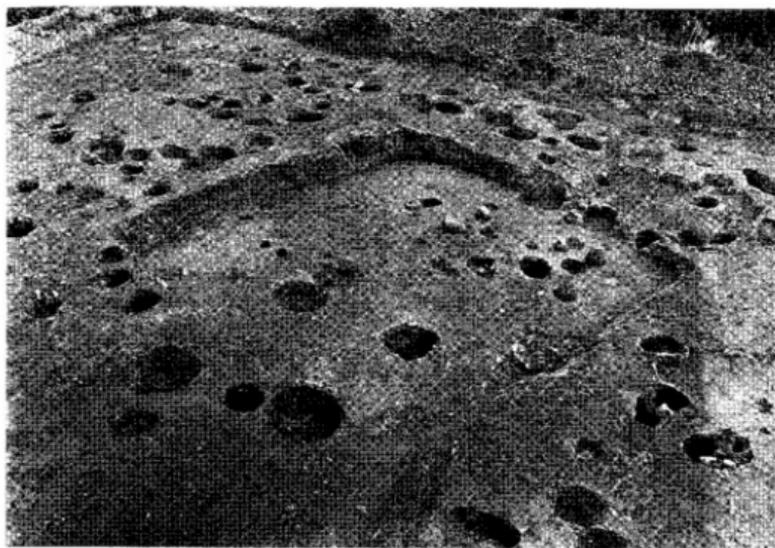
8. 第7号墓棺 (下棺) 01125
2172



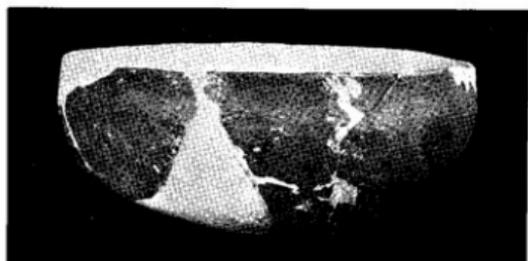
1. D地区住居跡全景①(南より)



2. D地区住居跡全景②(北西より)



1. D地区第1号住居跡 1200



02006

3020 H 6



02012

3015

H 12



02013

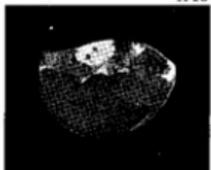
3018

H 13



2. D地区第1号住居跡出土遺物 02093

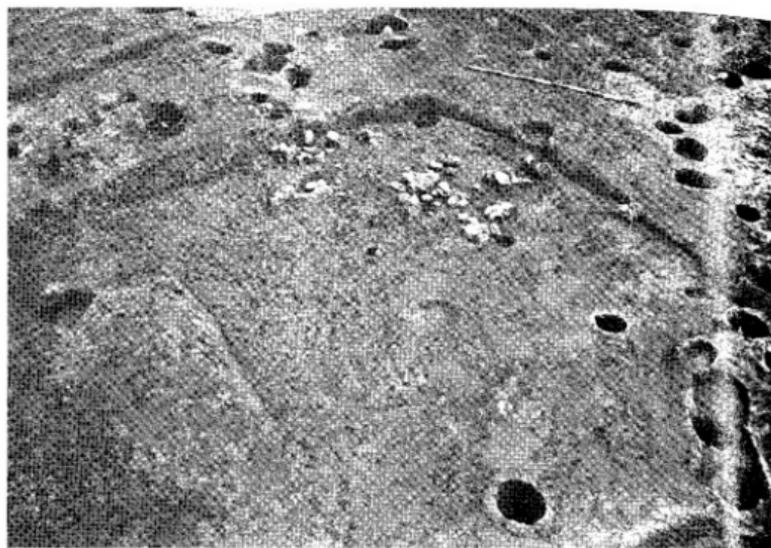
3024 4199



02014

3022

H 14



1. D地区第2号住居跡



2. 2. 1. 1.

S 2

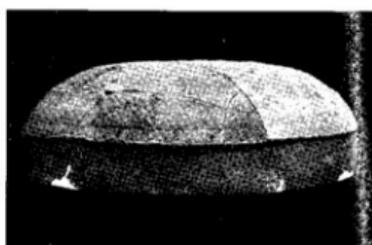


2. 2. 1. 2.

S 3

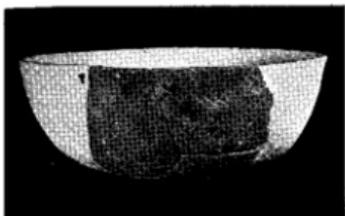


2. D地区第2号住居跡出土遺物 (1) S 4



2. 2. 1. 3.

S 6



02017 2058 H17 ✓



02024 2000 H24 ✓



02018 2050 H18 ✓



02025 2913 H25 ✓



02020 2147 H20 ✓



02026 2168 H26 ✓



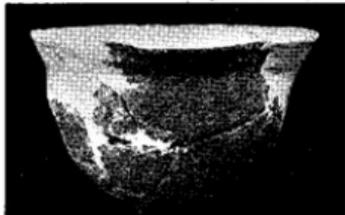
02022 2000 H22 ✓



02029 2167 H27 ✓



02023 2050 H23 ✓



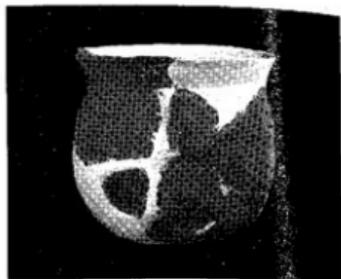
02028 2159 H28 ✓

D地区第2号住居跡出土遺物(II)

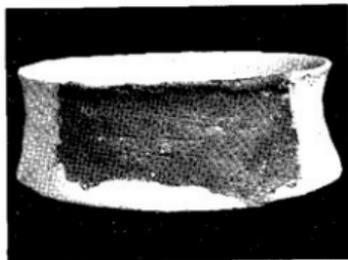
3105



H29



H30



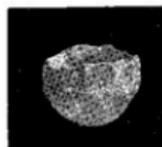
H36



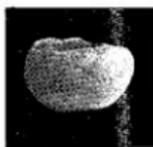
H35



H37



H40



H41



H38



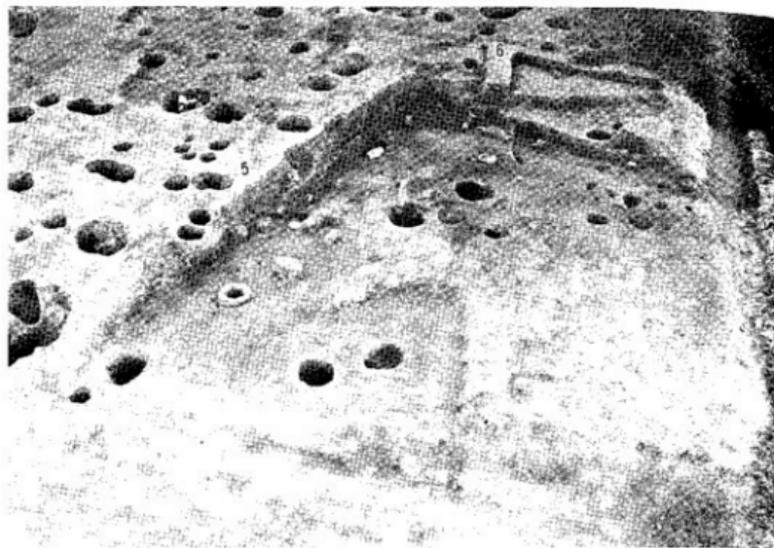
H42



1. D地区第3号住居跡 1272



2. D地区第4号住居跡 1272



1. D地区第5·6号住居跡



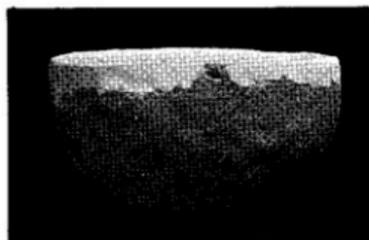
2. D地区第7号住居跡



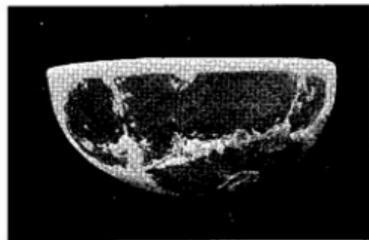
02046 2038 H46 ✓



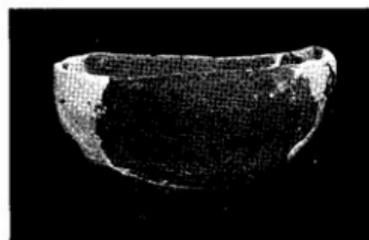
02051 2042 H51 ✓



02047 2037 H47 ✓



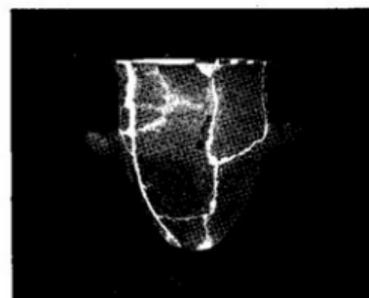
02052 2025 H52 ✓



02048 2050 H48 ✓

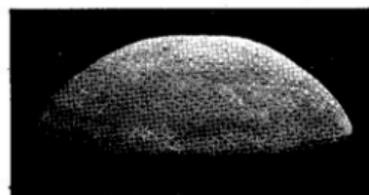


02054 2062 H54 ✓

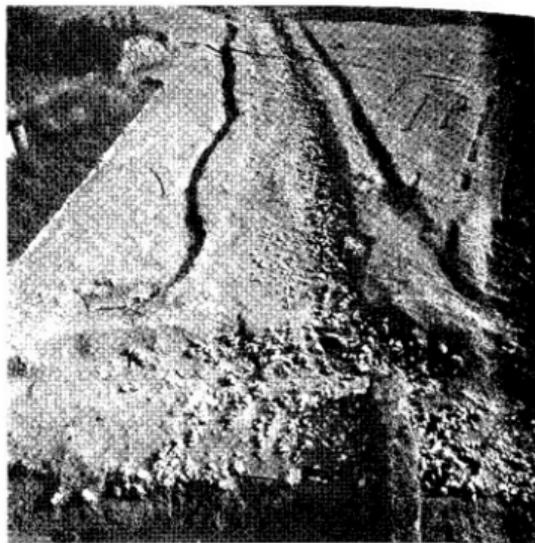


D地区第5・6号住居跡出土遺物 H61 ✓

02061 2111



02058 2025 S12 ✓



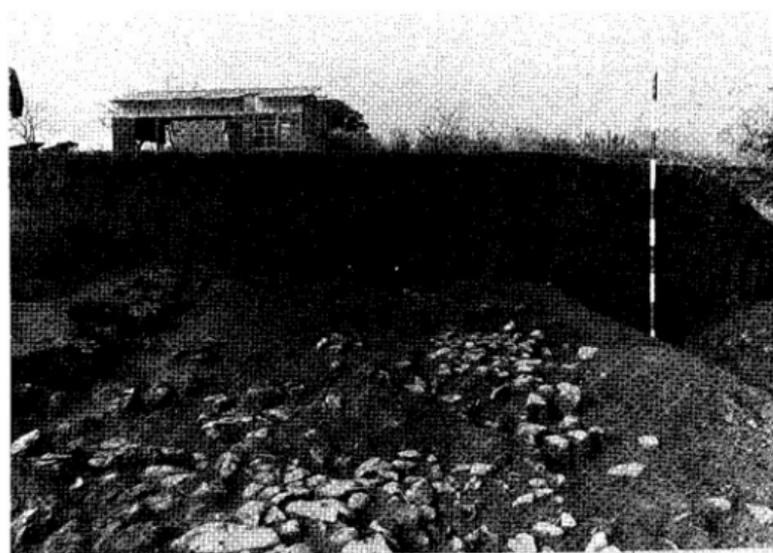
1. D地区南北敷石遺構①(北より)



2. D地区南北敷石遺構②(南より)



1. D地区東西歌石遺構(西より) 1・28



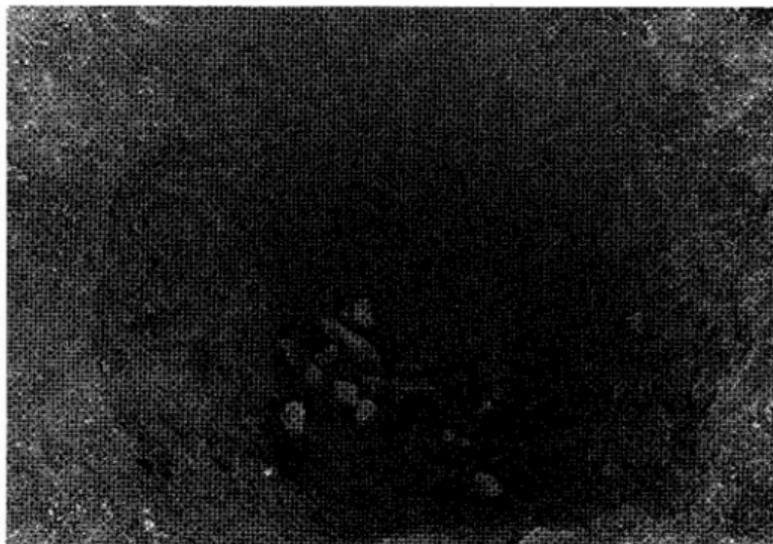
2. D地区東西歌石遺構検出状況



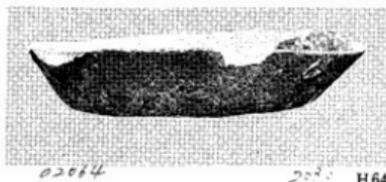
1. 東北敷石北溝



2. 集石遺構



1. D地区井尸状遗構 606



H64



H65



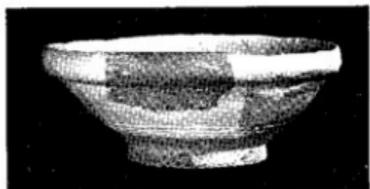
2. D地区井尸状遺構出土遺物 2086 H66
02086



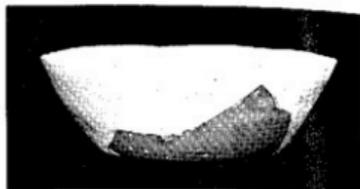
H63



H81



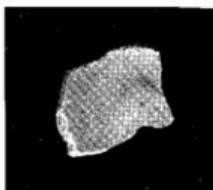
J 4 · 13



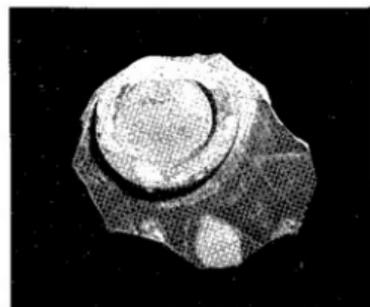
J 17



J 14



J 27



J 43



J 46

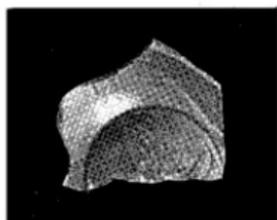


D地区散石遺構出土遺物(1)

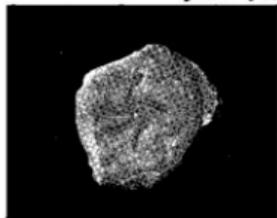
J 44



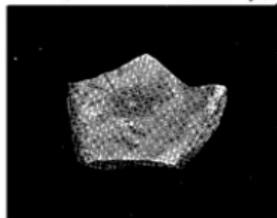
J 45



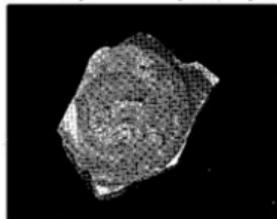
04610 2087 J64



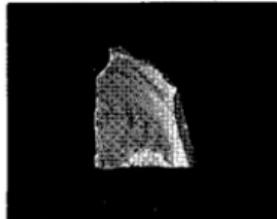
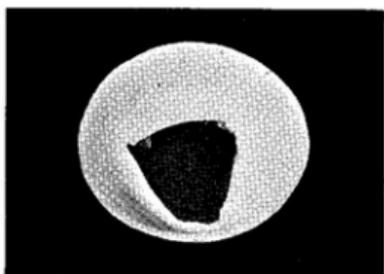
04609 2087 J67



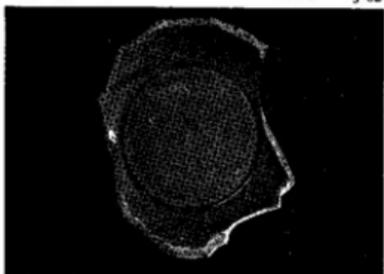
04607 2087 J69



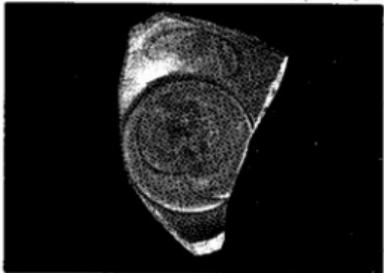
04608 2087 J68

D地区軟石遺構出土遺物(Ⅱ) J48
2086

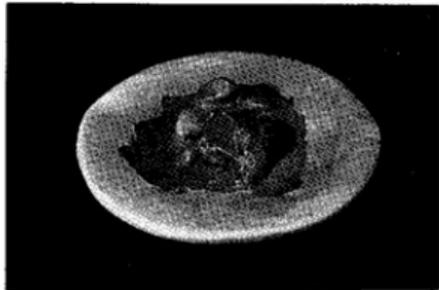
04612 2151 J62



04611 2087 J61



04610 2087 J60



04076 2161 J74



24959

J78



24960

J79



24961

J80



24962

J81



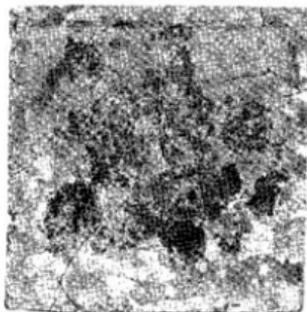
24963

J76

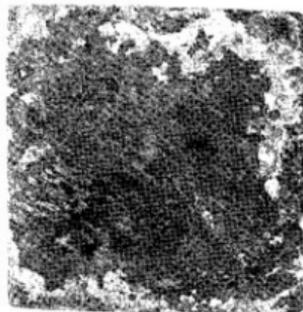


24964

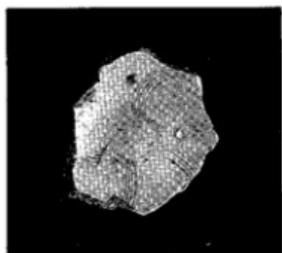
J77



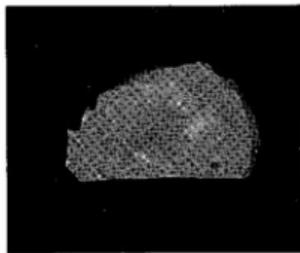
D地区敷石遺構出土遺物(Ⅲ)



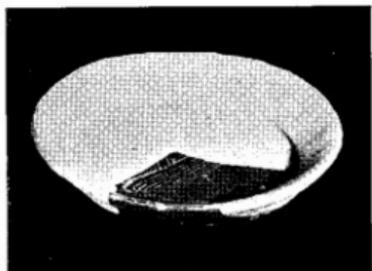
B1



2088 J84 ✓



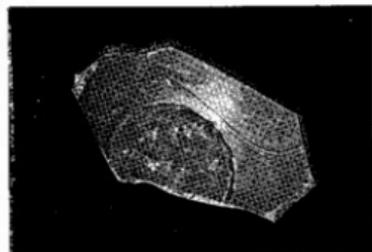
2088 J85 ✓



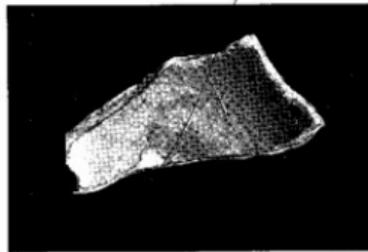
2080 J96 ✓



2081 J96 ✓



2089 J121 ✓



2091 J105 ✓

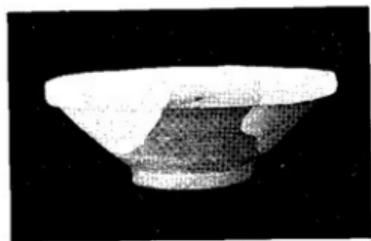


D地区沟状遗物出土物 J100 ✓

2023



2086 J112 ✓



J 124



J 130



J 129



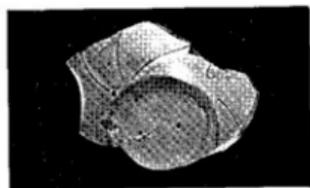
J 133



J 143



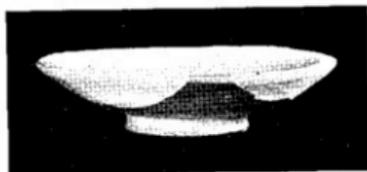
J 132



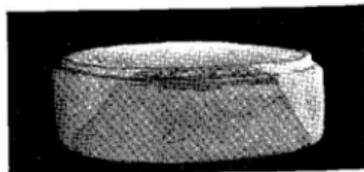
J 141



J 142



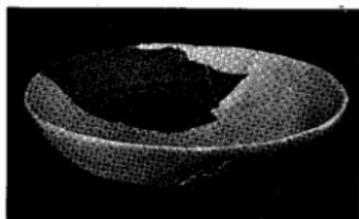
J 147



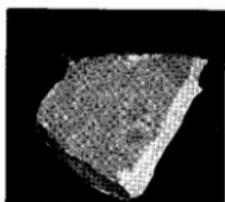
J 146



2009 J174 ✓



2061 J182 ✓



刻印「長命□□」?
2061 09.90 J190 ✓



0071 J178 ✓



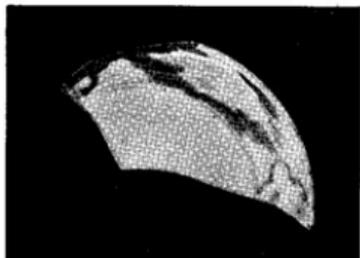
2060 J189 ✓



2026 J181 ✓



D地区表土出土遺物 2070
04.21 ✓
J191



2090 04.12 ✓
J192



2005 K1



2005 K8



2005 K9



2005 K2



2004 K7



2005 K6



2005 K3



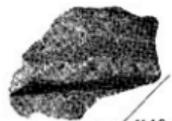
2005 K14



2005 K15



2005 K4



2005 K13



2005 K16



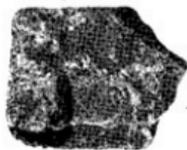
2005 K5



2005 K22



2005 K17



2005 K12



2005 K33



2005 K32

D地区出土滑石製遺物



1. E地区全景 (航空写真)

2909



2. E地区遠景 (西より) 1154

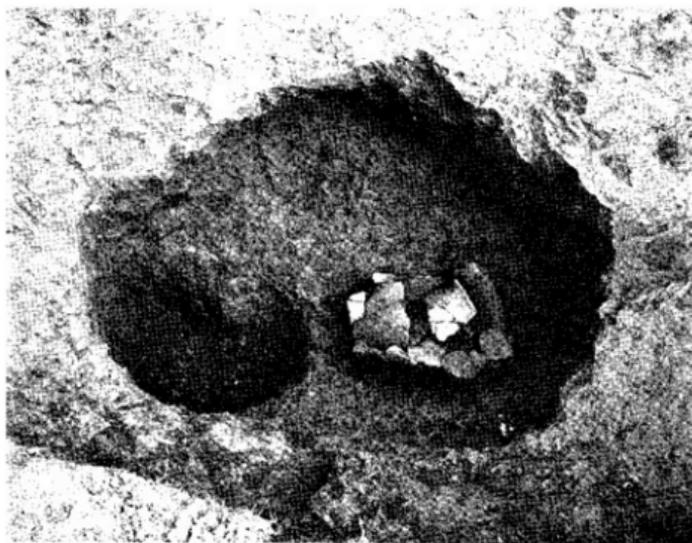


1. E地区断面①(北より)

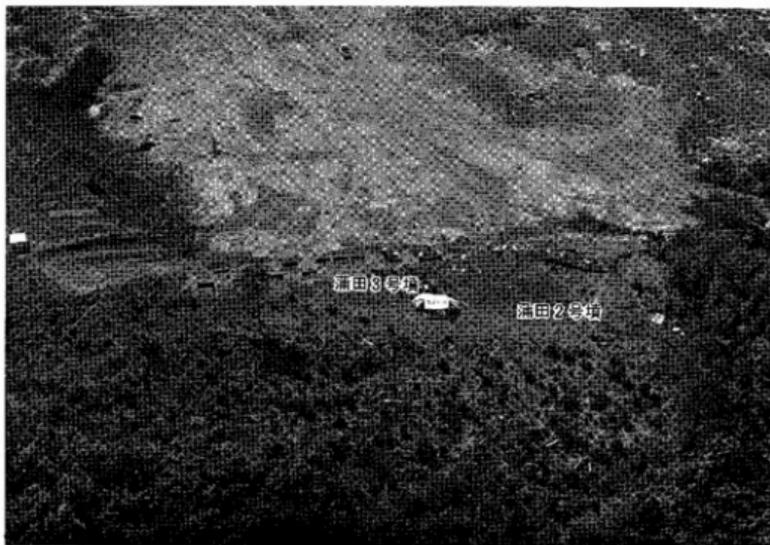
2891



2. E地区断面②(南より)

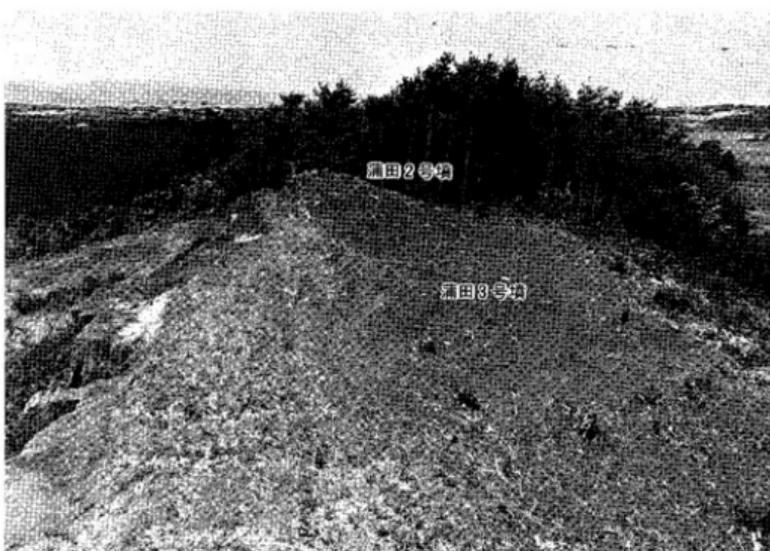


3. E地区土塚



1. 蒲田2・3号墳全景① (航空写真)

2910



2. 蒲田2・3号墳全景② (発掘調査前)

325



1. 蒲田2号墳石室



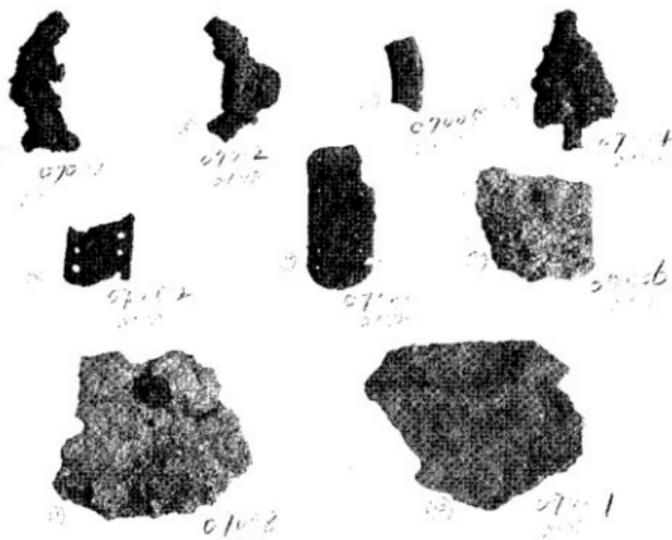
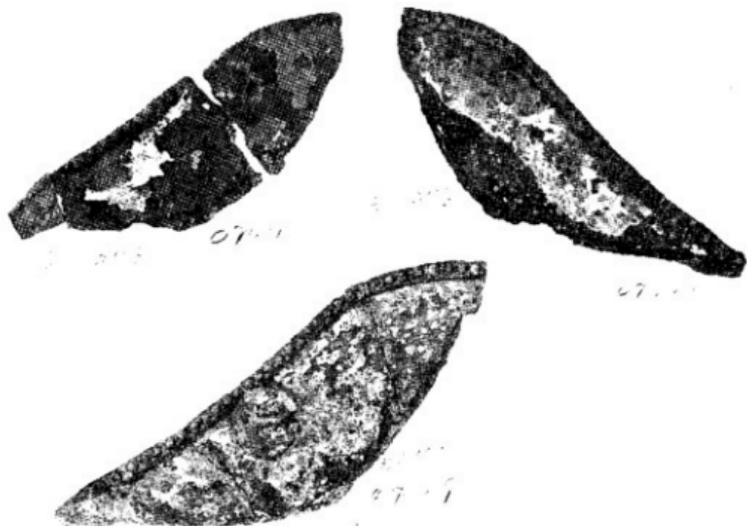
2. 蒲田2号墳墳丘断面



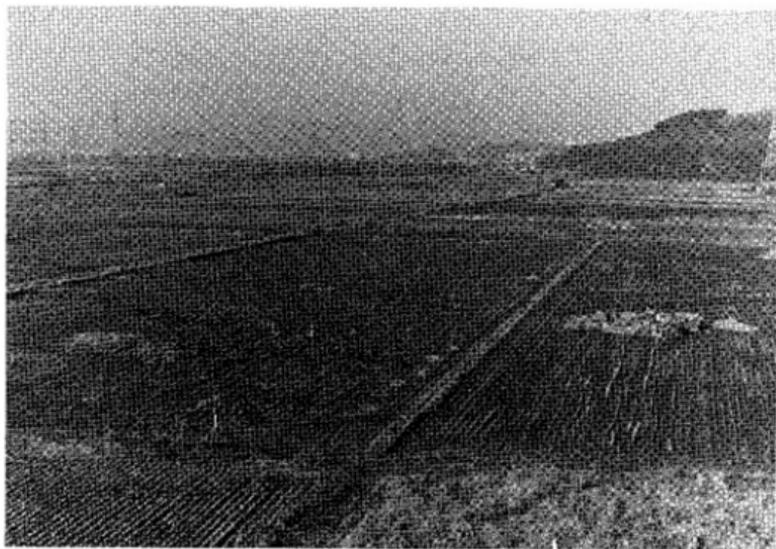
1. 蒲田2号墳墳丘列石 126



2. 蒲田2号墳墳丘出土遺物 (H90) 862



かけ塚山古墳群出土遺物



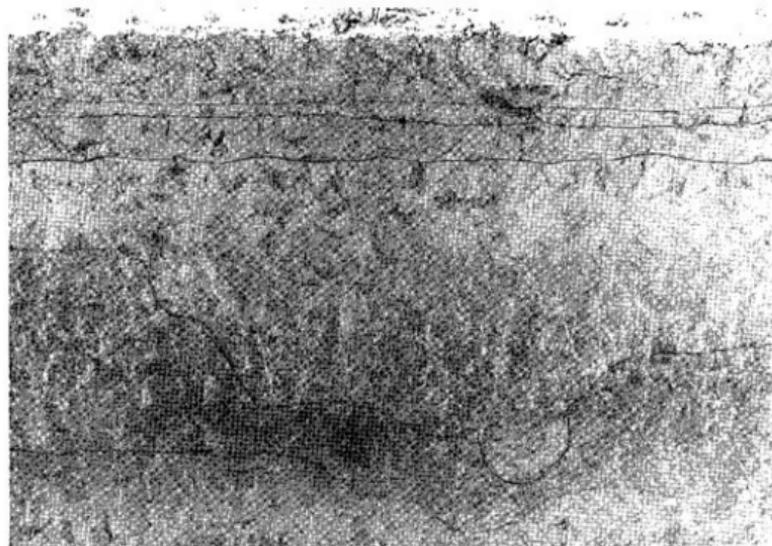
1. F地区遠景 892-7



2. F地区発掘区遠景 (正面は部木八幡古墳群のある森) 927



1. F地区No.1トレンチ断面①



2. F地区No.1トレンチ断面②



1. F地区№5トレンチ断面

2-911



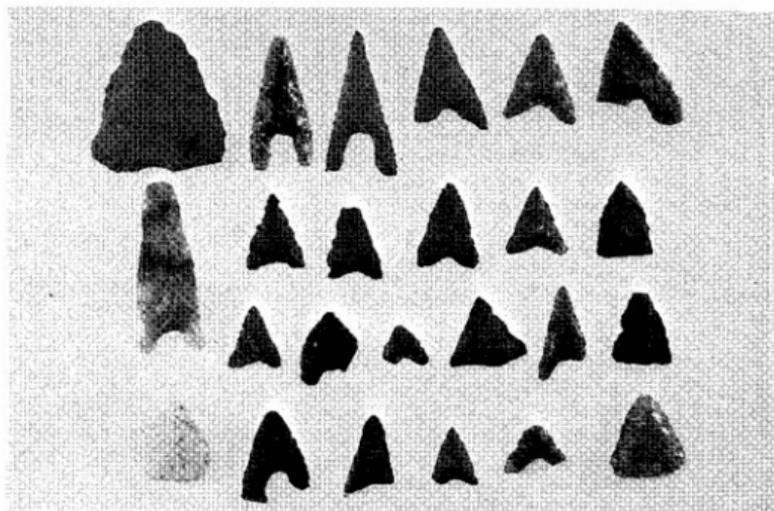
2. F地区集石遺構 876



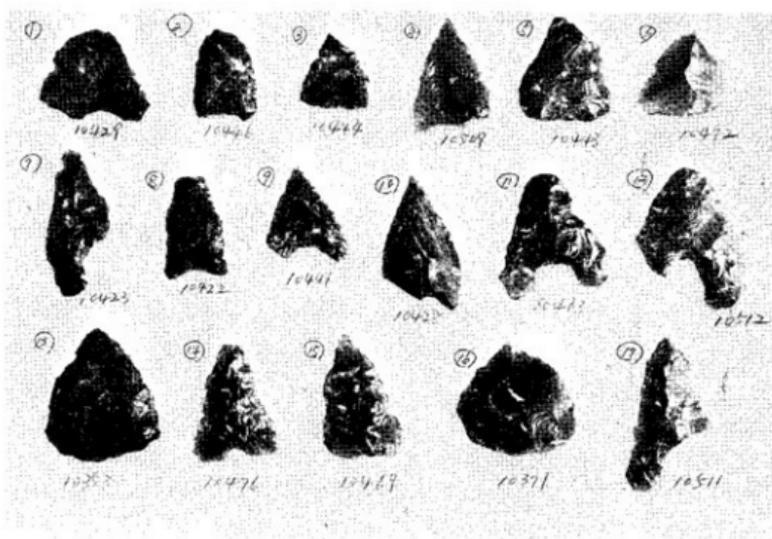
2274



石器(1) - A、B、D、E地区出土 -

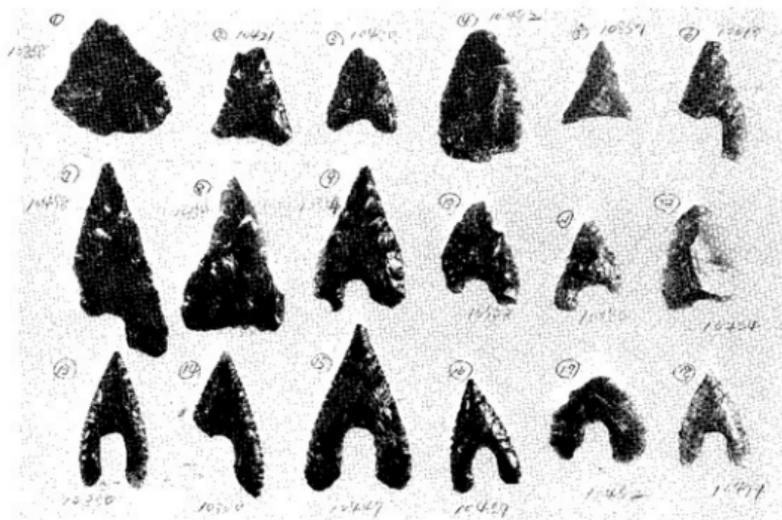


2240



石叢(Ⅱ) - A、B、D、E地区出土-

2246



1. 石鏃(Ⅲ) - A、B、D、E地区出土-

2247



2. 縦長・横長剥片(Ⅰ) - A、B、D、E地区I層出土-

1336



2337



縦長・横長剥片(Ⅱ) - A、B、D、E地区Ⅱ・Ⅲ層出土一

2317



2266

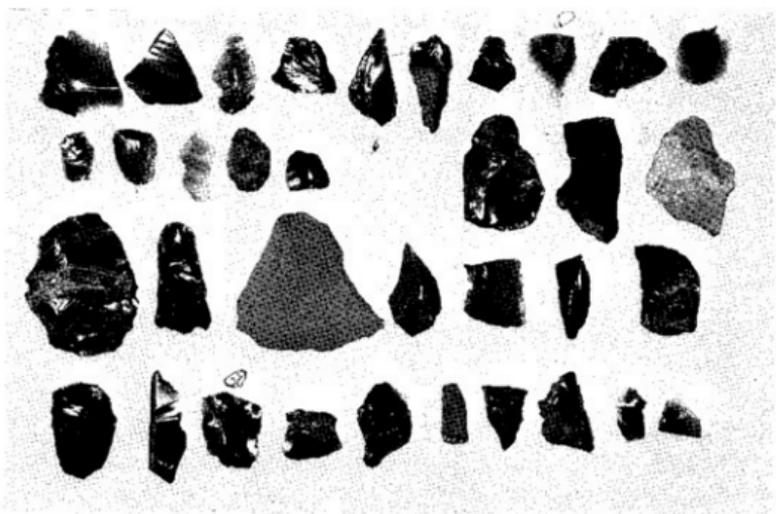


折断·切断碎片—A、B、D、E地区出土—

2267



2373



插器·刮器 - A、B、D、E地区出土-

2375

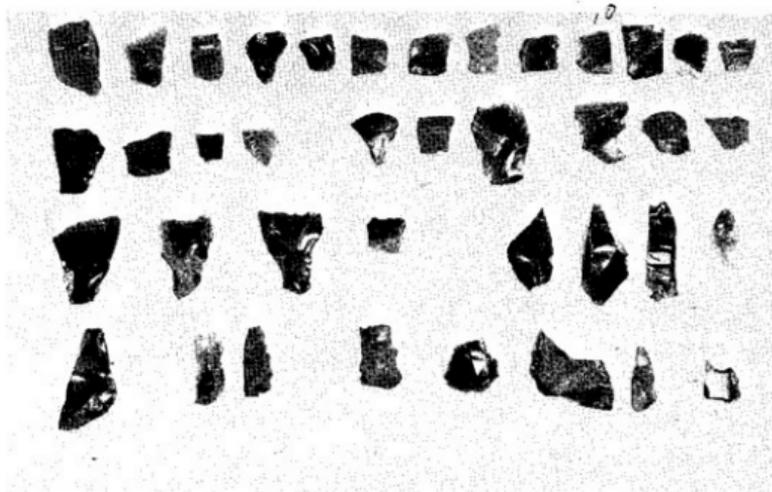


1. Scraper - A、B、D、E地区出土-

234



2. 石鏃状石器・掻器・形器・尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 - A、B、D、E地区出土-



1. 台形石器・彫器・揉鎌器 - A, B, D, E地区出土-

339



2. ナイフ形石器 - A, B, D, E地区出土-

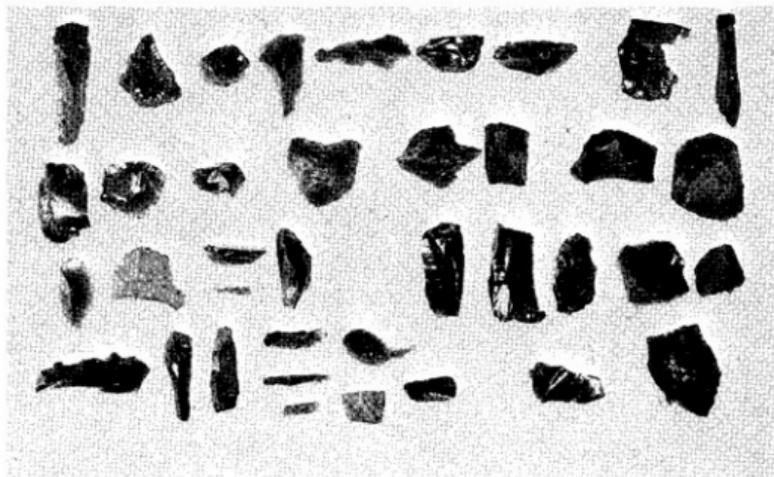
277



1. 小石刃・細石刃(I) - A、B、D、E地区出土-

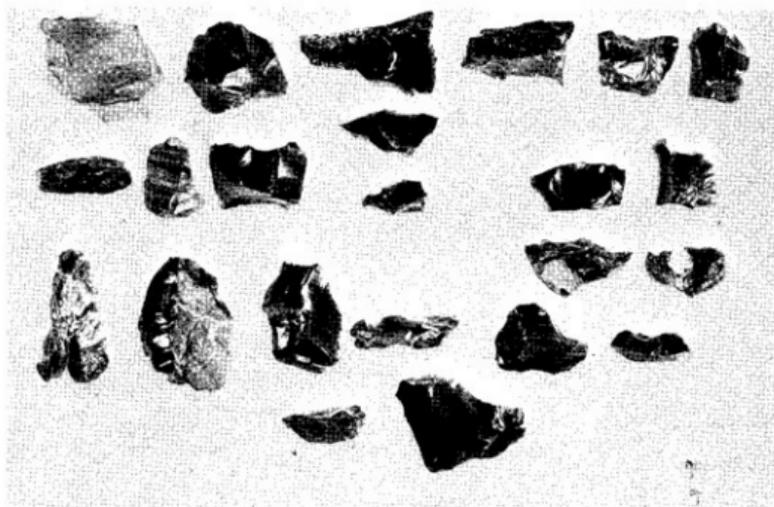


2. 小石刃・細石刃(II) - A、B、D、E地区出土-



1. 礮石核再生剥片 -A、B、D、E地区出土-

2269

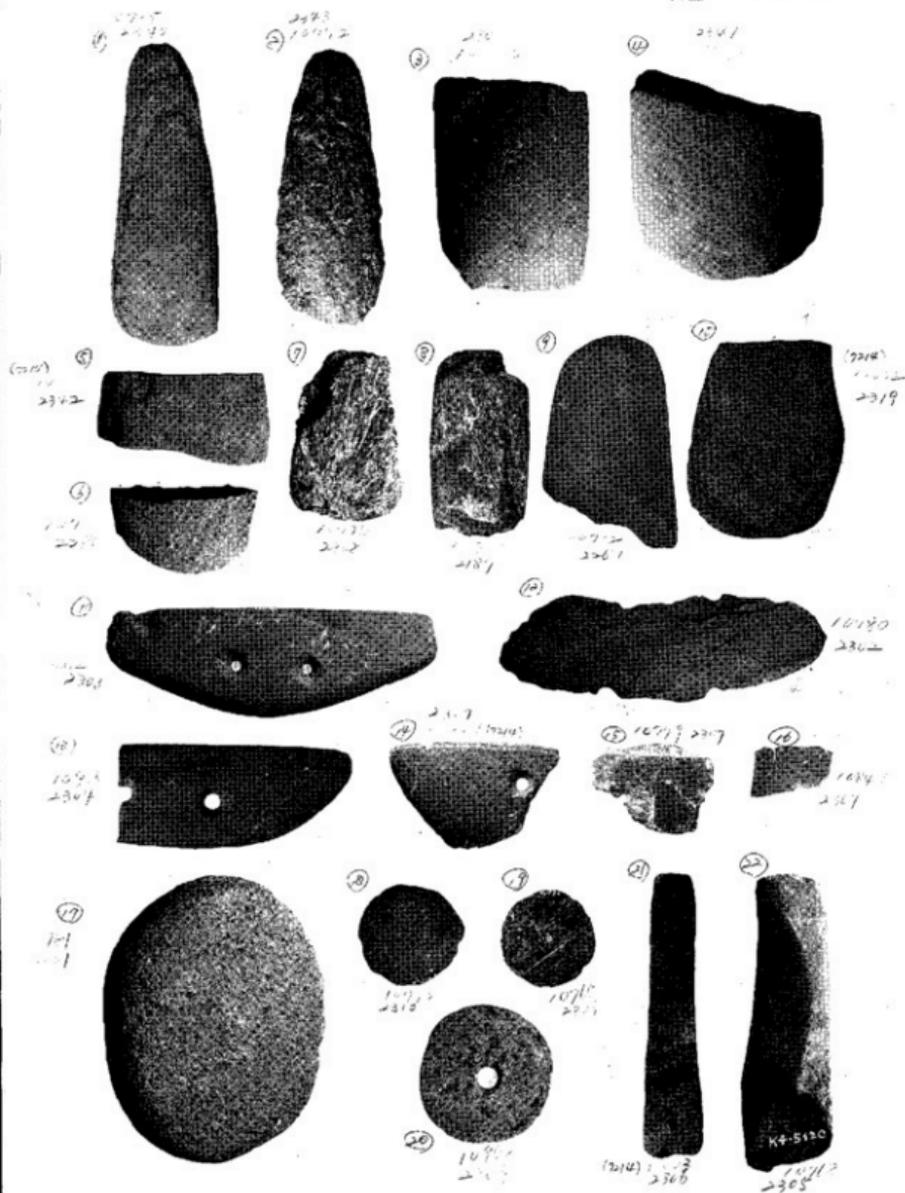


2. 石核再生剥片 -A、B、D、E地区出土-

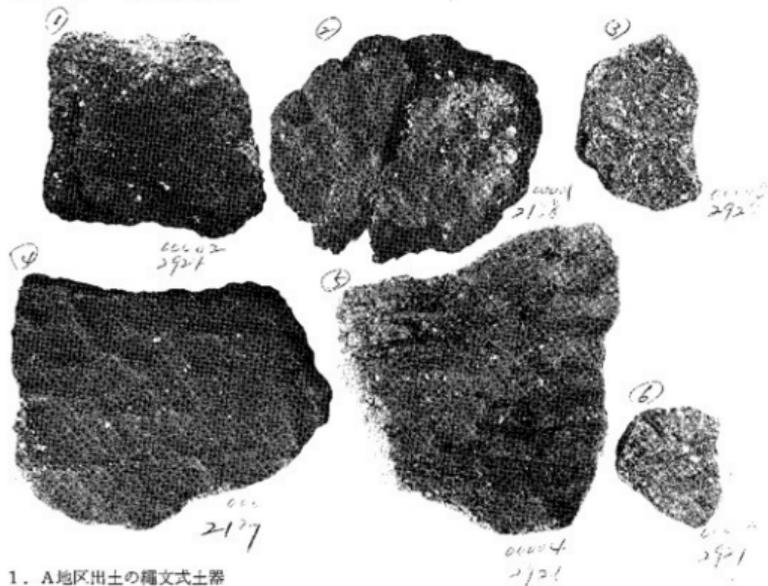
2268



柳石核·柳石核再生剥片·石核·石核再生剥片 — A、B、D、E地区出土—



磨製石器・石製品 - A、D、E、F地区出土-



1. A地区出土の縄文式土器



2. 福岡東インターチェンジ全景(航空写真)昭和49年11月撮影

2912

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

蒲田遺跡 258

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

1975年（昭和50年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社